
IS - 小さな幸せを求める青年

ホワイト・グリント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 小さな幸せを求める青年

【Nコード】

N9738Q

【作者名】

ホワイト・グリント

【あらすじ】

女性にしか動かすことが出来ない世界最強兵器『インフィニット・ストラトス』通称ISが出現して男女のパワーバランスは一変した。女尊男卑、それが新たに構築された今の社会の形である。

『世界で唯一ISを使える男』織斑一夏はその特異性からIS学園に強制入学させられることになった。周りの女性達から興味的である彼はそんな環境の中、さまざまな出会いがある前途多難な日常を送っていた。

・・・一夏とその姉、織斑千冬には実は『義弟』がいた。知らぬ所で誰よりも悲しみをその身に体験し、優しかった義弟は数年前に死んだとニュースで報道された。そしてその義弟の正体は”転生者”だった。

しかもその義弟は今も生きて、同時に戦ってもいた。

義弟は前世から求めた小さな幸せを掴む為、傷だらけのその身と神に貰った力を駆る。

プロローグ（前書き）

なんか小説に続いてアニメ版のISを見たら非常に書きたくなりました。

他にも作品を投稿しているのですが、頑張らせていただきます。

では、どうぞ。

ブローグ

S i d e ? ? ?

世界、というか地球上のほとんどの場所は基本平和な場所である。

しかし、その中には当然対極の場所、争いが存在する場所もあるものだ。抽象的に一番しつくり来るのは中東だろうか？もちろん他にも戦場は存在する。

そしてオレは、その他の戦場のご真ん中で着実に迫る死を待っていた。

オレの名前はラーゼ・ベルセルク。名前を見ればわかんと思うが日本人ではない。

オレは自身の出身国や生みの親のことをまったく知らない。どういった経緯かわからないが物心がついた頃には、オレは銃を持ってアフガンなどの紛争地帯を走り回っていた。いわゆる少年兵というやつだろう。

物心ついた頃からのせいなのかわからないが、自身の境遇を呪ったことは無かった。最も、少年兵という存在は普通なら境遇を呪う前に死ぬのがほとんどだ。実際オレもそうなるはずだった。

昔仲間（オレと同じ少年兵）が戦場でシエルショックを起こし、

その混乱に巻き込まれる形でオレは敵の銃弾を体に受け、他の仲間
は全員死んだ。そこでオレも殺されるはずだったが、何故か軍
に訪れていた一人の社長がオレを助け、ベルセルク家の養子にした
おかげでオレは生き残った。

ちなみにラーゼという名はこの時に与えられたもので、その前の
呼ばれ方は「
」といった感じの番号だった。

ベルセルク家は世界に対してかなりの影響を持っている会社で、
養子になったオレは一通りのエリート教養を叩き込まれ、それを次
々と吸収していった。戦場で銃を撃ちまくる日常を送ってきたオレ
にとってはエリート教養を学ぶ日々はただ楽しかった。

両親は、跡継ぎがない現状をどうにかしたい、それがダメでもせ
めて優秀な護衛が欲しい、という目的でオレを引き取ったらしいの
だが、どうやらオレは後者に適している人材だったらしい。

次の日からオレを見る両親の目は一生物の道具を見守っているよう
な目にならっていた。別に苦痛はない、そんな目は戦場で命令して
くる大人たちに嫌というほど向けられていた。

そこからさらに数年が経ち、オレが18歳になった年、オレと両親
は商談を終えて飛行機で帰ろうとしていた。

しかし、そんな時に街の各所でテロが発生、街の中は数時間でテロ
による虐殺ショーが繰り広げられる地獄へと変化を遂げた。

その地獄には当然、両親とオレも巻き込まれた。そして両親に襲い
掛かる脅威を全て排除するのが、オレがラーゼ・ベルセルクでいる
理由だ。

「父上、車が確保できました。警察も混乱しているようですので最寄の軍関係者に連絡をして保護を要請しました」

「そうか……だがラーゼ、この騒ぎを起こしたテロリスト共に襲撃される可能性があるのではないか？」

親子ではなく、まるで部下と上司のうおうな会話の会話。オレの前で椅子に座っている男はオレの養父。少し離れた所では養母が電話越しに相手を怒鳴っている。大方、会社の人間がすぐに助けに来られないからだろう。

「先程、空港内に進入しました三人組みを拘束し、口を割らせました。テロリストもどうやら組織を組んでいるようですので、私が奴らの警戒網を惹きつけてまいります。父上は母上と共にどうぞ他国へ脱出を……」

オレの発言に父上は面白そうに口元を歪めて顔を上げた。

「ほう……自ら進んで囷になるといつのか……はつきり言って私と妻はお前に対しては道具以上の価値を着けておらんぞ？……お前の帰還など待たずに私は他国に飛ぶ、それを知ってモカ？」

「全て存じております。その上で父上に提案しております。私は父上のおかげで生き延びた身、故にこの命は父上の命を守るために使おうと決めております」

我ながら見事な演技だと思う。どうせオレが何もしなければこの男はオレに捨て駒になってこいと躊躇いもなく命令するはずだ。

オレの言葉を聞いた父上は無言で立ち上がり、母上を連れて車に乗った。

「ラーゼ、今までご苦勞だったな。精々テロリスト共を一人でも殺して私達を助けてくれ」

「ラーゼ、感謝しますよ。道具はその役割を果たしてこそ道具です。あなたは私達に尽くしてくれた最高の道具でした」

このようなセリフを悪意なしで口に出来るのだからこの夫婦は大したものだ。周囲のSPでさえ二人の言葉を人間のものとは思っていない。

段々遠ざかる車。そのまま最寄の軍事施設を目指していくのだろうが、オレには最早どうでも良かった。

「・・・・・・さて、行くか」

無表情で空港を出て、銃声が最も大きく聞こえる方向に歩き出す。オレの格好は黒いスーツ姿なので別に着替える必要は無い。歩きながら両手に指出し手袋を通し、手持ちの武器を確認する。

（腰のホルスターにM1911二挺とマガジンが二本。後は接近戦用のナイフが一本と投擲用のナイフが4本か・・・・・・どうせこれが最後だ。精々道連れを増やしていくとしよう）

最後なのでぶつちやけるが、もう疲れた。肉体的な疲労もあるかもしれないが主に精神面の疲労だろう。

最初は少年兵として戦場を駆け回り銃弾を撃って撃たれる日々、毎日少なからず死んでいく同じ境遇の仲間。

次は社長の養子という名目でここでも道具扱い。少年兵の時よりは少なかったが、暗殺や護衛という形でここでも人殺しを重ねた。

そして最後が養父母から直々の”死んでこい”という命令。見詰め返してみると人を殺した日々には大した空白がない気がする。

でも、これで最後だ。生き延びるつもりは毛頭ないが、生き延びてもご丁寧にあの夫婦がたくさん雇っているであろう殺し屋に追われ続けるだけだ。

せめて最後は得意な人殺しで幕を閉じるとしよう。幸い殺す相手はたくさんいるのだから。

市街の通り道には簡易なバリケードが作られ、そこでは軍とテロリストの銃撃戦が繰り広げられていた。軍服を着ている軍とは違って私服姿でマシンガンを撃ちまくっているテロリストの顔には笑顔があった。

オレは戦場の様子を真上、建物の屋上から見下ろしていた。最初ここに来た時はテロリスト側の狙撃手がいたのだが、邪魔なので一瞬で首を斬り落として黙らせた。

消化に使われるホースの片方を丈夫なパイプに、もう片方を腹部に巻く。右手にはM1911を持っている。

オレは屋上から躊躇いなく飛び降りる。体中を空気抵抗が襲い掛かるが、気にもせずに建物の壁を駆け下りる。

そして地面が近付いたところで空いている左手を腹部から屋上に伸びるホースに伸ばす。左手への負荷を気にせず全力で引っ張り、落下のスピードを殺す。そしてオレが降り立ったのはバリケード作って銃撃戦を繰り返していたテロリスト達の真後ろ。

「ん？・・・なっ」

男の一人がオレの存在に気付くが、声を上げる前にオレの右手に握られた銃から吐き出された45ACP弾に頭部を吹き飛ばされる。別にこの弾なら頭に当てずとも殺傷能力は充分だが一撃必殺が身に付いてしまったのか頭部を狙ってしまう。

絶命した男が倒れる前に右手の銃を乱射しながら左手でナイフを抜き、集団の中に突っ込んでいく。一箇所に密集しているので特に照準は必要ない。

突然後方から襲い掛かる痛みと仲間の悲鳴にテロリスト達は状況の理解が追いつかない。しかしそうしている間にもオレは撃ち尽くしたマガジンを吐き捨てて集団の中でナイフを振るう。

オレの振るっているナイフは刃が縦に30cmはあるので接近戦では高い切れ味が発揮される。すでにテロリストを5人ほど殺している。テロリストの数人が状況を理解してオレに銃を撃ってくるが、周りに味方がいるので撃つのに躊躇いがある。

「何度も言うがこれで最後だ。・・・頑張ってくれよ？こちらから自主的に殺すのは初めてなんだ」

最初の発砲からおよそ10分。その間30人ほど固まっていたテロリストは10人前後まで減っている。だがオレも決して無傷ではない。背中に二発ほど狙撃を受け、額から流れた血によって左目が塞がれている。

武器の方もそろそろ危ない。銃は一挺と弾は3発……。は今撃ち尽くした。投擲用ナイフは狙撃手を仕留めるのに全部使ってしまった。残りはもう接近戦用のナイフだけだ。

銃を乱射してくる男に正面から突っ込んですれ違い様に右手のナイフを振るって胸部を切り裂く。通り過ぎてすぐにブレーキ、ナイフを逆手持ちに切り替えて男の背中に突き刺す。

再び走り出し、今度は銃を持った二人目の手の甲を切り裂く。二人目は痛みで手に持っていたM9を落とす。それを左手でキャッチして二人目の腹部、腸の場所に鋭い刺突、同時にM9のグリップで二人目の顎を砕く。

少し形は違うが、実はこの動きは偶然見て興味を持った日本のアニメを参考にしたものだ。最初のは”空の境界”の両義式の技。次のは”ガンスリンガーガール”のピノッキオの技だ。

ドンッ!!

右脇腹をライフル弾で貫かれた。痛みを感じる前に発砲者に向けてM9を連射、発砲者が絶命する。

「……ぐっ!……はっ、いいねえ……けど、まだだあああ

「!!」

テロリストの方が逆に恐怖するほど今のオレは狂って見えるだろう。ただ殺す。それだけしか頭の中にはない。そうだ、まだまだ殺せるはずだ！

そんな長いことがあって冒頭に辿り着く。周りにはたくさんの人間の死体が転がり、降り注ぐ雨が死体から血を拭き取っていく。

あれから記憶があやふやだ。なんだか記憶の中では軍人も殺しているがあるのだが、テロリストの死体がたくさん転がっていることから欲求不満でマジでやっちまったかもしれない。

どちらにしても、もう終わりだろう。体中から流れる血は現在進行形で水溜りを作っているし、痛みが無い体は指一本動かない。

「終わりが……ああ、よく思い出すとオレの人生って人間としちゃ最低も良い所だよなあ」。好きな風にやり直しか出来ねえかなあ……。あ、やべ……。眠い……」

呑気に喋っていたのだが体が先に限界を迎えた。襲い掛かる強力な睡魔。瞼がゆっくりと細くなり、オレの意識は無くなった。

しかし、次の瞬間に再び意識が覚醒、目の前の景色が真っ黒から真っ白に染まる。

『ふう〜ん。ならさ、叶えてあげようか？その願い』

オレの背後から聞こえたその声は、若くて明るい女の声だった。

プロローグ2（前書き）

原作にはまだ届かないプロローグです。

では、どうぞ。

プロローグ2

Side ラーゼ

「暇つぶしに下界を覗いてみれば、とんだめつけ物ねえ。・・・
・試しに過去も覗いてみればこれまた不幸なもの。・・・ん
で、興味をそそられてキミを呼んだってわけ」

ラーゼ・ベルセルクだ。

オレはあの時、養父妻を守る囷となってテロリストを皆殺しにし（不確定だが軍人も殺してしまったかもしれない）雨の中、体が限界を迎えて死んだはずだった。

だが眠ろうと瞼を閉じた次の瞬間に見たのは何処までも真っ白の空間。そこにいたのは今話しているオレより頭1つほど小さい一人の女性。腰まで届く長い金髪、エメラルドのような深緑の瞳、スタイルは抜群で容姿は恐らくかなりの美人に部類するだろう。

そんな女性がワンピースのような服を着て、今オレの前で陽気な笑顔で話している。なんだか人の不幸を躊躇いもなく爆笑できそうな笑みによく似ている。

しかもこの女性の名前、なんと”ヘラ”だって。信じられるか？笑顔で人の不幸に興味をそそられたこれが結婚の女神なんだぜ？人の空想がどれだけ再現できない美しさを求めているのかよくわかったよ。

とりあえずヘラが言ったことを整理しよう。

「あー・・・確認するぞ？あんたは溜まっている仕事を部下に押し付けて暇つぶしに下界を覗いた。それでオレから偶然・・・なんだっけ？強いタナトス（死神）の気配？・・・それが感じられたんでオレの人生をよく見ていたら面白く感じたぞ？」

「そうだよ、理解が早いねえ。キミの人生は見ていて飽きなかったよホントに・・・捕虜にされた基地から脱出するついでにその基地を一人で壊滅させたり、両親が国の重鎮に恩を売りたいから政府要人を誘拐したテロリストを殺したり・・・中でもパーティーを狙った銃所持の襲撃犯50人を一人で全滅させた時なんてぶつちぎりで面白さNo.1よ！・・・ねえ、これDVDにしてみない！？」

どうやらオレの人生を見てきたというのは本当らしい。実際今口にしていた事件全てをオレは体験している。

懐かしいなあ・・・二番目の時なんて完全にガンスリンガーガールのピノッキオの真似をして殺し方もまったく同じにしたっけ？・・・まあ、その後に残った数人が手榴弾で特攻してきたのは流石にびっくりしたけどな。

「しない！？・・・と言われても誰が買って誰が見るんだよ・・・オレの記憶が正しけりやどの事件にも実写にしたら思いつきりR18指定のグロシーンが盛り沢山だったぞ」

「大丈夫！。あの位、天界に住んでるみんなは私みたいに笑顔で見れるから！」

ゴンッ！！！！

握り拳を作った笑顔で断言してくれるが、その言葉はオレの不幸を

笑顔で見ていた確かな証拠になつていないか？とりあえずこいつの頭に拳骨を叩き込んだオレに罪はないはずだ。

「それで？・・・興味をそそられたとはいえ、まさかDVDの製作許可を貰う為だけにオレを呼んだわけではないだろう。用件はなんだ？地獄行き決定の判決が下された、とかなら自覚あるから別にいらねえぞ」

拳骨の痛みで涙目になったヘラはオレを上目遣いで見上げてくる。

「痛てて・・・うう、最初に言つたじゃん。『願いを叶えてあげようか？』って」

「願い？・・・もしかして、好きにやり直せたらつて、あれか？・・・口にしておいてなんだが、出来るのか？つかやっていいのか？」

「ふふふ、女神を・・・いや私を侮ってもらつては困るなあ。そんな位簡単なのだよ。ていうか、キミの人生を見させて貰つた者としては、個人的にキミはもつと幸せになつて欲しいんだよね。死神タナトスの気配が強かつたのもキミの人生の一部だけど。幾らなんでもキミは不幸すぎた。だから、キミには素晴らしい来世を生きて欲しいんだ・・・」

前半は今までどおりの口調だが、後半になるに連れて口調が真面目なものへと変わっていく。

幸せな人生、か。今まで生きてきた中でまったく求めなかったと言えば嘘になる。曇りのない笑みで楽しそうに過ごしている親子に何度も憧れた。血に染まり切つた自分を見て”何故自分が”と思つたこともあつた。

諦めていた幸せ。それをこの女神は与えてくれるのか？

「……ハア、人の人生を”DVDにしよう”なんていった奴の言葉かそれ。けど……ありがとう。んじゃ女神様、オレに幸せを掴むチャンスをくれないか？」

「お任せなさい！……んじゃせつかくだからアニメとかの二次元の世界なんて行ってみない？」

シリアス気味だった雰囲気をぶつとばしてこの女神はいきなり壮大なことを言い出した。

「アニメの世界？すまん。そういうのはまったくではないが、あまり見たことないんだ」

アニメを見たことが無いわけではないが、どの世界も死亡フラグが濃いものばかりであり行きたくはない。

「ああ、それもそうだね。……んじゃさ、なんかやりたかった事とか無い？あるならそれを参考にして私が選ぶよ？」

やりたかった事？んなこと言われてもそんなものパツと出てくるものではない。……あ、そうだ。

「空……」

「ん？何？」

「少年兵の時、戦闘機とかじゃなくて、生身で空を自由に飛びたい

って思ったことならあるな」

殺し合いばかりの地上に嫌気が差して、青空を見上げたときに本気で願ったことがあった。空なら自由になれると思ったのだろうか？

「空を飛ぶ、かぁー。空・・・空・・・あ！そうだあの世界なら色んな意味で幸せだよな！ちょっと待ってて！」

オレの言葉を聞いて女神は少しの間ぶつぶつと何かを呟き始め、良い所が思いついたのか姿を消した。そして、3秒ほどでまた戻ってきた。

「はいこれ」

女神が差し出してきたのは一枚のA4用紙。見てみると7つの空欄があり、その上には『好きなチートを書いてみよう！キミの願いが今実現する！』と殴り書きで書かれている。なんだろうこの非常にむかついてくるタイトルは。

「そこに好きな願いを7つ書いて、それが来世でのあなたの力になるから。なんでも良いよ？デスノートでも超能力でも」

「おいおい、んな物必要とする時点でどんな所に送るつもりだ・・・」

「あくまで例えだよ。戦争中とか化け物がうろついてるとか、そういう所じゃないから安心して。ほらほら、書いた書いた。あ、言い忘れてたけどロボットとかの名前は何でも良いから必ず入れてね」

「・・・んじゃー、欲を出して・・・」

一つ目『肉体をリンクスに改造。AMS適正数値をゼロの倍以上に』

二つ目『レオハルト、及びジェラルドのアーマード・コア・ネクスト、ノブリス・オブリージュを搭乗機に』

三つ目『上記と同じ内容で、ベルリオーズ搭乗機シュープリス』

四つ目『上記と同じ内容で、アナトリアの傭兵搭乗機ホワイトグリント』

五つ目『アーマードコアfor answerまでに登場するパーツの全て』

六つ目『搭乗機を整備するための最高級の施設』

七つ目『搭乗機全てをFBSメモリ改造全項目フル改造状態に』

こんな感じにしてみた。オレが唯一つやり尽くしたゲームであるアーマードコアの影が濃いのは仕方の無いことだ。

「ほうほう、なかなかすなあ。でもなんか物足りないよねえ、機体は全部小さめになるし。しかも最後のは事実上必要ない。・・・よし！サービスとして1、6、7番目の願いは私が変わりに叶えてあげる。あと願いが3つ残るよ」

と言われても。他に思いつくものは精々、格闘戦闘に特化した機体として、アンジェの搭乗機オルレアを追加するぐらいだ。残りの二つは保留にするか？

「保留？・・・ならさ、私が一個だけ機体選んでもいい？お勧めっていうか、個人的にあなたに乗って欲しいものがあるんだけど」

「・・・構わんが、最終決定はオレにさせてくれ」

女神が薦めてきたのは”機動戦士ガンダム〇〇”の劇場版に登場するガンダムサバーニヤ。詳しい機体構造は知らないがわざわざ薦められたのだ、ぜひ使うことにしよう。

「うむうむ、機体はこれで充分ね。あとは肉体か・・・最優秀のリンクスってだけじゃ物足りないし、純粹種インベクターの力と、アナトリアの傭兵の戦闘経験、知識は・・・博士号が取れる位でいつか・・・」

「おい、知らない単語の筈なのに阻止すべきだとオレの本能が叫んでいるんだが・・・」

「大丈夫、大丈夫。持ってた損になるものは入れてないから。・・・よし完了。じゃ、準備はいいかな？」

どうやら今からすぐに送られるらしい。オレは無言で頷く。確認した女神はオレの足元に何らかの陣を展開した。陣が発光を始める。

「注意事項を言っておくね。まず、キミは最初から改造された肉体で新たな人生を始める。でも、キミの願った機体は来るべき時期とか、キミ自身の強さとか、そう言った条件を満たさないと使うことは出来ないからね」

「は？・・・それまでは自分の肉体だけで生き抜けてことか？」

「そんな大きなスケールの話じゃないよ。そのことは多分行けばわ

かるから。・・・それじゃ、楽しい人生送ってねえ・・・ん
っ・・・」

「・・・おい、これはなんの真似だ。つか頬を赤めるな、
胡散臭さがにじみ出てるぞ」

陣の発光が強まり、体が半分ほど消滅した所で、なんと女神がキス
してきやがった。しかも唇に。

「えへへ・・・キミってファーストまだでしょ？私もなんだ・・・
・女神の口付けは幸福をもたらす物なんだよ？せつかくだから貰っ
て行つて」

「納得いかんが・・・わかった。んじやな、色々ありがとう」へ
ラ”・・・」

「・・・ッ・・・どういたしまして」

一瞬驚いてすぐに笑顔を浮かべたヘラを見て、オレは周りを包む力
の流れに身を委ねてそのまま意識を手放した。

Side Out

「・・・行つたかあ」

光に包まれて消えたラーゼを見送ってヘラはその場にしばらく呆然
としていた。

「ううゝむ。本気で幸せになって欲しいとは思ってたけど、流石にキ
スはやり過ぎたかな？」

普段見せている陽気な笑顔だが、よく見ると頬が少し赤い。実はこの結婚の女神、かなり初心だった。

「あ!?!.....DVDの製作許可貰うの忘れてた。orz.....ま、いつか、勝手に作って他のみんなに配っちゃおっと.....さあ、忙しくなるぞぉ」

そして、拳骨を喰らった位ではまったく懲りていないのだった。

ふと、ヘラの服のポケットから一枚の紙が落ちた。そこには文が短く記載されている。

『ラーゼ・ベルセルク。女神ヘラの決定により記憶を引き継いだ状態による転生を決定。向かう世界の名は』

その世界の名は.....。

『.....インフィニット・ストラトス』

プロローグ2（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

プロローグは終わりましたが、原作にまったく近づけねえ。

ついなのですが、主人公ラーゼはISの原作知識がありません。

今回はようやくISの世界です。でも、原作キャラが出るのはまだ先になるかもしれません。長い目で見守ってください。

では、また次回。

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。主人公だけでもかなりのチートになっています。
では、どうぞ。

キャライメージを自分で思い直し、イメージを書き直しました。

主人公設定

ラーゼ・ベルセルク

本作のオリジナル主人公。

・年齢 21歳 転生後は肉体年齢が5歳に低下。

・性別 男

・身長 190cm 転生後不明。

・体重 65kg 転生後不明。

・容姿（転生後） 背中まで届く銀髪、深い真紅の瞳、イメージはコードギアのロスカラに登場する“ライ”を銀髪赤目にして目を少し鋭くした感じ。

・声のイメージ：森久保祥太郎さん。

・趣味や好きなもの 子供の笑顔、絵描き、ピアノ、読書、雨。

・嫌いなもの 戦争と戦場、理由が無い一方的な虐殺、他人を見下す人間。

・性格

物静かな口調で少し暗く見えるが、優しく面倒見も良い。しかし

本気でキレた時は殺人を起こしてもおかしくないほど敵意があらわになる。幼い頃から戦場に身を置いてきたので人を殺すのには躊躇いが無い。ただし、無関係の人が死ぬのは我慢ならない。

・詳細

過去について情報がまったく無く、物心着いた時には中東で名無しの少年兵として戦っていた。他にも少年兵の仲間がいたが、仲間の一人がシエルショックを起こした時に敵に包囲され皆殺しにされた。事実上少年兵部隊の唯一人の生き残り。

戦場で殺されそうな所をベルセルク社の社長とその妻に助けられ、ラーゼという名前を与えられた。それ以後はベルセルク家の養子となったが、夫妻がラーゼを引き取ったのは道具として使う為である。ラーゼ自身はそのことを自覚しており、夫妻の命令で数多くのテロリストを殺してきた。

やがて精神が磨耗して、最後は夫妻を守るために”捨て駒”になってこい”という命令を引き受け、数十人のテロリストと多数の軍人を巻き添えにして死んだ。その後、女神ヘラに第二の人生を与えられ、ISの世界へと転生する。

搭乗機

・アーマードコア・ネクスト4機

『ノブリス・オブリージ』（for answer版）『シュープリス』『ホワイトグリンツ』『オルレア』

・ガンダムサバーニヤ。

・ for answerまで登場した全てのパーツ。中にはVOBヴァンガード・オーバーード・ブリストなどもある。

上記の機体は全てヘラの手によってサイズが縮小され、”ISに見えるが中身がまったく違う兵器”へと変貌を遂げている。一般の見解では全身装甲フルスキンのISに見えるかもしれないが、正体はネクストやモビルスーツをそのままISのようなパワードスーツにしたものなのだ。

搭乗機設定

・ラーゼの実力や条件などの規制によって最初に使える機体はノブリスとオルレアだけ。

・ネクストは本来の機能をフルに使えばあつという間にコジマ汚染を撒き散らす。しかし、ヘラの魔改造によってラーゼのネクストから排出されるコジマ粒子は全て無害な新種のニュートリノに変換されるようになった。ただし兵器の物理的な破壊力に大きな変化はない。

これによってプライマルアーマー、オーバーブースト、コジマキヤノン、アサルトアーマーなどを使用しても地表や環境、周辺の間や敵をコジマ粒子で汚染することはない。

・サバーニャは縮小化した以外は本来のものと変更点は特にない。サポート役の二体のハ口は黄色のハ口が音声込みでAIとなってサポートしてくれる。

パイロット設定

・肉体がリンクスへと改造されているので、身体能力全般が人知を超えている。しかしラーゼ本人は、簡単にフライパンを丸められるようになっただけに感動するなどまったくの負担を感じていない。

A M S 適正は、リンクスの中で最高の数値を出していたセロの倍以上なのでリンクスの才能はまさに”天才”である。

・インベーター純粹種の力のおかげで強力な脳量子波と驚異的な空間認識能力等を手にし、寿命は理論上常人の倍近くなった。実は、これはラーゼの寿命が怪我などで縮んだ場合に対しての保険でヘラが追加したのだ。

・リンクス戦争の開始から最後まで戦い抜き、それから数十年の間も戦ったアナトリアの傭兵の戦闘経験を貰ったのでネクストの操縦でミスすることはまず無い。

主人公設定（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

早速無茶苦茶なオリジナル設定の登場です。

フルで戦ってコジマ汚染がないネクストって、自分でも反則な兵器だと思います。

では、また次回。

第1話 崩れ去った幸せと新たな出会い（前書き）

ようやく少しだけ原作キャラを出せた。

今回もオリジナル設定があります。

あと随分遅れた気がします、感想などありましたらよろしく願います。

では、どうぞ。

第1話 崩れ去った幸せと新たな出会い

S i d e ラーゼ

「ねえ！ラーゼお兄ちゃん、遊ぼう！」

「他の皆も呼んでこようよ！」

「……さんせ……い……！」

「わかった、わかった。……わかったから4人で一齐に服を引張るな。別に逃げないっての」

ラーゼ・ベルセルクだ。

オレは女神ヘラから力を貰い、前世の記憶を持ったままヘラの選んだ世界に転生した。

しかし、目が覚めたオレはなんとサバンナ風の荒野に一人倒れていた。しかも何故か紛争孤児みたいな格好で。どうやらヘラの用意した転生とは、最初からではなく途中からやり直すことのようなのだ。

しかもちゃんと願いは叶えてくれたようだ。目が覚めてから体に何かの違和感を感じる。恐らくAMSとネクストの操縦に耐えるために強化された肉体だからだろう。確かめるために落ちていた石を握って見たら簡単に粉碎できた。

あと首の後ろの丁度真ん中あたりに接続プラグが人工皮膚で隠されていたが、あれがAMSプラグなのだろう。

あと、小さな湖の水面を見た時に気付いたのだが、顔の形なども別物になっていた。誰だよこの銀髪赤目少年。イビルな笑み浮かべたりとか本気で睨んだりすればかなり怖い顔になると思うぞ。

その後、状況を確認したオレはとりあえず人里を探し、この街を見つけた。

そして住人の格好を見て一瞬で確信した。ここは、前世のオレの始まりの場所でもある中東だった。

ここはオレの中東とは随分違っていた。それはもう天と地くらい対極に。何故か？オレの知っている中東は今のオレみたいな子供に救いの手を差し延べたりしないからだよ。しかもここでは紛争などはほとんど起こっていないらしい。

いや本当に良い人達だよ。オレの格好を見た途端に手厚く保護してくれて戸籍も用意してくれたし、知らないことも教えてくれて、生活が安定するまで色んなことでかなりお世話になった。

それと、気付いている人もいるだろうがオレの名前は前世と変わらず『ラーゼ・ベルセルク』にした。どうせ前世のオレを知っている人間がいるはずは無い。それにオレ自身この名前は気に入っている。

そんなことがあって今のオレはもう2年ほどこの街で暮らしている。ちなみに世間上でオレは7歳の子供だ。

冒頭に戻るが、精神年齢が成人を超えているオレは子供達に大好評。どうやら身体能力を確認するときにやった空中バツク転3回連続が受けたらしい。……自分で望んでおいてなんだけど、幾らなんでも無茶苦茶すぎないか？この体。

暇があればたくさんの子供達の面倒を見るのが当たり前になってきた。なんというか、すごく幸せな感じがする。

当たり前の日常を体験するだけでも前世のオレに不可能なことだった。その不可能なことが今では日常の一部になっている。ヘラには感謝しても感謝しきれない。

だが、2年続いたオレの幸せは、突然訪れた一つの不幸に砕かれた。

月明かりが差し込む部屋の中、もう見慣れた天井を瞳に映してオレは目覚めた。

おかしい。いつも目覚める時間より遥かに早い。それに何だか外から悲鳴や怒鳴り声なども聞こえてきてかなり騒がしい。明らかに只事ではなさそうだ。

ドンドンドン！！！

「ラーゼ！ラーゼ起きてるか！……ラーゼ！」

「ラーゼ君！起きてラーゼ君！」

正面玄関の扉が大きな力で叩かれ、お隣に住んでいる家族の夫妻が必死に叫んでいる。一瞬でベッドから跳ね起きてすばやく扉を開ける。扉を開けるとお隣の夫妻、ラードさんとルイーネさんが必死の形相をしていた。その後ろでは街中の人々が走り回っている。

「どうしたんですか？・・・只事じゃなさそうですけど」

「数十分前に、突然政府の人間がやって来たんだよ。何事かと思っただが・・・」

「落ち着いて聞いてね。今、世界各所のミサイル基地がハッキングを受けて2000発以上のミサイルが発射されたらしいの」

「は？」

それは何の冗談だ？ミサイル基地のハッキングと同時に2000発以上のミサイルが発射された？犯罪やテロを通り越して、もはや災厄のレベルじゃないか。

その犯人だって同じだ。楽しさにイカれたハッカーというのは決して居ないわけではないがこの犯人の思考は人間の枠に収まるのだろうか？

「幸いほとんどのミサイルは二ホンという国に発射されてたらしいが、数十発のミサイルが他とは違う軌道でこの街の近くに落ちてくるらしい」

日本？なぜ2000発以上ものミサイルを日本に落とすんだ？領土的に小さく海に囲まれたあの国でなくても候補は幾らでもあるはず

だ。

領土が小さいから狙いやすい？小さく海に囲まれている？つまり逆を取れば守りやすい。……もしかして犯人の狙いはミサイルを着弾させることじゃなくて……。

「ってこんなゆっくり話してる場合じゃない！ラーゼ、急いで着替えろ！街から少し離れた所に軍が車を止めてる。俺達も子供達を連れて後から行くから！」

「あ、はい。ではまた後で！」

弾かれたように家の中に戻り、すばやく寝巻きを脱いで普段着に着替える。少しでも必要な荷物を纏めるべきかもしれないが、生憎と家以外に私物はあまり無いので纏めておいた金と体だけで充分だ。

街を出てしばらく走ったところに、難民救出などで使う車が何台か止めてあった。人ごみの中にはしっかりリードさんとルイーネさんもいる。軍人の声に耳を済ませてみると、どうやら脱出はギリギリで間に合うらしい。安心してオレも車に乗り込むとしよう。

しかし……。

「……あれ？ルイーネ、ベルドとマリエスはどうした？」

「え？さっきまで二人で何かを話してたけど……え？ベルド！マリエス！何処にいるの!？」

ベルドとマリエスというのはリードさんとルイーネさんの子供だ。

ベルドが長男でマリエスが次妹だ。よく考えてみればお隣の関係でオレにかなり懐いてきたあの二人がオレを見つけて話し掛けてこないはずはない。つまり、二人は車に乗っていない。

そして最悪なことに乗っていた車が動き出した。タイムリミットが近いのだらう。軍人の顔に隠しきれない焦りが見える。

「うそ・・・うそでしょ・・・ベルド!! マリエス!!・・・いやああ!!!」

「ルイーネ! 落ち着けルイーネ!・・・」

「離して! 離してロード!・・・お願い行かせてえ!!」

車から飛び降りようとしたルイーネさんをロードさんが必死に止める。余裕がないルイーネさんはロードさんが涙を流しているのにも気付いてないだらう。

街から離れた距離はおよそ5キロ。大人数を乗せたこの車では、飛ばして二人を拾ってもミサイルの被害から逃げ切れない。無茶苦茶な体を持っているオレでさえこの事態を覆すことは出来ないだらう。だが、それでも・・・。

（はいそうですか、って言うて見捨てられるかよ・・・!!）

「すみません・・・」

「ラーゼ君?・・・くっ!!」

ルイーネさんの腹部を殴って気絶させる。そのまま自然とロードさ

んと目が合う。

「……………先に行つててください。あの二人は必ず助けますから」

「え？……………おい！ラーゼ！！」

リードさんの叫びを無視して軍人から救急セットを強奪。車から飛び降りる。かなり速度を出していたので着地と同時に地面を盛大に転がる。しかし全身に強化手術を施されているリンクスの体にこの程度は大した怪我にはならない。

即座に起き上がって原動機付自動車を凌駕するかのようなスピードで走りだす。具体的なスピードで表すなら時速5〜70キロは出しているかもしれない。もう少し早く走れそうだが逃げるときの為にまだ体力を残しておきたい。

突然耳に大きな風きり音が聞こえてきた。走る速度を落とさずに夜空を見上げてみると、子供が見たら流れ星と勘違いしそうな光が10本ほど見えた。間違いなくミサイルだろう。まずいな、先に街へ着くことは出来そうだが逃げられるとは思えん。

「ベルド！！マリエス！！……………何処にいる！？返事をしてくれ！！」

ゴーストタウンになった街の中でオレは叫ぶ。街は無音状態のため遠くまで声が響く。

ガタンッ！！

ふと家の中から何かが倒れるような音を聞き、ドアを蹴りでぶち破って中に入る。そこにいたのは、黒髪赤めの男の子と黒髪黒目の女の子。

「ベルド、マリエス・・・よかった、無事だったか。まったく何でまだこんな所にいるんだ？」

「「ごめんさい・・・これ」」

二人が両手で差し出してきたの蒼と金の水晶玉。これは確か、この二人が今年6歳の誕生日を迎えた時にラードさんがプレゼントしたものだ。青がベルド、金がマリエスだったっけ？これを取りに来たってわけか。

「はあ・・・まあいいさ。行こう、ラードさんとルイーネさんが心配してるぞ」

「「うん！！」」

揃って笑顔を浮かべた双子を抱きかかえ、オレはすぐに家を出ようとした。オレの記憶が確かなら街の広場の近くに補助席付きのバイクが置いてあったはずだ。それを使ってできるだけ遠くに逃げよう。先に逃げた人達との合流はあとから考えればいい。

しかし、オレの見立てたプランは強烈な爆音と暴風で台無しになった。

ボオオオン！！！！ボオオオン！！！！

家の中の窓から見えた無数の紅蓮の柱。それが意味するのはつまりタイムリミット。しかもそれは街の広場付近から吹き上がっていた。最悪もいい所だな、クソが。

「ラーゼお兄ちゃん？」

「ラーゼ兄さんどうしたの？」

「………すまん」

呆然とする二人に首筋に威力を極限まで抑えた手刀を打ち込む。罪悪感を感じる前に気絶した二人に救助キットから取り出した酸素マスクを二人に付ける。オレ分は初めから頭数に入れてないので無い。

二人に混乱されては厄介なことになる。それに、もう何処に逃げても無事で済む場所など無い。ならばせめて………。

絶えず続く爆音。爆風が吹き荒れ、家の天井に亀裂が走り始める。このままでは間違いなく数分で崩れるだろう。だがそれでいい、それならこの二人は助かる。

ベルドとマリエスを密着させ、オレはその上から覆い被さるように二人を抱きしめ、。この肉体のタフさならば岩の破片を幾ら浴びても貫通することはないだろう。これで二人は生き埋めにはならない。

瓦礫に埋もれたところなら直接火は届かないし、煙が入ってきたり酸素が足りなくなっても二人には酸素マスクがあるから大丈夫だ。まあ、オレが生き残れる可能性は………良くて2、3%が良い所か？てか、むしろ誰かに”無い”ときっぱり言われた方が楽に

なれそうだな。

この二人も絶対に生き残れるということはないが、この世界の中東政治や救助団体は優秀だ、心配はないだろう。その時はオレの遺体も一緒に運ばれるかもしれないが。

ブ
ツ
ツ
!
!

「…………ツ！！」

天井が崩れた。背中に岩の破片が次々と突き刺さり、血が流れ出す。他にも刺さらずに背中にぶつかる破片もある。意識が薄れ、視界が暗くなつていく。痛みは前世で嫌と言うほど味わったが、やはり慣れなどがあるわけもない。

「……ぐっ！！……ベルド……マリエス……生きて、くれよ……」

そうやって二人の頭を撫で、オレは意識を失った。

「.....!!.....!!.....!!」

何だか騒がしいな。何故か消毒液の臭いがするが・・・冥界ってのは実は騒音とアルコール臭に溢れた場所だったのか？

目を開けてみる。すると、視界に映ったのは冥界ではなく、白い天井だった。

何故か体が動かないので首だけ動かして周りを見る。すると、数人の女性と一人の男性が忙しく側にある機械を操作したり、点滴を取り替えたりしている。

「・・・・・・・・ここ・・は、何・・処・・だ？」

あれ？普通に話そうとしたのに、なんだこの掠れ声は。しかもうまく喋れない。酸素マスクを付けられてるせい？いやいや、んなわけないだろう。

多分ここは病院だと思うのだが、処置をしてる人間の言葉が引っかけ。なんだつけ？これ。ああ、そうだ！日本語だ！・・・・・・・・あれ？でも確か日本にはミサイルのほとんどが向かってたんじゃなかったけ？

それに病院ってことは、下手したらA M Sプラグとか改造された体とかがバレてるんじゃないか？

オレが一人思考の海に沈んでいると、男性医師が廊下で誰かと話していた。ここからでは顔が見えないが、どうにも女性に見える。

するとその女性が医師と入れ替わる形で部屋に入ってきた。近くで見るとかなりの美人さんだ。黒い長髪に少し狼を思わせる吊り目。クールビューティという言葉がよく似合う女性だ。オレになに

か用だろうか？転生してから日本人とは会話以前に出会ったことすらないのだが。

「目が・・・覚めたんだな。・・・よかった」

その女性はオレの顔を見た途端に今にも泣きそうな顔をした。なぜ、この人が泣くのだろうか。

「何故・・・あな、たが・・・泣く、ん・・・ですか・・・？」

かなり苦労したが何とか声に出せた。一応前世で日本語は完全に覚えていたのでなまりは無いはずだ。

「！！・・・私の言葉がわかるのか？・・・ああ無理に喋るな、煙や埃を大量に吸い込んだせいで喉が弱っているんだ。頷くだけがいい」

オレの声を聞いて、女性の顔が泣き顔から入室の時の顔に戻った。なるほど、声がうまく出せないのはそういうことか。そういえばこの人は誰だろう？少し無理してでも聞いてみるか？

「そういえば、自己紹介がまだだったな。ラーゼ・ベルセルク君」

どうやら必要なかったらしい。しかし、オレの名前を知っていると言うことはオレのことを調べたということか。AMSの技術を狙っている人間には見えないから一先ずは安心だが。

「私の名前は・・・織斑千冬。・・・キミにこんな怪我を負わせてしまった張本人だ」

これがオレ、ラーゼ・ベルセルクが、未来に『世界で唯一ISを動かせる男性』と呼ばれる織斑一夏とその姉、織斑千冬の二人に出会った出来事の始まりである。

第1話 崩れ去った幸せと新たな出会い（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回のオリジナルは白騎士事件でのミサイルが日本以外に飛んで行ったという滅茶苦茶なものです。

あと、原作キャラは出せたけど、ストーリーが原作に入るのはまだ1、2話先だと思います。

それと、近々試験が迫ってきましたのでしばらく更新を遅れさせていただきます。まあ元々早くもないのですが。どうかご了承ください。

では、また次回。

第2話 新たな家族（前書き）

試験勉強の休憩時間に投稿です。

では、どうぞ。

第2話 新たな家族

S i d e ラーゼ

「なあラーゼ、組み手付き合ってくれないか？箒も一緒にやろうぜ」

「別に構わんが・・・一夏、せめて2対1でやろう。私達が一人だけで挑んでも勝負にならない」

「そうだな・・・それじゃ兄さん、箒、タイミングはそっちに任せるよ。・・・けど今日は姉さんも帰ってくるし、一回だけにしようか」

ラーゼ・ベルセルクだ。

日本の病院で目覚めたオレは織斑千冬さんに出会い”キミにこんな怪我を負わせてしまった張本人だ”と言われた。

詳しい事情を聞くと、ミサイル基地にハッキングし、あの2000発以上（正確な数は2341発）のミサイルを一斉発射させたのは千冬さんの友人なんだそうだ。そして千冬さんはその友人の計画の手伝いとして、日本に飛来してきた大半のミサイルを迎撃したらしい。

その話を聞いた瞬間は鼻で笑いそうになった。一人の女性がどうや

って無数のミサイル群を迎撃出来たというのだ、と。

そうそう思ったオレは、次に千冬さんが話した内容に興味を示した。

IS。正式名称インフィニット・ストラトス。

宇宙空間での活動を想定し、千冬さんの友人が開発したマルチフォーム・スーツ。理論上での性能は従来の兵器を圧倒する性能を秘めている。しかし、世界はISの性能を”絵空事”だと言って興味を示さなかったらしい。

その対応は当然だとも思うが、同時に愚かなことでもある。千冬さんが簡単に教えてくれた性能だけでも、物質を粒子化し搭乗者の意思で武装を交換する高度な火器管制、戦闘機のような速さで縦横無尽の飛行が出来る運動性能。これだけを聞いても充分に興味を示す価値はあったはずだ。

もし、これを一つの国が独占すれば、パックスエコノミカのように全ての国家と戦争をするのも可能になっただろう。そこにオレが持つAMSとネクストの技術を加えれば敗北はまずありえない。やるつもりもないがな。

ただこの時、オレはISが女性にしか反応しないという重大な事実を聞いていなかったのだ。

話がずれたな。そこでISの圧倒的な性能を世界に知らしめる為に千冬さんの友人は今回のような騒動を用意したんだそうだ。

日本に向けて同時発射された2000発以上のミサイルをIS”白騎士”を使って千冬さんが一人で迎撃する。ついでに白騎士を鹵獲、

あるいは破壊しようとした国家軍も死傷者無しで無力化したという二重効果が生まれた。今では世界各国がISを抑止力にしようと千冬さんの友人の理論に食い付いているらしい。

結果的に計画は大成功。しかし、唯一つだけ失敗があった。それが予定コースから外れて迎撃が間に合わず、中東に飛来した数十発のミサイル。そして唯一人だけの負傷者、つまりオレのことだ。

ミサイルの迎撃と軍の無力化が終わった千冬さんは即座に中東へ直行。瓦礫の下敷きになっていたオレを発見して救出してくれた。ベルドとマリエスは気絶したままだったが無傷だったので無事ロードさんの所に届けられたそうだ。

だがそれに反してオレは見るも無残な状態だったらしい。破片が刺さった背中出血以外にも後頭部に当たった破片、鉄の棒などが貫通して負傷した幾つかの内臓、意識を失った状態で煙と埃を吸い過ぎてボロボロになった呼吸機能、他にも体中を破片で刻まれた無数の切り傷。はつきり言おう。2、3%の力を甘く見ていた。

とは言ってもオレは病院での処置を繋ぎ繋ぎに行って、この病院でようやく怪我の処置が完了した。それに、怪我の処置が終わってもオレは意識不明の状態で、目が覚めた今日まで一年以上眠っていた。

「・・・・い、ち・・・・年・・・・？」

「・・・・そうだ。・・・・本当に申し訳ないと思っている。私達の不手際で危つくキミは命を落とす所だった。・・・・すまなかった」

千冬さんは深く頭を下げた。入室の時のあの顔からして、目が覚め

るまで何度も見舞いに来てくれたのだろう。その度にどれほどの精神的な負担を感じたのか、その負担を果たして何度感じたのだろう。本音を言えば、オレは千冬さんとその友人さんにはまったく怒りの感情を抱いてはいない。むしろ感謝しているくらいだ。ベルドとマリエスは無事だったし、千冬さんがISで即座に駆けつけてくれたからオレは死なずに済んだ。そのISを開発してくれた友人さんにも同じように感謝している。

それに意識を失っていても、オレの体に秘められているAMSの技術を欲しがる輩は少なからず居た筈だ。しかもオレは今回の事件で唯一人の被害者、政治的注目は無駄に集まったはず。それでもオレがこうして無事に目覚めることが出来たのはこの人達が守ってくれたからだろう。

「気に・・・して、ま、せ・・・んよ」

「え？・・・だ、だが・・・」

「助け・・・て、くだ・・・さって・・・あり、がとう・・・ござい、ま・す。・・・グッ！・・・ゲホッ！」

喋りすぎたのか軽く吐血した。しかしこの言葉だけは伝えなければならなかった。助けてもらったら感謝するのは人として当然だ。今のオレの体がまともな人間と呼べるのか疑問があるが。

「もういい・・・もう、いいから・・・・・・ありがとう」

オレの手を握って涙を流す千冬さん。しかしその表情は先程とは違い、何かが吹っ切れたような顔をしていた。あとオレはその後に医

者から吐血した件でかなり怒られた。すみませんでした。

それからオレは凄まじい勢いでリハビリを終えたのだが、行く当てのないことにその時に気づき、盛大に自分を恨んだ。そこで「ウチに来ないか？」と救いの手を差し延べてくれたのが千冬さん。オレは喜んで引き受け、織斑家に引き取られた。AMSの技術を狙う連中から追われると予想してたので千冬さんには大感謝だ。

そして冒頭に戻り、オレは織斑家の一番下の兄弟ということになっている。前世の家庭が滅茶苦茶なものだったので、今の家族はとても温かく感じる。

今はオレの兄である織斑一夏とその幼馴染、篠ノ之箒の二人を同時に相手にして組み手をしている。最初は二人の剣道を見ているだけだったのが、兄さんに誘われた時に『オレはナイフと素手の方が慣れている』と答えてしまい兄さんと勝負。

結果はオレの圧勝。小太刀サイズの木刀を片手に兄さんの竹刀を上空に払い、一瞬で首筋に木刀を添えて終了。試合時間はほんの数秒だった。

それからこうして2対1の組み手を偶にやっている。オレは素手、兄さんと箒は防具無しで武器に竹刀を持つ形だ。楽勝か、と聞かれれば実はそうでもない。二人はこの年に不相応な位の实力を持っている。鍛錬さえ欠かさなければ数年後には前世のオレとやり合えるレベルにはなるだろう。

だが今は所詮子供、楽勝ではなくても油断しなければ負けはしない。息を切らした兄さんが唐竹に振り下ろしてきた竹刀を軽いサイドステップでかわし、踏み込んできた右足を横に払って兄さんを横転させる。立ち上がる前に首筋に手刀をゆっくりと添えた。一回死亡。これで兄さんはリタイアだ。

「一夏！？・・・はあっ！！」

前方から箒が額を狙って突きを放ってくる。首を僅かに傾けて突きを回避、箒の左足に自身の左足を絡めて軽く突き飛ばす。

「え？・・・うわぁ！」

いつの間にか片足が地面から離れたことで箒は地面に尻餅を着く。即座に立ち上がろうとするが、その前にオレは蹴りを顔面に・・・・当たる寸前で止めた。

「・・・一回死亡。これで箒もリタイアだ」

「あゝあ、また負けか・・・初めてやったときから一撃も入られねえよ」

「むう・・・勝てないとわかっていても、やはり悔しいものだな・・・」

「兄さんも箒も、その年でその位強いのはすごい方だよ。オレがちょつと異常なだけ」

オレは前世で何度も戦闘を経験してきたし、リンクスとなったこの体のおかげで前世のオレが再現不可能だった動きも出来るようになる

った。この体なら前世の最後の戦場でも生き残ることが出来るだろう。

だがそれは対人戦、中東の時のような災害の前ではまるで無力だったな。

「さあ、兄さん、箒、もうお仕舞いにして早く着替えよう。今日は姉さんが帰って来るんだし」

千冬さんはオレと一夏を養うために一人で働いている。最近では国内より海外に行くことのほうが多いかもしれない、養ってもらってるオレと兄さんに出来るのはせめて帰ってきた千冬さんをゆっくりさせてあげられるように家事をしっかりすることぐらいだ。

そんな千冬さんが今日、日本に帰ってくる。これから3人で出掛けて空港に迎えに行くところだ。幸い空港は歩いて行ける距離なので大人に同席してもらわなくても平気だ。

この時、オレは知っておくべきだった。不幸というのは一つの出来事だけで終わるものではないということに。

第2話 新たな家族（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

主人公がようやく織斑家に引き取られました。しかし未だにISやネクストなどを使った戦闘が書けない。orz

出来れば次回で少年時代は終わりにしたいと思います。

では、また次回。

第3話 目覚めの予兆（前書き）

気が付いたらPVが2万を超えていました。

みなさんありがとうございます。

パパチャ様、baru様、デウカリオン様から感想をいただきました。ありがとうございます。

では、どうぞ。

第3話 目覚めの予兆

S i d e ラーゼ

もう少して千冬姉さんが乗る飛行機が降り立つ空港。兄さん、箒、オレの三人はゲート前で椅子に雑談をしていた。先程放送があり、姉さんの乗った飛行機はあと十数分で滑走路に入るらしい。

兄さんと箒は到着が待ち遠しいのか笑顔で話し合っている。見ていて微笑ましいものを感じるが、オレは会話に混ざらず、何度か周りの気配を探っている。

（3人・・・いや、5人に増えたな）

空港に入ってから感じ始めた複数の視線。最初は子供だけで空港に来たことを珍しく思った人間のものだと思ったが、確信した。

これはその手のものとは違う。前世で数えきれないほど感じた尾行と監視の視線だ。しかしすぐに気づけないとは、オレも随分と緩くなったものだ。初めから気付けていれば適当な理由で兄さん達から離れて早めに監視を仕留められたのに。

仕方ない、今からでもやるか。

「兄さん、箒、ちょっと飲み物でも買ってくるよ。姉さんが先に来たら正面ロビーで待ってて」

兄さんと箒は疑いもせずに元気良く返事、オレは二人の元から離れていく。移動するに連れて5つの気配がオレを追い掛けてくる。

（やはり狙いはオレか。AMSの技術が目当てか……まあすぐにわかるだろう……締め上げればな）

その時のオレは知らずの内に歪んだ笑みを浮かべていた。

「げほっ！……もう……許し……バキッ！」……がぁ！……」

「だったらさつさとバツクの組織名を吐けよ……こちら人を待たせてるんだ。そろそろ鼻や指も折っちまった方が良いか……？」

スパイ5人組みは意外と簡単に見つかった。この世界でのスパイの錬度が低いのか、オレが相手した奴らが異常だったのか、どっちにしても苦労はしなかった。

あとは姿を隠して尾行を撒き、一人ずつボコボコにしてリーダーを聞き出した。現在オレの足元で地べたを這いながら顔を蹴られて口から血を吐いている男がそうだ。他の4人は四分の三殺し状態にして警備員の巡回ルートに置いてある。

今の場所は人の手があまり無い古い倉庫の中。他の仲間と連絡が出来なくて焦ったのか、人目のない場所に逃げようとしたのをオレが追跡していたことに気付かなかった。結果的にこいつは自分で自分の首を絞めた。

一応逃げないようにこいつの腕と足の骨は全て折ってある。顔面もボコボコにしているが、喋れなくなると少し困るので顎の骨を折らないように手加減を加えている。

いやあ、この体ってかなりの怪力だから狙い所しだいで骨を折るのは蹴り一発で済んだよ。まあ中には砕けた骨もあるかもしれんが知ったことではない。

一度目は千冬さん達が確かに拒否の意思を示したはずだ、それをわかっていてこいつらはやって来た、ならばもう掛けてやる慈悲は無い。

「・・・あ、そうだ。聞き忘れてたけどお前らがオレを狙ってた目的って何？・・・とぼけた場合は肩と指の骨を砕くぞ」

「・・・ひっ！・・・お、俺達への命、令には・・・AM、Sって名前の・・・技術、だって・・・」

「・・・なに？」

AMSの技術を狙ってきたことは完全に予想通りだ。そこはいい。しかしオレの疑問点は別にある。

なぜこいつらに命令した組織の人間は”AMS”という技術名を知っている？

オレは今まで、この世界の誰にもAMSの技術詳細はもちろん、AMSという略称や正式名称であるアレゴリーマニユピレイトシステムの名前すら口に出していない。資料などにも残した記憶は無い。

ならば何故こいつらを雇った組織は名前を知っていた？この世界の人間が付けた略称と偶然一致した？馬鹿な、詳細も知らない段階の技術に略称が必要なほど長い名前を付けるわけが無い。

（いや待てよ・・・詳細を知らずに名前は付けられない、なら逆に明確な詳細を知っていたら？もしまったく同一の技術体系が存在していたら？・・・だがそんなことがありえるのか？オレのこの力は元々ヘラに与えられた力なんだぞ？・・・ダメだ、情報が少な過ぎる）

「・・・おい、これが最後のチャンスだ。お前らの所属してる組織名はなんだ？・・・素直に吐けばオレの情報を一切話さない条件で見逃してやる。・・・ちなみに反対の場合、わかるよな？」

「（コクン！）（コクン！）・・・亡、亡国企業って名前だ・・・ファントム・タスクとも呼ばれてる・・・」

「ファントム・タスク・・・あんがとよ。んじゃ、ご苦労さん・・・」

「え？・・・「バキツ！！」・・・がつ！！・・・なん・・・で・・・」

拳で醜く歪んだ顔で相棒に裏切られたような目をオレに向け、男は気を失った。何を驚いているんだ？監視していた相手をそのまま所属先に返してやるわけないだろ。

指紋などの付着を避けるために装着していた黒い手袋は外さず、気絶した男の所持品から無線機を見つけて握り潰し、粉々に踏み砕く。そして男を肩に背負い、他の四人と同じように夜の警備員が巡回コ

― スで偶然発見したように設置しておく。こんなもんか。

少し遅くなってしまったが、後で千冬さんに事情を話せばわかってもらえるだろう。そして、オレ自身もこれからどうするか決めるべきだ。

スパイが送り込まれて、そのスパイが全滅した。ならば敵の狙いはオレではなく周りの人間に変更される可能性が大きい。それを回避するためには、オレという存在が今の環境から姿を消さなくてはならない。

「ふっ……やれやれ、この日常もいよいよ潮時か？」

皮肉げに笑いながら右手で拳を作る。そしてその拳を、壁に横殴りで叩きつけた。全力ではなかったがピカピカのタイルで作られた壁に大きな蜘蛛の巣状の亀裂が走る。

「……ふざけんな」

見えぬ敵に対して放った言葉にあらん限りの憎悪を込める。握りしめた右手からは力の入れ過ぎで血が出ているがどうでもいい。

オレは願った。殺し続けることしか出来なかった人生をやり直したいと、そして手にしたんだ、新たな人生を、新しい家族と過ごす日常を。なのにそれがまた壊れようとしている。

認めない。前世を否定はしないが、新たな人生での幸せまで否定されるなど冗談ではない。不幸は前世でイヤと言うほど経験した、だから今度は絶対に幸せを諦めない。それを邪魔するモノがいるならその敵を破壊し尽くす。

今のオレにはそれを可能にする力が眠っている。オレのみに与えられた力が。やれる、やってやる。今度こそ、オレは……。

ピー。

『凍結強制解除。これよりネクスト、ノブリス・オブリージュ、オルレア、二機のデータのセットアップを開始します』

突然脳内に響いた短い電子音、それに続いて左目の網膜に表示された文章。オレの理解が追いつくより先に網膜の文字は消え、新たに二つのメーターが表示された。

「これは……「プルルルル!!」……ん？」

前方に設置されていた公衆電話がコール音を立てている。まるでオレの身に起きた異常と合わせたようなタイミングだ。普段なら存分に警戒するところだがオレは左目を手で押さえながら躊躇わず受話器を取る。

「もしも『やあ!お久しぶりだね……』「ガチャ!」……行くか「プルルルル!!」……はあ」「ガチャン」何の用だ?ヘラ……」

受話器を取った時と同じように躊躇いなく受話器を置いたが、再びやってきたコール音を聞いて溜め息を吐きながら受話器の向こう側の女神に用件を聞いた。

『それより!いきなり電話を切るなんて酷いじゃないラーゼ!……とにかく、いきなりデータの凍結が解かれたから連絡しに来たつてのに』

いつからこいつはオレのことを”キミ”から”ラーゼ”と呼ぶようになったんだ？こいつと仲が進展するようなことなんて……あったな、プロローグ2で思いつきり。とりあえず意識しないよう冷静に話す。

「データ？……この左目の網膜に直接映ってるやつか？」

『そうだよ。あの時言っただけでラーゼの機体は来るべき時期が来るか、条件を満たさなければ使用できない……。はずだったんだけど。ラーゼの激情が作用して凍結が強制解除されちゃったみたい、よっぽど強い感情を抱いたんだろうねえ……。何なのかは大体想像出来るけど』

「オレの前世を見てきたお前ならこそ、か？……。それで？これはどうゆう仕組みなんだ？」

『今から説明するね。少し長くなるよ？』

まずその左目に映ってるのはメーターはラーゼが選んだ機体のノブリス・オブリージュ、オルレア、二機のネクストをその世界の戦闘に最も適した形に最適化し、同時に変化したネクストのデータをラーゼの体の中にダウンロードしてる作業の進行度だよ。他の機体も全てそれと同じように行われるから。

それが100%になればラーゼは晴れて本物のリンクスってこと。

それと、その作業には段階があるの。今みたいに機体のデータを読み込み始めてる状態が第一形態^{ファーストフェイズ}、その作業が終了した状態が第二形態^{セカンドフェイズ}、そこからしばらく扱って慣れたら第三形態に入るの、第三形

態になったら武装とかパーツを自在に変更できるようにするよ。あつ、機体の整備とかは専用の道具を送るから。

こんな所かな？質問ある？」

「いや、大丈夫だ……。それと、別のことで質問がある——何故この世界にAMSの技術が存在するんだ？お前が選んだこの世界は”アーマード・コア”の世界ではないんだろう？」

現状は理解した。しかしまだ気になることはある。あのスパイと違ってヘラなら確実に何かを知っているはずだ。オレをこの世界に送ったのは他でも無いヘラなのだから。

「それだけは絶対に無いよ……。絶対にね——これに関しては私も予想外だったんだけど……。前世のラーゼに宿ってたタナトス（死神）の力が何らかの形で干渉したのかも……。そっちの世界で目が覚めた時も生まれた瞬間というよりはどっかで倒れてたって感じじゃなかった？」

「ああ……。目が覚めたら荒野の真ん中で寝てた——衣服もロボ口だったな」

『確定だね。タナトスの力がラーゼの来世を”転生”から”憑依”に変更したんだよ……。私の予想だけど、その変更が起こした何らかの力で世界にAMSの技術が生まれた。最悪ネクストも……。

そして体にラーゼの魂が宿る前のその体の持ち主は何処かの研究施設で暮らしてたんじゃない？それこそアスピナ機関みたいな所とか……。そこを抜け出してしばらくして……』

「オレの魂が宿った、か——つまり、この世界にはAMSやアイマードコア・ネクスト、それを動かすリンクスが存在している？」

「うん。十中八九ラーゼと同じ力を使うだろうね……。でもその世界にはISもあるからリンクス戦争とかは絶対に起きないと思うよ。それだけは安心して……。あ、そろそろ時間切れかな？」

「ありがとう、ヘラ——色々教えてくれて助かった」

『いいの！いいの！……じゃあ、頑張つてね……。ちゃんと幸せにならなきゃだめだよ？』

そこで電話が切れた。受話器を戻し、今度こそ兄さん達の所に歩き出す。

しかし、どうやらオレの敵は一つの企業だけでないらしい。だが恐怖は無い。オレの邪魔をするのならそれら全て倒してみせよう。

左目に触れる。表示されたメーターの数値は現在ノブリスが56%、オルレアが49%。

「そうだ——あきらめない……。絶対に、諦めてたまるか……」

そう呟きながら空港の広いロビーに足を踏み入れた瞬間、ロビー全体を爆音と閃光が支配した。

第3話 目覚めの予兆（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

主人公の来訪の仕方は死神のせいでは実は憑依になっていました。ちなみに主人公の魂が宿る前の人格は命令に忠実な人形のようなものです。

そしてすいません、少年時代が未だに終わりません。下手をしたらあと1、2話分使うかも……。

少し無理矢理な感じかもしれませんが、このISの世界にアーマードコアの技術が秘密裏に生まれましたので、原作のリンクスやネクストも出していくつもりです。多分アームズフォートもあるかも。

では、また次回。

第4話 謎のIS、急襲（前書き）

BR様から感想をいただきました。ありがとうございます。

突然で申し訳ないのですが・・・どなたかオルレアの左右の背中武装のパーツ名をご存知ありませんか？左背中はずラズマキヤノンというだけでパーツ名がわからず、右背中はわかりません。わかる人がいればお手数を掛けますが教えてください。

では、どうぞ。

第4話 謎のIS、急襲

S i d e 千冬

私は海外での仕事を終えて久々に故郷である日本に帰ってきた。ゲートを潜つてすぐに私に飛びついてきたのは大切な家族であり弟の一夏。傍には私の悪友である篠ノ之 束の妹、篠ノ之 篤がいる。ふと、もう一人の弟がいないことに気付いた。ほとんど一夏の独断で一番下の弟ということになっているがあいつは外見年齢よりも遙かにしっかりしているの、いつも一夏達を傍で見守っている。今回のような迎えの時も普段は必ず着いて来るのだが……。

「ただいま、一夏、篤……ラーゼはどうした？」

「おかえり千冬姉！……ラーゼはなんか飲み物買ってくるって行ったり戻ってこないんだよ……千冬姉が先に着いたら正面ロビーで待つててくれって……」

ラーゼが一夏達を置いて飲み物を買に行つた？ 普段ならありえないことだ。何かあったのか？

あいつは自分の存在が色んな意味で世間から注目を集めていることを充分に理解している。本当にあいつは外見からは想像もできないほどしっかりし過ぎている。今だって自分だけで目の前の問題を片付けようとしているのだから。

少しは頼って欲しいと思った。だが事実上ラーゼには手助けなど不要だ。それほどの力をあいつは持っていた。実際、あいつを物理的

に鎮圧するには私でもISの力が必要なほどだ。

ラーゼが入院していた頃に医者から聞かされた話だと、ラーゼの肉体は内臓や脳を除いた全身に人工的な強化手術を施されているらしい。何よりも驚かされたのはラーゼの首の後ろに人工皮膚で隠された接続プラグ。それは明らかに一般人の生活には必要無い物だ。

どれだけ簡単に見積もってもラーゼ個人が有する身体能力は人知を超えていた。一度だけ手合わせしたことがあったがあいつは小太刀サイズの木刀一本だけで私とほぼ互角だった。

自慢ではないが私の身体能力も他人と比べればかなり異常なのだろう。しかしラーゼはあの年で私のそれに追いついた。

本人の様子からしてラーゼは自分のことを全て理解している。辛くないのか？とは訊けなかった。答えの予想が付かないのに何故だかラーゼの答えを聞くのが怖かったのだ。

ラーゼが目を覚ました時もそうだ。

絶対に許してもらえないと思っていた、罵倒される覚悟も出来ていた。当然だ、私と束はラーゼに生死の危険を伴う怪我をさせたのだから。今思えばあれで生きていられたのはラーゼだったからだ。

だがラーゼは恨み言の一つも言わずに許してくれた。しかも、あることか逆に感謝された。一瞬頭の中に障害でも出来たのどうかとも思った。

嬉しかった。しかし同時に罵倒の一つも無かったことが怖かった。何故そうも簡単に許せるのだろうか？本当は殺したいほど恨んでいる

のでは？簡単に言えば、私はラーゼの言葉が信じられなかった。家族へ勧誘したときも本心ではおっかなびっくりだった。

もちろん今ならそんなことはないとはつきりわかる。あいつは私達と本当の家族として向き合ってくれている。

話がかなりずれたな。

とにかくラーゼならば自分で問題を解決して戻ってくるだろう。

「そうか・・・では先に行って待っていてよう」

「うん！」「はい！」

三人で歩き出し、会話をしながら正面ロビーを目指した。

ラーゼは私がISの知識に詳しくたことから気づいているだろうが、一夏は私がIS関連の仕事をしていることを知らない。束の計画によつて今やISは全世界の軍事力の要となっている。そんな時期なのでこつちに居られるのはそう長くない。

（いいかげん海外にいる束をラーゼに合わせて5人で遊びにでも行くか・・・）

目の前で楽しそうに話している弟とその幼馴染を見ながら頭の中でそんなことを計画してみる。

だが次の瞬間、私の思考は突如やってきた閃光と爆風によつて中断された。

この時、私の計画が実現される可能性は無くなった。

Side Out

爆風がやってくるよりも前に千冬は一夏と箒を抱き寄せ地面に伏せた。その時ゴンツ！という音が聞こえたか千冬は気にしない。爆風の熱が千冬の肌を撫でて通り過ぎる。

千冬が顔を上げると、そこは空港の中とはまったく違った場所になっていた。人が最も密集するゲートやチケットの販売口、電子掲示板などの場所から巨大な黒煙が巻き起こり、爆発の炎が引火して壁や置物は燃え盛っている。

炎は爆発の直撃を受けて絶命した人々の体を焼いてその勢いを増していく。

「爆弾テロか・・・だとしたら何処の馬鹿だ・・・？」

千冬は目の前の状況に少し混乱しながらもほとんど冷静だった。

自然と自分の白騎士に続く新たな愛機、暮桜を展開しようとするが手を止めて舌打ち。間の悪いことに現在暮桜は束の要求で整備に出していたのだ。

ISが無く、一夏と箒がいる今の状態で自分に出来ることは無い。そう思い千冬は額を打って気絶している箒と事態をまったく理解できていない一夏を抱えて移動する。その際一夏に死体を見せないよう注意を払う。

爆発音が連続で響いた。聞こえてきた方向は真上。千冬が視線を上

げた先では空港の天井に張り巡らされた丸い鉄柱が落下していた。仕組まれていた爆弾は天井の鉄柱の接続部分を数箇所破壊したのだ。

その中の破片の一部が千冬に迫る。決して大きくなくても膨大な落下エネルギーを得た物理的破壊力は人一人を殺すには充分。

避けられない。逃れられない死を理解した千冬は目を閉じた。次の瞬間に破片は千冬の体に直撃し、鮮血を撒き散らす……

はずなのだが、その痛みは訪れなかった。

バアアアン！！！！

破片が千冬に迫った時、千冬の横を人影が通り過ぎ、落ちてきた破片をなんと右の拳で殴った。間違いなく腕の骨が粉々になるはずなのだが、砕けたのは破片の方だった。しかも見る限り衝突した拳には少しの出血しか見当たらない。

千冬は聞こえた粉砕音に目を開ける。するとそこには……。

「痛ててて……流石にこの体でも無傷とはいかないか。……怪我無いですか？姉さん、兄さん」

右手をぶらぶら振りながらこちらを心配してくるラーゼの姿があった。その登場にこそ驚いたが、もう一人の弟を見て千冬は目を伏せて笑った。

「ああ、大丈夫だ……ただいま、ラーゼ」

千冬言葉にラーゼは一瞬目を見開いたが、すぐに苦笑した。

「おかえりなさい・・・千冬姉さん」

S i d e ラーゼ

正面ロビーに辿り着いた瞬間に起こった爆発。その原因は間違はなくオレがさっきボコボコにした奴らのバックだろう。ちっ、今になってはもう遅いがやっぱりあいつ等殺しておけばよかった。

しかし、スパイを送り込んでくる時点で小さない組織だとわかるが、まさかここまでやるとはな。

こんなことをするのはもはやただのテロリストだ。亡国企業はオレの頭の中にある超えてはいけない境界を超えた。

人の血で汚れきったオレが言う資格は無いのかもしれないが言うてやる、この行いは”悪”だ。

（まずは兄さん達を探さないとな・・・多分姉さんと一緒に正面ロビーにいた筈だ）

今の位置は爆破地点の一階からエスカレーターで上がった2階。縦の高さはほぼ12、3メートル。エスカレーターを使わずにまっすぐ一階に飛び降りる。

着地。足に負荷が掛かり、痺れが走る。だがそれだけだ。そろそろこの体の反則性能で可能な行動は直感的にわかる。

空港にいる人間の全員が逃げ出している中、周りを見渡して兄さん達を探す。

（お、いた・・・って！？・・・）

見つけたのは姉さんだったが、兄さんと篤は千冬さんの脇に抱えられている。そんな姉さんの上から一つの破片が落ちてきた。あのままでは直撃する。

迷わず走り出して右の拳を突き出す。真空を生み出して放ったそれは破片を粉々にした。

流石にこれは無傷とはいかず裂傷が出来たが、逆に何故裂傷だけで済むのだろう？

そんなことを考えながら姉さんに無事が訊くと、無事の報告とただいまの言葉が帰ってきた。

とりあえず安心しておかえりと返し、すぐに空港から出ようと姉さんの荷物を持って一緒に出口へ走り出す。周りにいた人々も殆どが逃げ終えているようで、人影があまり無い。残っているのは天井まで到達しかけている炎と爆発で降り注ぎ散乱した破片だけ。

「な、なあラーゼ・・・何がどうなってるんだ・・・？」

篤のように気絶していない兄さんは現在の状況がまったく理解できていないようだ。それでも暴れたりして姉さんの邪魔をしてないので充分大したものだが。

「早い話がテロだよ・・・平和なこのご時世、しかも日本の中でこんな体験するなんて本当に運が無い・・・」

「そういうラーゼはなんで冷静なんだ・・・？」

「オレは兄さん達の所に来る前に何度か中東で経験したからだよ・・・実際、こんな状況じゃ筭みたいに気絶しちまった方が色々幸せな方だ・・・」

「お前ら・・・この状況でよく話せるな・・・見えた、出口だ」

オレはかなりの速度で走る姉さんに並びながら3人で会話する。緊張感がまるで無いが頭上の破片には注意を向けているので大丈夫だ。出口の外には人ごみが出来ていて、耳には消防車のサイレンの音が聞こえる。どうやら騒動は次第に治まるようだ。

煙が近付いてきたので先に姉さんを行かせ、オレがその後続く。

だがオレが出口を通ろうとしたとき、背筋に強烈な悪寒が走った。気が付けばオレは千冬姉さんを荷物と一緒に出口の外に突き飛ばしていた。その時、呆然とこちらを見る兄さんと驚愕の顔でこちらを振り向いた姉さんの二人と目が合う。

「・・・ラーゼ・・・？」

「・・・ッ！？・・・ラーゼ！！」

背後から猛スピードで近付いてくるジェット音。飛来してきたそれは、爆弾よりも一際大きな爆発を起こして出口とその周辺を吹き飛ばした。

「・・・ぐうつ・・・！」

爆発で後ろに飛ばされながら咄嗟に両腕で顔を守ったが、飛び散った破片が腕や脇腹に少量突き刺さる。

背中を地面にぶつけて着地。顔を上げた先には崩れ去った瓦礫と業火に完全に塞がれた出口。どう見ても出られそうにない。巻き起こった炎はすでに空港内部の7割まで広がっている。

（・・・ていうか、しばらくは出られそうにないな・・・）

ガチャン！！

「・・・ッッ！」

背後から聞こえた重い駆動音。振り向いて確認するより先に全力で右に跳ぶ。

その瞬間・・・・・・・・。。

ババババババババ！！！！！！

鼓膜を突き破りかねない轟音と共に、一瞬前にオレが立っていた場所が吹き飛んだ。いや、音からして無数の銃弾が着弾しただけなのだろう。だが、銃弾の大きさと連射速度が異常だった。

着弾点から逸れた場所に空いた穴の大きさから、弾の大きさは人間が単体で使う兵器のものじゃない。戦車などに搭載されている対人機銃でもここまではならないと思う。

連射速度も最低で毎秒20〜30発はあるだろう・・・・でなければ

ば床に巨大なクレーターが出来るわけもない。ちなみに、毎秒30発で発射される弾は毎分で1800発に到達する。

立ち上がって視線をクレーターから発射元・・・空中に持ち上げる。視線の先の相手もオレを見た。

そこにいるのは2メートルを超える真つ黒の中に白いラインが入った巨人。だがその身は人のものではなく機械だ。

その全長からは太いとも細いともとれない二つの足、腕の長さは指先までで太ももの辺りまで。両腕の肩を円状の装甲が包み、その上に短い三本のスパイク、肩から肘関節までを金属で出来ている伸縮式のバルブで固定し、そこから下の腕は少し細い。(イメージ：アニメ版のIS4話に登場した黒い敵ISの腕を短くして細くし、肩を上記の通りに変えた姿)

そしてその真ん中、人間で言う胴体の部分にもう一つの体がある。不気味な覆面と全身タイツみたいな格好をしているが、何？あの変態・・・まあ、あの格好はとりあえず無視して。

多分あれはIS、インフィニット・ストラトスだ。姉さんの話ではもう全ての国が第二世代のIS開発に着手したらしいが、亡国企業はどこでこんなものを手に入れた？つか子供一人が狙いで普通ISまで持ち出すか？

それに、一目見ただけでもこいつが積んでる装備は常識的に人間に使用してはいけないと思う。

右腕の下に装着されているガトリングガンと右腰の横にぶら下げているドラム型マガジン、これがさっき床にクレーターを作ったのだ

ろっ。

ISの装備は基本、粒子化した状態から実体化させて自由に使用する。恐らくこいつにはまだまだ物騒な火器が搭載されているな。

黒いISが空中に浮いたまま無言で右手を持ち上げ、ガトリングの砲口をオレに向ける。

（話すつもりはありません・・・てか・・・？）

先程と同じように全力で跳ぶ。今度も右だ。立っていた床がさっきと同じように挟られ砂埃が舞う。今度はさっきと違って黒いISはガトリングのトリガーを引いたまま砲口をオレに向けてくる。

着地してからも全力で走り抜ける。ISにはハイパーセンサーという聞くだけでも凄さが伝わってくる高性能センサーが搭載されている。つまりあの黒いISは精密射撃が期待できないガトリングでも的確な射撃が出来るのだ。

人前で一度も発揮したことない”全力”で走る。オレの急加速に反応が遅れガトリングの追跡から距離が開く。もちろんすぐに追いつくだろうが、照準が狂った僅かな隙にエスカレーターへ走る。二階へ逃げて隠れれば少しは時間が稼げるだろう。

だが、それは相手にも予想できたことだった。

背後からキューイン！という音が響き、黒いISの肩から新しい武器が出現した。その形は縦に長く、一本の筒のような形をしている。その筒の先端が向いているのは間違いなくオレ。

「あれは……やばっ……！」

ポオオオン！！！！

大きな発射音が響いたと同時に右に転がる。オレのいた場所を白い煙がロケット音をばら撒いて通過した。

顔を上げた途端に強烈な爆風。両手で顔をガードしてなんとか踏み止まる。

爆煙が晴れた場所には完全に原形を失ったエスカレーターが見える。形を見て思ったが、やはりあれはロケットランチャーだ。出口をふっ飛ばしたのもアレだろう。

逃げ道を塞いだ黒いISは再び右手のガトリングを持ち上げた。

「……調子に……」

砲口がこちらを向く前に転がっていた手の平サイズの瓦礫を右手で拾って投球ホーム。

「……乗るんじゃないやねえ！！……」

左足で地面を踏みつけ、全力投球。ただのストレートだが、この体の全力で投げた物体の速度は160キロを超える。そしてそれだけの速度が加われば、十分な殺傷能力を秘めた凶器となる。

黒いISの搭乗者はオレの攻撃が予想外だったのか一瞬固まって反応が遅れた。そのまま瓦礫は搭乗者の顔面に食い込むはずだったが、だが、瓦礫は顔面の寸前で発生した力場に物理エネルギーを殺され、

地に落ちた。

（……今のがISの中で最も重視されてる”絶対防御”か……）

ISは防御面、詳しくは操縦者の保護に一番目を配っている。それが今の絶対防御だ。搭乗者の生死に関わる損傷はあのように自動防御が働く、しかし絶対防御はISのエネルギーが大幅に削られると姉さんが言っていたし、今で少しは消耗させられたはずだ。

（……攻略の糸口は見えたな……あいつの正体も……変だとは思ったが、無人機か）

操縦しているのが人間、しかもそれがISである時点で女確定なのだ。いかに訓練を積んでもあの速度で瓦礫が顔面に接近してきて何の反応もないのはおかしい。反射的に少なからず声が出るか、腕で身を庇うぐらいはするはずだ。

ガチャン！

ガトリングの砲口が再びオレを捉える。降り注いで散乱した巨大な瓦礫が集まる地点に向かって走り抜け、瓦礫を盾にしながらガトリングを回避する。だが、突然周りの瓦礫が纏めて吹き飛んだ。黒いISがロケットランチャーを放ってきたのだ。

爆発に肌を焼かれるが、出血などの外傷は殆ど無い。爆炎の中から黒いISに向かって走り出す。ハイパーセンサーでオレを捉えていた黒いISは空中に少し浮いてガトリングを向けていた。立ち止まらず走る速度をあげる。

ガトリングのトリガーが引かれる前に右足でハイキックを放つ。狙

つたのはガトリングの砲身。蹴りが直撃した砲身は少し歪み、構えていた腕がオレから見て左に開く。

二段構えで、黒いISは備えていたロケットランチャーを構える。即座に右足を戻して全力で真上に跳躍。オレは黒いISを飛び越さずに肩に着地し、ロケットランチャーの砲身を右手で掴む。

「・・・おらあああああ！！！」

咆哮と共に握りしめた左拳で砲身を殴る。だがISの装甲と同等の強度を持つ砲身は拳一発では壊れない。中指が折れたが砲身に与えた損害は亀裂程度だった。黒いISがオレを振り落とそうと暴れ、武装を粒子化するより先に左手を伸ばしてくる。

右手はバランスを取るために砲身を掴んでいるし、左手は中指が折れて十分な威力の拳を放てない。両足も激しく揺れているこの状況では落ちないようにするので精一杯。

「おっと・・・仕方、ないか・・・」

左手で手刀を作る。中指が使えないのなら小指で衝撃を与える手刀にすればいい。これで小指も折れるだろうが、どうせ左手はもうまともに使えないしロケット弾の連射よりは遥かにマシだ。

「・・・はあああああ！！！」

振り下ろす。亀裂が入った同じ箇所到手刀を打ち込み、今度こそロケットランチャーの砲身が碎ける。遅れて小指が折れた痛みが走るが、これでこの武装が使用できなくなったのだから安いものだ。

迫る大きな手から逃れるために黒いISの肩から飛び降りようとする。しかし、突然左から強烈な衝撃を感じた。

「……ぐっ……！」

全身に暴風が襲い掛かり、骨をやられた痛みを感じた瞬間、オレの胴体が大きな手に驚掴みにされていることに気が付く。少し霞む視界の先に見えたのは、みるみる近づく壁。

背中から衝撃を感じ、すぐに壁に叩きつけられたと理解した。

「……がはっ……！」

背中 of 激痛は背骨が砕けたのではないかと錯覚を覚えるほどだった。胴体を掴む手が離れても、オレの体は壁に深くめり込んだままで抜けなかった。

顔を上げると、右手にガトリングを持ったさっきの黒いISの横にもう一機同じ形状の装甲のISが浮いていた。ただ武装が異なり、右手に片手で持てるマシンガン、左肩にさっきオレが破壊したのと同じようなロケットランチャーを積んでいる。

（二機いたのか……どこまでも用心深い奴らだ……）

口の端から血を垂らして舌打ち。ガトリングの方だけならばなんとかする自信はあった。しかしISが二機に増え、もう一機はまったくの無傷となるとかなり厳しい。体はまだ動けるだろうが左手が使えない。

「もうちょつとやれると思ったが……仕方ない……」

二機の黒いISがガトリングとロケットランチャーを構える。直撃すればこの滅茶苦茶な体でも死にはしないかもしれないが間違いなく重傷だ。そんな状況でオレは口元に笑みを浮かべた。

「……………生身じゃこんなところか……………」

瞬間、ガトリングとロケットランチャーの砲口が轟音を上げ、オレの体は爆発と土煙に包まれた。

だがその時、オレの脳内だけで短い電子音が響いていた。

Side Out

レーザーの姿が見えなくなり、二機の黒いISは武器をどけてハイパーセンサーを操作する。

センサーが生体反応を一つ捉える。そこは二機の予想範囲内だった。しかしセンサーが捉えた生体反応の強さは発砲前とまったく同じ……………いや、むしろ強くなっていた。

黒いIS二機はそれぞれガトリングとロケットランチャーを構えトリガーに指を掛ける。

だが次の瞬間、センサーがアラームを鳴らし、二機の間を突風が吹き抜けた。しかも、気が付けば黒いIS2のロケットランチャーの砲身が綺麗に切断されていた。

センサーを見直すとレーザーの反応が元の場所から消えていて、新た

な反応がちょうど後方に出現していた。二機はそれぞれ武器を構えて後方を向いた。

そこには・・・・・・・・・・片手に銃を持った天使が浮いていた。

第4話 謎のIS、急襲（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ちくしょう・・・まだ少年期が終わらない。

今回、多分オリジナル設定になると思いますが、第4話がまだ引越していない時期にもう第二世代型のIS設計が開始されています。この設定が影響して火器積んだ黒いISが原作で大量に出るかも。

今回は多分ネクスト無双です。

では、また次回。

少年期終了 第5話 覚醒、破壊天使（前書き）

今は名もなき傭兵様から感想とオルレアの武装情報をいただきまして。ありがとうございます。

更新が少し遅くなりました。申し訳ありません。

では、どうぞ。

少年期終了 第5話 覚醒、破壊天使

Side ラーゼ

ピー。

『データセットアップ終了。これよりネクスト、ノブリス・オブリージュ、オルレア、の二機を起動させることが可能になりました。おめでとうございます』

二機の黒いISが発砲した瞬間に鳴り響いたオレにしか聞こえない小さな電子音。それに続いて左目の網膜に文字が浮かび上がった。

特に驚きは無い。姉さん達と話している時も戦闘中もオレの左目にはずっとメーターが表示されていたのだから。むしろやっと終わったかと呆れた気分になる。

放たれた弾丸が何時までもやって来ないことに気付き、視線を持ち上げてみた。そこには、全てが止まった世界があった。

黒いISはもちろん、燃える炎も、放たれた弾丸も、音も、時そのものが歩みを止めていた。その閉ざされた世界の中で、オレは自分を保っている。呼吸も出来て、体も動く、オレは生きている。

ピー。

『緊急事態の発生を確認しました。現在製作者ヘラの開発された『初期起動限定サポートプログラム』に連動して時間停止プログラム“ザ・ワールド”を発動しています。自衛、および敵の撃退に最も

確実な方法として、ネクストの起動を推奨します』

時間停止プログラムの名前にネタの気配がするのは何故だろう？

「なるほど、今の状態はヘラの力か……ノブリス……起動しろ……！」

止まった世界の中でもう一つの動きがあった。左目に映された質問に、オレは苦笑の後に返答した。

『了解。リンクスの命令を受諾、ネクスト、ノブリス・オブリージュ、起動します』

壁にめり込んだ状態の体が浮遊感に包まれ、瓦礫を押しつけて空中に浮遊した。

全身が無害となった緑色のコジマ粒子の光に覆われ、純白の装甲を纏っていく。

肩幅が広い胸部アーマーと両肩が上に出て肘の部分に専用のスタビライザーを装備した細い両腕。さらに、搭乗者の生命補助システムでも積んであるのか左腕から折れた指の痛みが消えた。

膝と足首、太ももの各所に黒いパーツが付けられ、股関節の近くにレッグスタビライザーを装着した二脚。

頭部を覆うヘッドパーツは元々の形から口元の装甲を無くし、目をセンサーや望遠などの様々な機能を積んだ赤いバイザーで覆っている。

その際、ヘッドパーツの裏から伸びたプラグがオレのAMSプラグに接続した。一瞬だけ頭痛を感じて視界と思考にノイズが走ったが、すぐに納まった。セロの倍以上のAMS適正を持つオレだからこそこの程度で済んだのだろう。

AMS適正が低く、粗製と言われたアナトリアの傭兵やローディーの接続時の痛みはきつと想像を絶するものだろう。

AMSを接続すると、脳内に速度計と高度計、コジマ粒子の密度、被弾箇所や損傷度などの機体情報が送られる。自分の意識の全てがこの機体に繋がったと確かに感じられ、さっそく武装の展開を指示、右手の平を前に突き出す。

脳から流れた電子信号がノブリスヘダイレクトに送られ、装甲の展開と同じようにコジマ粒子の光が両腕と背中に収束し武装を形成した。

右腕に突撃型ライフル、MR-102を握り、左腕にレーザーブレード、EB-0305を装着。背中の左右両方には3連装レーザーキャノン、EC-0307ABを二基装備する。背中に待機状態となっている二つのレーザーキャノンは翼の形によく似ている。

全身に余韻を残して漂うコジマ粒子の輝きを身に纏い、今ここにローゼンタールを象徴するネクスト、破壊天使、ノブリス・オブリージユが完成した。

純白の装甲を纏っている中で唯一肌が見える口元に笑みが浮かんだ。ネクストに繋がれ、全身が全能感に包まれた。感情を抑えきれず、喜びの笑みが抑えられない。

「そうだ・・・これが、オレの手に入れた力・・・最高だ」

『ノブリス・オブリージの起動を確認、5秒後にサポートプログラムを終了します。御武運を』

5秒か、覚悟を決めるには十分な時間だ。

4・・・3・・・2・・・1・・・0・・・時が動いた。

物理的な破壊力を持ったガトリングの弾丸とロケット弾が再びオレに迫り、着弾。着弾点が吹き飛び、爆発と土煙が舞う。しかし、吹き飛ばされたのは背後の壁だけ、オレ自身は無傷だ。

オレに迫った弾丸とロケット弾は装甲に触れる前に薄緑の膜のようなものに阻まれ、ロケット弾はそのまま爆発、弾丸は全て弾かれた。プライマル・アーマー。ネクストの標準機能であり、ジェネレーターから生み出されるコジマ粒子を機体周辺に還流させ、あらゆる攻撃のダメージを大きく軽減、あるいは無力化する膜状のバリアだ。

実体弾には一番効果が高く、既存する戦車砲や榴弾、ミサイルなどではほとんど損害を与えられず、理論上は核兵器にも耐えられる。

これほど強大な防御力を持っているが、実は複数弱点がある。一つ、形が膜状なので貫通力に優れたスナイパーライフルやレーザー兵器に対しては効果が比較的に小さいのだ。

二つ、粒子で構成されているので攻撃を受け続ければプライマル・アーマーは次第に減衰し、再展開に時間を要する。

ネクストが使用するグレネードならば爆風でプライマル・アーマーを大きく削れるが、今黒いIS2が使用したロケットランチャーでは単純に破壊力が足りない。

「さあて……反撃開始だ……」

背中に装備された4つのメインブースターが火を静かに吹き出し始め、爆発のような轟音を上げる。同時に、オレの全身を重圧が襲った。攻撃を受けたわけではない、オレ自身が急加速を行ったせいだ。クイック・ブースト。これもネクストの標準機能であり、ブースターを瞬間的に高出力で噴射することで前後左右への高速機動を可能にしている。機体の重量やブースターの出力などにもよるが、FBSを全項目フル改造にした今のノブリスは一度のクイック・ブーストで800～900Kmに到達することが可能だ。

高機動のクイック・ブースト、防御面でプライマル・アーマー。この二つがネクストを他の兵器から隔絶させた根源である。

体験したことのない重圧で一瞬右の視界が真っ黒に染まった。見えているもう半分の視界には距離が近付いていく黒いIS2が映っている。その様子を見る限りクイック・ブーストの動きを感知出来ていないようだ。

左腕のレーザーブレードを起動させる。通り過ぎ様に左腕を振るう。標準のレーザーブレードより長い金色の刀身が発生し、黒いIS2のロケットランチャーの砲身を綺麗に切断した。

手応えを感じ、ブースターを吹かして空中に浮遊、背後を振り向く。2機のISが3秒ほど経ってからこちらを振り向いた。後一步でオ

レの命を奪えた存在が今ではとてもみじめで弱く見える。

二機はオレの姿を見て硬直し、動きを止めた。無人機なので驚いている様は見られないが、今の奴らは人間の様子で言えば予想外の事態に激しく動揺している。酷く滑稽なその様子に引き金を引きたい衝動がこみ上げてくる。

行動が決まったらしく、二機は新たに武器を出現させた。黒いIS1は右肩のロケットランチャーを粒子化して収納し左手に西洋騎士が持つ盾、いやシールドを出現させる。黒いIS2も左肩のロケットランチャーを収納し、左手に刀身が真っ直ぐの形をした鍰の無い実体剣を握った。

ガトリングガンと大型シールド、マシンガンと実体剣か・・・クイック・ブーストのスピードを一度見たというのにこの程度の武装とはな、搭載されている人工知能は唯のガラクタではないのか？。

黒いIS1がシールドを持ち上げ、ガトリングガンを撃ってきた。黒いIS2も右手のマシンガンを発砲してくる。連射速度はガトリングに及ばないだろうが充分火力がある。相手が同じISであればな。

クイック・ブーストを使って右に高速移動。放たれた弾丸はプライマル・アーマーにすら掠りもせず射線の延長にあった壁を抉っただけだった。一瞬でオレが消えたように見えたIS2機は発砲を中止してオレに再び武器を向ける。

「・・・つまらんな。この程度ではまともな性能確認にすらならん・・・せめて武器の精度を確かめる位は耐えて見せろ」

再びサイドクイック・ブリストで弾丸を回避、加速の勢いが完全に止まっていない状態から前方、黒いIS2に向かってクイック・ブリストで接近し、右手の突撃型ライフルを連射する。右腕に連続で伝わる僅かな振動。放たれた十数発の弾丸は全て黒いIS2に直撃し、無数の火花を散らさせる。

（さすがにシールドバリアの貫通は簡単に出来ないか・・・それにしても全弾命中とはな、相手が避けられなかったとはいえFCSの射撃精度はかなりのものだな・・・ん・・・？）

黒いIS2がまっすぐこっちに接近し、黒いIS1が後退して距離を取った。

黒いIS2にライフルを10発程度連射してみると回避運動を行ったので特攻ではないらしい。こちらの射撃をほとんど避けられていなかったがな。

エネルギーを大きく削って接近してきた黒いIS2は左手に持つ近接用の実体剣を振り上げた。

「遠距離では勝てないと判断したか・・・だが生憎と・・・」

メインブースターを噴射して空中を前進、僅か2秒で時速500Kmに到達。それでもまだ初期加速の段階だ。

眼前には唐竹に振り下ろされた実体剣、物理兵器であるそれならプライマル・アーマーを貫通できるだろう。だが恐怖など微塵も感じない。

左腕を横薙ぎに振るった。それに連動して光刃が一瞬輝く。黒いI

S2の左腕は手応えを感じずに空を切る。黒いIS2の左腕は二の腕から下が無くなっていた。勢い余ってオレの右側を通り過ぎ、すぐに振り向いたが、そこに待ち構えていたのは一つの銃口。

「・・・距離にも地形にも、こいつに苦手はない・・・」

ほぼゼロ距離での発砲。防御すら間に合わない距離で連射された弾丸は絶対防御による数秒の抵抗をぶち抜き、黒いIS2に搭乗している人形の上半身を完全に消し飛ばした。

『万能』をコンセプトに作られたノブリス・オブリージュの強みは戦闘域を選ばない所にある。空中だろうが、海上だろうが、地上だろうが、遠距離だろうが、近距離だろうが、どんな状況でも、ノブリス・オブリージュは万全の戦いが出る。

黒いISが系の切れた人形のように動きを止めた。

レーザーブレードを右に振るって落下する前に黒いIS2を胴体から両断する。そこから落下していく上半身に向かってライフルを向け、爆発するまで連射した。

子供一人を捕らえるためにISを2機も用意した組織だ。失敗した場合は何百キロの爆薬を纏い自爆、なんてプログラムが積まれているもおかしい。だからこそ自爆などの素振りを見せる前に完全に破壊した。

空になったライフルのマガジンを換装。地上に転がったガラクタから目を離し、もう1機に目を向けてみた。ちょうど狙いを定めて発砲してくる。クイック・ブリストで回避したのでまったく当たらないがな。

「最後か・・・丁度良い、これの試射で終わりにしよう・・・その盾で耐え切れるかな・・・？」

笑みを浮かべて背部の武装を展開する。” 象徴” である背中の翼が死を振り撒く” 兵器” へと変貌を遂げた。

右に3門、左に3門、合わせて計6門の大出力3連装マルチレーザーキャノン、EC-0307AB。これこそノブリス・オブリージユがその身に背負う『象徴』の真の姿であり、瞬間火力では他の機体と比較しても上位に入るノブリスの切り札。

前世でプレイしたゲームでのノブリスはこれを装備しているため積載量・出力ともに余裕が無く、決して扱いやすいとは言えない機体だった。しかしフル改造状態となった今ならばその問題は特に深刻ではない。積載量にはまだ余裕があるし、ENもこれを展開しながらのクイック・ブーストも可能だ。

照準。向けられた兵器の脅威を知らない黒いISSは愚かなことにシールドを構えて受け止める体勢を取った。無知は罪、とはよく言ったものだな。

「消える」

発射。全ての発射口から放たれた6つの閃光が空間を灼いた。センサーなどを使わなくても肉眼で目視できるレベルまで収束された白いレーザーは黒いISSをシールドごと飲み込み、上半身を完全に蒸発させる。

レーザーの勢いはそれだけでは止まらず、黒いISSの直線状にあつ

た壁をも貫通。壁は命中した部分が黒いISのロケットランチャーを遙かに上回る大爆発を起こして崩壊し、レーザーは知らぬ間に時間が経っていて暗くなった夜空に溶けていった。

オートブーストを吹かせてゆつくりと地上に着地、レーザーキャノンを収納して翼の形に戻ったその破壊力に少し驚いたが、なにより気になったのは。

「レーザーの色ってレオハルトが乗ってた時のやつなのか・・・オレ自身こっちの方が好きだからありがたいな」

for Answerでのレーザーの色は赤だったのだが、どうやら4時代のレーザーの色に変更されているらしい。個人的にそのことはとても嬉しい。

（・・・てか何でfor Answerになったらレーザーの色変わったんだ？製作事情？）

それより破壊力がいささか予想外だった。持ってたシールドを消し飛ばすのはわかりきっていたが、まさか絶対防御すら一瞬で消し飛ばすとは思っていなかった。いや、ネクストの武装なのだからこれぐらいは予想しておくべきだったのか？

何にしても・・・これは有人使用のISに撃つたらとんでもないことになるだろうな、威力があり過ぎる。まだ各国のIS技術の発展は幼いから少し時が経てばシールドの強度もかなり強化されると思うが。

「やめよう・・・それよりこれからどうするかだ・・・」

敵は全て破壊した。だけど……。

「このまま……戻るべきなのか？本当に……」

自衛とは言ってもこれでオレは完全に亡国企業を敵に回したことになる。プロの工作員による監視、民間人を平気で巻き込んだ爆破テロ、どれも犯罪集団などで納まる行動ではない。爆破の現場を見た時もあったが、相手はテロリストだ。それもかなりの規模の。

そんな連中がこれで諦めるわけが無い。しかも今回の騒動でオレ自身に”火器を搭載したIS2機を撃破できる力がある”という事実がわかった。そうすれば予想していたように奴らの狙いはオレ自身からオレの周りの人間、兄さんや姉さん、箒に変わる。

「ダメだ……それだけは、ダメだ……やはり……」

オレが消えねばならないのか。それで兄さん達に危害が及ばないという保証などは無い。だが、オレが傍にいるよりは安全なはずだ。

「結局……こうなるのか……」

ネクストの装甲を纏いながら苦笑する。情けない。家族の死にこれほどの恐怖を抱くなど、リンクスにしてぬる過ぎる。AMS適正や戦闘経験以前の問題だ。いや、下手をしたら一般人よりも臆病なのかもしれないな。

だけどそれでも構わない。オレが真に望むのは楽しい小さな日常だ。力を望んだのはそれを手に入れ、守るためだ。例えくだらないと言われてもそれは変わらない。

絶対に諦めない。だがどうする？どうやって兄さん達を守る？

空港の火災はもう全焼が確定したんじゃないかという段階までひどくなっている。煙の量も増してきて呼吸が少し辛くなってくる。まるでオレに決断を迫らせているかのようだ。

『プルルルル！！』

思考の海に沈んでいた意識が突然聞こえた電子音に引き戻される。条件反射で音の発生源の方向にライフルを構えた。しかし、そこには燃え盛る炎とあちこちに穴の開いた床しか見えない。

いや、よく見ると携帯電話が一つ落ちていた。接近して左手で拾い上げる。画面には着信者の名が”篠ノ之束”と出ている。

「篠ノ之……？……もしかして……あれ？……くそ、ボタンが押せんっ……！」

今のオレはネクストの装甲を纏っていて全長が最低2メートル以上はある。それに連れて手全体の大きさも携帯電話に出るには少しでかい。なんとか通話ボタンを押して、手の平全体で携帯電話を耳元に押し付け固定する。

「……もしもし」

『はいはい！！電話越しに初めまして！！天才科学者、篠ノ之束だよー！！』

「……（堪えろ、堪えろ……ヘラの時と違って今は電話を切るべきじゃない）……」

電話越しから聞こえたヘラと雰囲気が似ている心から楽しそうな声。激しく電話を切りたくなるが、現状が現状なので必死に堪える。電話相手が相手なのだから尚更だ。

篠ノ之束。何を隠そうISを発明した張本人である。なぜそんな人物が今このタイミングでそこら辺に落ちていた携帯電話に電話を掛けてきたのかは知らないが、必ずオレに関係のある話をするはずだ。

「……どうも、篠ノ之ということとはあなたは第の……」

『ぶ……テンション低いなあ……。けどその通り、私は可愛い第ちゃんの姉なのだよ。ちなみに大好きなちーちゃんの大親友……!』

「……ISの発明者のあなたがオレに一体何の用ですか?……今のオレの状況を全て理解している上での電話だと思いましたが……」

『うん、大体はそんな所だね。キミは現状問題で時間が無いから簡潔に用件を言うね?……どう?私の所で働いてみない?交換条件としてキミが今悩んでる問題をどうにかしてあげるよ?……悪いようにはしないし、保護だってしてあげる。ある程度他の望みも叶えてあげるよ?』

どうやら本当に全てお見通しらしい。オレが今悩んでいる問題を解決してくれて、さらに保護までしてくれる。願ってもないことだ。数多のミサイル基地にハッキング出来たこの人の協力が得られれば亡国企業の後も追える。

しかしそれ故に迷う。この状況で全ての問題を解決してくれるなど、

疑うなというのが無理だ。だがこの申し出を受ける以外にオレの望みを叶える道は無い。

「・・・一つだけ聞かせてください・・・あなたがオレを保護する理由は？」この力”が目当てですか？」

『違うよ？今は単純に仕事の手伝いをしてくれる優秀な人が欲しいだけだよ。それに、キミには少し大きな貸しがあるからね・・・
・この二つが理由だよ』

「・・・わかりました。お受けします・・・」

『うんうん。素直でいい子だねーらくんは・・・それじゃあその携帯に合流場所を示したメールを送るからそこで落ち合おう！じゃねー!!』

通話が切れてメールが1通送られてきた。開いた中には合流場所が示されている。頭の中にその場所を記憶し、携帯を破壊して捨てる。

「さて・・・行くか。暇な時間は当分やって来ないみたいだぞ、ノブリス」

上昇してレーザーキャノンで大穴が開いた壁から空港の外に出る。マスコミや一般人になるべく目撃されたくないで、連続クイック・ブリストを使って炎の光が届かない夜空に移動して空中で停止する。バイザーの望遠機能で集まっている消防車の近くをしてみる。酸素マスクを付けている人がたくさん見え、中には到着した救急車に乗せられる人もいた。

そんな人ごみの中、即席の布団に寝かせた子供二人を静かに見守る一人の女性を見つけた。間違いなく姉さんだろう。どうにかして無事の報告をしたいがあれだけ人がたくさんいる中だ、誰にも見られないようにするのは無理だろう。

「行つてきます・・・姉さん、兄さん・・・いつか、必ず戻るから・・・」

背部のブースターが一瞬吸気音を響かせプライマル・アーマーの展開に使われていたコジマ粒子がブースターに圧縮された。次の瞬間、全身がクイック・ブーストの時以上の重圧を感じ、爆発的なスピードで加速した。

オーバード・ブースト。背部に搭載された個別の専用ブースターユニットにコジマ粒子を回して爆発的な加速を得る。もちろんエネルギー消費は通常のブースターより遥かに大きくなるが、発揮される速度は時速1000 Km以上、クイック・ブーストと併用すれば瞬間的には最大時速2000 Kmも可能である。

ネクストが長距離を一瞬で縮めるためによく使用しているが、初体験のオレは重圧で声にならない苦しみが漏れてくる。

「・・・ぐう！・・・くっ！」

少し苦しいがクイック・ブーストを連射するより、ENの回復の時間を置いて何度かオーバード・ブーストをしたほうが時間の短縮になるはずだ。

音速を超える推力を得たオレは大気の壁をぶち破りながら夜空を飛行し、目標地点に向かった。

Side Out

空港火災で起こった爆破テロにより空港は全焼して建物がほぼ倒壊。死者は確認されているだけでも数十名、遺体が見つからない生死不明者は数人いた。

生死不明者は一般で行方不明者と変えられ、その人間達は事実上の死亡者と無言の見解が広げられた。

その行方不明者の中に書かれていた名前の中には…………。

『ラーゼ・B・織斑』
ベルセルク

という名前が記されていた。

少年期終了 第5話 覚醒、破壊天使（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

やっと少年期が終わりました。少し強引な終わり方だと思いますが。作者は法律ほとんど知らないんで行方不明者云々のことを自分の願望のままに書きました。

ノブリスの機動力とかも作者はFBSフル改造を実現できなかったのて出来る限りの実験結果と予測を混ぜて書きました。時速900Kmってよく考えたらかなり速いですからね。ゲーム的な見解で。

少しネクストを強くし過ぎてしまった気がする。このままではISと戦えないのでネクストの武器には威力を抑えるリミッターが付くかも？

少年期が終わってもすぐに原作に入るわけではありません。原作にはまだ少し掛かると思いますが、長く温かい目で見てください。
では、また次回。

第6話 天才とリンクス

Side Out

某国にあるとある研究所に突如けたたましいアラートが響き渡った。

「・・・何事だ!？」

「センサーが当施設に高速で接近する反応を1つ確認しました!!・
・ミサイルじゃない、なんだこの速度は・・・最低でも速度は1
000キロ以上です!!」

「ISか?・・・迎撃体勢!武装ヘリに戦車・・・出せる戦力は全
て出せ!!この存在を知られたのなら生かして帰すわけにはいか
ん!」

「りよ、了解!!」

十数分後、研究所の周囲は無数の兵器群で埋め尽くされた。

空を無数の武装ヘリが浮遊し、陸を戦車とミサイルポッドを搭載し
た武装車両が埋め尽くしている。

その数はもはや『部隊』ではなく『軍隊』に届くレベルだろう。

現代で国家が最も期待を向けている兵器はIS^{インファニット・ストラトス}なのだが、この研究

所は非公式かつ人道的に違法な研究所なので警備の主力は今になっては珍しい戦車などを使っている。

いかに最強の機動兵器と言われているISでも軍隊規模の兵器群を1機で相手にすることなど出来はしない。それこそ相手が世界に名を刻んだ白騎士かそれと同じ位の強さを持つていなければ不可能だ。負けはしない、必ず勝てる。

司令室の人間も警備隊の面々も心からそう思った。世代差による性能が大きくとも圧倒的な物量はそのまま力になる。これほどの戦力差を覆せるわけではない。

『目標接近……来ます!!』

しかし、接敵から数分後……彼らの予想図は木っ端微塵に打ち碎かれた。やって来た敵の力は、軍隊でも止められぬ程に強大だったのだ。

背後に爆音を引き連れ、常人では視認すら難しい速度で突っ込んできたそれは空中で加速を止め、次の瞬間その場から爆音と共に姿を消した。同時に戦車の一台が爆散した。

『え?』

警備隊の誰かが声を上げた。その瞬間に戦車砲でない発砲音が響き、3台纏って並んでいた武装車両がミサイルを搭載したまま大爆発を

起こした。

『なんだ、どうなってるんだ……敵はどこに』おい！！後ろだ！！』……え？』

上空から地上を見ていたパイロットが通信を聞いて後ろを向くと、目の前には迫る光があった。それが何なのか知ることなく、パイロットはその光に飲み込まれ灰の人形となった。

光はそのまま横薙ぎに動き他にもヘリを4機ほど斬り裂き、爆発させた。その爆発に気付き、警備隊の全員の視線がそこに集まる。

天使。

一瞬その敵を見た全員が同じことを考えた。しかしよく見ればそれは天使ではなく全身が装甲に覆われた機動兵器だった。

『う、撃て！！撃て！！撃ちまくれえっ！！』

警備隊の隊長らしき人間が絶叫のような声で指示を出し、思い出したように戦車部隊やヘリが榴弾やミサイルなどの発砲を開始した。

空中に浮遊する天使に迫る無数の弾幕。しかしその全てが着弾する前に天使は爆音を鳴らし、慣性の法則を無視した高機動で弾幕を潜り抜けた。

目標を追い切れなかったヘリのミサイルは地上の戦車隊のと真ん中に着弾、数十台の戦車が爆発した。

『てめえら何やってんだ！？こっちは味方だぞ！！』

『やりたくてやったんじゃない！！奴が全て回避したんだ！！』

戦車隊の人間が無線に怒鳴り、ヘリのパイロットが怒鳴り返す。そうしている間に天使は地上に着地、背部のブースターを吹かして統率がボロボロになった戦車隊に迫る。

そしてお返しとばかりに始まった天使の攻撃。

天使の左腕から発生した長い光刃が戦車隊を薙ぎ払い、右手に握られたライフルが水平に放たれ武装車両に穴を開けて爆発。巻き起こった紅蓮の炎が近くの戦車を飲み込み、誘爆した。

『く、くそおおお！！』

苦し紛れに放たれた戦車の榴弾が天使の背に直撃した。爆煙が巻き起こり、次第に晴れていく。そこには傷一つ付かず悠然と立っている天使。戦車の搭乗者は気付いていないがその周辺には緑色の膜のような物があつた。

背に榴弾の直撃を受けて無傷でいる天使の姿が一瞬幻ではないかと戦車の搭乗者は思うが、それが現実と思い知る前に搭乗者は天使の放ったライフルによって肉塊となり絶命した。

「なんだ・・・なんだあれは！？」

司令室にいた指揮官が怒声を上げた。他の人間は外で交戦している

部隊からの通信を受けていて指揮官の声は聞こえていない。

指揮官が見詰める先には無数のモニター。そこには超スピードで移動し両手の武器を使つて外の部隊を全滅させていく天使。

「あれは本当にISか！？・・・あんな滅茶苦茶なものが！！」

誰に対してもなく司令官は叫ぶ。そうしたくなるもなるほどに天使の力は圧倒的だった。

物量の差をたった1機だけで覆すなど戦術面から見たらバグ以外の何でもない。そもそもあれは本当にISなのだろうか。指揮官もISの性能や機動を見たことがあったが、モニターに移る天使はISそれすら凌駕するものに見える。

「こ、航空部隊、全滅・・・戦車隊の残存戦力およそ12%・・・もう持ちません・・・」

モニターには空中へ上昇する天使が映る。一定の高度まで上昇した天使は背中の機械仕掛けの翼を前方に展開、翼の先端が僅かに残った戦車隊に向けられた。

翼の先端から放たれた6つの光。それは地面に着弾し、大爆発を起こして僅かに残っていた戦車隊を全て消し飛ばした。

「ば、馬鹿な・・・たった1機があればほどの出力を持った光学兵器を・・・」

「どこまでふざけているのだ・・・化け物が！！」

天使は空中に浮遊したまま翼の形をしたレーザーキャノンの砲口を基地に向ける。それを見て司令室の全員が悲鳴を上げて逃げようとしたが、出口に辿り着く前に全員が白い爆発に飲み込まれた。

Side ラーゼ

『敵勢力の全滅と司令部の破壊を確認。ミッションコンプリート』

バイザーに表示された文字と施設にレーザーキャノンを撃ち込んだことで出来た巨大な大穴を見て展開していたレーザーキャノンを収納、右手のライフルをリロードして地上に着地する。

ヘルメットを外して頭を左右に振るうと銀髪が暴れて下に沈む。ヘルメットを外したと言ってもAMSのプラグがあるので頭部に被っていたヘルメットが変形し持ち上がって垂直になっただけだが。

周辺を見渡していると通信が入ってきた。AMSを通して通信を開くとバイザーにスクリーンが表示され、そこに映ったのはアリスが着ているような青と白のワンピースを着て、頭にウサミミを装着している女性。この人こそISの生みの親、篠ノ之束だ。

『やつほー！終わったみたいだね、らーくん。どうだった？』

「情報通り真っ黒、アタリでした。迎撃に出てきた戦力が異常でしたけど……。一応迎撃部隊と司令室は破壊しましたから後始末はお願いします」

『それは任せといて……。けど、らーくん個人にはハズレだったみたいだね』

「ですね……けど予想はしてましたから」

空港火災の時に黒いISの襲撃を受けたあの日から2年ほど時が過ぎた。

指定されたポイントで束さんと合流したオレはそのまま束さんと一緒に行方をくらませる日々を送ることになった。あの事故で行方不明とされたオレには問題無かったのだが、筭を含めた束さんの家族は政府の保護を受けて引越してしまったらしい。

オレと束さんは追ってくる各国の追跡から逃れ続けながら（余裕で予想より楽しく暮らし、たまにこうして人道的に違法な研究を行っている施設を潰している。

施設を潰す際の戦力はオレだけだが、ネクストの前でこのような連中はゴミ同然だし、オレ自身もこういった下種な研究は大嫌いなので苦でもない。

ちなみに束さんの言ったオレ個人のハズレとはAMSの技術を有している研究施設ではなかったという意味。

本当にこの世界にアスピナ機関のようなものがあるなら間違いなくネクストとリンクスがいる。漠然とだが、恐らくオレの目標にはなるべく多くのリンクスの協力が必要になる。当面のオレの目標はまずそのリンクスと接触することだ。

『あ、そうだ……らーくん、新しいセンサーはどんな感じだった？』

「完璧ですね……照準の誤差も最初よりかなりマシになったし、

クイック・ブーストにもしっかりと付いて来てくれます」

機動性、火力、どれも現代の兵器を遥かに上回る性能を持ったネクストだが、当然ISに劣っている面もある。

センサーや通信機などの内装系だ。ネクストの搭載するセンサーは数キロ先を見渡せるほどの性能を持っていないし、通信に相手の顔は映らない。

一度束さんに相談した結果、解決法として出たのがISのハイパーセンサーの機能の一部をネクストのセンサーに加えること。今回の戦闘で実験を行ったのだが、成果は最高値、文句無しの出来だった。

『そつか、なら良かったよ……ノブリスには既に搭載してるから良いとして、あと何機残ってるんだっけ？』

「オルレアとシュープリスの2機ですね……けどまだ増える予定ですから、すみませんが3つお願いします。戻ったら手伝いますんで」

『この位束さんにとっては楽勝だから問題なしだよ……だからゆっくり帰ってきて大丈夫だよ、代わりにおいしいもの作ってね』
あと帰ってきたら製造法も教えてあげるよ』

「ははは、わかりました……それじゃリクエストは帰ってから訊きますから、今からそっちに戻ります」

『うん！……じゃねえ』

通信が切れ、原形を失った研究所に静寂が落ちる。目的地までの進

路と距離を再確認、空中に上昇してオーバード・ブーストを作動する。

数秒で音速を突破し、オレは研究所を離脱した。

数時間後、あの研究所は何処からか飛来してきたミサイル群により完全に消滅した。

第6話 天才とリンクス（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

現在、ノブリスとオルレアは第三形態^{サードフェイズ}、シュープリスは第二形態^{セカンドフェイズ}です。

では、また次回。

第7話 接触（前書き）

少し遅くなりました。

では、どうぞ。

第7話 接触

S i d e ラーゼ

束さんが拾った情報を頼りに現在オレはノブリスに乗って非公式の兵器輸送部隊の場所を目指している。

大まかなプランとしてはオレが輸送部隊に突入して兵器を破壊、その際に対抗戦力がいた場合は無理に相手をせず兵器の破壊を最優先にして終了と同時に離脱する。その後は束さんが輸送の情報を世界に流してグループはお縄に付く、こんな感じである。

実を言えば対抗戦力を含めても皆殺しにするのは簡単だし、その方が楽だ。だが下種共の違法研究所ならともかく兵器を非公式で輸送する犯罪者には大した殺意は湧かない。それに、敵だからといって全て殺してしまったら前世のオレと同じだ。

「……そろそろか……ん？」

目標を目視できる距離まで接近したのだが、周りには何も見当たらず、レーダーにも反応が無い。ちなみに今の場所は道路も作られていない荒野だ。

（束さんが偽情報を拾ったのか……こっちの襲撃が気付かれたのか）

一度束さんに連絡を入れようと思ったが、レーダーが高速で接近する熱源を二つ捉えた。感知された方向をズームしてみると、遠くの荒野に二つの光が見えた。

それはISではなかった。はっきりとした姿すら見えないが確信できる。接近する二つの光が背後から零れ落としている緑色の粒子によって。

「この速度とあの粒子……まさか……」

光が近付き、バイザーに搭載されているセンサーが二つの光の詳細データを表示した。

『接近速度と”コジマ粒子”の反応からアーマードコア・ネクストと断定……敵ネクストの機体構成と武装を照合開始……完了。独立傭兵イエーイの搭乗機、エメラルドラクーン、同機体の共同機、ウイスの搭乗機、スカーレットフォックスと判明』

光の正体……二機のネクストが少し離れた場所に着陸した。

一機は全身緑色の装甲。右手にスナイパーライフル、050ANSRと左手にBFF製の標準型ライフル、047ANNSRを持ち、両の背中には標準型ミサイル、MUSSELSHELL、肩には連動発射が可能な背中と同名のミサイル、MUSSELSHELLを搭載している。

もう一機は全身赤色の装甲と逆間接の脚。右の背中には散布型ミサイルのMR-0200、左の背中にはグレネードキャノン、GRB-TRVERSを搭載、両腕は長いマガジンを装着したマシンガンと一体のEKLAKH-ARMS。

間違いない。搭乗者までは分らないが、二機ともオレが前世で見たエメラルドラクーンとスカーレットフォックスにそっくりだ。

だがまったく同じというわけでもなく、二機のヘッドパーツがオレと同じく目元をバイザーで覆って口元が見えるような形をしている。スカーレットフォックスの腕部も形が少し違い、肘先全てがマシンガンになっているのではなく手首の先がマシンガンになっているような形だ。というか、どうやってあの逆間接状態を作ってるんだ？ あんな姿勢を人間がやったら間違いなく両足が使い物にならなくなると思うが……。

突然通信が入ってくる。束さんかと思ったが通信先の相手の顔が表示されず、画面は真つ黒のモニターに『SOUND ONLY』と記されている。

『……そっちのネクスト、聞こえてるか？ 聞こえたら応答してくれ』

若い、少なくとも成人男性ではない声が聞こえてきた。前世で少し訊いたスカーレットフォックスの搭乗者、ウイスの声に似ている気がする。まさか機体だけでなくリンクスまで同じなのか？

ネクストとは確実にノブリスのことを言っているのだろう。今の所相手に交戦の意思は見えないが、いつでも戦闘が行えるように警戒し音声のみで通信に応じる。

「聞こえている……オレのことを知っているのか？」

『知らないのか？……「裏」の方じゃ、あんたはそれなりに有名なんだぜ。最近じゃあんたのことを恐れてテロリスト共も大人しくしてる』

知らぬ間にオレも少しは有名になっていたらしい。まさかテロリストの抑止力にまでなっていたとは。

「それで……こちらに何か用か？」

「おいおいそんなに警戒すんなよ。せつかく広い世界で同類同士が再会したんだ、少しは喜ぼうぜ、最も、お前はオレ達のことを覚えていないみたいだが……なあ、イエーイ」

『そうだな』

「……その言い方から察して、お前達はAMSの開発機関の場所を知っているらしいな、ついでに昔のオレのことも」

これはチャンスだ。こいつらから機関と他のリンクスの情報を手に入れられるかもしれない。

『やっぱりお前、あの人形みたいなやつだったか……。どうだい？ あんたと俺達、互いが欲しい情報を交換しないか？ あんたもオレ達に聞くことがあるし、こつちもあんたに訊きたいことがある、ギブアンドテイクだ……。おつとその前に自己紹介だな。このネクスト、スカーレットフォックスのリンクス、ウイスだ』

『エメラルドラクーンのリンクス、イエーイだ』

「……ラーゼだ、ラーゼ……。ベルセルク。この機体の名はノブリス・オブリージュ」

一瞬ラーゼ・B・織斑と名乗りそうになったが、今はまだその名を

名乗るわけにはいかない。

「……本題の前に聞きたいことがある。この辺りを兵器輸送車
が通る情報があったんだが、お前達が仕掛けた偽情報か？……そ
れに、オレがここに現れることがどうしてわかった」

「その情報は本物だ。あんたの言う兵器の輸送をしてた連中なら俺
等が先にやっちまったよ……俺達が飛んできた方に少し行ったら
残骸が転がってるぜ？……それに、現れることがわかってたわけ
じゃない、俺達なりにあんたの行き先を予想して見ただけさ」

なるほど、オレの襲撃予定地点より先にこいつらが目標を襲撃した
わけか。しかも言葉を聞く限り生存者もないだろう。ライフルを
握る手に少し力が入るが殺気は一切外に漏らさない。

「次はこっちの質問だ。あんたはネクストを使って何度も違法施設
を襲撃してきた、なら当然ネクストを整備する施設を持っているよ
な？」

「……確かにネクストを整備するための手段をオレは持ってい
るが……あれは施設というより機材の方がしっくり来るな……
で？それがどうした」

ネクストも兵器である以上は定期的な整備が必要だ。だがリンクス
のAMSを介して機体の情報を保存しているので整備のためには当
然専用の施設が必要になる。

その為、ヘラは空港火災から少しの日々が過ぎた時に専用の整備資
材を送ってきた。あの時はびっくりした、何しろ夜中に光と共に現
れたのだから。

送られたきた資材は何の変哲も無いノートパソコン一つだけだったのだが、そのパソコンに取り付けられていた接続端子をAMSプラグに接続することで、パソコン内に機体の情報を送ってそのまま整備を行うことが出来た。

あのノートパソコンはヘラが手軽な形にただで、内臓スペックは恐らくネクストの整備ハンガー数個分に匹敵する。

おまけに、仕組みはわからないが弾薬の備蓄が無限に等しい位あるように弾薬費の心配も無用、これで雷電やヴェーロノークを遼機に付ければ戦争が出来るんじゃないか？

『そうか……どうやら俺達はかなりラッキーみたいだな……
イエーイ』

『問題無い……始めよう』

スカーレットフォックスが前進し、エメラルドラクーンが後方に距離を取り始めた。エメラルドラクーンが右手のスナイパーライフルと左手の標準型ライフル、スカーレットフォックスが両腕のマシガン構える。遅れて、耳元にロックオンを知らせるアラームが鳴り響いた。

「……一応訊いておくが、何の真似だ？」

『俺達は研究所を脱出できた……だがネクストを整備する施設が無い俺達はいずれ力を失う、だからお前から奪うのさ……寄越せよ、抵抗しなければ無傷で帰してやる』

「なるほど……最初から狙いはそれか……」

『俺達はこんな所で終わらない。俺達はもっと上に行くんだ……あんたには踏み台になってもらうよ、悪く思うなよ……まさか2対1で勝てるとは思ってないよな?』

『悪いな』

二機のネクストが臨戦態勢に移り、機体の表面に緑色の膜、プライマルアーマーが展開された。大気中にコジマ粒子が拡散するが、地面の植物には何の変化も無い。オレと同じで無害な粒子に変換されているのだろう。

(コジマ汚染の心配は無し、周辺に人影は一切無い……オールクリアだな……これなら……)

「心置きなくやれそうだ」

ジェネレーターの出力が上昇を初め、70%、85%、100%に到達、プライマルアーマーを展開して空中にゆっくりと浮遊する。同時にAMSに指示を出して通信を繋げる。

『……あれ、どうしたの?らくんの方から通信なんて珍しいね、どうかしたの?』

「東さん、今からの戦闘を開始から終了まで全方位で記録してもらいたいんですが」

『ん?別に構わないけど……らくん、なんか楽しそうだねえ……録画は任せといて!』

束さんが心から嬉しそうな笑顔を浮かべ、通信を閉じた。楽しい・
・そうか、オレは楽しいのか。

初のネクスト戦で、相手は連携が取れる二機、確かに状況は不利かもしれない。

だが、それがどうした？ヘラはオレを最高のリンクスと言ったのだ。ならばやれる筈だ。最高のリンクスとその能力に見合うふさわしいネクストがあれば・・・こいつら程度、倒せるはずだ。

『おいおい、まさか戦うつもりか？』

『無謀だな』

「能書きはいらん・・・同時にいかって来い、2対1で掛からなきゃ勝てないんだろ？」

ウイスとイエーイの笑い声が止まり、二人から怒気が溢れ出す。この程度の挑発に乗るとは片腹痛い。

三機のネクストがそれぞれの武器を構える。向けられる砲口の数に当然オレの方が多い。

「さあ・・・始めようか」

スカーレットフォックスとノブリスがオーバードブーストを同時に起動。音速を超えて接近する二機を見ながらエメラルドラクーンがスナイパーライフルでノブリスを狙う。

ノブリスが突撃型ライフル、フォックスが両腕のマシニングガンを使い互いの敵に向ける。

今此処に、破壊天使の断罪が開始された。

第7話 接触（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

やっとネクストを出せました。2対1がやりたくてタッグで搭乗するネクストを出しました。赤い狐と緑の狸です。

一応タッグで登場するネクストは他にもいたのですが、ウィン・Dとロイは強すぎる気がするし、ド・スとシャミアは場所が似合わない、PQとブツパ・ズ・ガンは……ねえ？

ちなみに逆間接のネクストを展開しているリンクスは、搭乗者の足を膝立ち状態で固定して、AMSを使って足を動かしている設定です。

タンク型の場合は足を長座体前屈の体勢にする感じです。

今回は2対1の戦いです。

では、また次回。

第8話 2対1（前書き）

羽屯 十一様から感想をいただきました。ありがとうございます！

PVが10万を越えました。皆さんありがとうございます！

今回は初のネクスト戦で2対1。相手は赤い狐と緑の狸。

では、どうぞ。

第8話 2対1

Side Out

音速を超える速度でノブリスとスカーレットフォックスが互いに接近した。だが、スカーレットフォックスの後方には遠距離主体のミサイル兵器やスナイパーライフルを持つエメラルドラクーンがいる。

互いに射撃武器を構えながら接近する状況で先手を取ったのはスカーレットフォックスだった。両腕に装着されているマシンガンが凄まじい連射速度で銃弾を吐き出す。

ガトリングガンやマシンガンのように高い連射速度を持つ兵器はネクストのプライマルアーマーを急速に減衰させることが出来る。

プライマルアーマーが無くなればネクスト本体の装甲など、タンク型でもない限りノーマルと大した差は無いので即座に大きな被弾を負ってしまう。しかも今はオーバーブーストを使っているのでプライマルアーマーが少し減衰している。

だがノブリス、ラーゼは微塵も脅威を感じていない。

マシンガンから放たれた弾が到達する前に、ノブリスがスカーレットフォックス（以後フォックス）の視界から突如消えた。

「・・・なに!？」

「後ろだ!」

エメラルドラクーン（以後ラクーン）からの通信を受けてフォックスがクイックターンで後方へ旋回。すると、先程まで自分の正面にいたはずのノブリスがオーバーブーストで後退するラクーンに距離を詰めている。

先程ノブリスはオーバーブーストを発動したまま連続クイックブーストでフォックスの側面を通り抜けてそのままラクーンの方へ向かった。接近主体のフォックスより先に遠距離主体のラクーンを叩くことにしたのだ。

「俺をシカトかよ・・・舐めた真似しやがって・・・！」

フォックスもオーバーブーストを使ってノブリスを追うが、少し距離が遠く、速度でも負けているせいで距離が縮まらない。

フォックスは両腕のマシガンを下ろし、右背中の散布型ミサイルMR-0200と左背中のグレネードキャノンGRB-TRVERSを起動させ、グレネードを撃った。

ノブリスは発砲音を聞いて左にクイックブースト、グレネードの爆発と爆風を完全に回避した。だがそこに追撃として散布型ミサイルが襲い掛かる。

ノブリスはオーバーブーストを解除してクイックターン、地面に落下しながら右手のライフルを連射してミサイルを撃ち落とす。だが迎撃しきれなかったミサイルがノブリスのプライマルアーマーと周辺に着弾し土煙が霧散、ノブリスの足が止まる。

「イエーイ！」

隙を逃さずフォックスがグレネード、ラクーンが背中と肩の標準型ミサイルMUSSEL SHELLを放って追撃する。ノブリスは一瞬で爆炎に覆われた。

「終わったか・・・悪くない動きだったが、あんな重いもん背負ってりや遅くもなる」

「そうだな」

フォックスとラクーンが勝利を確信して爆炎に近付く。散布型を含めたミサイル数十発とグレネードの直撃、普通に考えればプライマルアーマーが消滅し本体に大きなダメージを負っているはずだ。

そう、普通ならば。

「・・・っ！イエーイ！」

「あ？どうし・・・っ！」

イエーイの声を聞いて振り向いたウイスの目の前にはレーザーブレードを振り抜く寸前のノブリスがいた。そのまま直撃すればプライマルアーマーを貫通してフォックスの装甲を焼き切るだろう。

「なっ！？・・・くっ！」

激しく動揺しながらフォックスは逆間接の有する高い跳躍力を使ってレーザーブレードを寸前で回避した。プライマルアーマーが切り裂かれたが本体に損傷は無い。

ノブリスは即座にクイックターンで反転、フォックスの背中を狙って右手のライフルを連射する。

正確な標準で放たれたライフル弾はプライマルアーマーを失ったフォックスの装甲を確実に削る。だがそれ以上の攻撃を許さず、ラインがミサイルを放ってノブリスを引き離す。

ノブリスは即座にクイックブーストで離脱するが、ライフル弾はフォックスのグレネードを破壊した。フォックスは即座にグレネードをパージして離脱、誘爆の被害をギリギリ逃れる。

「ちくしょう……どうなってんだ。確かにさっき……」

「……………」

「少し危険だったが……想像以上の出来だな」

動揺を隠せない二人とは対照的にラーゼは物静かな様子でノブリスの装甲を見ている。純白の輝きを放つ装甲には一見大きな損傷は無いように見えるが、良く見ると左肩の部分に熱で焼けたような黒い損傷がある。

あれだけの爆発を受けての損傷はそれだけだった。

ラーゼが所有している全てのネクストはヘラの手によってFBSメモリ改造が全項目フル改造状態になっている。その項目の中にはプライマルアーマーの防御力を高める整波性能も含まれる。頭部から脚部までに至る全てが、だ。

よってノブリスのプライマルアーマーの防御力は基本状態の数倍、

タンク型の装甲にも匹敵するほど堅牢になっている。

先程ラーゼは性能試験としてわざとミサイル群とグレネードを受けたのだ。下手をすればプライマルアーマーが剥がされ装甲が吹き飛んでいたというのに。

「それじゃ・・・本番と行こうか」

ライフルをリロードしてオーバーブーストを起動。ノブリスがフォックスとラクーンに急接近する。

近付けまいとフォックスは両腕のマシンガン、ラクーンはスナイパーライフルと標準型ライフルを連射して弾幕を張る。

だがノブリスはオーバーブーストを起動させた状態で連続クイックブーストを使用、最低限の被弾（被弾といっても全てプライマルアーマーに止められたのでほぼ無傷）で弾幕を突破した。

突撃型ライフルが放たれるが、フォックスは上に跳躍、ラクーンはクイックブーストで回避する。そのまま二機の間を通り過ぎるのかと思われたが、ノブリスはオーバーブーストを停止させインターバルを置かずクイックブーストでラクーンを追撃する。

ラクーンは左手のライフルを連射するが、全て堅牢なプライマルアーマーに阻まれる。

急接近したノブリスが通り過ぎ様にレーザーブレードを一閃、ラクーンはクイックブーストを使ってギリギリ後方へ回避したがスナイパーライフルの銃身が両断された。

ラクーンの隣を通過したノブリスは体を右に反転、ラクーンの背後を取って再びレーザーブレードを振るう。ラクーンも回避を急いだが背中にある左右両方のミサイルを両断される。それよりミサイルポッドが暴発、肩部分のミサイルも巻き込みラクーンが大爆発に包まれた。

「イエーイ!!」

爆煙が晴れると、その場に膝を着き、緑色の装甲が数箇所吹き飛んでいるラクーンがいた。だがノブリスのセンサーが生体反応を捕捉しているので搭乗者のイエーイはまだ生きているのだろう。

（至近距離であれだけの爆発を受けたのに搭乗者がまだ生きている・・・何にせよ好都合か、これなら手元が狂っても少しは大丈夫そうだ）

エネルギーを回復させるためにノブリスは地上に着地、メインブースターを吹かせてフォックスに接近する。強力なKP出力によってエネルギーが瞬く間に回復し、2、3秒過ぎた時には既に3分の2ほどが元に戻っていた。

突然噴射音が聞こえ、地上を移動するノブリスの前方からミサイル群が降り注ぐ。

ノブリスは即座に回避行動を取るがクイックブーストを使っていないのでミサイルが次々と着弾した。プライマルアーマーによってダメージはないが、直撃を受けたので濃度が少なからず減衰する。

フォックスが追撃に両腕のマシンガンを連射、減衰したプライマルアーマーを削り切ろうと接近する。

「もらった！」

「甘いな」

だがノブリスはエネルギーの回復を終えクイックブーストで離脱、空中から接近するフォックスへと向かって距離を詰める。

至近距離ではミサイルを使えないので両腕のマシンガンが向けられるが、ノブリスはフォックスの左肩をライフルの銃身で殴りつけ強引に体勢を崩す。ノブリスは空中で体勢を崩したフォックスの腹部にクイックブーストの加速を加えた右足で蹴りを打ち込む。

「なっ！……馬鹿な……」

ネクストの基本に存在しない攻撃の驚きと物理的衝撃を受けてフォックスは空中に落下。姿勢制御のためにオートブーストがフル稼働するが、クイックブーストの急加速を加えた蹴りの力を相殺しきれず背中から地面に墜落する。

「ぐっ！……く……そ……」

「チェックメイトだ」

何とか機体を起こそうとするが、フォックスの頭部に銃口が突き付けられた。目の前には両背中の中のマルチレーザーキャノン6門と突撃型ライフルを構えるノブリス。その姿はまるで断罪の裁きを下そうとする天使のようだ。

本来、腕と背中の中の武装を同時に使用するには多大な精神負荷を伴う

が、AMS適正が化け物レベルと言えるラーゼは汗一つ掻かずにそれをこなしている。

至近距離でライフルと6門のレーザーキャノン避けきるなど絶対に不可能。ラーゼが発射命令を下せばフォックスはレーザーキャノンで溶解し、ライフル弾の連射で粉々になる。

ラクーンのように搭乗者の肉体は守られるかも知れないが、ネクストが損傷した時に起こるAMSからのフィードバックの痛みに精神が耐えられるかはわからない。

「2対1でこんな圧倒的に……冗談だろ……」

ウイスが悪夢を否定するように呟く。

2対1で、しかもラーゼはネクスト戦はこれが初めて、勝率が完全にウイスとイエーイに傾いていたこの状況でラーゼはノブリスの損傷を軽微に抑えて勝利した。今のラーゼの実力ならカロードのオーダーマツチでランク1桁まで辿り着くことも可能だろう。

「殺しはせん……聞きたいこともあるいからな」

ラーゼの言葉で抵抗をやめてフォックスは力を抜いて背中から地面に倒れる。交戦の意思を無くしたらしい。頭部パーツが変形しイエーイが素顔を晒した。明らかに今のラーゼよりは年上に見える青年だ。

ノブリスもその様子を見てマルチレーザーキャノンを収納、同じように素顔を晒す。

「予想通り・・・やっぱりお前か・・・年下に負けるとはな・・・」

「単純に相手が悪かった、それだけだ・・・さて、お前らのおかげで聞けなかったが、質問に答えてもらおう」

「こちとら敗者で見逃してもらった身だ・・・いいぜ、何が知りたい？」

「一つ目は、AMSの技術を研究してる機関の場所だ」

まずラーゼが知りたい情報はAMSの技術をこの世界に広めた根源だ。それが分かればこの世界でどういう流れでアーマードコア・ネクストが生まれたのかも分かる。

「機関って、アスピナのことか？場所の暗号がまだこの機体に残ってたはずだ、送るから手を出せ」

「どこに行ってもアスピナはアスピナってことか・・・束さん、お願いします」

『お任せなさい！』

フォックスがノブリスの手に触れ、転送されてきたデータを束が回収し解析を始める。

「二つ目だ、そこにまだリンクスとネクストはいるのか？」

これが次にラーゼの知りたい情報。ラーゼの目的の為にはまず他のリンクスの協力が必要なのだ。

「俺が知ってる限りで最高クラスの実力者が確実に10人以上いる。ついでに言うならあの研究所にいるリンクス達には反乱を防ぐためにネクストの展開の妨害と電気ショックを起こす首輪が付けられてたんだ。トップクラスの実力を持つ奴らは特に監視の目が強かったんで、オレとイエーイはそいつらに監視の目が引き付けられる時に首輪を外して他のリンクス達に混じって施設を脱走したってわけだ。たぶん今から2年くらい前だな」

「・・・最後だ、お前とあっちの相棒、これからどうする？」

「俺はともかく、イエーイの機体は完全にご臨終だ・・・とりあえずは何処かの街を目指してから考えねえとな」

「それに関しても聞きたいんだが、何であの爆発で搭乗者が生きてるんだ？ネクストの機能の一部なのか？」

ラーゼとウイスの視線の先には膝を着いたまま真っ黒の煙を纏っているラクーン。戦闘なので仕方ないと思えるが、上半身の装甲が半分近くが吹き飛んでいる様子を見るとラーゼも少し罪悪感を感じる。

「機能の一部っていうよりあって当たり前のものだな。ISに絶対防御があるみたいにネクストにもリンクスにも搭乗者の命を守る保護システムがあるんだよ。まあ酷い損害を受けた場合の最終手段に近いかな」

「叩きのめした後にお詫びつてのもおかしいが・・・オレ達の所に来るか？寝床と飯もあるし、お前らの機体も修理と整備が出来る」

「俺達にとっては願ったり叶ったりでありがたいが・・・お前本当に何者だ？ISの開発者の篠ノ之 束と繋がりがあってトップ

クラスの操縦技術と整備施設まで持つてゐるなんて充分異常だろ……
そもそもさっきの情報を聞いて何するつもりなんだ？」

「ああ、言つてなかつたか……。なに、単純さ」

ラーゼの顔が自然と笑みを浮かべる。その表情は何かの楽しみを必
死に堪える子供のようにだった。

「リンクス達を助け、ある企業を潰す……。んで、いつか名前と
幸せを取り戻す」

第8話 2対1（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

チート機体の前では2対1の戦力差も無力でした。もちろんリンクスの方もチートだからこそ出来たのですが。

ふと思ったのですが、整波性能を全部フル改造にしてアサルトアーマーやアサルトキャノン直撃させたら威力が恐ろしいことになるのではないのでしょうか。雷電一撃で倒せたりして。

では、また次回。

第9話 アスピナ機関、襲撃（前書き）

更新遅くなりました。

では、どうぞ。

第9話 アスピナ機関、襲撃

Side Out

中東の砂漠地帯に大きな研究施設がある。

その機関の総称はアスピナ機関。現在はどの国家にも秘密裏にアイマードコア・ネクストとAMSの被研体であるリンクスの実戦データの収集し、新たなリンクスを作り上げている。

どの国家にも秘密裏に動いている以上、この施設のステルス性能は超強力。

だがその施設は現在、業火と爆煙が吹き荒れ、砲弾やミサイルが飛び交っていた。

それらが向かう先には3機のネクスト。赤、緑、純白の色をした3機は反則的な急加速と防御を駆使して襲い掛かる敵を急速に減らしていく。

ここアスピナ機関はネクストとリンクスを開発しているだけあって他とは違う防衛戦力を有している。

その戦力の一つは逆間接に楕円形のコアと大型の機関砲やライフルを搭載した兵器、マッスルトレーサー、通称”MT”。もう一つはネクストよりもごつく見える装甲にマシンガンやミサイルとそれぞれ様々な武装を搭載した二足歩行型機動兵器、アイマード・コア。ネクストが出現した今では”ノーマル”と呼ばれている。

この二つはISに及ばないが、旧世代の兵器よりも高い性能を有している。

その兵器がかなりの数で猛攻撃を浴びせているのにネクスト3機の進行速度はまったく衰えない。

プライマルアーマーによる堅牢な防御とクイックブーストの慣性の法則を無視した急加速、これらを有しているネクストにはノーマルやMTなど、余程高い戦略や連携を使わない限りは脅威にならない。そして、そのネクストを駆るリンクス達は……。

「うおっ！？あぶねっ！……くそ、2年間戦車とかヘリしか相手にしてなかったから腕鈍った！おいイエーイ、ちゃんとミサイルで弾幕張れよ！」

「その前にミサイルを撃ってくるノーマルをちゃんと沈めろ……お前が避けているだけのせいでプライマルアーマーがやばいんだ……むっ！？くそ、当たったか」

「おい、お前ら——自分から付いてきといてなんで苦戦してんだよ……頼むぞ？中に入るより先にノーマルとMTにやられたなんて笑い話にもならん」

3機の中の2機は一杯一杯で互いに文句をぶつけていた。だが残った1人は余裕を思わせる口調で2機の様子に呆れている。

どこか緊張感を感じさせない会話を続けている中でも、3機に襲い掛かる砲弾やミサイル群は進行を食い止めようと勢いを緩めない。

Side ラーゼ

2年ぶりに戦ったノーマルとMTに苦戦しているウイスとイエーイに呆れながらも、オレは突撃型のライフルを連射して固まっていたMT5機を蜂の巣にして、正面からマシンガンを連射しながら接近してきたノーマルを通り過ぎ様にレーザーブレードで両断する。

爆散したMTやノーマルからは悲鳴も血飛沫も上がらない。少し前に気付いたが、どうやら無人機を自動操縦で動かしているらしい。便利なものだ。

しかもこのノーマル共、ネクストと同じようにサイズが小さくなっている。MTも同じだ。サイズで圧倒されないのならネクストの勝利は揺るがない。

ウイス、イエーイの二人と交戦してから数日後、オレは束さんが解析してくれたアスピナ機関の施設へ向かうことにした。

そんな時にウイスとイエーイが自分達も付いて行くと言ってきた。確かにスカーレットフォックスとエメラルドラクーンは修理を終えて完全に元通りとなっているが、この二人がわざわざ危険地帯に付いてくる理由はない。

そう言ったのだが二人は”助けてもらった礼だ”と言って引き下がらなかった。結果、今遼機として一緒にいるのだが・・・はつきり言おう。こいつら、使えねえ。

二人の機体は修理を行ったので調子は言葉通り”万全”。オレと交戦した時に溜まっていた機体の負荷も全て取り除いたので、今なら

あの時より数段良い動きが出来るはずだ。

だが今の二人は万全となった機体でなんとノーマやMTに苦戦してやがる。どうやら理由は2年間通常の兵器群としか戦っていなかったため、単純に腕が鈍ったから。敵の強さではなく、多数を同時に相手する戦闘の仕方を忘れているのだ。

だが、それでも二人はリンクス、本当に少しずつだが勘を取り戻して動きの無駄を減らしている。

「しかし数が多いな……」

すでにかかなりの数を沈めたはずなのだが敵の勢いはまったく衰えない。このままだと相手の全滅よりこちらの弾切れが先になるだろう。

ウイスとイエーイの話では、この施設は正面ゲートから進むと徐々に地下へ降りていく仕組みらしい。正面ゲートは肉眼でも目視できるが、ノーマルとMTが集まって守りを固めている。

あれを突破して中に侵入すれば自動制御で動いているやつらは施設内で迂闊に発砲できないはずだ。

「ウイス、イエーイ……道を作る、オーバーブーストの準備をしろ」

返答を聞くより先に両背中のマルチレーザーキャノンを展開。敵ではなく閉じられているゲートに照準を合わせて発射する。

6発の高出力レーザーが同時に放たれ、進路上にいたノーマル及びMT群を溶解させながらゲートに命中。大爆発を起こして隔壁が吹

き飛び、ゲートまで道が出来た。」

即座にレーザーキャノンを収納し、同時にオーバーブーストを起動。音速をぶつちぎってゲートの中に突入した。数秒後にフォックスとラクーンも辿り着く。

「お前ら、残弾はどれくらい残ってる」

「全部まとめて6割ってとこだな——イエーイ、お前は？」

「ミサイルを撃ち過ぎたな——4割と6部、というところだ」

ミサイルで弾幕を張っていたイエーイは空中からノーマルを叩いていたウイスより自然と弾薬を多く消費していた。まずいな、半分は勘だがこの先はおそらくネクストを相手にする。しかもトップクラスの実力者をだ。今のままでは二人とも弾が完全に足りない。

「……仕方ねえ、ラーゼ、お前はそのまま先に進め——俺達はここに残ってノーマル共を引き付ける」

「……限界が来ればすぐに離脱する。心配は無用だ」

「……わかった。けど自分から陽動を引き受けたんだ、最低でも3時間は引き付けろ。東さん、二人のオペレートを頼みます。じやあな」

『任されたよぉー!!』

「おい!——陽動に課題押し付けるって、お前鬼か!?……つて、おい!」

ウイスの非難を無視して先に進む。通路は決して広くないが、充分余裕を持って動ける。原作にあったB7のコジマプラントの通路に近いかもしれない。ただゲームとは違い、ここでクイックブーストを使えば間違い無く壁にめり込んでしまうだろう。

迎撃システムとして無人のMTが数機何度か現れるが、攻撃は全てプライマルアーマーが防いでくれるので余裕を持ってレーザーブレードで沈めていく。

（さて、オレの予想通りならそろそろネクストが駆り出されてくるはずだが、出来ればここの研究者が無能なのを願うな）

Side Out

「くそっ！どうなってるんだ！？・・・2年前に逃げ出したメンバーの二人だけでなく10年近く前に姿を消したあの『人形』までいるだど！？しかもあの機体、奴が逃げ出した時に紛失した一つではないか！」

地下の通路を数人の白衣を着た研究員が早歩きで移動している。先頭にいた研究主任が怒鳴っているが他の研究員はそれぞれ耳のインカムから次々と聞こえてくる報告に返答している。

「・・・主任！内部に侵入した機体の進行は一向に止まらず、外で戦闘中の戦力はすでに68%が失われました！」

「当たり前だ！貴様らも”此処の人間”ならわかっているだろう！アレ（ネクスト）はそういう兵器なのだ！」

研究員の慌てるような報告を聞いた主任は怒鳴り声で返答する。ヤケになっているわけではなく、本当にくだらないと思う質問をされたからだ。

怒鳴られた研究員は一瞬肩を震わせて小さくなった。

主任の言うとおり、此処の人間なら誰でも知っている。アーマードコア・ネクストが持つ圧倒的な性能を……そしてネクストが兵器として完成する過程で最も深く関わっているのがアスピナ機関だ。

「……しかし主任、どうしますか？このままではあの『人形』が……」

「わかっている……ノーマルではあの化け物に太刀打ちすら出来ん……ならば、化け物には化け物だろう？」

やがて一つの部屋に辿り着く。自動で開かれた扉の先には入院患者のような服を着た若い男が1人、透明の軍用装甲版で作られた監獄の中にいた。暗闇が深いせいか顔は良く見えない。

入ってきた研究者達に気が付き、男が目を向け立ち上がった。男の首元には真つ黒の機械的な首輪が填められている。ウィスがラーゼに話した、ネクストの展開の妨害と反乱鎮圧のための電気ショックを起こす二つの機能を持った文字通りの首輪である。

「主任！……まさか”これ”を使うおつもりですか！？」

「何か問題があるのか、報告で見た限り実力はかなりの物なのだろう？」

”これ”と呼ばれても男の表情はまったく揺らがない。呼び方に慣れたのか、それともまったく興味が無いのか。

「お前に任務を与える・・・現在この施設に3機のネクストが攻撃を行っている。まずお前は地下を進行中のネクストを撃破しろ、外のネクスト2機はその後だ・・・質問や希望はあるか？」

「・・・・・・・・ネクストの使用許可と敵ネクストの詳細データを希望する」

「よかるう・・・・・・・・首輪を外せ、そのあとにデータを与える」

主任の命令に従い、研究員の1人が監獄の扉を開けて専用の携帯端末を操作して男の首輪を外した。

だが、この時気付くべきだった。過去にこの施設で多くのリンクスが反乱を起こしたという事実を。

「・・・・・・・・礼を言つよ」

男が呟きと共に研究員に拳を突き出した。拳は研究員の顔面にめり込み、その体を壁まで吹き飛ばす。男は凄まじい速さで走り出し、主任の傍にいた残りの研究員を一発で気絶させる。

「なっ！？・・・・き、貴様・・・・！」

「何を驚いている、2年前にも同じようなことがあっただろう？・・・だが感謝するよ、貴様が無能なおかげでようやく自由を得られた。・・・さて、少し質問に答えてもらおうか」

男が発光と共に全身を装甲で覆い、両手と両背中に武装を出現させた。間違いなくネクストの姿である。

「ひっ！・・・や、やめろ！ここから脱出しても、貴様のネクストはいずれ朽ち果てるぞ！」

「それがどうした・・・そんな理由で実験動物に戻るほど頭は死んではない・・・殺されたくなければ質問に答える」

S i d e ラーゼ

「けっこう下に来たはずなんだが・・・ウイスに貰ったマップだと、もう少しで研究員の居住スペースだな」

通路とリフトを何度も通り、ようやく人間がいそうな場所まで来た。もうMTやノーマルも出て来ないので楽に進めている。

「ん？・・・隔壁が降りてる」

進路上の通路が無数の隔壁で遮られた。スキャンしてみると、隔壁は奥まで無数に続いている。

隔壁が降りていない道を見つけてマップと照らし合わせると、行き先はネクストの戦闘データを取る広い訓練室に繋がった。

「・・・誘導されてる、と見るべきか・・・仕方が無いな、どうせ避けられない道だ」

覚悟を決めて通路を進む。訓練室のゲートが開き、中へ入った直後にドアが閉まった。

訓練室は壁の全てが真っ白だった。これでは訓練室と言うより感染症の患者を隔離する部屋のようなのだ。

その時、オレが通ったゲートとは正反対の位置にあるゲートが開いた。リーダーが熱源を一つ感知、以前の時と同じくバイザーに詳細データが表示される。

『ネクスト反応を感知……敵ネクストの機体構成と武装を照合開始……完了。カラードランク1、オツツダルヴァの搭乗機、ステイシスと判明』

その機体はオームルの標準機、ライルをベースとした軽量二脚型の機体構成で、深い青色の装甲を纏い、歪な前傾姿勢を取っていた。

右手に突撃型ライフル、AR-0700と左手にレーザーバズーカの異名を持った試作型レーザーライフル、ER0705が握られ、右の背中にPMミサイル、MP-0901、左の背中には負荷低減型のリーダー、RD03-PANDORA。

「初めましてだな、人形……。放っておいても構わなかったのだが、追って来られても面倒だ。ここで死んでもらうでしょう……」

両手の銃をオレに向けながら空中に浮遊するその正体は……。紛れも無い『最強』の存在だった。

第9話 アスピナ機関、襲撃（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

予定ではMTとノーマルは、技術が世界中にはら撒かれてテロリストなどの主戦力になる予定です。やばい、黒い無人ISやノーマルなどのせいで敵だけ強くなっている気がする。

そしてラーゼの次の相手はなんと、ランク25、26からぶっ飛んでランク1のオツツダルヴァ・・・本名、水没王子です。フィールドは室内なのでどうやっても今回は水没しません。

では、また次回。

第10話 最強（前書き）

すごくお久しぶりです。

やっとテストが終わったので投稿することが出来ました。あと、どうでもいいことかもしれませんがやっとISの7巻を読み終わりました。

今回の相手は水没王子です。

では、どうぞ。

第10話 最強

Side Out

無数のノーマルやMTを相手にしていたエメラルドラクーンとスカレットフォックスは残り少ない弾薬を節約しながら戦闘を続けていた。

逆間接の高い跳躍力により敵の空中を取ったフォックスは左背中のグレネードと右背中の散布型ミサイルを発射。

グレネードがノーマル4機とその近くに居たMT6機を、ばら撒かれた複数のミサイルが戦車部隊を吹き飛ばした。

「おい！内部に突入したラーゼから何か連絡は無いのか！？」

即座に放たれた対空砲火をクイックブーストで回避しながらウイスが通信に声を飛ばす。

『まだ何も来てないよ……それより増援でノーマルが着たから気を付けてねえ』

「ウイス、しばらく対空砲火を弱らせるからそつちを頼む」

エメラルドラクーンが両背中と両肩の標準型ミサイルを同時に発射した。

それは上空のフォックスに目を向けていた敵のだ真ん中に着弾し、対空砲火の密度を弱らせた。その隙にラクーンのスナイパーライフ

ルと標準型ライフルが放たれ、敵を打ち抜く。

その間にフォックスはオーバーブーストで増援に現れたノーマルに急接近、上空から両腕のマシンガンを連射してノーマルを蜂の巣にする。

すぐにその場から離脱しようとするが後方から迫ったミサイルがブライマルアーマーに着弾し、減衰した部分を狙って放たれた戦車砲がフォックスの左肩と右足の装甲を少し抉った。

「があ！！・・・くそっ」

A M Sからのフィードバックにより肩に激痛が走るがウイスは歯を食いしばって耐え、オーバーブーストでイエーイの元に戻る。

イエーイのラクーンも損傷したのか胴体の左胸部と背中が僅かに溶解していた。

「A Pは60%以下・・・腕が鈍ってるのもあるが、流石に疲れってきたな」

「そうだな」

『体力だけじゃなくて弾薬もやばいんじゃない？・・・らくんの指定した3時間まであと数分だし離脱したらどうかな？・・・あ、私はちよつと取り込み中だから離脱は自力でお願いねえ』

それだけ言つて束は通信を終了した。自分が興味を示す特定の間人間以外には生死すら無関心になる束の人格を理解している2人は心の中で”言われなくても”と答える。

ラクーンとフォックスは敵群に目掛けて両背中 of 武装を同時に発射。隊列が乱れたのを確認して上空に上昇、対空砲火が開始されるより先にオーバーブーストでその施設から離脱した。

「あの女の人格は充分に理解したつもりだったが・・・理解してても腹が立ちやがる」

「そうだな・・・しかし」取り込み中」と言っていたが、一体あの状況で何をしていたんだ？」

「知るかよ・・・知りたくもねえ——俺達は指定された時間通りに囚役をやった。後はラーゼを待つだけだ」

吐き捨てるような相棒の言葉を聞いてイエーイもその話を止め、黙って飛行を続けた。

・
その頃内部に侵入したラーゼのノブリス・オブリージュは・・・

「ぐっ・・・く・・・そがつ・・・！」

訓練室の真っ白な床に片膝を着いていた。

ローゼンタール社最高のネクスト、破壊天使の異名を持ったその機体の純白の装甲は各所に爆発の黒煙を焼付け、弾痕の穴を刻んでいた。機体各所からは火花が飛び散っている。

「なるほど、技術者共は馬鹿だが無能ではなかったか……知らぬ間にここまで機体の性能が上昇していたとはな」

素直に感心する声を上げて空中からノブリスを見下ろすのは、ライルフレームをベースに構成されたオツツダルヴァの搭乗機、ステイシス。

「まだまだ……！」

A M Sを通して全身に走る激痛に耐えながらラーゼは機体を立ち上げらせ、オーバーブリストで急接近して左手のレーザブレードを突き出す。

しかし光刃が辿り着くより先にステイシスはその場からクイックブリストで姿を消した。

目で見るより先に、左腕に手応えを感じなかったことでラーゼも即座にその場からクイックブリストで離脱する。次の瞬間、ノブリスのいた場所にステイシスのライフル弾が当たる。

ノブリスは上昇を開始して突撃型ライフルを連射。だがステイシスは高い空戦適性によってそれを容易く回避し、空中を超高速で移動し続ける。

ノブリスも連続クイックブリストによる超スピードで対抗し、空中で銃撃戦を繰り広げる。

しかし……その拮抗は長く続かなかった。

ステイシスの右背中に搭載されたPMミサイルが左右から迫る。ノブリスは迷わずクイックブリストで前進、ミサイルを振り切る。

しかし、そこを狙っていたのかノブリスの頭上を取っていたステイシスのアサルトライフルが放たれ、数発の弾丸がノブリスのプライマルアーマーを貫き右肩の装甲に弾痕を作った。

「認めよう。確かに貴様の實力は高い・・・機体の性能に振り回されず、それを完全に制御する技量も持っている・・・だが・・・」
オツツダルヴァの言葉を聞き入れず、ノブリスは空中で体を前に倒して強引に右ヘクイックターン。空中で背中を地面に寝かせたような体勢を取り、頭上にいたステイシスに突撃型ライフルの照準を合わせる。

ステイシスはその動きに一瞬驚いたが、すぐに左手のレーザーバズーカの異名を持った試作型レーザーライフルをノブリスに向ける。

二人共、同時にロックオンが完了するより先に引き金を引いた。連射されたライフル弾と一筋の赤い閃光がすれ違い、互いの標的に迫る。

命中を知らせるように爆発音が響く。その音源はノブリスの頭部とステイシスの低負荷型リーダー。

「・・・ネクストとの戦闘に貴様自身が慣れていない」

「ぐ・・・が、ああっ!!」

頭部パーツの左側が爆発を起こし、破片がラーゼの左側の額を切り

裂いて血が飛び散る。

しかも激痛のせいで機体制御が上手くいかず、ノブリスは背中から地上に激突した。

（っ！・・・やばい！・・・急いで体勢を・・・）

脳が激しく揺さぶられ吐き気が込み上げるが、ラーゼは肉体や機体の損傷を無視して一刻も早く立ち上がろうとする。

だが上半身を起こそうとした瞬間、右腕の付け根に衝撃を感じ、体の内側を鋭い何かに掻き乱されたような激痛と共にノブリスは再び地面に叩き付けられた。

「がああああっ！！！」

痛みに耐えきれずラーゼは声を上げる。

「ISとは違いネクストの保護機能に絶対は無い・・・許容限界の物理エネルギーをぶつければ容易く砕け散る」

ノブリスの目の前には右腕のライフルを突き出したステイシス。そのライフルに搭載されている鋭利な刃がノブリスの右腕に突き刺さっている。

「しかし、空中であんな動きを実現させるとはな・・・リンクスよりも曲芸士の方が向いているのではないか？貴様は」

まったく疲労を感じさせない声でオツツダルヴァは軽口を叩く・・・いや、本当に疲労していないのだろう。

オツツダルヴァの言う通り、ラーゼはアナトリアの傭兵の経験を持っているが、ラーゼ自身がネクストの戦闘にまだ慣れていない。経験があってもそれを実施されるのはまた別なのだ。

対して相手はゲーム内ではカリードランク1だった存在。自惚れなど存在せず、最強と堂々と名乗れる存在なのだ。

だが、不利になっている原因はそれだけではない。ステイシスの機体性能、特に機動性方面がノブリスを上回っているのだ。

考えられる原因は此処の研究者が急ピッチでチューンを施したくらいだ。

機体性能とパイロットの根本的経験、この二つだけでラーゼは自然と不利になる。

「中々悪くなかったが、他を待たせているのでな・・・ここまでだ」
レーザーライフルがノブリスの左胸部に押し付けられ、銃口に光が収束する。このままレーザーが放たれれば確実にラーゼの心臓を撃ち抜くだろう。

だが、この時オツツダルヴァは気付かなかった。爆発した頭部パーツの隙間から見える血塗れたラーゼの左目がまだ死んでいなかったことに。

オツツダルヴァは知らなかった。目の前の少年が弱肉強食を現した戦場で生き続ける為に常に止まることなく進化を続けていたことを。

「ぐっ！・・・なにつ・・・！」

ステイシスが指に力を込めるより先に、腹部に大きな衝撃が走りその体が後ろに吹き飛んだ。ノブリスが左足でステイシスの体を蹴り飛ばしたのだ。強引に刃を抜いたことで傷口から血が吹き出す。

ノブリスは仰向けに倒れている体勢からクイックブーストを使って一瞬で起き上がり、間髪置かずに吸気音を響かせてオーバーブーストを起動。ステイシスに猛スピードで接近し、頭部を後ろに大きく傾ける。

「お返した」

にやりと口元に笑みを浮かべたラーゼはそのまま頭部を勢い良くステイシスの顔面に叩き付けた。所謂頭突きである。

その衝撃でノブリスのヘッドパーツの装甲が歪むが、強度で劣るステイシスの頭部は突起部分がへし折れ、装甲のほぼ全体が酷く損傷していた。

「くっ！！・・・こんな・・・馬鹿げた攻撃を・・・」

イエーイの時と同じく予想外の攻撃にオツツダルヴァが動揺し、頭部に感じる衝撃に意識をぐらつかせている。

常識などクソ食らえと言わんばかりの戦場で生きてきたラーゼにとつては殺し合いに馬鹿も天才も存在しない。逆にこういった何でも有りの生き汚い戦い方はラーゼの意識にちょっとしたやる気を投入してくれる。

ノブリスは両背中マルチレーザーキャノンを起動して発射。ステイシスはクイックブーストでその場から離脱して容易く避ける。

だがノブリスの狙った先はステイシスではなくその足元だった。大爆発が巻き起こり、爆炎と爆風を周囲に撒き散らす。それを施設のシステムが感知して天井のスプリンクラーが起動し、かなりの濃度で水が降り注ぐ。

（イエーイの情報には大助かりだな・・・後は・・・）

ノブリスがもう一度レーザーキャノンを発射。降り注ぐ水を熱で蒸発させ、訓練室の中が水蒸気で満たされる。ステイシスのレーダーが破壊されているので、互いの視界が一時的に死ぬ。

（スプリンクラーの水を使って視界を殺し、その状態からの奇襲を狙いか）

レーザーの狙いを見抜き、意識を集中させるオツツダルヴァ。自分の居場所を教えないようにブーストでの上昇は抑えることにした。

右腕がともに使えなくなった今のノブリスに残された武装はレーザーブレードとマルチレーザーキャノンのみ。

しかし大出力のマルチレーザーキャノンなど撃てば発砲音が聞こえた途端にステイシスはクイックブーストで回避できる。よってノブリスの攻撃手段はレーザーブレードに大きく絞られるのだ。

（何処から来る・・・っ！・・・右か！）

リンクスとして積み上げられた経験が本能に助言し、ステイシスは

両手の銃をその方向に放つ。

煙の向こうから着弾音が聞こえ、正体を現す。

爆散したそれは、ノブリスに搭載されているマルチレーザーキャノンの片翼だった。ノブリスは片方のレーザーキャノンをパージしてそれを投げ付けたのだ。

肩透かしを食らったステイシスの左腕に突然衝撃が走り、レーザーライフルが手から零れ落ちる。

レーザーライフルに直撃したのはノブリスが持っていた大型の突撃型ライフルだった。

「あまり調子に乗るなよ人形！」

怒りの声を上げてステイシスはアサルトライフルを眼を向けずに自分の背後へ連射する。すると、連続で着弾音が響いた後にもう片方のマルチレーザーキャノンが煙の向こうから現れて爆発した。

「これで武装は後一つ……次で確実に……っ!？」

何か強い危機を感じてステイシスが後ろを振り向いた。そこにいたのはオーバーブーストで急接近しながらレーザーブレードを突き出す寸前のノブリス・オブリージユ。

ステイシスが最後のマルチレーザーキャノンを破壊した時、ノブリスはその少し後ろにいたのだ。スプリンクラーの水がプライマルアーマーに当たって居場所がばれないようにプライマルアーマーを解除していた為、ノブリスの装甲には無数の破片が突き刺さっている。

接近速度と距離からステイシスのアサルトライフルは当てられない。
至近距離ではPMミサイルは役に立たない。

「もらったあああ！！！」

勝利を確信したラーゼは、叫びながらレーザーブレードをステイシスの胸部目掛けて突き出す。

だがラーゼの確信は、視界を埋め尽くす緑色の閃光によって残酷なまでに覆された。

第10話 最強（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

オツツダルヴァはメインブスターがイカれて水没しなければ滅茶苦茶強いはずです。

主人公のラーゼの戦い方がもはや不良の喧嘩に似てきている気がする。さらに武装をパージして相手に投げ付けてるし。

最後のやつが何かわかる人は結構いらっしやと思います。

では、また次回。

第11話 元最強（前書き）

周りが忙しくしてくれたせいで少し遅れました。

では、ごきげん。

第11話 元最強

Side Out

「まさか、ここまでやるとはな……」

オツツダルヴァに油断は無かった。例え自分がレーザーより優勢でも、絶対的な勝利の確信が無い以上は気を抜けない。レーザーにはその僅かな油断を突いて逆転できる可能性が充分にあったのだから。

そう、油断など無かった。無かったはずなのにオツツダルヴァはレーザーに追い詰められた。

アサルトアーマー。防御に使用するプライマルアーマーを攻撃に転用することで、自機を中心とした広範囲を大爆発で吹き飛ばすネクストの切り札とも言える特殊機能。

使用後はプライマルアーマーを展開できないリスクがあるが、回復を待てば何発でも使用することが出来る。そこに強力な破壊力を加えたアサルトアーマーは、核兵器に次ぐ大量破壊……いや、コジマ汚染が撒き散らされれば大量殺戮兵器に位置づけられるかもしれない。

実はこのアサルトアーマー、ステイシスにも搭載されているのだ。ステイシスの高機動とオーバーブーストの出力を殺さぬために一番破壊力の低い物を積んでいるが、破壊力は充分だ。

これが無ければステイシスは完全に終わっていただろう。接近したレーザーブレードは確実に左胸部、つまりは心臓を狙っていた。

本来ならオツツダルヴァはアサルトアーマーを使う気など無かった。模擬戦だろうと実戦だろうと、どんな時もオツツダルヴァはアサルトアーマーを使わない。本当の最終手段として使っているのだ。

それを使わせたラーゼの急成長はオツツダルヴァに恐怖を感じさせた。” 実戦に勝る経験は無い ” と言うが、この短時間でのラーゼの成長はそんな言葉で片付けられるレベルではない。

「・・・だが、今度こそ」

先程のアサルトアーマーは間違いなくノブリスに直撃した。あの至近距離ではどうやっても回避は不可能だ。機体もリンクスも無事では済まない。

しかもノブリスはステイシスに接近を気付かせないようにプライマルアーマーを展開していなかった。アサルトアーマーの前ではプライマルアーマーの防御力も焼け石に水だが、有ると無いとでは受けるダメージに大きな違いが出る。それが無かったノブリスの損傷は計り知れない。

消火が終わったのか、スプリンクラーが停止し、視界が開けてくる。ステイシスは破壊された低負荷型レーダーをパージ、メインブースターを吹かして先程落としたレーザーライフルを拾う。どうやら銃にダメージは無いようだ。

センサーが回復し、微弱な熱源を捉えた。バイザーに表示されている反応はステイシスの後方、その壁際だった。

ステイシスが振り返ると、その方向に立ち込めていた水蒸気が霧散

し、まるで迷える者を導くように一つの道を作っていく。

その道の最奥にいたのは、両の翼を失くし、全身に大小の損傷を受け、壁に背中を預けたノブリス・オブリージュ。

純白の装甲は胸部が数箇所が弾け飛び、他の箇所には傷や弾痕、無事な箇所などもはや見えない。その姿はまるで墮とされた天使。ほぼ全身から火花を飛び散らせているその姿から、もはや戦闘は望めないだろう。

いや、むしろ死んでしまったのはリンクス、ラーゼの方がかもしれない。

口で説明するのが難しいと思えるほどの酷い損傷。あれを一瞬で受けたということはリンクスを襲ったAMSのフィードバックは想像を絶するものだったはず。最悪ショック死の可能性もある。

破損した頭部パーツから見えるラーゼの顔は力を失って下を向いている。気絶しているのか死んでいるのか、ピクリとも動かない。

ステイシスはノブリスの前に佇み、剥き出しになったラーゼの頭部にアサルトライフルを向ける。すると、その敵意に反応したのかラーゼの体が一瞬震え、首が持ち上がった。

ステイシスを肉眼で見るラーゼの瞳に諦めの色は無い。隙あらば喉元に噛み付く獣のような目だ。しかも意思だけではないらしく、体を起き上がらせ、どうにかして左腕を動かそうとしている。

ステイシスは無言でノブリスの胸部を足で踏み付ける。再びノブリスは背中を壁に打ち付ける。

その衝撃で機体が限界を迎えた。AMSの自己判断により、最終セーフティーが作動した。ネクストの機能が強制停止を起こし、レーザーを守っていた第二の体が光となって霧散した。

地に倒れたラーゼの体はボロボロだった。頭部からの出血は未だ止まらず、アサルトアーマーによるもののなか、左脇腹と右足からも血が流れ出している。

「終わりだな……もう充分だろう、楽になれ……」

再びステイシスのアサルトライフルがラーゼの頭部に向けられる。ネクストが使う武装の威力なら痛みなど感じさせずにその命を絶つだろう。

トリガーに添えた指に力が籠もる。

「っ!!……何故だ……」

しかし、弾丸は放たれなかった。ステイシスの体が驚きで硬直したせいだ。

「何故……立ち上がる……」

ステイシスの目の前に体中を血に濡らしたラーゼが立っていた。ネクストの戦闘で敗北し、機体が限界を迎えても、ラーゼに諦める選択肢は無い。

「……勝ちたいからだ」

ラーゼが口元に微笑を浮かべる。狂ったわけではない、単純に笑ったのだ。

「それと、いつオレの負けが決まったんだ？・・・まだオレの体は動かし戦える。それに・・・オレの機体は”一つだけじゃない”・・・」

ピー。

電子音が鳴り、ラーゼが左目の血を拭いた。開かれた左目の網膜には文字が表示された。

『ネクスト、ノブリス・オブリージュがダメージ限界により機能を強制停止しました。現状を危険と判断し、対応策として”新たなネクスト”の起動を推奨します』

「あっちが最強なら、こっちは前最強で相手をしてやる・・・シユープリス、起動！」

『リンクスの機体選択を受諾。ネクスト、シユープリス、起動します』

「っ！・・・させん！！」

ラーゼの言葉に反応し、ステイシスがアサルトライフルを放つ。ラーゼは怪我の酷さを無視してその場から全力の跳躍、2メートル以上のステイシスの真上を飛び越えた。強化された肉体でこそ為しえたモノとはいえ、その行動に再びステイシスが驚く。

着地と同時にノブリスの時と同じく全身がコジマ粒子の輝きに包ま

れ、ネクストの装甲が形成される。だがそれはノブリスのような光を纏う純白ではなく、闇のような漆黒の色をした装甲だった。

中心部分に鋭い突起と両胸に二つのボルトが付いた胸部アーマー。高さが頭部に届き、肘部分に大型のユニットが装着されている細腕。

脚部パーツはノブリスより細く、膝に左右それぞれ一本飛び出た突起を装備し、足は爪先に指を一本、後方には二本、踵には鉤爪のようなユニットがあり、太ももの部分にはブースターがある。

ヘッドパーツは上部のみが元のみままで、口元の装甲が収納される。それ Continuing 両目を赤いバイザーが覆い隠す。

頭部パーツ展開と同時にAMSプラグを接続、ラーゼは即座に武装を展開する。

右腕にBFF製のライフル、051ANNR、左腕に突撃型ライフル、04MARVE。左背中には何も無いが、右背中にはグレネードランチャー、OGOTO。最後に両肩部分に二基のフレアディスプレイバー、051ANAMを装備する。

これがリンクス戦争時のランク1、ベルリオーズの搭乗機。レイレナード社製のアリーヤフレームを元に他企業の武装を使用したネクスト、シュープリスである。

腰に装備されたスタビライザーによるものかカラーリングの違いか、通常のアリーヤフレームとは異なり刺々しい外見をしている。

展開の完了と同時にシュープリスとステイシスが右腕に持ったライフルを互いに構える。二機の間を展開の余韻で散ったコジマ粒子が

漂うが、二機は少しの距離を保って睨み合った状態から動かない。

その状況は知る者が見れば現最強と元最強の対峙に他ならなかった。

「ネクストを複数所持していたとはな……だが、機体を新しくしても体はどうだ？生命補助システムとて完全ではない。あれほどの怪我、保って30分が良い処だろう」

そう、ラーゼの怪我は完治したわけではない。生命補助システムによつて一時的に出血と痛みを止めているだけだ。

30分……いや、脱出の時間も含めれば15分〜20分、その間にラーゼはステイシスを無力化しなければならない。

「上等だ……さて、第二ラウンドと行こうか……」

だがそんなことでラーゼは動揺などしない。制限時間があるならそれまでに勝つ、それだけだ。

互いにライフルを構えながら二機が同時に動き出す。シュープリスが右、ステイシスが左に、ライフルを連射しながらクイックブーストを行った。時速800キロ以上で移動していたというのに、両者の弾丸は確かに互いの装甲を削っていた。

シュープリスは右肩、ステイシスは左肩に弾丸を撃ち込まれている。だが、装甲の薄さと損傷の酷さからダメージはステイシスの方が大きい。

先に動き出したシュープリスは連続クイックブーストで距離を詰め、ステイシスは接近を避けようと空中へ上がり、ライフルで弾幕を張

りながら後退する。

しかしシュープリスは弾幕をもろともせず、両手のライフルを連射しながら突き進む。乱射しているわけではなく、確実にステイシスのプライマルアーマーを削り取っている。

「くっ……何故避け切れん……！」

BFF製のライフル、051ANNRは直撃すればネクストのプライマルアーマーすら貫通する威力がある。ステイシスの高機動を前にしても着弾を可能にするところから、BFF製にふさわしく、射撃精度はかなり優秀。

（……段々と動きが見えるようになってきた）

しかし、弾丸が当たっている原因はそれだけではない。さっきの戦闘で翻弄されたステイシスの動きにラーゼの反応が追い着いているのだ。

左手に持つ04MARVE（以後マーヴ）は右手のライフルよりも命中精度が低い。だが、それでもステイシスが回避しきれないのだ、これは武器よりもラーゼ自身の射撃精度の方が大きい。

「……チイ……！」

このままではジリ貧になると考えたのか、ステイシスはオーバーブーストでシュープリスの頭上を通過し、背後を取ってPMミサイルを発射する。

シュープリスはクイックターンで急旋回、オーバーブーストで中央

を突破し、先程のようにP Mミサイルを振り切る。これでシュープリスは左右と後方への動きを封じられた。

退路を断たれたシュープリスにステイシスが正面から接近、ノブリスの右腕を潰したアサルトライフルの銃剣が突き出された。

だが、シュープリスはクイクブーストで逆に接近し、頭部に迫った銃剣を直撃の寸前に首を傾けてかわした。

「なっ……！」

そのままシュープリスはステイシスの右隣を通過、ステイシスの背中にマーヴを連射する。

至近距離で放たれた弾丸はプライマルアーマーを貫き、ステイシスの装甲に弾穴を作っていく。

「ぐっ！……おのれ——」

振り返った瞬間、ステイシスの胸部を大きな衝撃が襲った。なんとシュープリスはその場で回し蹴りを放っていたのだ。鈍い金属音と共にステイシスは背中から壁に激突する。

「動きが……違いすぎる……本当に同一人物か……？」

「無謀だったな、オツツダルヴァ。先程とまったく変わらぬと思ったか？」

正確な射撃、無駄の無い回避、敵への反応速度、何から何まで先程とは違いすぎる。たった数十分の戦闘だけでこれほど実力が上がる

のだろうか？

AMS適正がもたらす才能ではない、ラーゼ自身に眠る”戦いの才能”がこの急成長を実現させているのだ。幼い頃から戦場に身を置き、生き抜くため常に成長を止めなかったラーゼだから可能なのだ。

立ち上がったステイシスとシュープリスが浮遊を始め、戦場を空中に変える。

クイックブーストの爆音が鳴る度に二機が現れ、そして消える。だが銃弾は絶えず飛び交い、部屋中に無数の弾痕が刻まれる。

そんな時、クイックブーストで移動したシュープリスとステイシスが正面で向かい合う状況になった。シュープリスが右手のライフルを、ステイシスが左手のレーザーライフルを構える。

発砲。

ライフル弾と赤い閃光がすれ違い、互いの標的に迫る。

そして数秒後に鳴る爆発音。

ノブリスが頭部を破壊された時とまったく同じだったこの状況・・・
・今回の音源は、ステイシスの左手にあったレーザーライフルだった。

シュープリスはその瞬間、レーザーライフルの銃口にライフル弾を撃ち込みレーザーライフルを内側から爆発させたのだ。ちなみにステイシスのレーザーは頭部を狙っていたが、ラーゼはそれを見切り、首を傾げることで回避した。

武装が突然爆発したことでステイシスの体勢が崩れた。シュープリスはその隙を逃さず右背中折り畳まれた状態のグレネードランチャー、OGOTOを展開し発砲する。

直撃を知らせる大きな爆発音が響き、胸部から黒煙を吐き出してステイシスが完全に体勢を崩す。有澤製のグレネードならばステイシスのプライマルアーマーを消し飛ばし、本体にダメージを与えることは難しくない。

吸気音を鳴らしてシュープリスがオーバーブーストで接近、ステイシスの腹部にマールヴを深々と突き刺した。

そのまま二機はシュープリスのオーバーブーストによって直進、腹にマールヴを突き刺したままステイシスは壁に激突した。

「がはっ……!!」

口から血を吐き出すオツツダルヴァ。ラーゼはそれを冷たく見下ろし、銃身から血が垂れているマールヴを勢い良く引き抜く。引き抜かれた腹部からは少なからず血が流れ出す。

シュープリスが右手のライフルを持ち上げ、銃口をステイシスの頭部に密着させる。これならステイシスのアサルトアーマーが発動するより銃弾が頭部を吹き飛ばすほうが早い。完全なホールドアップだ。

「オレの勝ちだ、オツツダルヴァ」

「はっ……ああ……そして、私の負けか」

この瞬間、ラーゼ・ベルセルクが現在最強のリンクス、オッツダ
ヴァに勝利し、新たな最強が誕生した。

第11話 元最強（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

アーマードコア？の発売日が遂に決まりましたね。

元最強っていうのは4のベルリオーズで、搭乗機のシュープリスのことでもありました。

ちなみにマールヴを突き刺したっていうのは4のオープニングでやってたアレです。オリジナルなのは、そのままオーバーブーストで壁に突っ込んだところですよ。

ちなみにステイシスのアサルトアーマーは私はゲームで一度も見ただけありません。ミッションだと勝手に水没するし、オーダーマッチだと待っている内にこっちが不利になるし……。

次の更新も少し遅れるかもしれません。

では、また次回。

第12話 脱出と合流（前書き）

お久しぶりです。やっと試験が終わりました。

セツ様から感想をいただきました。

では、どうぞ。

第12話 脱出と合流

Side Out

侵入者であるラーゼを誘導するために降ろされた無数の隔壁。

それはもちろん帰り道、つまりは地上へのルートにも張り巡らされている。

そして、誘導された本人のラーゼは、現在それを破壊しながら進んでいる。

ボオオン！！ボオオン！！

「・・・本当にこつちでいいのか？」

「間違い無い。お前と交戦する前にメルツェルと確認したからな・・・もうすぐだ」

右背中に搭載されている有澤製グレネードランチャー、OGOTOをぶっ放して隔壁を吹き飛ばす漆黒のネクスト、シュープリスの隣には別のネクストが並走していた。

外見はシュープリスとそっくりのアリーヤフレームだが、下半身が逆間接になっており、黒のカラーリングがシュープリスより濃く、間接の各所に赤のラインが刻まれている。

武装も大きく異なっており、シュープリスが左手に持つマールヴを右手に、ステイシスが持っていたのと同じレーザーバズーカを左手に

持っている。右背中も同じくPMミサイル、左背中には高出力レーザーキャノンを搭載していた。

そのネクストを操るリンクスの声は、レーザーと戦っていたオツツダルヴァとそっくりだった。まあ、当然だろう、同一人物なのだから。

「……というか、ホントにキャラが別人だな。一体どっちが本当のお前なんだ？それと、なんて呼べばいいんだ？オツツダルヴァか？……テルミドールか？」

「……個人的には後者の方が望ましいな……しかし、初めから知っていたのか？私がネクストを二機所持していたことを……」

「予想はしてたが確信は無かった……むしろ、あの場で交戦したのがお前だった、そっちの方が予想外だったな……」

この人物の名は、マクシミリアン・テルミドール。またの名を、
「オツツダルヴァ」と名乗っている。

機体もステイシスとはまったく別の物、その名を「アンサング」という。

つまり「オツツダルヴァ」はレーザーと同じく、別の名とネクストを持つ者だったのだ。

普段の姿は「ステイシス」を操り、偽りの名を名乗るオツツダルヴァ。そして本当の姿こそ、今の「アンサング」を操るテルミドールである。

だが、例え偽りの姿だったとしても、この二人は先程まで殺し合っ

ていた。そんな二人がどうして行動を共にし、これほどまで友好的に会話をしているのだろうか。

それはラーゼがオツツダルヴァに勝利した時まで戻る。

ステイシスの頭部に右手のライフルの銃口を押し付けたまま、シユープリスはステイシスを見下ろしたまま引き金を引かなかった。

「ごほっ・・・どうした・・・ここまでやって殺すのに迷いが出たか？」

血を吐きながらの皮肉を聞いてもラーゼに反応は無かった。ただ銃口を突きつけ、引き金に指を掛けている。

バイザーに隔たれたラーゼの瞳にはステイシスに見せた不屈の闘志は無く、深い思考の海が広がっていた。

やがて瞳から海が引くと・・・

「なあ、オツツダルヴァ・・・協力、というか・・・手を貸してくれないか？」

「・・・なに？」

そんなことを言い出した。オツツダルヴァも突然の申し出に呆けてしまっている。

「話してなかったが、元々オレがここに来たのは……ここにいるリンクス達を救出するためだ。もちろん今も目的は変わってないがな、今のままだと生命補助システムの時間が足りないし、脱出しようにも隔壁を突破するための弾薬が足りない……そこでお前の力を借りたいんだが、どうだ？」

そう、今のラーゼの体には制限時間がある。ステイシスとの一度目の戦闘で負った傷は生命補助システムによって誤魔化しているだけだ。

そんな状態で他のリンクスを助けようとすれば間違い無く時間切れでラーゼの体が動かなくなる。逆に脱出しようとしても、地上まで何層も降ろされた隔壁が待っている。

一枚一枚の厚さはシュープリスの火力を持ってすれば紙も同然だが、数が多いのだ。どう節約しても先に弾薬が尽きてしまう。

「……貴様の要求はわかった。だが、この機体状態で私が協力しても足手纏いになると思うが？それに、何故貴様は他のリンクスを助けるような真似をする……そこまで馬鹿なお人好しでもあるまい、目的はなんだ……」

「……確かに目的が無いわけじゃないが、今は単純に同類を助けたいだけだ……それに多分、お前もう1つ自分の機体を持っていたりするんじゃないか？」

「っ！……何故知っている……！」

「その反応から見てアタリか……どうする、協力するか？……」

「

驚きに声を荒げたオツツダルヴァの反応を見ながらラーゼは冷静にもう一度尋ねた。協力が得られない場合、二人ともこの地下から抜け出すことはできない。その事実を理解しているオツツダルヴァは顔を俯かせ、しばらく考える。

「……ひとつだけ、答えてくれ。お前は……今の世界をどう思う」

「政治の話しか？それとも……」女尊男卑社会”か？……歪んでいて、それでもって気に食わんな。社会はもちろん、下にされている男共も」

そう答えるラーゼの言葉には、目に見えないモノへの確かな怒り、いや殺意があつた。

篠ノ之 束が生み出したIS、インフィニット・ストラトスが登場したことで、常識が塗り替えられたのは何も兵器だけではないのだ。ISが持つ影響力は人間社会の常識までも塗り替えてしまった。

ISを動かすことが出来るのは”女性のみ”。この事実が全世界に『女性≧男性よりも立場が上』という方程式を刻んでしまった。

男女平等、などというのが世の中の基本だったのかもしれないが、今も昔も、実際は世界に平等などほとんど存在しない。

例えば身体能力。これは平均的に男性の方が女性のそれを上回っている。まあ一部では男性に勝る女性もいるが、全ての男女のトータルスペックを比べれば恐らく男性が勝る数が多い。

だがそんな常識的な差もISの力が木っ端微塵に破壊してしまった。つまりはパワーバランスが一方的に女性へと傾いてしまったわけだ。その結果出来上がったのが、女尊男卑社会。

ラーゼも適当な国の主都を歩いている時に、女性に奴隷のように扱われている男性を見たことがある。

ラーゼ本人も、態度がデカイ見ず知らずの女性に突然命令をされたことがあった。その際はラーゼが無言で殺気を込めて睨み、女性は悲鳴を上げながら逃げ出した。

だがラーゼが嫌っているのは社会だけでなく、大人しく従う男性も同じである。本人曰く、媚びるような様子は「家畜以下だな、吐き気がする」らしい。

「……そうか。わかった……それが聞ければ充分だ」

ラーゼの返答を聞いたオツツダルヴァはどこか満足したような声で答え、その体をコジマ粒子の光で包み始めた。

深い青色の装甲が空中に溶け出し、変わってシュープリスよりも濃い黒色の装甲が展開されていく。それは全身を覆い、やがては武装を形成、一機のネクストを誕生させる。

このネクストこそ「アンサンブ」である。

「さて……協力の証として改めて名乗ろう。マクシミリアン・テルミドールだ」

Side ラーゼ

（目標をセンターに入れてスイッチ・・・目標をセンターに入れてスイッチ・・・目標を・・・って良く考えたら隔壁狙うのに照準いらないだろ・・・）

砲身の熱を逃すためにOGTOを収納し、左手のマールヴを連射。数メートル先の隔壁に弾痕で丸い穴を描く。そこへクイックブーストで急接近。くると体を右に回転させ、左足で回し蹴りを放つ。

鈍い金属音が響き、弾痕で描いた隔壁の穴の部分が綺麗に外れて宙を舞う。

一応言っておくが、退屈だから工夫して遊んでる、というわけではない。こうして弾薬の消費を最低限に抑えなければ協力しても地上まで届かない可能性があるのだ。

「交代だ」

「了解だ・・・しかし、本当に器用な奴だ・・・そもそもネクストが蹴りを使うか・・・」

後ろに下がるオレと変わってアンサングが前に出て右背中の中のPMミサイルを発射、隔壁に大穴を空けて吹き飛ばす。ノルマとして、隔壁を10枚程破壊したら交代、というルールになっているのだ。

「なに言ってるんだ。常識に縛られた戦い方なんてしてたら生き残れ

ないだろうが・・・」

「だからと言って蹴りを使うか・・・むっ、通信が回復してきたな。間もなく地上だ」

「合流した途端に”お仲間”がオレを撃たないようにしてくれよ・・・？」

脱出の途中で教えられたのだが、元々テルミドールは仲間と一緒にここから逃げ出すつもりだったらしい。

だが、ウイスやイエーイを含めた大勢のリンクスが逃げ出した事件のせいで監視が強化され、中々機会がやって来なかったそうだ。

そんな時、オレがここを襲撃したことによって混乱が生まれ、研究者達を出し抜いて自由を得られたそうだ。

テルミドールはオレと戦う前に捕らえられている他のリンクス達を解放し、先に地上へ向かうように指示を出していた。ちなみにこの計画は「メルツェル」という仲間と考えた、と言っていたので、ここにはORCAのメンバーもいることがわかった。

上手く利用されたようでスッキリしないが、一応は手助けになったのだから良しとしよう。

聞いた話だと他全員は協力して既に地上に出たらしい。見覚えのないオレを見て撃った、というのは勘弁願いたい。

「あと4枚ほどで地上か・・・ちっ、ラーゼ、マーズの弾が切れた。手伝ってくれ」

テルミドールの言葉を聞き、右手のライフルを持ち上げて発砲。マ
ーヴの時よりも大きな弾痕が隔壁の一点に刻まれ、そこをアンサン
グの放ったレーザーバズーカが撃ち抜き、吹き飛ばす。

次に見えた隔壁をアンサングの左背中中のレーザーキャノンが貫き溶
解させ、溶解した穴の先にPMミサイルを放ち、奥の隔壁を吹き飛
ばした。

「最後の一枚・・・交代だ」

その言葉を聞いて機体を上昇させ、オーバーブーストで溶解させた
穴を通ってPMミサイルで吹き飛んだ場所をすぐに通過、右背中
のOGOTOを展開し、最後の隔壁に目掛けて発砲する。

ポオオン！！

紅の閃光が煌き、爆煙の間から太陽の日差しが差し込んでくる。ア
ンサングがオレを追い越して先に地上へ飛び出た。

続いて地上に出ると、顔面全体に強い日差しの熱を感じる。不快感
に顔を顰めるが、すぐにネクストの保護機能が作動し熱を遮断する。
周りを見渡してみると周り一面はただの砂漠だった。いや、センサ
ーに反応がある方を拡大してみると軽く見てもボロボロの施設が見
える。どうやらこの出口は施設から離れた場所に通じていたようだ。

「皮肉なものだな・・・このような見捨てられた大地には悠久の
時が約束されているのに、人が生きる場所は酷く歪む」

砂漠を見渡しながらテルミドールが呟いた。背中越しで表情は見えないが、そこには少々落胆の気配があった。何に対して落胆しているのかはわからないが。

この世界でここまでのレベルなのだ。コジマ粒子に汚染し尽された国家解体戦争後の世界ではどれほど酷いか想像できない。

いや、むしろ想像も出来ないレベルだからこそ、こいつは『クロースプラン』なんてものを実行したのかもしれない。

「……すまない、気にしないでくれ。さて、メルツェル達と合流しよう……互いに時間もヤバイか、急ぐぞ」

「了解だ」

二つの吸気音が鳴り、全身にオーバーストの重圧を感じながらオレとテルミドールは施設の方向へ向かった。

「……んで、合流したのはいいが……壮観だなこりゃ……」

テルミドールのアンサングに続いて到着した場所には数十機のネクストがいた。どれが誰の何て名前の機体か分かりそうなんだが、色が多過ぎるせいで目が疲れているのか、それとも”時間切れ”が近いのか、良く分からない。

気のせいだろうか、桜色のネクストがこっちを見ていた気がした。

自分の声に疲労感を感じながら、揺らめく視界にアンサンブに近付く一機のネクストが映った。

「来たか、テルミドール……後ろにいるのがそうか？」

「ああ……すまんが、二人分の医療施設の準備を頼む……」

「医療施設？何故だ？」

「そろそろ時間切れだ……しばらく頼む」

その言葉の意味を頭が理解し、傍で倒れるテルミドールを見て、オレの意識は途切れた。

第12話 脱出と合流（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

とりあえずテルミドールはラーゼと同じく機体を複数所持している設定にしました。

原作時期までもうちよつとかな？

では、また次回。

第13話 非公式な存在

Side Out

「ええと・・・必要なデータは転送したよね。荷物はまとめたし・・・むう、らーくんの完璧な家事能力にお世話になってたから不安が消えないなあ・・・よし完璧！流石私！」

誰も居ない、見ていない場所で声の主である女性、篠ノ之束は両手を腰に当て胸を張る。そのすぐ近くには纏められた荷物一式。

束の目の前の端末には「転送完了」と文字が表示され、他の端末は全て沈黙している。

束が指を鳴らした。それに反応し、置かれていた荷物が量子変換され、姿を消す。

別に不思議なことではない。ISの武装使用は量子変換の技術が主であり、束はそのISの開発者だ。

技術の理解度はもちろん、応用性が他より優れているのはむしろ当然のことだ。

「さてさて・・・それじゃあ、らーくにメールを送っておこつと・・・にしても凄いな、一度の敗北からあの短時間での実力の急上昇・・・やっぱらーくんもちーちゃんの弟だね・・・よし出来た、送信つと・・・」

空中に表示されたディスプレイを消して束は出口へ歩き出す。

だが出口を出る一步手前で立ち止まり、部屋の中を振り返った。

「またね、ラーくん」

本人がその場に居たわけではない。だが、何故か束はそう言った。言い終えると、もう用は無いと言わんばかりに部屋を出ていく。

それからその拠点には、物音一つしなくなった。

S i d e ラーゼ

「・・・うつ・・・!」

視界が開き、最初に見えたのは真っ白い天井。差し込む明かりに開いたばかりの目を刺激され、視線が狭くなる。背中に感じる柔らかさから、ベッドで寝ているようだ。

「ん？目が覚めたか、ラーゼ・ベルセルク」

少し冷たさを感じさせる声が聞こえた。なんだろう、何処かで聞いたような気がする。

声の方に目を向けると、そこにいたのは1人の女性。

艶のある黒髪を背中まで伸ばし、ルビーのような赤い瞳を薄く開いている。

その顔立ちは整っており、かなりの美人に部類される。千冬姉さんのようにクールビューティーという言葉が良く似合っていると思う。

「さて、何から知りたい？言ってみる」

初対面での自己紹介などは無く、目の前の女性はそうやってきた。まあ、せっかくなので利用させてもらおう。

「・・・ここは何処だ？オレが意識を失ってしてからどのくらい時間が過ぎた」

「ここは施設内にある医療施設だ。お前が眠ってからすでに6時間が経過している」

6時間。その程度の時間なら傷が痛むのも仕方が無いか。

「テルミドールや他のリンクス達はどうしてる・・・これからどう動くつもりなんだ？」

「テルミドールはお前より先に目を覚ました。今は他のリンクスを集めてこれからのことを話し合っている・・・幸い話を聞く連中が多かったようだ」

正直驚いた。

リンクスは基本的に群れるのを嫌っているのかと思っていたが、この世界では少し違うようだ。

しかし、一体どんなリンクスがいるんだ？ウイス達の他にも脱走し

たリンクスはいたから全員がいたわけではないだろうが。

「質問は終わりか？・・・なら少し待っている。テルミドルを呼んでくる」

「あつ・・・すまん！最後に一つ・・・あんたの名前は？」

出口を通ろうとしていた女性が足を止めた。目だけがこちらを向き・・・

「・・・セレン・・・セレン・ヘイズだ」

それだけ言って部屋を出て行った。そして名を訊ねた本人であるオレは、その返答に驚きで言葉を失っていた。

「セレン・・・ヘイズだと・・・っ！」

まさかその名をここで聞くとは思えなかった。

セレン・ヘイズ。”for answer”では独立傭兵たる主人公をサポートするオペレーターだが、リンクス戦争時代の名は違う。

その名は霞・スミカ。かつてのレオーネメカニクス社の最高戦力と呼ばれ、真正正銘オリジナルリンクスの一人である。つまりは、世界を相手に戦ったリンクスの一人だ。

もしかして、気を失う前にオレを見てたあの桜色のネクストってシリエジオだったのか？

ばやけている記憶を掘り返していると、束さんにプレゼントされた

携帯が着信を鳴らした。体を動かしてみると、少しだけ痛みがあるが問題なく動いた。

携帯を開いてみると、メールが一通来ていた。てか、この携帯のアドレス知ってるのって東さんだけだな。しかし、なんでネクストの方への通信じゃなくメールなんだ？

『やつほくらつくん！

唐突なんだけどね、たった今から私らくんと別れて一人で動こうと思うんだ・・・あ、もちろん理由は説明するよ？

あのね、多分だけど、らくくんが今から何か”大きなこと”をやる予感がしたんだ。だから私はそれに関わらず外側から見物することにしたのだ！

突然かつ身勝手に、理由にもなっていないのは承知の上なんだけどね。。。けどほら、その辺は私だから。

てなわけでさよなら。きつとまた会えると思うよ。

追伸

今まで家事全般でお世話になったお礼に使ってたアジトとそこにあるモノは全部は上げるね。』

なんとまた、重大な内容がフランクな文で書かれていた。心の中の驚きが殆ど無いのは・・・うん、相手が東さんだからだろうな。うん、だって東さんだし（↑大事なことなので二回言いました）。

しっかし、”大きなこと”ねえ……全くと言って良い程心当たりがないんだが、どういう意味なのか、それとも本当に束さんの直感が叫んだだけなのか。

「……すまない。中々有効な意見が出なくてな」

思考の海に沈んでいると、扉が開く音が聞こえた。入室してきたのはテルミドールとセレン・ヘイズ、さらに知的な感じの眼鏡を掛けた男性だった。多分、テルミドールと一緒にいるということは。

「初めましてだな、ラーゼ・ベルセルク。テルミドールの同士、メルツエルだ」

勘みたいなものだったが、やはりこの男がメルツエルか。ORCAの頭脳であり、BIG BOXではヴァオーと共に企業連の部隊を相手に散ったリンクス。

「よろしく……しかし、テルミドールの言葉を聞くと、やっぱり話し合いは……」

「まあな……整備や物資の問題からいつまでもこの基地を拠点には出来んし、バカ正直に普通に暮らせば間違いなくアスピナ機関に雇われた組織が狙ってくる、難しいものだ。……いつそのこと全員で全世界規模のテロでも起こして名を売るか？」

そう言われて一瞬、国家解体戦争の再現を思い浮かべてしまったが、苦笑しながら、やめておけ、と釘を刺す。しかし、確かに難しいものだ。

この基地に残されてる物資には限界があるし、どうやらここではネ

クストの整備が出来ないようだ。だが、問題は施設や物資だけではない。

オレ達は今回の件でアスピナ機関と完全に敵対（元々、敵味方という関係でもないが）した。あくまでも非公式の機関とはいえこんな基地を作っているんだ、きっとかなりの国家権力を持っている。

それを使って秘密裏にオレ達を捕獲、あるいは抹殺に来る可能性は充分にある。この基地内にいるリンクスの合計戦力は全てのIS、467機分に届く可能性があるほどだ。

そんな危険分子、あるいは貴重な戦力を放っておけば、復讐されるのが怖くて眠れもしない。

加えて言えば、オレ達は世界にとって非公式の存在。たとえ殺しても不審に思う人間も悲しむ人間も皆無に等しい。

つまり、このままでは普通に暮らすことさえ難しいのだ。せつかくの自由もこれでは意味が無い。こんな扱いなら脱獄した囚人のほうがまだマシだと思う。

かと言ってリンクスやネクストの存在を公表しても、アスピナ機関に手を回されて情報を握りつぶされるか、信じてもらえないかのどちらかだろう。

こうなるともう本当にテロでも起こしてリンクスの存在を認めさせるか？

……ん？待てよ？何だか今みたいな状況を前に聞いたことがあるような気がするぞ。

兵器としてまったく新しい形のネクスト、それを扱える希少なリンクス、しかし技術を普通に公表しても世界は振り向いてくれない。

「……………あ、そうか、ISだ！」

今のネクストは白騎士事件以前のISと似たような状況なんだ。ただ違う点があるとすれば、発表すらしてない、というところだ。

となるとだ、性能はともかくISとネクストはほぼ似た状況にある。なら同じく、”似たような方法”で世界に名を売れるんじゃないか？

「……………おい、大丈夫か？」

突然沈黙したオレの様子に反応してテルミドールが声を掛けてきた。いかん、どうやらかなり考え込んでいたようだ。

「ああ、大丈夫だ……………それよりテルミドール、良い考えを……………」

「ビイイイ！！！！ビイイイ！！！！ビイイイ！！！！」

思い付いた。そう言おうとした途端、耳障りな警報が響き、部屋の中を天井から降り注いだ真っ赤な光が包み込んだ。

「……………テルミドール、悪い知らせだ」

耳に付けていた通信機から手を放したメルツェルの顔は真っ赤な室内でもわかるほど青褪めていた。

「各方向から無数のミサイル、MT、ノーマルがこの基地を包囲し押し寄せてきている。どうやらアスピナは予想よりも早く私達を消そうとしているようだな」

「・・・基地はミサイルで消し飛ぶだろう。ノーマルやMTが幾らいても負ける気はせんが、行き先すらまだ決まっていないう状況で無闇に離脱するのは少々危険だな・・・」

テルミドールの言う通り基地そのものは降り注いだミサイル群が綺麗に吹き飛ばしてくれるだろう。これは問題ない。ノーマルやMTも同じだ、幾ら数を集めようがネクスト数十機に勝てるわけが無い。問題は包囲網を突破した後だ。恐らくアスピナの狙いは回数を重ねた長期間の包囲攻撃と、休み無き連戦によるオレ達の消耗、そして消耗して後に鹵獲・・・最悪の場合は核まで使ったりしてな。

ネクストは確かに強い。だが、“強い”だけで“無敵”ではないのだ。機体かリンクス、いずれはどちらかに限界が訪れる。

まあ、これは”行く当てが無く、オレ達が永遠と逃げ回っていれば”の話だな。

「脱出するぞ。他のリンクス全員にも伝えてくれ」

ベッドから降り、入り口近くで壁に背中を預けていたセレン・ヘイズを含めた三人に短く言い放つ。

「無論、脱出はする・・・だが包囲網を突破した後は何処へ向かう」

「つい先程オレの物になったアジトだ、そこに向かう・・・居場所を誰にも知られるわけにはいかなから追撃すら出来ないレベルまで敵は潰す」

どうやら時間は待ってくれないらしい。ならやってやるさ、ここにいるリンクス全員にオレの力を証明して、次は世界にオレ達の存在を無理にでも認めさせてやる。

「・・・ほら！時間に余裕があるわけじゃないんだ、準備を急げ！」

「・・・あ、ああ」

少し声を荒げると、テルミドールとメルツエルは耳に装着していた通信機を操作しながら部屋を出て行く。部屋に残されたのはオレとセレン・ヘイズの二人だけ。

「ふつ、年下の子供に指示を貰うとはな・・・それで？私はどうすればいいんだ？言ってみろ」

セレン・ヘイズは退出した二人に愉快そうな笑みを浮かべ、オレの方に試すような目を向けてきた。それに対してオレは、少々歪んだ笑みを返す。

「他全員の準備が終わるまで少しやっておきたいことがある。少し手伝ってくれ、これを使えば近い内に面白い結果を出してくれはすだ」

そう言ってオレ達が向かったのは、”データ総合管理室”・・・あ、そういえば。

「ウイスとイエーイのこと忘れてた……まいつか、アジトに戻ってくれって通信送った」

Side Out

「……一応作戦を説明するぞ？進行方向に展開されてるMT及びノーマル群を全て掃討後、即座にオーバーブーストで戦闘地域を離脱、敵を完全に振り切る……いいな？」

発進用のゲートからネクスト全機が出撃し、遙か彼方から迫るノーマル群をセンサーで捉えた。

ラーゼの脱出の提案に反対するリンクスはいなかった。この中の誰一人、まだ死にたくないのだろう。

ラーゼの言葉に返答は無いが、ここにいる全員の答えは言葉にしながらとも理解できた。

「……行くぞ!!」

ラーゼのシュープリスがオーバーブーストを作動し、驚異的な加速を用いて敵軍に突っ込んでいった。それに続いて、他全てのネクストも同じく突っ込んでいく。

突如大きな発砲音が響いた。その音源は銃身がかなり長いグレネードランチャーを背負ったタンク型のネクストだった。放たれたグレ

ネードは敵軍に着弾し、数十キロ離れた場所から肉眼で確認できるほどの巨大な爆炎を作り上げた。

それを引き金に、ネクスト全機が攻撃を開始した。プラズマライフルやレーザーブレード、ミサイル、ガトリング、様々な兵器がノーマルとMTを蹂躪していく。だが、相手は無人機なのか後退する気配はない。

どちらにしても、どちらの勝利で事が片付くのかは明白だった。

数日後、衛星が偶然発見したその場所には、無数のパーツとクレータがあり、発見の数日前には一人の老人が夜空を飛翔する無数の緑色の光を見たと言っていた。

第13話 非公式な存在（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

束とはいったんここで別れました。

あと、セレンの口調がよく分からなくてかなり戸惑ってます。

残ってる、というより味方のリンクスは改めてリストにでもして纏めます。企業が支配する世界じゃないのでこのリンクス達はちゃんと話を聞いてくれます。

では、また次回。

第14話 準備（前書き）

Gatthito様から感想をいただきました。ありがとうございます。

あと、PVが20万を越えました。皆様ありがとうございます！！
では、どうぞ。

オールドキング辺りの誤情報を修正しました。

第14話 準備

S i d e ラーゼ

「・・・ラーゼ、少し良いか？依頼に向かわせるリンクスについて意見が欲しいのだが・・・」

「あんなテルミドール・・・そういうのはオレじゃなくてローデイとかネオニダスに相談しろ。オレは”計画”の準備で忙しいんだ」

「むっ・・・そうだったな、すまない・・・仕方ない、真改と話すか」

降り注ぐミサイルで吹き飛ぶアスピナの施設をバックにした、ハリウッド顔負けの脱出からもうすぐ3年が過ぎようとしている。

今ではオレも世間的には13歳となり、体が徐々に出来上がってきた。身長もそろそろ170を越しそうなので、これなら前世と同じく190まで伸びるかもしれないな。

逃走先を知られないように敵部隊を完膚なきまでに殲滅し、オレ達はアスピナの追撃を振り切って”アジト”に到着した。

そして、到着したのはいいのだが、安全を確認して”休んでも良い状況”になった途端、オレを含めたリンクス全員がその場でぶっ倒れた。

理由は単純、疲れた。

結果的にはなんとかあったが、無限と呼んでも差し支えない数のノーマルとMT、さらにはヘリやら戦車、トドメには爆撃機、それら全部を殲滅して、その後は追っ手を警戒しながらオーバーブーストによる長距離移動だ。体力に余裕のある人間など誰一人としていなかった。

多分オレが最後に倒れたと思うのだが、ネクストが次々と糸が切れた人形のように倒れる光景は少し恐怖を覚えた。その後は全員ネクストの展開が解除され、ぐっすりと眠った。オレを含めて。

そして、先に戻っていたウイスとイエーイに慌てながら叩き起こされ、眠るのを諦めてアジトに残された物を調べることにした。ちなみにウイスとイエーイには邪魔になるから他のリンクス全員に毛布を掛けてやるように命令した。

そこで、調べた結果……なあにこれえ。

束さんの私物全般や専用のデータファイルが無くなっているだけで、それ以外は全てそのままに残されている。物資などはもちろん、ISに関しての資料やパーツ、さらには試験用に束さんが開発した初期化状態のISコアが十数個ほどあった。当然、最高級の整備施設も残されている。

施設自体の価値もかなりのものだろうが、世界中が欲しがっているISコア十数個の方がよっぽど高価である。

ISコアは完全なブラックボックスとなっているので、その開発法を知っているのは世界中で束さん唯一人だけだ。ISの性能からし

て、一機でも多くのISが欲しい、というのが各国の本音だろう。

ちなみにこのアジトの形状だが、地下要塞というのが一番しっくり来る形をしている。

基地や施設、などではない、要塞だ。外部から発見されないように高性能のステルス性能を有しているし、内部のセキュリティも見てみたがかなり凶悪だ。

今までのアジトは”最低限で生活と研究・開発が行えればよし”という感じだったのだが、何故か今回のアジトは非常に、いや異常に手が込んでいた。その時の本人は「頑張りすぎちゃった」エヘッ」とか言ってたが。

だって広過ぎるんだよこのアジト。オレも迷わないようになるまでかなり時間が掛かった。

今になって思ったが、実は束さんって未来が見えるんじゃない？

だっておかしいだろう。このアジトの大きさや内部はもちろん、部屋だって無数にある。全部まとめて見ても、まるで男女混合の大所帯が使用するような設計だ。

束さんがいなくなってしまった今は確認する方法は無いが、せつかく貰ったのだ。お言葉に甘えてこれからも使わせてもらおう。

施設の状況確認が終わり、他のリンクスも全員目覚め、オレはその全員にある提案、というか、あるお願いをした。

「オレには帰りた場所がある・・・だが、そこに帰るにはアスピナや他の敵が邪魔だ。それはお前達も同じだろう？どうだ、手を貸してみないか？うまくいけばお前達も今よりまともに暮らせるかもしれないぞ」

力を貸してほしいというのは本当だが、リンクスは決して善人ではない。この中の何人かはオレの個人事情など知ったことかと思っていることだろう。

だからこそ、自由を得る可能性という言葉でそいつらの注意を引かせてもらった。これなら余程の奴でなければ協力を前提に考えるはず。悪いが今は一人でもリンクスを犬死にさせるわけにはいかない。

結果、利口な奴が多かったおかげで全員が協力の意思を見せてくれた。さて、まずはネクストの整備プログラムをこのシステムにコピーして全員の機体を整備しなければ。

そんな頃から今までの3年間。オレ達はずっと秘密裏に動き、とある”計画”の為の準備を進めてきた。もちろん、ネクストや生身の肉体を使ったドンパチもかなりあったがな。

何度か死にそうな目にもあったが、3年の月日を費やした甲斐あって準備は一通り完了した。

あと、準備を行っていた3年間、他のリンクスの何人かを見つけることが出来た。報告では、遭遇した全員がウイスとイエーイと似た

ような理由で戦闘を仕掛けてきたらしい。

血の気が多いことだが、結果的に全員無力化され、テルミドールの説得のもと、力を貸すことを約束してくれた。

これでリンクスの人数も増え、戦力も整ってきたのだが、動いてきたのはオレ達だけではなかった。

実は最近になってテロリスト連中の中で多用されている兵器がある。

その名はマッスルトレーサー、通称でMTと呼ばれるそれが破壊活動を行うテロリストの間で頻繁に使用されるようになったのだ。詳細は不明だが、ISとは違う二足歩行型の機動兵器を見たと言う報告もある。おそらくノーマルのことだろう。

その兵器の出所はまったくの不明だったのだが、その兵器を最も使用している組織の名にオレは心当たりがあった。

リリアナ。それがその組織の名前だ。その名を聞いたときの寒気は当分忘れることが出来なかった。

すぐに協力してくれているリンクスのリストから見てみたが、最悪なことに探していた名前は見つからず、リリアナのリーダーの名前を断定する決定的な材料となった。

オールドキング。原作では虐殺ルートで主人公と共にクレイドル03を襲撃し、数億単位の人間を歌いながら殺した異端者であり、OCAの一人だ。

その実力はエース級リンクスを集めたORCA旅団の中でも上位に位置するほどであり、アルゼブラベースの逆間接機に、重シヨットガンという構成からリンクス戦争時代のNo2、イクバール魔術師と呼ばれたサーダナとは師弟関係らしい。

数億人の死者を出すクロースプランでさえ”温い”と切り捨てられるような男だ。歪んでしまったこの世界の現状は奴にとってさぞかし殺る気を刺激してくれるだろう。

生き残りが一人もないので、ネクストの目撃情報は無いが、いつかはオレ達と対立するだろう。奴から見てもオレ達の存在は敵としか映らんだろしな。

Side Out

「・・・GA、オメル、インテリオルには話を通したし、同じグループやその傘下企業にもおとなしくするように言ったが・・・一応、変態共の目付け役にセレンを行かせるか？」

「ラーゼ、少しいいか？味方のリンクス全員のリストが出来たんだが・・・」

「ありがとう、メルツエル・・・これを施設から盗んだリストと照らし合わせればまだ発見できてないリンクスがわかる」

メルツエルから渡されたファイルに目を通し、PCに味方になったリンクス全員と比較を開始させる。

「ところでラーゼ、先程だが、二回目のモンドグロッソ優勝者が決まったらしいぞ」

ピタリと作業中のラーゼの手が止まる。

「……織斑千冬か？」

「いや、違う人間だ。なんでもIS装備のまま決勝戦を投げ出してどこかに向かったらしい。おかげで会場はすごい騒ぎだ」

「なに？……確かジュリアスが依頼であの近くにいたな……メルツェル、通信を繋いでくれ」

急に真剣な表情になるラーゼ。メルツェルは一瞬戸惑ったが、すぐに頷いて通信を開始する。

織斑千冬が世界大会を放り出してでも優先する存在。それに該当する人間は今ではただ一人、弟の織斑一夏しかない。

つまり今のこの状況は、織斑一夏に何かあったということを意味する。

「繋がったぞ」

モニターが切り替わり、金髪青目の美人が映る。原作ではORCAを作った始まりの5人の内の1人である。

『やあ、ラーゼ……私の方でもすでに調べてみたんだが、どうやら織斑千冬の弟が誘拐されたらしいよ、ドイツ軍が情報を提供した

らしいから、もうすぐ騒ぎも収まるだろう」

「アスピナの仕業って形跡はあるか？ノーマルやMTなどの情報は？」

「いや、確認できない。恐らく奴等ではないのだろう。」プラン”の後はわからんが、今は奴等も大っぴらには動けないからな。あと小耳に挟んだのだが、誘拐された弟、かなり抵抗したらしいぞ？そのおかげで誘拐グループがISを使用、その反応を掴んで場所がわかったらしい」

「そうか・・・わかった。急な仕事を頼んですまなかった、ジュリアス。戻り次第、ゆっくり休んでくれ」

『了解だ、ストレイド』

通信を閉じて、ラーゼは椅子に背中を預ける。メルツエルはその様子を見て、何も言わずに部屋を出て行った。

ちなみに、ストレイドというのはオレのリンクス名だ。これは”道に迷った者”つまりは「迷子」を意味している。原作から取ったというのもあるが、これはオレの境遇からしてぴったりの名前だ。

味方のリンクス全員はオレの名前を知っているが戦場で本名を聞かれるのは少しマズイと考え、今では仕事や戦闘の時にストレイドと名乗っている。

（”プラン”開始間近のタイミングでこの事件・・・偶然か？だとしたら、黒幕は何が目的だった？前回の世界大会優勝者の弟である兄さんを誘拐してなんの価値があった？）

事態は間違いなく收拾の方向に向かっている。だが、ラーゼはその身に感じる嫌な予感を拭い去ることが出来なかった。それは、ただ家族を案じる気持ちなのか、未来の不幸を感じ取った予言なのか、今は誰もわからない。

「いや、事件は解決に向かっていているんだ……今は”計画”の達成に集中しよう」

頭を左右に軽く振り、ラーゼは机の上に置かれた計画書を手に取る。

「オレ達リンクスの希望『プロジェクト・リヴァイブ』……失敗は許されない」

時を同じくして……

「ほう、世界最強のIS操縦者が肉親を助ける為不戦敗か……随分と思い切りがあるが、所詮はそんなものか」

誰も想像できない狂気をその身に秘めた”殺戮者”が、今、動き出そうとしていた。

「まあいい……さて、次の目標は……」

そして、その狂気の矛先は……

「フランス……確かISシェアがトップクラスの会社があつた

第14話 準備（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

オールドキングはリアナの皆さん率いてLet's genoc
ide!!という状態です。

主人公の方は現在仲間達と準備に忙しい状態です。あと、リンクス
名はストレイドにしました。

原作で一夏が誘拐された年が分からないので、十三歳の時に誘拐
されてもらいました。あと、今の一夏はIS無しでも強くなってい
ます。

ISを使った人は、原作読んだ人は分かるんじゃないですかね？

では、また次回。

外伝1 リンクス名簿（前書き）

高杉ワロタ様、クーロン様から感想をいただきました。ありがとうございます。

現在味方のリンクスとまだ出会っていないリンクスを纏めました。

では、どうぞ。

機体名の誤字を直しました。

外伝1 リンクス名簿

S i d e ラーゼ

「さてと・・・現勢力のリンクスを纏めてみるか・・・一応、わかりやすいように原作のカラードとORCAに分けよう」

・カラード

・（『』は機体名）・（○が付いているのは、一度交戦してテルミドールが説得したリンクス）

N O 2 リリウム・ウォルコット『アンビエント』

N O 3 ウィン・D・ファンション『レイテルパラッシュ』

N O 4 ローディ『フィードバック』

N O 6 スティレット『レ・ザネ・フォル』

N O 7 ロイ・ザーランド『マイブリス』

N O 1 2 リザイア『ルーラー』○

N O 1 6 有澤隆文『雷電』

N O 1 8 メイ・グリーンフィールド『メリーゲート』

N O 2 0 エイ＝プール『ヴェーロノーク』

N 0 2 1 カミソリ・ジヨニー『ダブルエッジ』○

N 0 2 2 カニス『サーベージビースト』

N 0 2 3 フランソワ・ネリス『バックニア』○

N 0 2 4 ドン・カーネル『ワンダフルボディ』○

N 0 2 5 ウイス『スカーレットフォックス』

N 0 2 6 イエーイ『エメラルドグリーン』

N 0 2 8 ダン・モロ『セレブリティ・アッシュ』○

N 0 2 9 ミセス・テレジア『カリオン』

N 0 3 0 チャンピオン・チャンプス『キルドーザー』○

オ
（元オリジナルリンクス） N 0 1 6 セレン・ヘイズ『シリエジ
』

・ O R C A

N 0 1 テルミドール『アンサンブ』

N 0 2 ネオニダス『月輪』

N 0 3 ジュリアス・エメリー『アステリズム』

N 0 5 真改『スプリットムーン』

N 0 6 ヴァオー『グレディッツィア』

N 0 7 メルツエル『オープニング』

N 0 1 0 ハリ『クラスナヤ』

追記

・原作のN 0 5、ジェラルド・ジェンドリンは施設の記録で死亡が確認されている。機体設計者のレオハルトは現在行方不明。

・原作のN 0 9、ホワイトグリントの搭乗者のデータは施設の記録に存在せず、機体を設計したアーキテクトの情報しか見付かっていない。

「こんなもんか・・・んで、これを研究所にあったリンクス全員のリストと重ねて、まだ遭遇していないリンクスは・・・」

・カロード

N 0 8 王小龍『ストリクス・クアドロ』

N 0 1 1 ダリオ・エンピレオ『トラセンド』

N 0 1 3 ヤン『ブラインドボルド』

N 0 1 4 イルビス・オーンスタイン『マロース』

N 0 1 5 シャミア・ラヴィラヴィ『レッドラム』

N 0 1 7 C U B E『フラジール』

N 0 1 9 ド・ス『スタルカ』

N 0 2 7 パッチ・ザ・ドラック『ノーカウント』

・ O R C A

N 0 4 オールドキング『リザ』

N 0 8 トーティエント『グレイグルーム』

N 0 9 P Q『鎧土竜』

N 0 1 1 プッパ・ズ・ガン『ビッグバレル』

N 0 1 2 ラスター 1 8『フェラムソリドス』

S i d e O u t

「あと13人……どういうわけか、全員原作で戦ってる奴なんだよなあ」

一人呟きながらラーゼはヘラに貰った専用ノートパソコンを閉じて席を立つ。

「腹減ったな……食堂行けばなんかあるかな？ 家事出来るやつが意外に多いおかげで食事は苦労してないけど……無かったら自分で作るか」

欠伸をしながら首の骨を鳴らし、ラーゼは部屋を出て行った。

外伝1 リンクス名簿（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

まだ遭遇していないリンクスは高確率で主人公と戦闘になる予定です。

味方のリンクスは原作より聞き分けが良い人達なので裏切ることは多分ありません。

では、また次回。

第15話 具現する地獄 前編（前書き）

”レイテルパラッシュ”様から感想をいただきました。ありがとうございます。

今回は長くなりそうなので分けました。出来れば前半と後半がいいんですが、中編とか入るかな？

しかも、なんか今回は少し文がグダグダな気がします。

では、どうぞ。

第15話 具現する地獄 前編

Side Out

フランスの首都、パリ。

大きな雲も無く、太陽が差し込む都市は平和で賑やかだった。

自然公園などで遊ぶ子供達、買い物をする学生達、車に乗ってドライブや旅行に洒落込む夫婦やカップル。

そんな笑顔が溢れる街中、連れの数人と一緒に買い物を楽しんでいた一人の男性が突然足を止めた。

「どうした？」

「いや……あれ、なんだろう？」

足を止めた男性が指差す先には、空に浮かぶ無数の黒点が見えた。どんどん近付いているらしく、目に映る黒点は大きさを増していく。少なくとも人間ではないようだ。

よく見てみると、近付いてくるその黒点はパラシュートに支えられて降下をしているようだった。ISが軍事力の主体となった今では、パラシュートで降下を行うものはあまりお目に掛かれない。

黒点は遂にその姿がはっきりと見える高度まで降下してきた。気が付けば空を見上げているのは男性達だけでなく、近くにいるほとんどの人間が何事かと空を見上げている。

「あれって……ロボット？」

「何言っただよ、ISだろう……でも、全部同じデザインなのに武装は違うな」

「けどさ、ISならなんでパラシュートで降下して来るんだ？飛べばいいじゃないか……それに、ここ（フランス）の主力ISはデユノア社のやつだろう？あんなIS見たことないぞ」

「新型が完成して、実はそのお披露目だったりして」

「はははは……おいおい、迷惑な話だな」

まったく言っただいほど危機感を感じず笑う市民に惹かれたように、ロボットはパラシュートを切り離して都市の中に着地した。

至近距離で見るそのロボットは、普通のISと違ってかなりゴツゴツとした装甲を持っていた。ISの防御力の要は単純な装甲の厚さではなく、絶対防御などのエネルギーバリアだ。その点から見て、このロボットはISにしてはかなり異質な存在だ。

余談だが、エネルギーバリアの有能性が証明されているので全身に装甲を持つIS、いわゆるフルスキンと呼ばれるタイプはかなり珍しいと言われている。

ロボットの手にはマシンガンが握られ、左右の背中部分にはミサイルポッドやグレネードランチャーなどの兵器が搭載されている。

「なあ、やっぱりおかしいって……ISの武器って確か粒子変

換で扱うんだろ？なんであれは武器を出したままなんだよ」

「いや、けどさ……ＩＳじゃなかったとしたら、なんだよこいつ」

その疑問に答えるように、ロボットの一機が動きだした。突然左背中に折り畳んで搭載されていた長い筒状の兵器、グレネードランチャーを展開し、なんの言葉も合図も無くそれを発砲した。

ポオオン！！

一瞬の閃光が放たれ、発砲音が都市内に響き渡る。長い筒状の砲身から放たれた砲弾は、背後に煙を引いて一見の高層ビルに着弾した。

着弾。爆発音と共に爆風が四方八方に放たれ、市民の何人かは体制を崩して地面に座り込む。それに続いて何人かの悲鳴が轟き、全員一目散にその場から逃げ出した。

先程まで笑いながら話していた人間でも、あのロボットが殺人を行ったのは糸も簡単に理解できたようだ。

だが、彼らは行動するのが遅すぎた。

逃げ惑う人々の背中にロボットは片手に握られたマシンガンを向ける。火力だけならＩＳと同等かそれ以上の兵器。トリガーが引かれれば、人間の体を数秒でミンチにするだろう。そして高層ビルを無言で吹っ飛ばした存在が迷うはずもない。

連続でマズルフラッシュが放たれ、逃げようとしていた人間を絶命させていく。

盛大な血飛沫が舞い、四肢が吹き飛び、痛みによる悲鳴がそれぞれ絶え間なく続いた。

虐殺。そうとしか表現できない行為をロボットは行った。たった今殺された人間は全て民間人だ。殺される理由などまったく無いのに、為す術なく一方的に殺された。

「……これは必要な犠牲だ。全ては人類未来のため……」

ロボットから声が放たれた。それなりに年齢がある”男性”の声だ。ISは女性にしか扱えない。その常識を加えたことで、ロボットの正体がISであることは完全に否定された。

その時、遠方から複数の爆発音が響いた。

住宅街から登る大きな黒煙の数は1つや2つではない、むしろ今も尚増え続けている。

パラシュートによって都市内に降下してきたロボットの数は軽く見積もっても50以上はあった。そして、それら全ての人間の行う行動は1つ、虐殺だけ。

数分前まで平和だったパリの街は、今や一方的な虐殺が繰り広げられる地獄へと姿を変えた。

だが、地獄の中で逃げ惑う人々の中、サングラスを掛けた青年が一人、暴虐を行うロボットをよく見ていた。

「………始まったか」

Side Out

地獄へと姿を変えたパリの街に向かって、数十機のISが戦闘機以上の速度を維持して空を移動していた。

カラーリングは全体的にネイビーカラー。膝から下は装甲が薄く、足はスマート延びている。背中部分から伸びるバックパックには4枚の多方向加速推進翼。それぞれのISの腕には既にマシンガンやアサルトカノンが握られている。

デュノア社製、ラファール・リヴァイヴ。

現在被害を受けているフランスの会社、デュノア社が開発した第2世代型のISだ。各国では第3世代のIS開発が進められているが、機体の総合スペックは初期の第3世代型とあまり相違は無い。

現在各国が軍事力として配備している量産機の中では第3位のシェアを持つているが、その数を確立させる特徴は広い汎用性だ。選択した武装次第で遠・中・近の全ての距離に対応が可能であり、クセが無い、量産機の要素をほぼ完璧に満たしてくれている。

「あの、隊長……本当なんですか？突然パリの上空に武装組織が現れたって……」

「私も初めは信じられなかったわ……本来なら領空に入った時点でレーダーに発見されるはず。なのに連中は突然パリの上空に現

れた。まるで空中でISを展開したように……」

「でも、その組織が使用している機動兵器から確認されたのは……
・男性の声。つまり、その機動兵器はISとは別の物」

「それに、なんでフランス……しかも首都を直接襲撃するんでしょう。目的がわかりませんね」

一人の女性の質問を引き金に、全員が心で思っていた疑問を口にする。

ここにいる誰一人として説明されたパリの状況を信じられなかった。今でも怒りの感情より戸惑いの感情の方が大きい。”信じられない”のではなく、”信じたくない”のかもしれない。

「とにかく今は急ぐわよ。もしテロリストの目的が虐殺だったら最悪だわ……ッ！散開！！」

先頭を飛ぶ隊長の声は部隊の全員に届き、リヴァイヴ全機がその場から弾かれたように離脱した。

次の瞬間、リヴァイヴが密集していた地点に無数の弾丸が降り注いだ。隊長の指示が無ければ10機近くがやられていただろう。

離脱したリヴァイヴ全機がハイパーセンサーの探知に従い、武装を上空の敵に向ける。

「ほう、避けたか……ISに乗れるだけが才能の全てではないらしい」

聞こえてきた声は男性のものだった。

そこにいたのは、一機のロボット。見た目は全体的にグリーンの色が入っている。ブリーフィングで見たやつと少し似ているが、全体的に四肢が細く装甲も薄い。一番目を引くのは、膝下からの逆間接の足だろう。

ただ、パリに現れたロボットと同じく両手と両肩に武装を積んでいる。

左手にはロングマガジンを着けたアサルトライフル、右背中にはミサイルポッド、左背中には銃身を疊んだチェインガン。これだけでもかなりの重武装に見えるが、リヴァイヴの操縦者達の目を一番引き付けているのは右手に握られている大型のショットガンだ。

細身の外見のせいで異様な存在感を放つそれは、改めて見ても恐怖を感じさせる。直撃を貰えば間違いなく装甲を吹き飛ばされると理解し、隊長を初め全員が警戒を強める。

「流石にノーマルを使ってるあいっすらじゃISの相手は無理なんだな・・・悪いがこつから先は通行止めだ。パリの人間を皆殺しにするまで付き合ってもらうぜ・・・運が良けりゃ絶対防御のおかげで生き残られるかもな」

愉快そうな声を出す男に反応し、リヴァイヴ全機がトリガーを引こうとする。だがそんな時、全機体のハイパーセンサーが空气中に漂う正体不明の粒子と、新たな敵影に反応した。

いつの間にか部隊を包囲するような形で数機のロボットが空中に浮遊していた。

黒い装甲を纏ったその機体はざっと見て10機以上。異常なまでに肥大化している肩部が目立ったその機体の武装は、ある意味で男性の機体よりも凶悪なものだった。

右手に持った長砲身のライフル、これは恐らくかなりの大口径だ。破壊力は先程の大型ショットガンほどではないが、連射力と貫通力を考えれば同じ位に恐ろしい。

そして何より、左腕から輝きを放って展開されている、分厚く長いレーザーブレード。レーザー兵器という点からその切れ味は想像を絶するものだろう。しかも2、3メートル以上の全高に届く刀身の長さだ、半端な回避では避けきれない。

「無人機だがそこそこはやるぞ?・・・気を付けるんだな」

逆間接の機体が両腕を持ち上げ、周りの黒い機体もレーザーブレードを持ち上げた。対するリヴァイヴ全機も円を作り、それぞれの武器を構える。

そのままの状態で静寂が訪れる。しかし、逆間接の男と隊長の視線が重なり、互いが動いた。

逆間接の機体のアサルトライフル、LABITAと隊長機のリヴァイヴが持つアサルトカノン、ガラムが同時に放たれ、リヴァイヴ全機と黒い機体が空中を駆け抜けた。

「…………どうしよう」

炎上する市街地の中、道路の端にリムジンが一台お釈迦になっていた。車内には黒いスーツを着た男が二人、それぞれ額から血を流して気絶している。

そして、車のすぐ傍には一人の少女がいた。

背中に届いている美しい金髪と藍色の瞳、将来はかなりの美貌になるであろうその顔は困惑の表情で満ちている。

スーツの男と違って外見に目立った傷は無い、精々衣服が少し汚れているぐらいだ。

この少女の名はシャルロット・デュノア。ラファール・リヴァイヴを開発したデュノア社の社長の娘である。

だがこの少女は、”デュノア社長の本妻の娘ではなかった”。現在の年齢に至るまで、父とは別に母親と共に暮らしていたのだが、母親の死の後にデュノア社の人間が迎えに来たのだ。

そのままパリにあるデュノアの本社に向かう筈だったのだが、移動中に突然現れたロボットが無差別破壊を繰り返して見事にリムジンは巻き込まれ、今に至るわけだ。

「…………どうしよう」

オロオロと動揺した様子でシャルロットはもう一度呟く。

破壊活動を行っていたロボットは何処かに行ってしまったが、今のパリはテロの真っ只中だ。まだ少女であるシャルロットに冷静な判断など出来るはずも無い。

「・・・あつ！・・・」

しかし、再び言うが此処はテロの真っ只中。例え状況が理解できなくても、無差別に死の気配は近付いてくる。

シャルロットの瞳がこちらに近付くロボットを捉えた。こちらに気付いているのかはわからないが、死の恐怖を感じてシャルロットは動けなかった。

センサーが何かが感知したのか、ロボットの顔がシャルロットをはつきりと捕捉する。片手に握られたマシンガンが持ち上げられ、大きな銃口が向けられた。

死ぬ。

そう理解したシャルロットの瞳からは涙が流れ出し、表情が恐怖のそれに変わる。

「イヤ・・・イヤだ・・・お母さんっ！・・・」

ダダダダダダ！！！！

亡き母を思い、襲い掛かる死を精一杯に否定すると同時に無数の発砲が響く。

シャルロットは咄嗟に目を瞑って体を縮こませた。しかし、数秒経ってもその体がロボットの弾丸に撃ち抜かれることはなかった。

ポオオン！！！！

「えっ………？」

痛みではなく爆発音が聞こえ、シャルロットは恐る恐る顔を上げる。すると、先程武器を向けていたロボットが全身から炎を吹き出して地面に倒れていた。

何が起こったのかわからず茫然としてみると、空気中に漂う緑色の粒子が視界を横切った。空から降り注ぐその粒子を追い掛けると、再び視線が固定された。

純白の装甲を纏い、空中に浮いている一機のロボット。右手には大きめのライフルが握られ、背中には左右両方に翼のようなものがある。緑色の粒子を漂わせながら空に浮くその姿は、まるで本物の天使を思わせる。

「……綺麗……」

シャルロットがポツリと呟くと、突然その天使は視界から姿を消してシャルロットの前に背を向ける状態で再び現れた。

ビクリと肩が震え悲鳴が上がりそうになったが、それよりも先に目の前の天使が爆発音と共に爆炎に包まれた。しかし、よく見てみると損傷が見当たらず、天使の体が緑色の膜に包まれている。

天使が背中ブースターを吹かせ、その体を前に進める。と言って

もその速度は凄まじく、ほんの数秒で100メートル以上の距離を移動する。

天使が向かう先には炎上したロボットと同じのが二機。天使を接近させまいとマシンガンをひたすら連射する。しかし天使は一瞬だけ爆音を鳴らしてその場から姿を消し、右、左へと高速移動しながら瞬く間に距離を詰めた。

ロボット2機は怯えたように後退するが、それよりも先に天使の行動の方が早かった。左腕に取り付けられたユニットが駆動音を鳴らし、金色の光刃を生成する。

天使が流れるように腕を左に一閃。前に立っていた右側のロボットが胴元から両断されるが、その事実を認識する前にもう一機が背後から縦に両断された。

火花を散らし、二機が同時に爆発する。立ち込める炎の中を進み現れた天使の姿を再び見て、自分は助けられたのだとシャルロットは理解した。

だが、お礼を言う前に天使は右手のライフルを量子化してシャルロットの背中と足に手を回し、その体を持ち上げた。所謂、お姫様だったのだ。

「え？・・・あ、あの・・・」

「・・・安全な所に運ぶ。少しの間だけ我慢してくれ」

顔を赤くして慌てふためくシャルロットを鎮めるために、初めて天使が言葉を話した。まだ若い、少年とも呼べる程の声だが、冷静に

放たれた言葉はその正体を一瞬大人だと思わせる。

「……は、はい……」

冷静な声を聞いて落ち着いたのか、シャルロットは頬に赤みを出しながら天使の首に手を回し、機械の装甲を纏ったその胸に体を預ける。

「感謝する」

短く礼を告げ、天使はブースターを吹かせて空へと上昇する。ロボット達からの発見を出来るだけ避けるためなのか、一定の高度に上昇してから天使は移動を開始した。

かなりの高度を上昇したが、シャルロットの呼吸が苦しくなったり、気流による轟風を受けることはなかった。ちなみにその間、天使の周りを浮遊する緑色の粒子の量が多くなったことにシャルロットは気付けなかった。

少し移動すると、天使はゆっくりと地上に降下する。降り立った場所は隔壁のようなゲートを備えた一軒のビル。天使がゲートに近付くと、ピピッ！と電子音が鳴り、ゲートが開いた。

「……ここで待っている。少しすれば隔壁が開いて中に入れてもらえる」

「あ、ありがとうございます……え、えつと……」

「奴らはここまで来ないから安心していい……ではな」

シャルロットを下ろした天使は次の言葉を待たずに背を向けて再び空へと体を浮かせた。

『ストレイド、自由時間は仕舞いだ。開始位置に向かえ』

「ちっ……了解」

「あの！……私はシャル——」

せめて名を教えようとしたが、天使は背中のブースターから吸気音を鳴らし、爆発的な速度と共に空へと飛び立っていった。

その場に残されたシャルロットは天使が飛び立っていった方向を悲しげに見詰めた。助けてもらった恩人に名を告げられず、ともに言葉を交わせなかった。助けてくれたことから酷い人間ではないとわかるが、あの態度には流石に落ち込んだ。

だが、悲しみと共にシャルロットは希望を手に入れた。

”ストレイド”。それがあの天使の名前なのかわからないが、それは確かな手掛かりだ。

「ストレイド、か……また、会えるかな……」

そう呟いて空を見上げたシャルロットは、頬を赤らめながら嬉しそうに微笑んだ。

第15話 具現する地獄 前編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

フラグが立ちました〜・・・いや、まだヒロイン確定じゃないんですけどね？一応候補の一人として・・・。

フランスが大変なことになりました（笑）戦車や戦闘機がやってこないのは、国土防衛をISに頼ってるから、という設定です。

この惨事に主人公、実は暴走寸前です。

自律型ネクストはリアナの誇る数少ない長所です。4で初めて戦った時のブレードへの恐怖は忘れられません。

ちなみにこの作品の自律型ネクストはプライマルアーマー展開可能というハイスペックを持っています。予定では他にも色々と・・・。

では、また次回。

第16話 具現する地獄 中編（前書き）

御酒那 怜牙様、高杉ワロタ様、レイテルパラッシュ様から感想をいただきました。ありがとうございます。

今回で終わらせるのも無理だったんで、中編になっちゃいました。次回は強制的に後編だけど、纏められるかな・・・

では、どうぞ。

第16話 具現する地獄 中編

Side ラーゼ

『……気は済んだか？ストレイド』

虐殺という最悪のテロ現場となったパリ。その都市の中で目を引く建造物、エッフェル塔の数キロ付近でオレはノブリスを解除し、路地裏に身を潜めていた。

耳に付けたインカムからはセレンの皮肉染みた声が聞こえる。多分今のオレはかなり恐ろしい顔をしているだろう。腹の中の怒りを抑えるために握り締めた左手からはポタポタと血が垂れている。

右手でも良かったが、ライフルの照準に支障が出ると思い無意識に左手になったようだ。

「気は済んだか？……随分と笑えない冗談だな。まさか本気で言っていないよな？」

『……』

「ふざけんじゃねえぞ！！もうこの都市で何人死んだと思ってる！！それなのにまだ待機だと！？」

『ああ、まだだ。開始にはまだ少し掛かる。それと“何人死んだ”だと？それならお前は今まで“何人殺した”と思っっている』

「そういうことじゃねえだろ！！オレがこの手で殺したなら何も言

わねえよ！！黙ってその事実を肯定するし、罪だって背負ってやる！だが、パリの人達は何で殺された！？何でこれだけ殺されなきゃならなかった！！」

インカムを通して精一杯の怒りをぶつける。狭い路地裏で声が反響するが、今の街の状況で冷静にオレの声を拾える人間など殆どいないだろう。

『いい加減にしろ。確かにこの被害はメルツェルの予想を超えたものだが、先程の行動が許されるわけではない。敵ノーマルを2機も破壊し、民間人を救出して非行式のシエルターへ誘導、仕舞いには声まで聞かせてしまった。もし、あのまま発見され大規模戦闘にでもなれば“計画”そのものが全て水の泡になっていたぞ。……お前は自分から志願したんだ。だったら今は大人しく待機している。10分後に作戦開始だ。いいな？ストレイド』

「……了解」

通信が切れたのを確認すると、オレは握り締めた左手をコンクリートの壁に横殴りに叩き付ける。常人離れの筋力によって壁が奥深くまで砕けた。何でもいいから今はこの怒りをぶつけたかった。

「……ちくしょう」

セレンの言ったことは正しい。オレの言ったことは“自分は悪くない”と言い張る子供の言い訳と同じだ。大局を見ずその場の感情で行動し、全てを台無しにしては意味が無い。

わかってはいる。だが、この地獄を目にして納得など出来るはずも無かった。死ぬのは戦う人間だけで充分のはずだ。オレは無関係な

人間が殺されるのが最も嫌いだ。

『ストレイド、大丈夫か？』

『もうすぐ開始時間だ。開始位置に移動しておけ』

「ジュリアス、ネオニダス……大丈夫だ、わかってる。そっちはもう配置に着いたのか？」

インカムから新たな声を聞き、座り込んでいた体を起こしながら答える。路地裏からそつと顔を出してノーマルがいないのを確認し、街中を走り抜ける。

頭を切り替えよう。悲しむことなんざ後で幾らでも出来る。今この時、オレにしか出来ないことをしよう。もうこれ以上悲しみを増やさないように。

炎上した車や瓦礫が転がっているが、邪魔になるものは全て跳び越えて先に進む。ノーマルが発見されないよう細心の注意を払っている、この体の身体能力は大いに役立つ。

『私はまだだな。ノーマルの数が想定より多いせいで順調に進めない。アステリズムが使えれば5秒以内で行けるのだがな……』

『こちらはあと少しで目的地に着くが、到着時間はお前さん達と同じぐらいだろう。まったく、メルツェルの小僧め、キツイ仕事を押し付ける。作戦開始地点まではネクストを使わず自力で移動しろ、などとは』

どうやら2人もノーマルのせいでうまく進めていないようだ。ネオ

ニダスが言ったように、移動にはネクストを使うなど言われている。だが、リンクスであるオレ達でもノーマルのセンサーを誤魔化すことは出来ないし、見つかって逃げ切れる保証も無い。

操縦しているのは人間だが、ノーマルは機械だ。視界がこちらを捉えていなくても距離が近ければ生体反応を感知され発見されてしまう。だからノーマルがその場を離れるのを待たなくてはいけない。

だが、ジュリアスの言った通り数が多い。少し進めばすぐに別のノーマルと遭遇して足止めを喰らってしまう。

ちなみに指定された場所は建物の屋上らしいが、これではその建物にも辿り着けない。

（くそっ！ネクストが使えれば奴らの頭上を素通り出来るのに・・・
・ん？待てよ、頭上？）

視線を上を持ち上げる。今オレがいる市街地は同じ高さの建物が並んでいる。一軒一軒の間の距離はそう遠くなく、建物の高さはノーマルの全長よりも大きい。

（地上よりは可能性が有るか・・・よし）

近くの家のドアを蹴り飛ばして中に入る。思いっきり住居不法侵入だが、非常事態のため勘弁してもらおう。階段を上り、屋上にたどり着く。思った通り、建物との距離はそこまで遠くない。

屋上の端まで下がり、クラウチングスタートの構えを取る。息を吸い込み、一気に止めると同時に走り出す。よし、この距離なら、いける！！

「・・・・ふっ！・・・」

屋上を蹴り抜く。体が宙に浮き、数秒で隣の屋上に着地する。だが、まだ終わりじゃない。着地の衝撃で勢いを殺さずにそのまま走り抜け、再び跳躍。その工程を何度も繰り返す。

足を止めるな。少しでも速度を緩めれば跳躍に失敗して墜落する。墜落すればすぐさまノーマルに発見され攻撃されてしまう。

「はっ！・・・・ふっ！・・・・っらあ！・・・・ふう、到着だ」

屋上から屋上へと飛び移り続ける作業を続けて数分、肩を上下させながら周りを見渡す。特に大きな音も聞こえないところ、屋上の上を走り回っていたのは気付かれていないようだ。

「なんだ、やはりストレイドが一番乗りか？こっちは・・・・あと2分もすれば辿り着く」

「こちらと同じだ。あと2分以内で辿り着く」

「こちらメルツエル。了解した。ストレイドはネクストの万全な出撃準備を、他2名は開始地点に急行し、到着次第ネクストの出撃準備だ」

『『『了解』『』』

通信を終了し、オレはAMSを通して左目の網膜にノブリスの機体情報を表示する。オレのAMSプラグはヘラに貰ったノートパソコンと接続しているので、消費した弾倉を補給する。それが終わって

も時間が余ったのなら装甲の修復を行おう。

最大弾薬数と現在の弾薬数を比べ、必要分の弾薬を充填。先程のミサイルでほんの少し損傷した装甲部分を突貫で修理する。ふむ、この程度の損傷なら内装はともかく外見だけは万全に出来るな。

『ストレイド、聞こえるか？』

「メルツエルか・・・独断行動の話なら後にしてくれ。ペナルティなら後でいくらでも受ける」

左目の視線を動かしながら作業を行い、メルツエルと話をする。電話をしながら書類を読んでいるのと同じなので大して苦労はない。

『いや、その件なら私が謝罪するべきだ。キミを咎めるつもりはない。本題はセレン・ヘイズからの伝言だ。“戻ってきたらシュミレーターで徹底的に締めてやる。だから早く戻ってこい”だそうだ』

作業の進行が一瞬止まった。言葉の意味を理解するのに数秒掛かり、理解できた途端にたまらず苦笑が漏れた。まったく、あの女らしい言葉だ。こつちのことは露程も考えちゃいねえ。

ああ、まったくあの女は変わらない。怒りを訴えていた自分がバカに思えて仕方ない。

「はははっ・・・わかった。なるべく早く戻る・・・そろそろ時間か。指示を頼む」

『ああ、後は頼んだぞ。・・・ストレイド、ジュリアス、ネオニダス、待たせたな。これよりプロジェクト・リヴァイブを第2フ

エイズに移行する。全員ネクストを展開、リリアナを殲滅せよ。一般市民の安全はすぐに確保できる、遠慮はいらん」

『『了解』』』

コジマ粒子の光が輝き、全身に純白の装甲を纏う。1秒と掛からずにその工程を終わらせ、ノブリスのメインブースターがオレの体を持ち上げた。他の2箇所からも別のネクストが上昇してくる。

白色の装甲を纏った細身のネクストはジュリアスのアステリズム、それと対するような重装甲のネクストはネオニダスの月輪だ。アステリズムは速さと高火力を両立させ、月輪はトールラス社が作り上げたアルギュロスを基にしている。

突然出現したオレ達をセンサーで捉えたのか、視界に映るノーマル全機がこちらを見上げた。数秒の間を置き、慌てたように敵意を纏って放たれる無数のミサイルや弾丸。

打ち合わせをしたわけでもなく、ほぼ同時のタイミングでオレ達はクイックブーストで移動。ミサイルすら振り切る速さでその場から姿を消す。

空中に生まれた3つの爆煙。だが、その爆煙が吹き飛ばすはずだった対象はいない。対象であるオレ達3人はそれぞれの武器をノーマルに向けている。

またも同時のタイミングで引き金が引かれる。ノーマル共より圧倒的に数で劣る3つの敵意。だがそれぞれの銃火器に宿した敵意は確実にノーマル数機を撃ち抜き、爆散させた。

「やつと許可が下りてな……貴様らには一片の慈悲もくれてやらん。その命、1つたりともこの世には残さん!!」

その言葉を最後に、この身はただ冷酷な死を振り撒く破壊天使と化した。

Side Out

数分前までパリを地獄に変えていたリリアナの人間達は現状を理解できなかった。

逃げ惑う人間達を殺し、暴力に酔っていた。そんな時、突然センサーが上空に反応を示した。増援かと思い見上げた先にいたのは、空に浮く3つの機影。

自分達が使っているノーマルとよく似ていてまったく違うモノだと断言できるその機体は、リーダーである殺戮者と同じものだと、リリアナの全員に一瞬で理解させた。

防衛本能のようにノーマル全機が攻撃を放ち、3機が爆発に包まれたと思った次の瞬間にノーマル数機が爆発していた。

ライフルを放ったノブリスは浮遊した状態からオーバーブーストを作動させ、ノーマルが密集している場所目掛けて突っ込む。ノーマルは弾幕を張るが、ノブリスはオーバーブーストを作動させたまま連続でクイックブーストを使い、糸も容易く突破する。

通り過ぎ様にノブリスの左腕が振り抜かれ、一筋の金色の閃光がノーマル5機を胴元から両断する。ノブリスの背後を狙ってノーマル達が集中砲火を放つが、ノブリスはオーバーブーストを停止させ即座にクイックブーストで急上昇。再び爆音を鳴らし、右に移動すると同時にクイックターンで振り向く。

振り向き様に右手に握られたライフルから発砲音と共に弾丸が放たれ、ミサイル数発と残りのノーマルを正確無比な射撃で蜂の巣にし爆発させた。

戦闘開始からたったの数分で10機以上がやられ、ノーマルの動きには明らかな動揺が見えた。上昇したノブリスを狙って4機のノーマルが6連装ミサイルポッドを放つ。だがノブリスはその場から移動せず、ミサイルが飛来する方向に体を向けるだけ。

計24発のミサイルが飛来し、ノブリスが爆煙に包まれた。ノーマルのパイロット達は喜色を浮かべたが、その表情は数秒で驚愕に染まった。

晴れた爆煙の中には、目立った損傷を一箇所も負っていない姿で悠然と浮遊するノブリス。自身の見ている光景が信じられないノーマルのパイロット達はノブリスの全身を覆っているプライマルアーマの輝きに気付かない。気付く前にクイックブーストで急接近したノブリスのレーザーブレードでノーマルは両断された。

『そんな……あり得ない。なんだあの防御力は……!』

『怯むな!我らはこのような暴力に屈してはならない!』

『そつだ!リリアナ万歳!全ては人類未来のために!!』

通信が混乱し、リリアナの通信が半ばオープンチャンネルのように流れる。その声は当然、3人のリンクスの耳にも届いている。だが殲滅の勢いは衰えず、むしろ勢いが増す。

『……胸糞悪いことこの上ないな。メルツェルに“3機目”とアサルトアーマーの使用許可を頼んでみるか？少しはこいつらも黙ってくれるだろう』

『同感だが落ち着いてくれ、ストレイド。そうするとネオニダスのアサルトキャノンまで使う羽目になるぞ。市街地に無数のクレーターが出来るなど洒落にならん』

『このような奴らにそんなものを使ってやる価値はない。それにだ。あの機体はお前さんのエース機体だろう？こんなところで見せるべきではない。まあ、気持ちはわかるがな』

ラーゼは最初、ノブリスにアサルトアーマーを搭載しようと考えていた。あれはプライマルアーマーを搭載していないノーマルを効率良く駆逐するにはちょうど良い兵器なのだ。

だが、その考えはメルツェルとテルミドールにより即却下された。市街地のど真ん中で全方位に圧倒的な破壊力を振り撒くアサルトアーマーなんぞ使用すれば被害が計り知れないと、まったくの正論だ。嫌悪感を隠さないリンクス3人はテンションがMAX状態のリリアナの連中を凄まじいスピードで殲滅していく。

ノブリスは空中から、密集しているノーマルに真上や側面からライフルで奇襲を仕掛け、即座に接敵してレーザーブレードで残りを沈

める。

アステリズムはノブリスを上回る速度で移動し、反撃する暇など与えず左手のハイレーザーライフルと右背中のレールガン、HLR71-VEGAとRC01-PHACTでノーマルを撃つ。

動きすら捉えられないのだ。レーザーライフルやレールガンなど回避できるはずもなく、1発の射撃でノーマル数機が溶解し、吹き飛ばされる。

攻撃が掠りもしないノブリスとアステリズムとは違い、月輪にはノーマルの砲火が当たっていた。

全て直撃を受けているわけではなく、距離とタイミングを見切って7割ほどの攻撃を回避している。残りの3割も堅牢なプライマルアーマーと装甲に完全に止められ、損傷と呼べるものはまったくない。

その様子に恐怖を感じたノーマルは後退しようとするが、致命的な隙を逃さず放たれた左手のプラズマライフル、FLUORITEと右手のハイレーザーライフル、CANOPUSが即座に息の根を断ち切る。

目にも留まらぬ高速移動、鉄壁の防御力、ノーマルを数発で仕留める火力。戦力差を物ともしない圧倒的な戦闘能力を振るうネクストを前に、リリアナ連中は再び恐怖のどん底に叩き落された。

『だ、ダメだ……葉が立たない……!』

『バカな! 相手はたったの3機なんだぞ! ?』

『分散しては各個撃破されるだけだ！全機集まれ！リーダーが戻るまで持ち堪えろ！』

生き残ったノーマル全てが一箇所に集まり、全方位を警戒する。防御に徹した陣形、ISが相手でも簡単には崩せないだろう。しかし、その陣形は3人のリンクスにとっては都合が良かった。

『いたぞ！』

センサーが反応を示し、ノーマルの全機が反応先、上空を見上げた。

そこには破壊天使、ノブリスが1機だけで空中に浮遊していた。胸部アーマーから放出されたコジマ粒子が周囲に漂わせ、ノーマルの集団を見下ろしている。バイザーで表情はよく見えないが、少なくとも笑顔を浮かべているとは思えない。

『撃て！撃ちまくれ！！』

叫ぶような命令の後にノーマル全機が全ての火器を放つ。だが破壊天使はその場から動かず、プライマルアーマーで全ての攻撃を受け止める。

俯き気味だった顔が少し持ち上がり、破壊天使の羽が兵器へと姿を変えた。マルチレーザーキャノンの発射口全ての照準が密集しているノーマルに合わせられる。

『マズイっ！……に、逃げ……！』

直感で危険を感じ取ったのか、ノーマルはその場から逃げようとす。だが、破壊天使はもはやリリアナの連中に慈悲をくれてやるつ

もりはなかった。

「消え失せる」

底冷えするような低い声。その言葉が死刑宣告となり、6つの白い閃光が放たれた。

着弾した裁きの光は大爆発と共に暴虐とも言える破壊力をもたらし、空間全体を振動させる。余波として炸裂した白い光の奔流は広範囲を飲み込んだ。

光の奔流が収まると、着弾点には大きめのクレータだけで、ノーマルが1機も残っていなかった。爆散したか、それとも蒸発したか。どちらにせよ、元々索敵能力の高いノブリスのレーダーには何も反応が無い。全滅したのは確実だろう。

マルチレーザーキャノンを収納し、近くのビルの屋上へと着地するノブリス。すぐにアステリズムと月輪も合流する。

『相変わらず凄まじい破壊力だな。お前の射撃は正確だから恐ろしいものだ』

『それでも出力は抑えてある。一箇所に集中させて撃てば破壊力は充分だ。それに、単純な破壊力ならネオニダスのアサルトキャノンのほうが上だろう』

『確かにそうだが、アレは少し速度が足りないな。簡単に直撃させられるのはシュミレーターでもあまり無かった。そういえば……トーラスの連中がお前にもデータ採取を頼もうかと言っていたが』

『やめてくれ、想像したくも無い外見と性能になっちまう。しかし、これで終わりか？随分とあつけない気が・・・ッ!』

3人の第六感が何かを感じ取り、同時にその場からクイックブーストで離脱する。それはまさにトップランカーのみが実現できるような洗練された回避運動だった。

だが、3人の耳に聞こえたのはその動きを褒め称えるような拍手ではなく敵性存在のロックオンを知らせるアラーム音と無数の発砲音。その直後、真上より無数の銃弾が降り注いだ。その威力はノーマルのものより強力で、ビルの屋上を数秒で穴だらけにした。

システム感知よりも速く移動した3機は別のビルへと着地、屋上の地面を装甲で覆われた両足で挟りながら強引に減速する。減速しながら3機はそれぞれの火器を上空に向けた。

「こいつは驚いた。つい先程奇襲に失敗したんで、工夫を加えてみたんだが。まさか今のタイミングで避けられるとはな」

視線の先にいたのは総数、13機のネクスト。空中に浮遊したまま左手に巨大なレーザーブレードを展開している自立型ネクストは死神の集団にも見える。そして他とは外見が異なる1機がいる。

アルゼブラのパーツを主体となっており、右手に対ネクスト戦用の大型ショットガンを装備した逆間接のネクスト。オールドキングのネクスト、リザだ。

その姿を見て、ライフルを握るラーゼの右手に力が増した。バイザーに隠された目には明確なる殺意が渦巻いている。

「よう、
“首輪付き”・・・随分と変わったみたいじゃねえか」

対する殺戮者は、己に向けられる殺意を感じたかのように笑みを浮かべ、ラーゼを視界に捉えた。

第16話 具現する地獄 中編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

主人公、セレンさんに八つ当たりしてしまい猛省しています。戻ったら地獄を見ることが間違いなし。

今回も主人公には遼機がいます。前回とは実力が違いすぎてモはや規格外のレベルですが。

ところで、ノブリスの羽レーザーをアサルトキャノンに代えた姿を考えてみたのですが・・・何かイヤだな。

あと、ノブリスの戦闘描写がわかりにくかったらプロモの戦闘シーンを思い浮かべてください。イメージ的には、ほとんど同じです。

“プラン”の詳細説明が未だほとんど無くてスイマセン。次回で説明できると思います。あと古王の呼び方の理由も。

では、また次回。

第17話 具現する地獄 後編（前書き）

お久しぶりです。滅茶苦茶遅くなってしまいました。

では、どうぞ。

あ、そうだ。どうでも良いけど、Vにムーンライトとカラサワが出るらしいのでとても嬉しいです。

第17話 具現する地獄 後編

Side Out

上空に浮遊する13機のネクストとそれを三角形形状の配置で見上げる3機のネクスト。詳しく分ければオールドキングのリザと12機の自立型ネクスト。それを見上げる3機はラーゼのノブリス、ジュリアスのアステリズム、ネオニダスの月輪だ。

武器を構えるラーゼ達とは対照的にオールドキング側は武器を構えていない。それよりもオールドキングはラーゼとの会話に気を向けている。

「首輪付きだと？・・・随分と捻りの無い呼び方だな」

『おいおい、昔の自分と一緒に間違っただけで記憶まで捨てちゃったか？

アスピナの施設にいた頃、俺はいつもお前をそう呼んでただろうが』

本人は皮肉のつもりで言ったのだろうが、それは事実だ。ラーゼの“魂”はアスピナ機関で過ごしていた頃の記憶を知らない。

『なんだ、マジで記憶飛んでんのか？一切の感情が無く、その瞳はこの世界を見ていない、だが命令には忠実に従う。お前は“自分”という概念を一つも持っていなかった。俺達に付けられたあの首輪がお前以上に似合う奴はいなかっただろうな』

昔のことを語るオールドキングの口調は何処か楽しそうだった。だが、ラーゼは奴に首輪付きと呼ばれた別のリンクスを知っていた。その人物がしたこと、その結末を知っているラーゼは首輪付きとい

う名前で呼ばれて良い気分にはなれなかった。

「オレ自身はごめんだな。あまり気分の良い呼び名じゃない……
というか、武器を向けられてるのに随分余裕だな」

『話をせずにぶっ放すほどお前等は無能じゃないだろう。それに、
まさかと思うが一撃で仕留められるとは思ってねえよな？』

ラーゼ達3人とオールドキングの距離は直線距離でおよそ200メートル。ネクストの兵装でも目標に着弾するまでは最低でも1秒、遅い場合は2秒掛かる。クイックブーストで距離を詰めても同じくらいだろう。

加えて、ネクストにはプライマルアーマーがある。ノブリスのライフルでは零距离で撃ち込まない限り致命傷にはならない。アステリズムと月輪のハイレーザーライフルならばダメージは与えられるだろうが、簡単に当たるほどオールドキングの実力は低くは無い。

（背中の子いつなら……いや、武装を展開している間に逃げられるだけか……）

ラーゼは一瞬背中マルチレーザーキャノンに目を向けたが、すぐに無理だと理解して視線をオールドキングに戻した。ジュリアスとネオニダスもラーゼの様子を見て動かない。

そんな時オールドキングが動き出した。

「まあ、話をしても結局は殺し合うことになるがな……街の生き残りを殺すにしても、お前等が連れてきた部下共をやってくれたせいで人手が足りん」

言葉の後に、空中で沈黙していた12機の自立型ネクストが駆動音を鳴らして動き出した。ラーゼ達のバイザーがコジマ粒子の発生を知らせた。全機がプライマルアーマーを展開したのだ。

「そつちも俺を見逃すつもりはないだろう？なら……始めようぜ」

12機の自立型ネクストが一斉に右手に持つライフルを持ち上げた。自律制御を担当しているAIが一瞬で照準を定め、間を置かずに即発砲する。ちなみに12機の照準は……全てノブリスに向けられていた。

「え？……ちよつ……何であー！？」

予想外の展開に一瞬思考が凍結したが、ラーゼの反射神経にAMSプラグが反応し、ギリギリのタイミングでクイックブーストの回避が間に合う。

自立型ネクストの5機が大型ブレードを展開し、ノブリスに急接近した。残りの機体は絶えずに集中砲火を続けている。

流石に反撃する余裕がなく、ノブリスは12機の自立型ネクストを連れて徐々に後退していく。

「（。D。）」「↑ジュリアス、ネオニダス、オールドキング

ジュリアスとネオニダスは、まさかラーゼだけに照準が往くとは思わなかったのか呆然としていたがすぐに我に返って後を追う。ただおかしいことに、オールドキングはその場からまったく動かない。

「おかしい・・・攻撃対象は自己判断に任せたが、まさか全ての機体があいつを狙うとは・・・」

こんなはずじゃなかった、という風に誰にも聞き取れない声で呟いた言葉には、確かな罪悪感が宿っていた。敵とはいえ、この展開はオールドキングが望んでいたものと何かが違う。とても重要な何かがある。

Side ラーゼ

一言だけ言わせてほしい・・・・・・・・・・どうしてこうなった！？

いや、確かにオレは敵だけど・・・・・・・・この扱いはいくらなんでも酷くない！？普通に考えれば12機を他と均等に分けて4機位で襲ってくる流れだろこの場面は！！

12対1とか、何これ怖い・・・・・・・・いや、冗談抜きで現在進行形でマジ怖いよこれ。

AIの正確な射撃と当たれば即死のブレードの猛攻。12対1という圧倒的に不利な状況でオレは迫り来る攻撃を凌ぎ続ける。

一点に集中すれば数秒でノブリスのプライマルアーマーを貫く無数の砲火を連続クイックブリストで避け続け、タイミングを見てライフルを発砲し妨害する。振るわれる大型ブレードには自分のレーザ

ーブレードで受け流してコースを逸らすという離れ業で避け続けている。

出力ではこっちが圧倒的に負けているので、ブレードが拮抗しているのは2秒程度。小さなミスでも、それで直撃を貰えば致命傷を負う一瞬の作業だ。

AMS適正の成せる技？否だ。AMSの役割は究極的にリンクスとネクストを神経接続で繋げることであり、この回避法は慢心ではなく、オレの集中力と反射神経が可能にしている技だ。ブレードの扱いで右に出る者がいない真改でも、この回避法は何度も出来るものではない、と言っている。

まあ、弾切れでも起こさなければ出力が上のレーザーブレード相手に近接戦闘なぞやらんだろうし、そもそも今のオレの状況そのものがレアなんだがな。

ジュリアスとネオニダスもオレを追って来ているだろうが……来てるよね？

追いついてもこの状況じゃタイミングが難しいだろう。よし、少し調子に乗ってる自動人形共に少し灸を据えてやるか。

大型ブレードを振るってくる自立型ネクストは全部で5機。一見休むことなく迫るブレードの猛襲なのだが、対応している中で気が付いた。こいつら、AI同士でフォーメーションを組んで攻撃し、それと同じ工程を何度も繰り返している。つまり、全機がそれぞれ同じ動きで何度も攻撃しているのだ。

とすると、良く見れていば攻撃のチャンスがあるはずだ。

左から迫る首元を狙った斬撃。受け流しをやめ、意識を大型ブレイドの刀身ではなく、その矛先に集中させる。最高のタイミングを見極め、矛先に左腕のユニットから生成された金色のレーザーブレイドを左逆袈裟に振るい跳ね上げる。

高密度のレーザーが衝突し、一瞬だけ凄まじい火花と閃光が迸る。だが所詮は一瞬、すぐにそれは消滅する。そして閃光が消滅すると、大型ブレイドの刀身は本来のコースから大きく上に逸れていた。

オレのブレイドの出力ではどうやってもこいつらのブレイドに正面から張り合えない。単純なパワーでは負けていないがほんの2秒の間に押し切るのは難しい。

そこで狙うのがブレイドの矛先だ。大剣のような大型武器でも矛先の軌道を変えてしまえば、その斬撃のコースは大きく狂う。実際、矛先は刀身よりも軌道が逸らしやすいのだ。

休む間もなく反対側から右腕を狙った横薙ぎの斬撃が来る。再び矛先に意識を集中させ、振り上げた左腕のレーザーブレイドを叩き付けるように振り下ろす。

巨大な刀身は再びその行き先を大きく狂わされ、オレの右腕の肘関節を狙ったはずが右足の爪先を僅かに掠るという結果に終わる。

続いて、正面から迫る機体がブレイドを持ち上げ、唐竹に振り下ろそうとしている。攻撃のパターンが同じなら、次は後方から2機が間を置いての攻撃が来るはず。

ここだ。ここが連携を崩せる点だ。

持ち上げられたブレードが振り下ろされ、前方に傾き始めた瞬間に前方へクイックブースト。一瞬で斬撃の懐に入り込み、左腕を一閃。手応えを感じるよりも先に右足で膝を放つ。

「……………はっ!!」

自立型ネクストの左腕が肘の先から両断され宙を舞い、ノブリスの右膝が胸部装甲の外面を破壊して深く突き刺さる。これだけの近距離ならばプライマルアーマーは役に立たない。

右足を引き抜き、右手に握ったライフルを装甲の内部に突き刺す。即座にライフルのセーフティをフルオートに切り替え、突き刺したまま引き金を引く。右手に絶え間無く振動が伝わり、装甲の中でマズルフラッシュが輝いている。

2、3秒で装甲を貫通し、自立型ネクストのカメラアイから光が消える。オレは突撃型ライフルから手を放し、機能を停止させた自立型ネクストの右手から長砲身のライフルを奪う。そして、もはや用済みとなった自立型ネクストをオレの後方、つまり背後から大型ブレードを構えて近付いてくる2機目掛けて蹴り飛ばす。

機能が停止しているのは気付いているだろうから恐らく奴らは斬り捨てるだろう。だが、そいつには少し役に立ってもらう。

拝借したライフルを構え、蹴り飛ばした敵の背中、メインブーストに狙いを集中して発砲する。今さらだが、コジマキャノンじゃなくて実弾ライフルなんだな。

しかもこれ、ノブリスのライフルより装弾数も威力も上じゃないか

？見た目は、MR-R100Rに似てるな。

命中と共に空中で機体が爆散。後方から接近していた2機は爆発に巻き込まれた。これなら少しの間足が止まり、近距離で爆発を受けたのでプライマルアーマーも少なからず減衰しただろう。

集中砲火を行っている残りの自立型ネクストにライフルを発砲し牽制、それと同時進行で両背中マルチレーザーキャノン起動。照準を付けず、自立型ネクストが密集している場所目掛けて計6発の閃光が走る。

敵は散開するが、1機だけ回避が間に合わず爆発する。これでやっと2機か。やはりゲームのようにはいかな、考えていたよりも疲れる。

放火が途切れたのを確認し、マルチレーザーキャノンを収納して背後へクイックターンで振り向く。方向転換終了と同時にオーバーブリストを起動。爆発で足止めを喰らった2機目掛けて急接近する。

2機はオレを迎え撃つように大型ブレードを構えるが、あれほど巨大なレーザーブレードだ。振るうよりも先にオレが近付くのが速い。

「……お、らあ！！」

クイックブリストでさらに加速。左腕のレーザーブレードで左の敵の胸部をぶち抜き、同時に右の敵の頭部を衰えぬ勢いで放った右足の蹴りで粉碎する。

突き刺さったままのレーザーブレードを横へ振るって敵を両断し、頭部を失ったもう1機が体勢を整える前にクイックブリストで接近、

同じく両断する。そのまま急降下し、EN回復の為にビルの上に着地する。

これで4機か。

空を見上げると、先程レーザーキャノンの発砲で散開した敵が体勢を整えて空中で再び右手のライフルを構えている。その中にはオレにブレードで近接戦闘を仕掛けてきた5機の内1機もいた。どうやら単機で来るほどバカではないようだ。

上昇とクイックブーストの信号を送ろうと頭の中で意識する。しかし、オレが動き出すよりも前に敵共の後方から飛んできたレーザーが敵を2機貫いた。オレに攻撃を集中させていた自律型ネクスト8機は慌てたように後ろを振り向く。

オレは視界で確認せず、バイザーに表示されているレーダーに目を移す。8機の敵に接近する2つの友軍シンボルがある。先程のはアステリズムと月輪のハイレーザーだろう。

『すまん、遅くなった。あとは私達で引き受ける』

『にしても、流石だのう。12機の敵を相手にしながら既に4機を落としたか』

「大したことじゃない。この程度セレンの奴なら、自動人形に何を手間取っている、とか言って説教してくるよ……まあ、とにかくそいつらの相手は任せた。オレには別の相手が残ってるんでな」

通信を終了し、もう一度レーダーへ目を移す。集まっている8機の自立型ネクスト、それと交戦する友軍のネクスト。だが、もう一つ。

敵性勢力を示す赤いシンボルが残っている。

その場所は・・・・・・・・・・オレの真上。

B i i i i i i i ! ! !

耳元でロックオン警報が鳴るよりも先に脳から電気信号が走り、ブースターが爆音を鳴らした。純白の装甲を纏ったオレの体は一瞬で音速の壁を突破し急加速する。

だが、オレの聴覚はブースターの爆音と共に大きな発砲音が鳴ったことに気が付いた。そして、気が付くと同時に急加速中のオレの左肩が重い衝撃に襲われ、AMSによるフィードバックが痛みとなって痛覚を刺激した。

「ぐう！・・・・・・・・ちっ・・・・」

やられっ放しで済ます気は無い。軽い痛みを無視してライフルを発砲音が聞こえた方向へ放つ。放たれた弾丸が少し届いたのか着弾の反響音が耳に聞こえた。

不意打ちは喰らってしまったが、姿を捉えたのなら当てるのは難しくくない。だが、どうやらダメージはオレの方が上ようだ。機体の損害報告を見ると、左肩の先端装甲が少し吹き飛んで掻けている。

『今でも少し掠った程度か。まったく、反応速度ならマジで獣並だな』

呆れた声でオレを見下すのはオールドキングのリザ。クイックブーーストと同時に聞こえた発砲音の正体である対ネクスト用のショット

ガン、SAMPAGUITAが異様に目立つ逆関節の機体は攻撃の手を止めない。

左背中のローゼンタール製チェインガン、CG-R500を起動させ、無数の弾丸をシャワーの如く降り注がせる。オレはバッククイツクブーストで後退して即座に上昇する。

オーバーブーストで突撃しながらライフルを連射し、左腕のレーザーブレードを起動させる。集中的に当たらなければあいつのチェインガンはノブリスのプライマルアーマーを突破できない。

それは当然あいつも承知の上なのだろう。チェインガンの弾幕を止めず、ショットガンの照準をオレに向けてくる。当たればプライマルアーマーを吹き飛ばされ装甲が吹き飛ぶだろう。

だがオレは回避を行わず、クイツクブーストで真っ直ぐリザへ突っ込み左腕のレーザーブレードを突き出した。爆音の後に発砲音が響き、散弾が当たった右肩に衝撃と激痛が走った。

だが、やられっぱなしではない。こちらのレーザーブレードはリザの右背中に搭載されていたハイアクトミサイル、POPULAR01に命中した。

突撃するような接近だったため、ノブリスはリザに激突する。全身に重い衝撃が走るが、オレは歯を食いしばってリザの腹部を蹴り飛ばし即座に離れる。その直後、リザが慌てたように背中のハイアクトミサイルをパージしたが、間に合わずすぐに爆発した。

レーザーブレードが命中したことによって搭載されているミサイル全弾が暴発したのだ。あの近距離ではプライマルアーマーも役には

立たなかったはず、確実に生身の肉体に傷を付けられたはずだ。

「……いつてえな、くそつたれ。普通あそこは避けるだろうが……」

「はっ……マニュアル通りに動いてネクストに勝てるかよ……」

爆煙の中から現れたりザの装甲は左半身が硝煙で真っ黒に染まっていた。爆発を受けたのは左肩か、出来れば右肩と一緒にショットガンを潰したかったが……。

オレも右肩に喰らったショットガンのダメージで右腕はそう長く動かない。オールドキングも左腕を満足に使えないだろうが、主力兵装のショットガンが残っているので不利なのはオレかもしれない。

「……いや、待てよ。確かあのショットガンの弾数は1080発のはずだ。残弾にはまだまだ余裕があるはずなのに、なんであいつはショットガンをあまり使ってこないんだ？」

「……ああ、そうか。恐らく他の戦闘で弾薬を消費したんだ。相手はフランス政府のIS部隊が妥当なところか。よし、ショットガンの残弾が切れ掛けているなら勝機は充分ある。」

同時のクイックブーストでその場から姿を消し、互いにライフルを撃ち合う。だが、互いに腕が満足に動かないのでまともな照準が付けられず、うまく当たらない。

「どうしてこんなことを、と聞くのは無粋か？」

「いや、そうでもねえさ。むしろお前がそんな質問をする方が意外

だ
』

クイックブーストで肉薄してレーザーブレードを横薙ぎに振るうが、上下の運動に優れる逆間接の急上昇で回避される。オレはそのままリザの真下を潜って背中にライフルを近距離で発砲する。

ライフル弾がリザの装甲を穿つが、その命を絶つより先にお返しでショットガンが絶え間無く連射される。プライマルアーマーが一瞬で消し飛び、それでも威力が劣れない散弾がノブリスの装甲各所に弾痕を作る。

『アスピナの施設を抜け出して、俺は今の世界をこの目で見た。女尊男卑、だったか？思考が他のよりイカれてる俺にも歪んでると思える世界だったな。・・・いつ頃だったっけか。街中で男を奴隷みたいに扱ってた女がムカついてよ。その女を殺して、変えてみるかって思ったんだよ』

「それがどうして大量虐殺に繋がる。この地獄で死んだ者にはもう男も女も何もないぞ」

『簡単な理屈さ。人が大量に死ねば国が動く。そうすれば戦力としてISが駆り出される。やってくるISを全部ぶっ壊しちまえば女は偉くなくなる。そういうことさ』

近距離を保ったままライフルを発砲してレーザーブレードで振るう。リザは残弾を惜しむ様子など欠片も見せずショットガンを連射する。互いにクイックブーストで攻撃を避け続けるが、少しずつダメージが蓄積していく。

ライフルとショットガンが交差するように狙いを定め、クロストリ

ガーのような状態になった。迷い無くトリガーを引くが、どちらも弾丸が発射されず空砲音を鳴らした。どちらも弾が切れたのだ。

左腕のライフルはすでにオレがブレードで斬り落としたので残った武装はチェインガンのみ。

だが、オレとオールドキングは基本の行動など関係無しに、右手に持ったライフルとショットガンの銃身を互いにぶつけた。簡単に言えば銃身で殴ったのだ。弾が切れた銃火器の使いようなどこれくらいしか思い付かない。

「単純すぎるし穴だらけだ。例えお前が現存する全てのISを破壊したとしても、ISコアの開発法を知っている篠ノ之束が生きていればISは無くならない」

「なら篠ノ之束も殺せばいい。女もう一人殺すくらい大したことはない」

「大したことはない、か。その過程で死んだ人達は大いなる犠牲つてやつか？」

「違えな。人を殺すのに犠牲も大儀もねえよ。俺はただ殺してるだけだ」

互いに弾く勢いで距離を取る。すぐさま急接近して、オレはライフルを右薙ぎに振るい、オールドキングは重ショットガンを縦に振り下ろす。銃身同士が再び衝突し、轟音を鳴らす。

そのまま隣を通り過ぎようとしたが、オレは背筋に強い寒気を感じてオーバーブーストを起動し、その場から急速に離れる。

直後、コジマ粒子の閃光と共にリザを中心としたアサルトアーマーが放たれた。ノブリスのプライマルアーマーが一瞬で減衰し、左半身と背中を高熱で焼かれたような激痛が襲う。

オレは両背中 of マルチレーザーキャノンを展開し、お返しとしてぶっ放す。アサルトアーマーを使用した直後なら奴も今は丸裸のはずだ。

しかし、アサルトアーマーの発光とコジマ粒子の乱流のせいで照準がまともに定まらなかったせいでリザに命中したのは6発中1発のみ。それでも一発だけで破壊力は大きく、僅かに当たっただけでリザの左肩を装備ごと溶解させた。

これでもう奴に残っている武装は弾切れのショットガンとアサルトアーマーのみだ。ショットガンは近付かなければただの重りだし、アサルトアーマーは距離を取っていれば簡単には当たらない。

しかし、やはり原作ORCAのNo.4、テルミドール程ではないが強い。ショットガンの残弾にまだ余裕が残されていたら少しやばかったかもしれない。

「まだ続けるか、オールドキング？」

「……なるほどねえ、有能な人形が感情を持てば強くなるか……んで、どうすんだ？その物騒な翼で俺を殺すのか？」

「もちろん殺してやる。楽に死ぬと思うな……だが、その前にやることあるんだ。殺すのはその後だ」

「ああ？俺を殺すより優先することがあんならお前等何しに来やがったんだ」

オールドキングの問いかけにオレは返答せず、左手の人差し指で真下に広がるパリの街を差す。オールドキングは数秒街を見下ろしたが、何もわからず僅かに首を傾げた。

だが、何かに気が付いたのか今度はバイザーに光を点して再び街を見下ろし、オレが教えたかったものが何なのか気付いた。

生きている人間だ。

数十機のノーマルの大群が虐殺を繰り返した街の中、無数の死者が生まれたと同時に、同じ位の逃げ惑う生者がまだ残っているはずだ。だが、今のパリ市街には生者が一人も見つからない。

生きている人間がない。違う、それなら市街には山のように大量の死体が転がっているはずだ。だからこそオールドキングはオレの教えたかったことを理解し、バイザー越しにオレを睨み付けた。

「デメエ……ッ！？……そういうことか！お前等、俺を戦闘に集中させるために実力を抑えてやがったなあ！！」

一発で正解を導き出したのは見事としか言い様が無いが、気付くのが遅すぎた。もう街中でこいつらが殺せる人間は一人もいない。

まったく、流石はテルミドルとメルツェルの選抜メンバーだ。思っていたよりも速く仕事を終えてくれた。

初めて聞くオールドキングの怒りの声。確かな負の感情が籠められ

たその声に対してオレは口元に笑みを浮かべて答えた。

「なんだ、本気だと思ったか？・・・悪いな、メルツェルの指示で時間を稼げって言われてな。殺すの我慢するのは大変だったよ・・・ああ、そうだ。どうせなら本当の目的を見せてやるよ」

A M Sを通して所有するデータバンクの中からある映像を選択して再生する。今のノブリスはI Sに使用されている技術の幾つかを導入しているので、スクリーン通信の応用で映像を外部に映すことも出来るのだ。

空中に表示されたスクリーンの中に映っているのは、ノイズが入ったモノクロ映像の中に揺らめく一枚の黒い旗。その旗にはアルファベットが縦に4つ描かれ、『O R C A』と書かれている。

『諸君、お初にお目にかかる。我らの名はO R C A旅団。私は組織団長、マクシミリアン・テルミドールだ』

第17話 具現する地獄 後編（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

申し訳ありません。試験のせいでまったく投稿が出来ませんでした。あと、やっぱり今回で最後まで纏めるのは無理でした。しかも後半少しグダグダな感じがする。

最後に映した映像はゲームの作戦説明と同じで、旗が出てくるアレです。

次で本当にこの事件は終わらせたいと思います。えと、後編の次だから・・・終編とか？

主人公、自立型ネクストにモテモテです。オールドキングも予想外だが、この程度で主人公の力は全てじゃない。まだまだ強いし、強くなっています。

では、また次回。

第18話 ORCA旅団、設立（前書き）

ギャラリー様から感想をいただきました。ありがとうございます。

更新遅くなってしまつてすいません。

あと、身勝手ながらキャライメージ大きく変えました。

では、どうぞ。

第18話 ORCA旅団、設立

Side Out

突如流された映像。どういうわけか、それは政府と代表的な企業の情報ラインのみに放送された。

「まず、このような形でしか話を持ちかけられない無礼を詫びよう。胸を張って大通りを歩ける立場ではないのでな、失礼する。」

現在この映像は、各国の政府と大規模企業のトップクラスのみに伝わるよう配慮している。情報統制でミスをしなければ、民間人に不要な混乱は起きないだろう。

この映像を見ている組織ならば、今パリで起きている悪夢のようなテロは知っているだろう。もし心の中で納得が出来ていない者の為に言おう、これは事実だ。今まさに、映されている通りテロは行われている。

そして、このテロを実行したテロ組織、リリアナが使用した機動兵器がISとは異なるものだということも分かっているだろう。
インフィニット・ストラトス

この機動兵器は”アーマードコア”、一般的な呼称ではノーマルと呼ばれている。IS程の性能ではないが、操縦訓練をすれば男性でも乗りこなせる兵器だ。この兵器の登場が今の世界にどういった影響を及ぼすかは、言うまでも無いだろう。

さらに、リリアナの指導者である男が使用した機動兵器、これは”アーマードコア・ネクスト”。操縦する人間の實力次第ではIS数

十機分の戦力となるだろう。また、リリアナの指導者と交戦している白い機体は我々ORCA旅団のメンバーだ。

ここまで言えば気付いただろうが、私達はそのネクストと操縦者を現段階で30近く戦力として所有している。ただ、テロを起こしているリリアナを我々は明確な敵対勢力と認識しているので、奴らとは敵対関係にある。奴らの仲間ではないと心から誓おう。

とは言っても、所持している戦力からして恐らく我々も警戒されているのだろう。

さて、ようやくここで本題だ。

私達が今回テロ組織を撃退し、このような情報を流したのは、我々の存在を知ってもらったためだ』

黒い旗が退けられ、新たに表示されたのは一つのデータファイル。

そこには、リンクスやネクストについての詳細。さらにはAMS、その理論を構築したアスピナ機関についても書かれている。

『このデータは映像終了の1時間後に転送されるようになっていた。情報は全て事実なので、幾らでも調べてくれて構わない。ちなみに、情報を流している対象はその組織が善に偏っていると判断したところなのなので、くれぐれも我々の期待を損ねる真似はしないほしい。

現在、ノーマルの設計データはリリアナによって全世界に流れ始めている。これを他のテロ組織が主戦力とすれば、恐らくISだけでは戦力が足りないだろう。

そこでだ、私達ORCA旅団はそういったテロ行為に対して戦力の提供を行おう。簡単に言えば、世界の火消しを担う傭兵になるのだ。ただし、そちらの国家に所属するわけではない。私達の戦力は新組織”企業連合”が各企業に分配し管理することになっている。参加企業のリストと組織の詳細は後で送る情報に載せよう。

私達が戦力の見返りとしてまず求めるものは、我々ORCAの存在を社会組織として認知すること、さらに企業としての利益といったところだ。

これらを最低基準として守ると約束するなら、協力的な企業、国家には国防の戦力の他に今まで見てもらっていた戦闘で使用したネクストの兵器情報とORCAが独自に研究を進めたIS技術の提供を考えてもいい。

だが、送られたデータを悪用するような組織が生まれた場合は我々は自らの力を持ってケジメをつけに訪れる。その時は、生存者の希望は捨てた方がいいかもしれんな。

こんなところか……。とりあえず、私達の方から提供できるものは一通り説明した。長々とした説明ですまない。

もちろん、我々の言葉を信用出来ない組織もあるだろう。そういった組織が軍事戦力を連れて我々を殲滅に来てもおかしくはない。しかし、我々は傭兵だ。自分達の行いにはケジメをつけるが、決して正義の味方ではない。敵対勢力に対して我々の容赦はあまり期待しない方がいいだろう。

拒むも受け入れるのも諸君の自由だ。どちらを選ぼうと私達は構わない。そうならば私達は独自でテロの芽を潰していこう。例えこの世界の全てにを拒まれようと私達ORCAは戦う。では、よく考えてくれ』

Side ラーゼ

「…………お前ら、正気か？」

映像を見終わったオールドキングが半ば呆然としたような様子で口を開いた。

「少なくともお前よりは大丈夫だな…………」

「俺にはそうは思えねえな。こんなことしても世界がリンクスやネクストの存在を簡単に受け入れるわけがねえ、最悪世界中を敵に回して袋叩きだ。俺でもわかるようなことをお前らが考えなかったとは思えねえな…………しかも、さり気なく俺達がノーマルの設計図を横流ししたのもバラしやがって」

「虐殺テロに比べたら小さな問題だろうが…………もちろん考えたさ。だけど、これ位に無茶な方法でも使わないとオレ達はアスピナのせいで世界に名を売ることが出来ないんだよ。戦力や情報、提供できるものを可能な所まで提供して、後は世界の反応に委ねるしかない」

そう、オレ達の行動は本当は欠陥だらけだ。成功を保証する要素が

一切無く、結果は全て相手次第、これでは神頼みも良い所だ。

当然最初はメルツェルが猛反対したのだが、他に手段を探そうにも思いつかず、結局この方法で実行することになった。

これは失敗が許されない作戦だが、最悪のケースもちゃんと想定してある。もし成功しなかった場合は味方が企業連のみの状態でアスピナ機関を相手にしなくてはならない。

そうなってしまうと言うまでも無く不利な状況だ。結果的にオレ達の存在を世界に知らせることが出来ても、出来うる限りその事態は避けたい。

「まあ、まずはお前をここで殺すとするさ。まさか生かしてもらえとは思ってねえだろ？」

マルチレーザーキャノンの照準を向けたまま左腕のレーザーブレードを起動させる。生憎とこの男を見逃してやるつもりは欠片も無い。どんな理由があっても、オレはこいつのしたことは認められないし気に入らない。

「そりゃそうさ……だが俺もそう簡単には殺されてやらねえよ……逃げさせてもらうぜ」

オールドキングが口元に笑みを浮かべたと同時に通信が届いた。今の状況では恐らくジュリアスカネオニダスだろう。

『ラーゼ！残りの自立型ネクストが全てそちらに向かっているっ！なんだか様子がおかしい、急に私のアステリズムを振り切るほどの速度を出した……！』

『私とジュリアスもそちらに向かっている、くれぐれも気を付けろ』
自立型ネクストがあのアステリズムとジュリアスを振り切ったと？何の冗談だ、それは。アステリズムのスピードは軽量機でもトツブクラスなんだぞ。

その時、バイザーに表示されたレーダーが後方から急接近する熱源を感知した。その速度は並みの出力のオーバーブーストを超える程のものだ。

「くそっ……!!」

クイックターンで後方に急旋回すると、4機の自立型ネクストが大型ブレードを作動させてこっちに接近している。4機の速度は本当に馬鹿げていて、まるでステイグロのような突進力を感じさせる。

左右の内、右のレーザーキャノンの照準を定め、4機の自立型ネクストを狙って発射する。距離が開いているので、当然回避される。だがすぐに回避した内の1機に左のレーザーキャノンを放つ。

回避の行動パターンが単純な奴なら恐らくこれで落ちると思ったのだが、狙った自立型ネクストは左腕の大型ブレードをその場で振るい、レーザーキャノンを刀身で受け止めた。

「はっ!?!……どんな回避プログラム組んだよ!!……ちっ……!!」

結局迎撃が間に合わず、4機の自立型ネクストを1機も落とせないまま接近を許してしまった。

左右それぞれの角度から迫る計4つの斬撃。それらの攻撃は全て、先程のものとは比べ物にならないほどに速い。まるで駆動系の回路や神経の動き全てが早送りになったような感じた。

捌くのは流石に難しく、クイック・ブーストで高速移動して全てのブレードを回避する。攻撃を外した自立型ネクストはそのままリザの前で止まり、クルリと反転して盾のように並んだ。

今レーザーキャノン撃つても先程と同じ方法で無効化されるので、防御を突破する手段が無いオレは自然と動きを止めた。だが、何もしないわけではない。即座に防御の陣形を作った4機の自立型ネクストの解析を行う。

『……解析完了。先程の戦闘で取得したデータと比較した結果、コジマリアクターや駆動系などの全てに数倍の出力増大を確認。しかし、冷却系の処理が追いつかず機体内部の温度が増大中。およそ6分ほどで自壊する可能性大』

解析結果を消して周囲のコジマ粒子濃度を調べてみると、確かに濃度が上昇し続けている。数分で自壊するほど出力を底上げしたとなるとプライマルアーマーの強度も上がっているだろう。

「驚いたか？詳しい仕組みは知らんが、何でも機体のリミッターを外してAIにリンクスの動きを再現させるシステムなんだとよ。アスピナの連中も役に立つもんを作ってくれたもんだ……数分で壊れちまうが、その分性能は段違いだ。ほら、俺が逃げるまで遊んでやれ」

鎖から解き放たれた獣のように4機の自立型ネクストがライフルを

撃ちながら突撃してきた。リザは身を翻し、オーバーブーストで正反対の方向へと飛んでいく。

「くそっ！・・・待ちやがれ・・・っ！・・・」

即座にオーバーブーストで追いかけてようとするが、円陣を組んだ自立型ネクストの包囲攻撃のせいで先に進めない。回避を捨ててリザにマルチレーザーキャノン撃つてみたが、射線上に割り込んだ自立型ネクストのブレードで阻まれる。

オレは内心の焦りを抑え込み、舌打ちしてジュリアスとネオニダスに通信を繋ぐ。

『ラーゼか、今お前の戦闘を肉眼で確認できる距離まで来ている。あと数秒で援護出来るだろう』

「ならお前等はいいつらの相手を頼む。オレはオールドキングを追う」

『無理だ、ラーゼ。奴は最初のオーバーブーストでかなり距離を稼いだ。あれでは私のアステリズムでも追いつけない。速度で劣るお前のノブリスでは尚更だ』

「いや、VOBを使えばまだ間に合う。奴の武器はもうアサルトアーマーしかない、追いつければ仕留めるのは簡単だ」

正式名称、ヴァンガード・オーバード・ブースト。

ネクストが使用する大小様々な十三個のブースターで構成された巨大増設ブースターだ。これを使えば時速約2000Kmでの高速長

距離移動が可能になるので、オールドキングに追い着けるはずだ。

『ダメだ、ストレイド……それは許可できない』

突然通信に割り込んできたメルツェルの声。オレはどういうことだ！と怒鳴ろうとするが、四方から遠慮することなく襲い掛かってくるライフル弾とレーザーブレードの回避に意識を傾けられ、言葉を遮られる。

『タイムリミットが近い。もうすぐ第2陣として送られたISがこちらに到着する。ただちに自立型ネクストを全機破壊、そしてすぐに離脱しろ。今の我々が“国家”と接触のは好ましくない』

「ならあいつを……オールドキングを見逃せつてのか！？ここであいつを逃がしたら、あいつは絶対にまた大量の人間を殺すぞ！VOBを使えばまだ追い着けるんだ！」

通信中のオレに自立型ネクストが追撃を仕掛けようとするが、到着したアステリズムと月輪が攻撃を仕掛けて妨害する。

『却下だ。たとえパージしたVOBの残骸を粒子変換で回収出来たとしても、我々の手の内を一つ晒してしまう。この先の為、これ以上ネクストの機能を知られるわけにはいかないのだ。わかってくれ、ストレイド……頼む』

「っ！……了解っ……！」

メルツェルの歯を食いしばるような懇願の声を聞き、頭が冷水をぶちまけられたように冷える。あいつも出来るのならこの場でオールドキングの息の根を止めたいのだ。だが、大局を見るのならここは

耐えねばならない。

オレは通信を閉じ、VOBの粒子変換命令を中断する。

「・・・・・・・・ちくしょう」

これじゃあ、勝ったのか負けたのかわからなくなる。こんなことならさっさとオールドキングを殺しておくべきだった、と後悔が湧き上がる。

あいつを逃がしちまった責任として、オレがあいつを仕留めないと。

『ラーゼ、そつちに2機向かったぞ！』

後ろを向くと、全身の3割ほどが自壊を始めている自立型ネクスト2機が前後で距離を開けながらこちらに向かってくる。オレは左腕のレーザーブレードの刀身を発生させ、オーバーブーストで正面から接近する。

「まあ、とりあえず今は・・・・・・・・」

前方にいる機体がブレードを横倒しにしながら近付いてくる。オレは速度を緩めず、レーザーブレードを腰溜めに構えて突撃する。

そして、衝突まであと3秒といった所でオレは前方にクイックブーストで急接近し、左腕を勢い良く振り抜いた。

光の軌跡を残し、大気を切り裂いた金色の刀身は敵の大型ブレードがオレに触れるよりも先に自立型ネクストの胴体を半分に両断した。

余程の危機的状況で無ければリスクを警戒して滅多にやらない芸当なのだが、何故か今はやれると確信が持てた。

「……………出来ることからやっていくとしようか」

爆発音を背後に聞き、オレは意識を残りの1機に向ける。装甲の隙間からオーバーヒートの赤い光を溢れ出させながら接近してきたもう1機は大型ブレードを突き出してくる。

ブレードが届くより先に、オレは機体を左にスライドさせ右手で作った拳を放つ。大型ブレードの刀身はノブリスの右肩の上を僅かに掠めて通り過ぎ、オレの勢いが乗った右ストレートは自立型ネクストの頭部を笑える形に歪めた。

オレはそのまま自立型ネクストの左腕の手首を右手で掴み、左膝を槌子にして肘の関節を粉碎する。足掻くように右手のライフルを向けてくるが、トリガーが引かれるより先にノブリスの左腕が振るわれ、レーザーブレードが右腕を両断する。

左腕を持ち上げ、全ての武装を失った自立型ネクストを縦に両断する。レーダーを見る限り、すでに残りの2機はジュリアスとネオニダスが沈めたようだ。

『離脱するぞ、ストレイド』

コクリと頷き、3人同時にオーバーブーストを作動させ予定の海中の回収ポイントへ向かう。表示されたレーダーを見ると、どうやらパリに包囲網を作るほどの余裕はなかったらしく近くには何の反応も感知されない。

「作戦終了か……民間人の避難を担当した人員も無事に離脱できているといいが……」

「メルツェルとテルミドールが直々に選抜したのだ、心配は無用だろう……。それにしても少し疲れたな、早く合流ポイントで拾ってもらってシャワーでも浴びたい気分だ」

「今回は長い作戦だったからのう。ORCAにとっては本当に大変なのはこれからだが、ジュリアスの言う通り、今は少し休みたい……。そういえば、人員と言えばラーゼ、企業連やORCAの人員を確保するためにクビになった軍人や技術者を雇う案を出したのもお前さんだったな」

「ああ。ISは確かに今までのどんな兵器よりも優秀だったが、それが理由で今までのエースと呼ばれたパイロットや天才と呼ばれた技術者をクビにしたのは明らかにバカな失態だ」

確かにISの性能は圧倒的なものだった。しかし、主力とする兵器が女性専用の物に変わったとしてもそれは今まで名を馳せた男性の実力が低くなっただけではない。

なのに、殆どの国家はそんな人達を迷うことなくクビにしてしまった。戦闘のプロである彼等の意見はISの開発においても貴重なものだというのに。

んで、そんな人材を放置しておくのはありえない、ということでおレは3年の準備期間の内にその人達を企業連とORCAにスカウトする提案を出した。

職を失っていた男性の方々は喜んで承諾し、今ではその実力を充分

に發揮してくれている。まあ、その中にトールラスで実力を發揮した人がいたのは驚いたが。あの変態共はコジマ関連以外でもぶつとんだ思考を持つてゐるからな。

合流ポイントまであと12、3分つてところか、オートパイロットの機能でも作るか？

頭の中で設計図を思い描いていくが、オレも疲れているようでは思考がうまく纏らない。ダメだ、まずは戻って休もう。他のことは全部その後に考えればいい。

それから合流ポイントで潜水艦に回収されるまで、オレ達は無言で海中を潜行し続けた。

S i d e O u t

何の前触れも無くパリを襲った、テロ組織リリアナの大量虐殺事件。これは“白騎士事件”に劣らない、いやそれ以上の大事件となり、その恐怖は世界中に恐怖を刻んだ。

そして、この事件でリリアナの戦力をほぼ壊滅させたORCA旅団と国籍を問わず多数の企業が提携しているという異例の組織、企業連。

企業連はORCAに続いて組織の設立を世界に公表した。

基本は3つのグループに分けられていて、グローバル・アーマメンツGA、インテリオル・ユ

ニオン、オーメル・サイエンス・テクノロジー、この3つを初めて参加している様々な企業は今まで聞いたことの無い名ばかりだった。

もちろん、そんな組織の存在を気に喰わないと思う連中もいた。その連中は早期に国の圧力を掛けて組織を飲み込もうとしたが、傘下企業の中には世界へ大きな影響力を持つ企業がいたのを知らず、逆に飲み込まれてしまった。

しかし、揺るがない組織基盤を持つ企業連とは違い、ORCAはリンクスやネクストの力を恐れられて干渉を避けられていた。世界の敵として認識されなかっただけありがたい状況なのだが、少なくとも受け入れられたわけではないようだ。

組織の存在自体はすぐに世界中へ知り渡ることになった。テルミドールも組織の存在についての情報には何の指定もしなかったのだから。

だが、警戒されているというのにORCA旅団は映像で言っていたように独自でテロの現場や裏組織の活動拠点を発見、その国家に対して『〜な作戦を実行します』通告を送り、即座にネクストで襲撃するという行動を繰り返していた。

勿論その場に追跡の足跡を残すようなヘマはせず、可能な限り秘匿して事態を収拾していた。しかも壊滅させた組織に拘束されていたようは売られた人間達を保護し、ちゃんとした場所に預けるなどのアフターケアで第二の被害を防いでいた。

当然そんなことをしていれば自然と周囲に存在を知られてしまうので、気が付けばORCA旅団は世界に知れ渡る傭兵部隊となった。

民間人には死者を出さず、何らかの利益のために戦うのではない。そんなスタイルを貫き通して活動するORCA旅団は表向きではないが、徐々に国際的な信用を手に入れ、未だ少数だが企業連を通して依頼を頼む中小企業が出始めた。

パリの虐殺テロから2年の月日が流れた。ORCAと企業連のおかげでリリアナの暴虐から守られたといっても、建築物などの被害も甚大なものだったパリ市街は企業連の多大な援助のおかげで復興することが出来た。

だが世界各地では、ノーマルを手にして暴れまわる犯罪者が増え始め、その中でも大規模な組織を壊滅させていくORCAの活動は徐々に増えていった。

そんなある日、日本を通してIS委員会に重大な知らせが届いた。

ISを動かすことが出来る“男性が2人”現れたと。

その情報は驚愕と共に世界中へと伝わり、政府は至急の措置としてアラスカ条約に基づいて日本に設置されたIS操縦者育成用の特殊国立高等学校、通称IS学園にその2人を入学させる決定を下した。

そして、ORCA旅団に企業連を介さず届けられた1通のメール。そこに書かれていた依頼内容は実に不可解なものであり、また無視できるものではなかった。

ORCA旅団から選り抜かれた現状トップクラスの實力を誇る最強のリンクスはIS学園へと赴くこととなり、数年ぶりの会合を体験する。

第18話 ORCA旅団、設立（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

何だかやつちまった感が消えてくれません。現実でこんなやり方しても絶対に成功しませんよね。

つか、私自身はつきりとは見つけれないけど、これ絶対何処かに穴あると思う。

けど、この作品では成功したことになります。この作品の世界は良いモブキャラが多いんです。

とりあえず、そんなわけでようやく原作に追いつきました。ん？おやおや？と思う人もいるでしょうね。

あ、それと、突然なのですが感想の方で何人かの方々から「主人公の機体にサバーニヤって要らなくね？」と言われて、私自身も考えたのですが……サバーニヤ、消すことにしました。

お恥ずかしい話ですが、サバーニヤを出した理由って正直言つと劇場版の「乱れ撃つぜええ！」に惚れたからなんですよね……。今思うとネクストと分けて使うのはかなり難しいと思う。

番外編辺りで女神に消してもらって、代わりになんか貰おうと思っています。機体とか、万能PCのアップグレードとか。

その辺りで何かリクエストがある人は感想辺りで教えてください。

機体の場合は“4”か“for answer”の、欲を言えば“for answer”寄りをお願いします。つい最近、“4”のデータが死ねばいい友人に消されてしまい、機体構成とパーツ名を調べるのが困難なんです。

では、また次回。

外伝2 注文変更と小さい矛盾（前書き）

f | s a i g e t s u 様、ギロ様、ギャラリー様に感想をいただきました。ありがとうございます。

今回は原作突入ではなく、外伝です。

では、どうぞ。

外伝2 注文変更と小さい矛盾

Side Out

「ふう……. ったく、あいつら、徹夜で大騒ぎしやがって。しかも成人組みの殆どが酒飲んでハイテンションってどういうことだよ…….」

ORCA旅団本部の地下要塞。ラーゼは薄暗い自室のベッドに座りながら1人愚痴を言っていた。

プロジェクト・リヴァイブが終了し、ラーゼ達3人は帰還と同時にすぐ休んだ。ただ、ラーゼだけは疲れが取れた途端にセレンに連行され、シュミレーターで地獄を見せられていた。

それから数日後は世界の反応を見る期間に入り、リンクスの全員は本部で待機していた。レジャー施設などで時間を奴らもいれば、シュミレーターで自分の腕を磨く者もいた。

だがそんな中、セレブリティ・アッシュの搭乗リンクスこと、ダン・モロがあることを口にした。

「計画の結果はまだわかんねえけどさ、成功するにしろ失敗するにしろ、俺達が全員集まれるのって少なくなるだろ？だからさ……. パーティでもやらねえか？」

その言葉にリリウムやカニス、ウイスやイエーイなどにも広がり、最終的にはロイやウィン・Dまでもが賛成した。

テルミドルやメルツェルはその提案に最初は渋ったが、今後集まる機会も殆ど無くなるという言葉に同感し、旅団長の許可の下でパーティーの開催が決定した。

シュミレーターで模擬戦や訓練をしていたラーゼや真改、ジュリアスなどの上位リンクス組は許可が降りた後に知ったのだが、断る理由は無いので了承し手伝うことにした。

まあ、リンクスの中には当然こういうものが好きでなかったり苦手だったりする者もいる。

例を上げるなら、リザイアやカミソリ・ジョニー、ステイレットなどの協調性が少ないメンバーが筆頭である。それと、少し以外なことにセレンは賛成側だった。

結果的にパーティーは開かれ、ORCA全員参加の飲んで食っての大宴会となった。

だが、開始から約1時間後、惨劇が始まった。

軽い気持ちでウィン・Dとセレンが飲み比べを始めたのだ。2人は決して酒に弱いわけではなく、むしろ強い方だった。しかし、この2人は負けず嫌いの性質があり、幾ら酒に強かろうと限界は存在する。

中々終わりが訪れない勝負に嫌な予感を察知したロイが2人に声を掛けたが、すでに遅かった。2人は完全に酔っており、すぐさま口を酒で溺れさせた。

そこからはもう伝染病の拡大と相違無かった。メイ・グリーンフィー

ルドやフランソワ・ネリス、さらにミセス・テレジアが潰され、リウムやエイ・プールまでもが飲み込まれた。

乗り気ではなかったメンバーもすぐにセレンとウィン・Dに補足され、沈められた。

そのまま女性陣の暴走は止まることを知らず、魔の手ならぬ酒の手は男性陣までも侵略した。

ダンやウイスなどの青年組みはもちろん、テルミドルやネオニダスといった成人組みさえも全員酒に飲まれてしまった。当然ラーゼも被害を受けたが、前世譲りなのか幾ら飲まされてもまったく酔いはしなかった。

それからパーティーは長時間に及び、他に意識がある者は酒が回ってハイテンションになり、頭のネジが緩み始めた。

ヴァオー、有澤、ネオニダスの3人は仲良く肩を組んで盛大に笑い合いながら酒を飲んでいった。騒音が絶えない宴会の中で「まだまだ行けるぜ！！メルツエエル！！」という3人の言葉が響いていた。

まあ、名前を言われた当の本人は当の昔に酔い潰れて床とキスしていたが。

他にも、何処で覚えたのか知らないが、真改が半裸でどじょうすくいを踊り始めたり、ドン・カーネルとチャンピオン・チャンプスがコンビで一発芸を繰り広げた（まったく笑いはなかったが）。

そして最後にパーティーを強制的に終了させることになったのが、スリーサイズがリアルにワンダフルボディのセレン、ウィン・D、

メイ、ジュリアス、4人のストリップショウだった。

最悪なタイミングで青年組みは目を覚まし、半裸に近かった4人の姿を見て鼻血を噴射、大量の出血と共に二度目の気絶を体験することになった。

パーティーは言葉通りの血の海に沈み、医療班は総動員で出血多量の男性陣と急性アル中一歩手前女性陣の介抱を行うこととなった。

ちなみにストリップ4人組はぶちぎれたラーゼの鉄拳制裁によって強制的に医務室へ運ばれた。

こうして、ORCA旅団のパーティーはラーゼ1人を残して全員が医務室に運ばれるという結末で幕を下ろした。

こうして現在に至り、精神的に疲れたラーゼはベッドに座りながら女神に貰ったノートPCに目を止めた。

「そっいえば空港火災の時から連絡が無いな。こっちからの連絡手段ってないのか？」

叶う可能性が低いと承知の上でノートPCを広げて電源を入れようとした。だが、人差し指が電源ボタンに触れる瞬間に画面が一瞬フラッシュを放ち、PCが勝手に起動を始めた。

『やっほー！おっひさー、ラーゼ！』

画面に映し出されたのは金髪緑目の美人。画面の向こう側で陽気に笑っているこの女性こそ、ラーゼに力と第二の生を与えた女神である。しかも前回会った時と違い、服装が何処かの国の皇女が着るような美しい儀礼服へと変わっている。

「……久しぶりだな。前に会った時と服装が大分違うようだが、何かあったのか？」

『あはははっ……思い付きで売り始めた商品がバカ受けしてね……それで？私と連絡を取りたかったみたいだけど、どうしたの？』

ラーゼは溜め息を吐きながら画面越しに女神と目を合わせる。

「久しぶりに会って結構失礼なこと言うが、お前がくれた力について頼みがある。憶えてるか？保留の2つの枠の内一つを使ってお前が選んだ機体、サバーニヤだ」

『もちろん憶えてるよぉ……でもその様子だと、どうやらお気に召さなかったみたいだね』

「使ってはみたんだが……あの機体、まるで国家規模の軍隊を単独で相手にするような装備が殆どでノーマル群が相手だと加減が効かないんだ。ネクスト相手だとQBとかの機動性で圧倒されちまうしな……あと、最終的な理由で言えば、やっぱりリンクスの体にはアーマード・コアが一番しっくり来るみたいだ」

一度だけサバーニヤを使用した戦闘があったのだが、その時の戦場は爆撃の後のような有様に成り果ててしまった。

ノーマルの武装やメインカメラのみを破壊しようとライフルを撃つてみると、ビームの出力が大きくカメラや武装どころか機体をまるごと爆散させてしまった。

ならばとGNミサイルを放つてみても、一発の威力と総発射弾数が予想より大きく戦場にあつた施設は全部綺麗に吹き飛んだ。

幸い民間人に被害は出なかったが、次も同じ様にするのは無理だとラーゼは思った。

機体性能は決して悪くないのだ。むしろ総合的な性能を見る限りはアームズフォートだって容易に沈めることが出来る。トランザムと呼ばれるシステムや太陽炉、全てのエネルギーを担うGN粒子、恐ろしいと感じるほどだ。

だが、それでもリンクスであるラーゼに最も馴染むのはアーマードコア・ネクストなのだ。ネクストの扱いにすっかり馴染んでしまった今のラーゼにサバーニヤまで扱わせるのは恐らく不可能だ。

『うゝん．．．．やっぱり純粹種だからってネクストとガンダムを両方乗りこなすのは無理か。それで？サバーニヤは消すとして、代わりに何かリクエストはある？少しはサービスするよ』

「すまん．．．．代わりのリクエストとしてアームズフォートのデータを頼みたい。だけど全部というわけじゃない。そうだな．．．ランドクラブ、マザーウィル、グレートウォール、ステイグロを頼みたい」

『元々キミが選ぶはずのものなんだから構わないよ。でも、4つでいいの？全部欲しいっていうのも不可能じゃないよ？』

「いや、全てのアームズフォートを開発したら最悪戦争の火種になる。ランドクラブやステイグロは移動や物資の運搬として使って、あとの2つは非常事態の時の戦力として保管しようと思う」

A M Sという才能がなければ機能しないネクストとは違い、アームズフォートは多数の凡人によって安定した戦力と性能を確保してくれる。

だがラーゼはランドクラブの拠点防衛能力やステイグロの海上走行能力を戦闘以外でも生かそうと考え付いた。

ランドクラブは陸地、ステイグロは海上、この分担ならば物資が足りていない地域を世界規模で援助することが出来る。それに、これを移動用の足にえばミッションの度にV O Bで長距離飛行をしないで済む。

もちろん、戦闘でもかなりの成果を発揮してくれるだろう。ステイグロは単機だけでもI S数機を相手にできるほどの海上戦闘能力があるし、ランドクラブも2、3機揃えば中隊規模のノーマル部隊と正面から張り合える。

「・・・わかった。うん、了解。数日後にキミのノートP Cに送っておくね。でも、新しい機体とかは欲しくないの？あと一つ願いの保留が残ってるけど・・・」

「オレ個人の戦力はまだ大丈夫だ・・・オルレアにシユープリス、さらにはホワイトグリントまであるからな」

「あれ？ノブリスが抜けてない？」

「ああ……ノブリスは今、ちよつとな……今まで一番使ってきたせいか、長期間のフルメンテナンスが必要だって言われちゃった」

『ありやりや……それはまた……』

ネクストを初めて起動させたあの日から、ラーゼはかなりの頻度でノブリスを戦闘に使用していた。

『万能』をコンセプトとしているノブリス・オブリージュの性能はどんな環境でも扱いやすく効率が良かったため必然的に戦闘で最も多く使われるようになった。

だが、万能をコンセプトにしてもいる機体も度重なるラーゼの高度な操縦による負荷によってガタが始めてしまったのだ。整備班一同の話だと、長期間に渡って格納庫に封印した方が良さそうだ。

『まあ、キミが必要無いならそれで良いよ。欲しい機体とかが見つかったらこのノートPCを通して連絡頂戴。この私、ヘラ様がキミの願いを叶えちゃうよぉ！』

「ああ、その時は頼むよ……そういえば、突然で変なこと訊くんだが……お前って本当に“女神ヘラ”なのか？」

普段通りの口調で気軽に尋ねたラーゼの質問に、女神は明らかな動揺を見せた。肩をビクツ！と大きく震わせ、一瞬で青褪めた顔から汗が流れる。

『ど、どどどどつしていきなりそんなことを！？一体どうしたの

！？」

「いや、お前の方がどうした。今一瞬で顔面蒼白になったぞ、大丈夫か」

『そんなことはいいから！？・・・ど、どうしてそう思ったの？』

本当に気軽な気分で尋ねた質問に予想外の反応で返され、その剣幕にラーゼはPCの画面から僅かに顔を離す。

「あ、ああ・・・思い出したんだが、お前オレにキスした時フアーストキスって言うてる？よく考えたらヘラってゼウスの妻だし、初めてっていうのはおかしいって思ったんだよ」

十数年間まったく気付かなかった小さな矛盾。その手の本を読んだのなら誰でも知っていること。

気付いても何かが起こるというわけではないので今までラーゼは頭の隅に追いやったのだが、これを機会に疑問を口にしてみた。

その結果、青褪めていた女神の顔は凍り付き、ポカンツと口を開けて呆然としてしまった。

『——あは、あはははは・・・つまり私、普通に自分で地雷踏んだだけ・・・うう、自分で自分が恥ずかしい・・・』

今度は顔が真っ赤に染まり、ラーゼに見られぬよう顔を背ける。顔の変化の忙しさにラーゼは軽く吹き出してしまうが、女神は心の内の羞恥心と戦っているせいで気付かない。

『——はあ、何だか散々だなあ。……そうだよ。白状すると私はヘラじゃない、私は神話に殆ど関係も無いただの女神だよ。ふんだ』

「いや、別にお前がヘラじゃなくてもどうとも思わねえよ……お前がオレにもう一度人生をやり直させてくれたのは変わりないだろう。今でも感謝してるよ」

苦笑を浮かべながら嘘偽り無い本心を述べるラーゼ。

あの雨の日、ただ殺すことしかしてこなかったラーゼにとって、今の人生は充実感に満ちていた。戦いから無縁の生活を送っているわけではないが、前世とは何かもが違う。

「けどさ、ヘラじゃなくて神話に関係の無い女神なら、お前の本当の名前ってなんなんだ？」

「え、私の名前？……私の名前は……マリス……エトルリア神話のマリスじゃなくて、ただのマリスだよ……」

ラーゼの質問に赤らめた顔を逸らして答える女神、マリス。少しでも恥ずかしさを隠すため、すぐに胸を張って、参ったかあ！！と叫ぶ姿にラーゼは微笑を浮かべた。

「マリスか、良い名前じゃないか。これからはそう呼ばせてもらおう」

「い、いいでしょうっ！ドンと来おいっ！」

「……お前、さっきからテンションおかしいぞ」

「うつ、だって……思い出す度にあの時の自分が恥ずかしいんだもん。ヘラって名乗っておいて初めてとか……うつ」

赤みが引かない顔を両手で覆いながら頭を左右に振り回すマリスはそのまま倒れて地面をゴロゴロと転がり始めた。

「まあ、あんまり気にするな。オレだって10数年間気付かなかったんだからな……ところで、本物の女神ヘラってそっちにいるのか？」

「うん、いるよ。でもね、もしかしたら私の時より驚くかもよ？一言でいえば……うん、女神様より女王様の方がしっくりくるね。冷たい眼差しで鞭持つてるし……あ、被害は主にゼウス様ね」

「……人間の思想美学って、こうも簡単に壊されるもんなんだな」

それから数時間、ラーゼは薄暗い部屋の中でノートPCを通じ、マリスと話し続けていた。画面越しでも2人の顔には確かな笑顔があり、楽しさがあった。

だが、ラーゼの部屋の前を通りかかった人間がその会話を微かに聞き、ラーゼが過労で幻聴を聞いているのではないかと誤解。すぐに医療班が緊急出動し、ラーゼを医務室に強制連行した。

ちょうどマリスとの会話を終えた途端に医務室に連行され、状況の理解が追い着かなかったラーゼは流されるままに医者から休むよう言われた。

よく分からないが、元から休むつもりだったラーゼは深く考えずぐに眠り、溜まっていた疲れを一気に消化。数日後にマリスから送られてきたAFの設計と配備の準備に取り掛かり始めた。

アームスフオート

気の済むまで休ませてもらったおかげで疲れが完全に無くなり、ラーゼは生き生きとした様子で作業に取り組んでいた。

ただ唯一、回復したリンクス達にAFの説明をしている時にその場にいた全員がラーゼに申し訳なさそうな視線を向けていたのが気がかりだった。

しかも視線だけでなく、全員がラーゼに気を配るような態度まで見せるので、気がかりを通り越して不気味だった。

それから、整備班の何人かが口にした「最近ストレイドが仕事を任せ過ぎたせいで過労になり、部屋の中で幻聴と会話していた」という噂を当の本人が耳にしたのは数日後の話だった。

外伝2 注文変更と小さい矛盾（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は皆さんが酒に溺れて暴れる話でした。くそっ！テルミドールがまるで空気じゃないかつ！

リンクスだって人間なんで、酔っ払ったら乱れるということでご了承ください。

リクエストがあつたので、今回で消えたサバーニヤの代わりにAF4つを頼みました。一応作者が個人的に好きなものです。これのどれかが変態魔改造を受けるかはまだ未定です。

機会があればサバーニヤを使用した時の話は外伝で書きたいと思っています。

あと女神様、実はヘラじゃありませんでした。唯の女神です。

では、また次回。

第19話 動き出す世界（前書き）

ギャラリー様、ケンス・ハムナー様から感想をいただきました。

僅かにですが、今回から原作です。

では、どうぞ。

第19話 動き出す世界

Side Out

上空を飛ぶ1機の旅客機。

ジェット音を鳴らす外とは違い、機内は音と揺れを最小限にして心地良い空の旅を約束している。

その機内にいる人間は、操縦席を除けばファーストクラスに座っている6人のみ。

その内の1人、ラーゼ・ベルセルクは手元の資料を見ながらコーヒを飲んでいた。

現在で年齢が15歳となり、顔立ちはかなり整い、180に届くその長身は鍛錬を怠らなかつた努力に報いる程に筋肉の付いた体をしている。

一通りの内容を読み終え、ラーゼは資料を仕舞って軽く息を吐く。それは外野から見れば、何処か疲労感を纏う溜め息にも見えた。

「ラーゼ兄様、何処か気分でも悪いのですか？」

そんなラーゼに言葉を掛けてきたのは1人の少女。

色が少し薄い金髪を背中まで伸ばし、緑色の瞳を持つその容姿は美少女と呼べるもの。穏やかそうな雰囲気で話しかけたこの少女の名はリリウム・ウォルコット。

普段は礼儀正しくおしとやかな少女だが、戦場では軽量二脚型ネクスト、アンビエントを駆り敵を殲滅する上位ランカーだ。リンクスとしてのその才能はORCA内でラーゼを抜けば随一かもしれない。

「そうなんですか？長旅で疲れが出たのかもしれませんがね」

そして、リリウムの後ろに付いて来たもう1人の少女はエイ・プー。搭乗機はミサイル兵器を主に使用するヴェーロノーク。

こちらの少女も同じく美少女と呼べる顔立ちをしており、背中に届く銀髪をポニーテールにして瞳の色は青い。リリウムのような“お嬢様”という程ではないが、こちらも基本は礼儀正しく優しい。

リンクスとしての実力はリリウムに劣るが、容赦の無い悪夢のようなASミサイルの弾幕は戦場での支援機として大きな力を発揮する。

「ふふ、多分違うわね。疲れてるならわざわざ資料なんて読まないでしょ」

席に座りながらファッション雑誌を読んでいた美人の女性、メイ・グリーンフィールドは微笑を浮かべながらラーゼの席に視線を移す。

こちらは腰まで届く緑髪と翡翠色の瞳を持ち、その体は全体的にスタイルにかなり恵まれている。

機体名はメリーゲート。重量二脚型で、ミサイルを中心に高い火力を持っている。その機体構成からなのか、メイ本人は戦闘で正面からの打ち合いを好んでいる。

「確かにな……それに、そう簡単に疲れるような鍛え方をしていないだろう。なあ、師匠？」

背中まであるブルネットの髪と薄い青色の瞳を持つ美女、ウィン・D・ファンシオンは読んでいた小説から視線を外して窓の外を眺めているセレン・ヘイズに声を掛ける。ちなみに両名ともスタイルは抜群である。

もちろん彼女もリンクスであり、機体名はレイテルパラツシュ。EN武器を主体にした高火力の軽量二脚型ネクストは、ラーゼの知る原作では“GAの災厄”と呼ばれ、前線の兵士にはプラス・メイデンの蔑称で呼ばれていた。

「当然だ。この程度で疲れるくらいなら私との鍛錬でとくに死んでいる。大方、今回の依頼についてまだ不満があるんだろう」

そして最後の1人、セレン・ヘイズ。こちらは原作のオリジナルリンクスの1人であり、レオーネメカニクスの最高戦力と呼ばれた古強者だ。

美女5人に男1人。いつもならこの状況をあまり気にしないラーゼだが、これからの仕事内容と場所のことを考えると少し気が重くなる。

「別に不満は無い……ただ、少し肩身が狭いと思ったただけだ」

「仕方無いだろう。“依頼主”がお前を直接ご指名なんだ。それに、後からロイも合流する」

「数カ月後に、な」

今この場にいない男性リンクス、ロイ・ザーランド。

ウィン・Dの恋人であり、ラーゼが男性陣の中でかなり親しい1人である。

機体は希少価値の高いアルドラの標準機、HILBERTに重火器を搭載したマイブリス。その腕は原作の独立傭兵の中で最高と呼ばれる程だ。

一見掴み所が無く空とぼけた男に見えるが、さりげなく相手を気遣う温厚な心を持っているのをラーゼはよく知っている。

そんな親しい友人も今は此处にいない。

ラーゼは溜め息を吐きながら、こうなった経緯を良く思い出してみた。

Side ラーゼ

数十年前。

引き受けた依頼を終わらせ迎いのヘリが来るまでの数日間、オレは出発前に予約を入れておいた滞在先のホテルに到着し、任務完了の報告をするために通信を行った。

もちろん盗聴されないようにするため暗号通信だ。

別に他の人間、現地でのオペレーターや指揮官に頼んでも構わないのだが、オレはこうして毎回自分で行っている。

「——ストレイドよりBIG BOXへ……ミッション完了。これより回収ヘリ到着まで潜伏地点にて待機する。オペレーター、そちらからの指示はあるか？」

『——BIG BOXよりストレイド……報告を確認。ミッション成功、お疲れ様でした。団長より、ストレイドは任務が完了次第“集会所”に顔を出せとのメッセージを預かっております。回収についての詳細もそちらの方で話すと』

「テルミドールが？……了解したオペレーター、通信終了」
通信を切り、オレはヘッドセットを外して部屋に用意されているコーヒーを作り始める。

え？なんで突然コーヒーを作るかって？これから絶対に喉が乾くからそれを潤す為にだよ。あれ？なんだよ、くそっ、インスタントコーヒーしかねえじゃん。まあ、有るだけ良いか。

ちなみに余談だが、今話していたオペレーターは原作で企業連のミッションでフリーフィングを説明する女性だ。初めて声を聞いたときはかなり驚いたものだ。

オレはロイやカニスと同じく独立傭兵の立場なので、あらゆる企業のおペレーターと話したが、全部原作と同じだった。原作と違うのはフリーフィングだけでなくミッション中のオペレートもやってく

れることだろうな。

あと、本部の名前は原作と同じくBIG BOXにした。こちらは別にGAの施設ではない。

コーヒーの湯気が立つカップを持って再び椅子に座り、ヘッドセットを掛け直す。そして記憶の中にメモしてある周波数を入力して再び通信を開始する。

「……………よう、団長自らお呼びとは珍しいな。緊急の要件か？」

『来たか……………まずは任務ご苦労だった、ストレイド。そして、質問の答えはYESだ。少なくとも私やメルツェルの一存で判断を下せる用件ではない』

『すまん、遅れた。セレン・ヘイズだ……………今の会話を聞いたが、全員を呼んだのか？』

『いや、今回のメンバーは私とテルミドル、そしてお前達を含めて11人だ。他には……………リリウム、ウィン・D、ロイ、エイプル、メイ、真改、有澤だ』

『……………オレ達を含めて類似点がありません見つからないリストだな。現在依頼を受けていないリンクスか？』

『安心しろストレイド、数分もしない内に全員揃う。理由はその時に聞かせてやる』

メルツェルの言葉に無言で頷き、オレはヘッドセットを付けたままコーヒーを口に運んで窓の外に見える市街の景色を眺めた。

通信機を見ているよりはずっと気が晴れるし、こういった見物も悪くは無い。

あと、オレは立場が立場なので一応狙撃手とかの警戒もしている。まあ、マテリアルライフルクラスの狙撃銃でもなきやこの体に致命傷を負わずことは叶わないが。

そんなことを考えながら数分後、全員が席に着いた。

『まず、緊急とはいえ急な召集を詫びよう。みなそれぞれ任務で忙しいだろう』

『ま、確かに。時差のおかげで俺のいる所は真夜中だ』

『私と師匠の方は夕暮れだな』

メルツェルの言葉にロイが気軽な声で返答し、ウィン・Dがそれに続く。

この“集会所”はオレ達リンクスだけが使用できる専用回線だが、リンクスは基本的に世界各地で活動しているので今回のような集会の時は時差などが問題になってくる。

『私とリリウムの所は……昼だけど猛吹雪だわ』

そつえばお前ら今回の仕事北国だっけ。

『私と真改の方は．．．．早いものだ、桜が咲き始めている』

お前等は移動するんじゃないくて“日本担当”だったよな。つか、桜が咲いてる風景が見えるってどんな場所で通信してんだお前等。

『ええ〜と、私の方は．．．．スコールが吹き荒れてます』

「いや、お前今何処にいるんだよっ!？」

ついエイ＝プールの答えに声を出してしまう。スコールがある所なんて、何処で仕事してるんだ？

『．．．．とにかく、今回集まってもらった議題を話そう。現在よりおよそ3時間前、ORCA本部に1通のメールが届いた。中にはメッセージと依頼内容が書かれていた』

『その内容にも驚いたが、それ以上の問題点は依頼主だ。依頼主の名は．．．．篠ノ之束だ』

『．．．．っ!??』

テルミドールがその名前を口にすると、オレを含めた他のリンクスは一瞬驚愕で言葉を失った。

他ならぬISの創造主の篠ノ之束。世界中の誰もが認める天才がORCA旅団に接触してきたのだ。

オレとしては、何故束さんがORCA旅団に依頼のメールなどを送ってきたのか不思議でならない。少なくとも、オレ個人に良い事が

起きるとは思えないな。

『・・・・・・・・篠ノ之束とは、驚いたな。ISの開発者たる天才が傭兵集団に何の用だ？』

『書かれていた要求内容はかなり漠然としたものだった。原文が少し・・・・・・・・アレだったので、勝手ながら私が翻訳した方を話す。

1つ、ORCA旅団及び企業連に所属するリンクス数名を3年間IS学園の生徒、または職員として所属させる。

2つ、上記で選出したリンクスはIS学園の治安維持に協力する。だが、警備や防衛の全てを担えというわけではなく、死者を出さなければ一切の行動に指定や制限を付けない。

ただし、有事の際には“篠ノ之箒”“織斑一夏”“織斑千冬”の安全を絶対的に優先する。

3つ、選出メンバーにはストレイドを必ず加える。

以上だ』

『・・・・・・・・・・』一同

再び言葉を失った一同。

恐らく全員が思っているだろう。篠ノ之束は何をしたいのだろうか、と。

IS学園の防衛戦力を頼むだけなら分かるが、選出したメンバーを

生徒、または職員に所属させる意味がわからない。

というか、今さらだけど3つ目おかしくね？何でオレだけ指定されてんの？他とは別の意味でオレも何がしたいのか訊いてみたい。

『……えっと、ごめん……。これって、何が目的なの？まったくわからないんだけど』

『恐らくメイ様だけでなく、この場の誰一人として理解出来ていません。……。そもそもIS学園はこの依頼についてご存知なのでしょうか？』

『それについては我が調べてみたが、どうやら学園だけでなくIS委員会の方からも許可が降りたようだ。下準備は万全、ということなのだろう』

『こちらでも調べてみたが、真改の調査結果と同じだった。しかも下準備だけでなく逃げ道を塞ぐのも上手いらしい、報酬が前払いで届けられた』

『そういえば先程GA本社から大量の資金が送られてきたが……。まさかアレか！？』

『ああ。企業連側には莫大な資金、ORCAには資金と完全に初期化されたISコア10個が送られてきた。まったく、前払いとはいえこんな物を貰っては喜びよりも恐怖を感じるな』

『何が恐怖だよ……。企業連側がその金を使ってるってことは断る気はないんだろ？たくつ、オレの意思は無視かよ。まあ、こんな報酬出されれば仕方ないと思うが……。』

すでに退路が無くなっていることに溜め息を吐くと同時に、この状況を心の何処かで満更でもないと思う感情があると少し自覚する。

IS学園に行けば、十中八九あの3人、千冬姉さんと一夏兄さん、そして篤に会っただろう。やり方が強引かつ滅茶苦茶だが、束さんなりに気を利かせたのだろうか。

リンクスの皆にはオレと織斑姉弟の関係を話してあるので、何も言っただけなのも気を使わせているのだろうか。

『……依頼を受けるのは理解した。そして、察するにその依頼に向かうメンバーはこの中から選ぶのだろうか？ 先程ラーゼが訊いていたが、メルツェル、何を基準にこのリストとなった』

『簡単だ、セレン・ヘイズ。日本語を理解し、他者とのコミュニケーションを自然に出来る。さらに事務作業をまともにこなせる。この条件に該当し現在長期の行動が可能なリンクスを選んだのだ』

『なるほどね。それで……他には誰が行くんだ？ ラーゼは既に決定だが、少なくともあと3人は女が必要だと思っただけ。IS学園つてのは女が殆どなんだろう？』

『なんだロイ、気を使うわりに立候補しないのか？ ちなみに私と師匠は行くぞ。3年というのは少し長いけど、興味がある』

『そいつは残念……悪いが、俺はこれから少し1人で動いてアスピナの情報を探ることになったんだよ。そっちに行くのは構わないが、合流できるのは数ヵ月後だな。真改や有澤の旦那はどうだ？ あんたら純粋な日本人だし適任だろ』

『私はこれでも社長だぞ？3年も仕事から離れられるわけなかつた』

『我もしばらくはアメリカでマフィアの掃討を請け負うので無理だ』

おい、何処が長期行動可能なんだよ。日本人2名がすでにスケジュール埋まってんじゃないか。

テルミドールとメルツェルはそう簡単に本部を離れられないし、これでもうオレの他に連いてくる男はいないということになる。

『他はどうだ？目的地では依頼の他にもすることがあるのでは、人数はなるべく多くしたい』

『私とリリウムは構わないわよ。まったくってほどじゃないけど、他の依頼を受ける機会が少なくなるんでしょう？それに面白そうだしねっ、日本の学校って』

『はい。私もメイ様と同じく、参加させていただきます』

『あつ、私も行きます。学校って興味がありますし……ここから早く離れたいです』

エイプル、お前は是非そうしなさい。代理にはウィスとイエーイを送つてほしいだろ。

『では、メンバーはラーゼ、ウィン・D、セレン・ヘイズ、リリウム・ウォルコット、メイ・グリーンフィールド、エイプル、そして後から合流するロイ・ザーランドの7人でいいな？』

『それと、この場で所属を決めるぞ。リリウム、エイプルの2人は学生、他の全員は職員だ』

『あれ？ラーゼさんは学生側じゃないんですか？』

「あのな．．．．オレは“男”だぞ？生徒として所属しても意味がないだろう」

『あつ！？．．．．そ、そうですね』

ネクストに乗るリンクスはあまり関心が無くて偶に忘れるが、ISは“女性にしか動かせない”。

だからこそ今の社会、女尊男卑の社会が出来上がったのだ。まあ、今になってはノーマルやMTを武装勢力が手にしたせいでパワーバランスは曖昧だがな。

『それもあるが．．．．ラーゼには他にもやってもらうことがある。IS学園ならお前の考えた“新しいIS”の稼動テストや調整が好きなだけやれるだろう』

「新しいISって．．．．“TYPE-N”か？確かにテストや調整は出来るが操縦者が．．．．なるほどね、その為の女性陣でもあるってわけか」

『．．．．何の話だラーゼ。話から察するに、お前がIS関連の何かを思い付いたようだが』

『その詳細は後でデータで転送しよう。それと、女性陣の諸君は日本に向かうまでの数日間、ISの操縦と知識を身につける為に本部

に戻ってもらおう。迎えは既に向かったので明日には戻れるだろう。
ラーゼ、お前は……」

「わかってるよ、メルツェル。オレもとりあえず本部に戻って必要な資材を揃えるさ。技術者も何人かは必要だからな」

「……では、今回の会議は一先ずここまでだな。国際的な信頼が増してきたと言っても、我々ORCAの立場はまだ安心を許さない状態だ。各自、自分の務めを果たしてくれ……本部にてまた会おう。人類に……」

「……黄金の時代を」

そんなことがあって数日後の今に至るわけだ。

あの後オレ達は本部に帰還し、女性陣はISの鍛錬や学習、オレは技術部で機材を始めとする様々な物資の用意、連れて行く技術者の選抜などをしていた。

女性陣の方は少し忙しかったようだが、準備を終えたオレの方は時間に余裕があったのでAFの運用や配備状況などの話し合いに出席していた。

ステイグロ2機とランドクラブ5機、現段階でロールアウトしたこのAFは予想以上の成果を上げてくれた。

直線速度ならOBすら上回るステイグロは物資運搬船やミッション

の際の移動艦として活躍し、現場へ物資を運ぶのがかなり楽になっている。

ランドクラブは主に自然災害や内戦の被害にあった村の救援と支援を行っており、救助チームや民間人の一時的な宿泊場所として役立っている。

ただ、ステイグロは当初その活躍の代償としてかなりの整備コストが掛かっていた。

全体的な成果と比べれば釣り合いも取れるのだが、削れるコストならばなるべく削った方がいい。

そこで、現在ロールアウトした2隻のステイグロの内1隻、ステイグロの2番艦は変態技術者共の協力も得て、本来の設計にかなりの改良を加えている。

大々的には推進や航行のシステムと搭載武装の方面に力を入れてあるが、最も特徴的な改造は“動力部の心臓を初期化状態だったISCコア3個に任せている”ところだ。

高度な自動成長及び処理能力や莫大なエネルギーを生み出すISCコアを3つ使用し、ステイグロの心臓部としたことで、ステイグロ2番艦はほぼ整備要らずの航行時間を発揮できるようになった。

その中で不便な点があるとすれば、ISCコアが搭乗者として登録した女性3人の内2人がいなければステイグロ2番艦はジェネレーターのエネルギーで通常通りのスペックしか発揮できないことだ。

最初は流石に無理かと考えていたのだが、束さんが放棄していった

データの中に同じ様な設計理論を見付け、何とか実用化することが出来た。

とはいえＩＳコアをこれ以上消費するのはかなり痛い損害なので、他のＡＦには別の改良を考えなければならぬだろうな。

・・・話がずれたな。

まあ、そんなことがあってオレ達は今日本に向かっているわけだ。

到着後はそのまま車に乗りＩＳ学園に直行、学園側の職員達と今後のことについての話し合いだ。恐らくその話し合いの席で千冬姉さんと会うこととなる。

会えるのは単純に嬉しい。だが、同時に今まで何の連絡も出来なかったオレに姉さん達が怒っていないかと不安を感じる。

（自分でも情けないと思うが・・・これっばかりはなあ・・・姉さん、会った瞬間に殴り掛かって来たりしないよな・・・殴られても自業自得だけど）

溜め息を吐きながら無意識に肩を縮んでしまう。

親に怒られるのを怖がる子供ってこんな感じなのか？

自分がこんな子供のようない面を持っていたのに驚きながらも、オレは不安を感じ始めた。

この時、オレは意識が思考の海に沈んでいたせいで、不覚にもカメラを激写するメイとそれを手伝うリリウムの姿に気付くことはなか

った。

『お客様、まもなく着陸態勢に入ります。席へお座りになり、ベルト締めてお待ちください』

心の中に不安を感じながらも、時間は残酷にも進み続けるようだ。

やめよう。今怖がったって意味が無い。現実の結果を受け止めなきゃな。

「さあて、久々の日本だな」

Side Out

「……本当なのか……それは……」

『本当も本当だよーちゃん！私がちーちゃんに嘘を付くはずがないよー……ちーちゃんも薄々気付いてたかもしれないけど、はっきり言っねー。らーくんはちゃんと生きてるよー』IS学園に向かう手筈になってるリンクスの中にいるからー！』

「答える東……一夏の件とラーゼの件、どう考えてもタイミングが合いすぎてる。委員会は隠しているが、私はお前がORCAに何らかの接触を図ったとしか考えられん。どうだ？」

『さっすがちーちゃん！その通り！どう見てもタダじゃ動かなさそうだし、潰しちゃったたらーくんが困るでしょ？だから前払いで企

業連にお金、ORCAの方には初期化したISコアを少し渡してきただあゝ！」

「ISコアだとっ？・・・とにかく、お前が連絡を寄越した理由はわかった。それで、用件はそれだけか？」

『情報と束さんの配慮のお代にちーちゃんの水着セクシーショットを一枚（ブツッ！！）』

躊躇いもなく通話を切ったスーツ姿の女性、織斑千冬は静かに空を見上げた。

義弟であるラーゼ・B・織斑は7年前の空港火災で行方不明となっていた。

千冬も一夏も、死体が見つかっていないのならラーゼが死んだとは思わなかった。当然葬式も挙げていない。

だが、千冬はこうして弟が確かに生きているという事実を知り、それを今喜んでいる。しかも、その弟が今からこの場所、IS学園にやってくるのだ。

「・・・ラーゼ・・・」

小さく呟く声。その声の中には、安心と期待の心がはっきりと感じられた。

「先輩っ！すいません、会談で話し合う内容について確認をお願いします」

「ああ、すぐに行く」

千冬を先輩と呼ぶ眼鏡を掛けた女性に返事を返し、歩き出した。

その様子は普段と違い、何処か上機嫌な雰囲気を感じさせた。

第19話 動き出す世界（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ORCA旅団と企業連は束さんの思いのままに動いています。

つか束の話し方がまったくわかんねえー！！

IS学園ではリリウムとエイプルに学生、他のリンクスには職員をやってもらうことになります。

ラーゼと職員の皆さんが話をする場面でも書けたら良いと思います。

ステイグロはそのままだと不安だったので、改造しました。結構無茶な改造だとは思いますが、束さんの残した完璧なデータのおかげで実用化できました。

ランドクラブも馬車馬の如く働き続けています。

次回はラーゼと千冬さんが再会します。

では、また次回。

第20話 不器用な仲直り（前書き）

ギャラリー様、ケンス・ハムナー様、ギロ様から感想をいただきました。

今回は、あまりお目に掛かれない仲直りです。

では、どうぞ。

第20話 不器用な仲直り

Side Out

IS学園。

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。育成対象者は操縦者に限らず専門のメカニクなども含まれている。

また、学園の土地はあらゆる国家機関に属しておらず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約がある。

だが、恐らくこの規約は半ば有名無実化するのが目に見えており、“全く干渉されない訳ではない”という曖昧な状態で落ち着くだろう。

だがそんな状況でも此処は他国との技術比較や新技術の試験場にも適しており、そういう面でこの学園は各国に重宝されている。

敷地内にはIS訓練用のアリーナの他、2人1部屋の学生寮や食堂、大浴場が設けられ、主に女性だけの使用が前提となっている。

まあ、ISを操縦できる男性が現れるなど当時の建築担当者が予想できた筈も無いのだから当然だ。

学校行事は一般の学校とは違い、通常行事の他に選出して代表者をISを使用したリーグマッチや学年別トーナメント。他にも色々と

ISを使用する行事がある。

「……え、えっと……この他にも教職員や生徒達の役職、学園の詳しい内部構造や警備システムもあるんですけど……今回はここまででよろしいですか？」

「ええ、充分です。他の情報については後日に……ありがとうございます。山田教諭」

その学園にある応接室内に、現在8人の男女がいた。と言っても、男1：女7という随分と偏った編成なのだが。

8人の内6人はラーゼを始めとするORCA旅団、そして残る2人はその6人への学園説明を担当することになったIS学園の教師。

1人は身長が平均のそれよりも低く、童顔に掛けられた大きな目の眼鏡が良く似合っている。

だが身長や童顔と違い、地味でも派手でも無い服装のおかげで目立つそのスタイルは抜群だ。

その女性、山田麻耶は学園についての説明をしていたのだが、目に見えて緊張しているようで口調が慌しくオロオロとしている。

他人に世話を焼く人間が見れば、その姿はさぞかし保護欲を誘われるだろう。

そしてもう1人は、少し狼を思わせる吊り目をしており、かなり厳しそうな雰囲気をしている。

服装は黒いスーツで、それに似合う長身とボディラインを持っている。こちらにも目に見えてスタイルは抜群だ。

そして、この女性の名は“織斑千冬”。

かつての日本の代表であり、第1回のIS世界大会、モンド・グロツソの総合優勝および格闘部門優勝者。つまりは、“世界最強のIS操縦者”である。

その美貌や実力に憧れを抱く者は多く、敬意をもって過去には『ブリュンヒルデ』と呼ばれた。

そして彼女こそ、織斑一夏と……目の前で会談を行っているラーゼ・ベルセルクの姉である。

「……そ、それじゃ、次は校舎の案内をします。皆さんもどうぞ」

「了解した。だが申し訳ない山田教諭……こちらのラーゼが織斑教諭と少し話をしたいらしい、この部屋をもう少し使わせてもらって構わないだろうか」

「え？部屋の方は構いませんが……えっと……」

セレン・ヘイズの申し出に対し、話をする本人の意思を聞こうと麻耶は千冬に視線を向ける。

その視線に対して千冬は静かに頷き、了承の意志を伝える。

その最中でラーゼはちらりとセレンに視線を向け、サンキュ、と感

謝の意思を飛ばす。

了承を確認した麻耶は「こちらです」と言ってORCAの人間を誘導し、応接室を出て行った。

ガタンと自動ドアが静かに閉まり、ラーゼと千冬の2人だけとなった応接室は沈黙に包まれる。

「・・・・・・・・」

（・・・・・・・・気まずい。何を話せば良いのかわからん）

会話が一切無い空気に重圧を感じ、ラーゼは心の中で呟く。

半分は口を開かない自分のせいだと理解しているが、言葉が出て来ない。

だがこのままではダメだと思い、ラーゼは言葉を発しようとする。

「あの・・・・姉さ」

「ついてこい」

突然立ち上がった千冬に言葉を止められ、ラーゼは再び沈黙してついでいく。

応接室を出て廊下を歩いている途中も無言だったので、ラーゼは空気の重圧に耐えながら冷静な顔のポーカーフェイスを必死に維持し続けた。

* * *
* * *
* * *
* * *
* * *

＊（こんなの覚えました）

そして、到着したのは学園内にある立派な剣道場。

人払いを行ったのか、部活が休みなのか生徒は１人もおらず、ラーゼはそこで１人立っていた。

道場に入って今度こそ話をしようとしたのだが、それよりも先に千冬は「待っている」と言って道場の奥に向かった。

最低限の言葉しか話さない千冬からはまったくその内面がわからない。

「少なくとも２人つきりで話したい、なんて雰囲気じゃなかったな……自業自得とはいえ、あの反応は流石にキツイ」

道場に張られている健剛実質と相克不屈の字を見ながらラーゼは呟き、着ているスーツのネクタイを外して窓の外を見上げた。

（見事な青空だな……お、微かにだけ飛行機雲が見える。オレ達に乗ってきたやつのか？）

ガラッ

そんなことを考えていると、道場の奥から千冬がやって来た。どうやら着替えていたらしく、スーツ姿から剣道の胴着に代わっている。

「?.....なっ!」

その姿にラーゼは首を傾げるが、千冬の左手に握られたソレを見て無意識に身構える。

手に握られていたソレは、鞘に納められた刀だった。

黒色の柄と鰐がある何の変哲も無い形だが、模造品ではなく本物だとラーゼは直感で理解する。

だが、理解は出来ても納得が出来ない。

何故この状況で刀が必要なのか。何故.....その刀をこちらに向けるのか。

「2秒やる。構えろ」

「ま、待ってくれよ姉さん。なんで.....」

「行くぞ」

混乱するラーゼに構わず、千冬は抜刀した刀を構えて凄まじい速度で突撃し、唐竹に振り下ろす。

当たってしまえばラーゼの脳天は綺麗に両断され、一瞬で絶命するだろう。

だがその斬撃は、交差した2本の大きなナイフに阻まれた。それはラーゼが腰に収納していたもの。

恐らく千冬も暗器に気が付いていたのだろう。でなければ、幾らなんでも丸腰の人間に本気で斬り掛かるうとするわけが無い。

「・・・・・・・・なんのつもりだよ」

「・・・・・・・・」

「答える姉さんっ!!」

怒りの声を上げるラーゼの問いに答えず、千冬は体を回転させ右の回し蹴りを放つ。

明らかに剣道の動きではないと思いながら、ラーゼは鳩尾に迫る蹴りを左腕で受け止める。

そのまま足を掴もうとするが、千冬は膝を一瞬曲げ、反動で右足を引き戻して体を左に回転。ラーゼに背を向ける体勢から回転力を加えた首狙いの左薙ぎを放つ。

「・・・・・・・・っ!？」

ラーゼの秀でた集中力と反射神経が一瞬で斬撃のコースを予測し、右手のナイフを逆手に持ち替えて殴るように刀身に叩き付けた。

刀とナイフはその場で拮抗し、両者は腕に力を込めながら動きを止める。

「どうして……!!」

腕の力を緩めず、顔を俯けたラーゼの声には隠せぬ悲しさがある。

今拮抗している斬撃の行き先は首。つまりは即死を狙った攻撃なのだ。

こんなことをするのは何か理由がある。

数年間暮らしたからこそ、千冬のこととはラーゼも良く知っている。もしかしたら、これで叱り付けているだけなのかもしれない。

そんなことを本当にやってしまう姉だと理解しているが、初めて温もりを感じさせてくれた家族に刀を向けられたという事実はラーゼの心を深く傷つける。

「どうして、か……私もお前に訊きたいことがある」

千冬の力が増し、細めの吊り目に怒りに似た色が宿る。

「7年前の空港火災……何故、黙って姿を消した」

一瞬で拮抗を壊し、刀が振り抜かれる。

ラーゼは力で対抗せず、バックステップしながらナイフで刀を受け流す。

「それしか……それしか方法は無かった。皆を守るためには、オレが消えるしかなかった」

「守るだど？私を誰だと思っている。それでも世界最強だぞ。家族ぐらい守ってみせた」

バックステップで後退するラーゼを追撃するように、千冬の掬い上げるような斬撃が下から迫る。

それはラーゼの黒いスーツのボタンを斬るだけで留まるが、返す刀で袈裟斬りの斬撃が放たれる。

ラーゼは右手のナイフを順手に持ち替え、左右のナイフを交差させて斬撃を防ぐ。

だが、防いだ斬撃の威力は今までの三度に渡るどれよりも重く比べ物にならなかった。

その威力は2本のナイフをへし折り、折れた刀身がラーゼの左頬と右肩を掠めて血を飛ばす。

（くそっ……人外っぷりが一段と凶悪になってやがる……）

着地と同時に2、3回のバックステップで後退し、ラーゼは右肩の傷を抑えながら折れたナイフと流れ出る血を見る。

別段特別な加工品というわけでもないが、通常の軍用ナイフよりも頑丈な強度を持つそのナイフがへし折れたのは少し予想外だった。

「確かに家族は守れたかもしれない。でも、姉さんだって分かっているだろ。手段を問わないような奴等が次に狙うことなんて……そして、オレと姉さんの体は1つしかない」

そう。無理だった。個人の力が幾ら強大でも限界がある。

守りたいと思う人間全てをたった2人で守り通すなど出来はしない。

「なら・・・何故連絡の1つも寄越さなかった！！私達を頼ってくれなかった！！何故・・・生きているとお前自身の声で教えてくれなかった・・・！！」

千冬が顔を俯かせ怒りと悲しみの声を上げた。

その怒りは家族の生存を喜ぶと同時に今まで溜め込んでいた感情の爆発が引き起こしたものだ。

結果的にそうなったとはいえ、どうして東ではなく自分を頼ってくれなかったのか。どうしてあれからの7年間、生きていると教えてくれなかったのか。

「オレだって・・・オレだって出来るなら帰ってたさ！！この7年間、ずっとあの家に帰るために戦ってきたんだ！！」

ラーゼもまた悲しみの顔を俯かせて怒りの声を上げた。

7年間の揺らがぬ決意。あの家に、家族の元に帰るという決意をラーゼは1日たりとも忘れず、戦い進んで来た。

「モンド・グロツソの時だって、本当ならすぐに兄さんを助けに飛んでいきたかった・・・でも動けなかった。亡国企業やアスピナ、色んな奴等がオレの邪魔をする・・・」

だからリンクスを集めた。ORCAを、企業連を設立し表舞台（世界）に足を踏み出して盛大に名乗りを上げた。

個人の力を鍛え抜くと共に強大な力を持つ組織を作り上げた。

その全てが帰りたいという1つの願いが為の行動だ。

「・・・・・・・・っ！」

突然ラーゼは千冬に抱き締められた。

顔を俯かせて動揺している今のラーゼは明らかに隙だらけだ。

驚きで体が一瞬硬直するが、初めて感じる心の温かさがそれを打ち消していく。

「結局は同じなのか、私も一夏もお前も・・・・誰かを守る為に躊躇わず自分を犠牲にしてしまう。随分と損な性格に育ったものだ」

「・・・・・・・・それでもいいさ。ずっと、ずっと求めた居場所なんだ。・・・・誰かの命令でも強制でもない、オレ自身が守りたいと思っただ」

「お前の気持ちはわかる・・・・・・・・だが忘れないでくれ。私達は家族なんだ。頼ってくれていい。もう“お前1人が頑張らなくてもいいんだ”。

だから、これは今までの罰だ・・・・・・・・おかえり、ラーゼ。よく、帰ってきたな」

子供をあやすように頭を撫でられ、掛けられた言葉を聞いてラーゼの目が見開かれた。

“ 1人で頑張らなくてもいい”。今までそんなことを言われたことは無かった。

前世では両親の命令でただ殺し続けるだけで何も言葉を掛けられなかった。

もしかしたら今回の人生もそうだったかもしれない。

ORCA内でトップランクに位置するリンクスとしての実力。そんな力を持ちながらも組織を支えるカリスマ。

それらは色々な人間にラーゼを頼りにして助けを求めさせたが、誰もラーゼを助けようと、ラーゼに頼られようとはしなかった。

自身も気付かなかった事実を自覚し、その目から徐々に涙が流れ出し、小さな嗚咽の音が千冬の胸の中で聞こえた。

「うん・・・・・・・・ただ、いまっ・・・・・・・・」

その涙はこれまで生きてきた中で初めて現れたラーゼの心の叫び。

初めて流れたの涙に戸惑い、何故泣くのかもはっきりとわからないが、ラーゼは今の気分を悪くないと思えた。

第20話 不器用な仲直り（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

言葉だけじゃ互いを許せない……肉体言語主体の織斑家の仲直りでした。

最近原作を少し読み返して、打鉄の近接用ブレードを生身で扱う千冬さんのハイスペックを思い出しまして。

あと、生身のラーゼはもう完全にガンスリンガーのピノッキオみたいにナイフを気に入っています。銃も使いますが。

もしかしたら一夏ともこんな風になるかも？

そうなった場合は……出来れば生身よりもIS対ネクストをやりたいですね。

では、また次回。

第21話 入学式（前書き）

ケンス・ハムナー様、ギロ様から感想をいただきました。ありがとうございます。

今回は二人目の男子が登場。

第21話 入学式

S i d e ラーゼ

「こちらが部活棟の部室割り当てです。なるべく早めに覚えてくださいね」

「ありがとうございます。お時間を取らせてしまい、申し訳ありません榊原先生」

「いえいえ、お気になさらないくださいラーゼ“先生”……ふふふっ」

IS学園の職員室にて、新調した黒いスーツを着ているオレは部活棟の部屋割り当てが書かれた資料を受け取っていた。

今話しているのは、部活棟の管理を任されている教員、さかき はら榊原 なつき菜月先生だ。

おしとやかで品行方正、容姿も美人と言える先生なのだが、姉さんに聞いた話だと男運が無く、1人で自棄酒をすることがあるらしい……ドンマイ、きっと良い人見つかりますよ。

それとオレの呼ばれ方なのだが、束さんと姉さんの計らいなのか、オレはリリウム、エイ＝プール、さらに兄さんが入る1年1組の副担任となった。故に先生だ。

ちなみに、ウィン・D、セレン、メイの3人もそれぞれの仕事についている。

リリウムとエイ＝プール曰く、先生と呼ばれた時のオレ達4人は随分と面白い顔をしていたそうだ。

「ラーゼ先生……そろそろ教室に向かうぞ」

「はい。すぐに行きます織斑先生……って、なんで面白そうな顔をしてるんですか」

他の職員との会議が終わったのか、スーツを着た千冬姉さんが口元を少しにやけさせながら声を掛けてきた。

公私混同はダメだと思い、職務では織斑先生と呼んでいる。多分だが、普段のように呼ぶと鉄拳が飛んでくるのだろう。

「いや、まだ慣れていないように見えたのでな……とにかく行こう。山田君にクラスの挨拶を任せているが、恐らく今の教室の空気は微妙だろう」

「“男子”が2人、居ますからね。というか、本当にオレのことを教えてないんですか？」

「心配するな。私と違ってあいつはきちんと話を聞いてくれる」

「いやいや……そういった自覚があるんなら二度とやらんでください。怪我した身としては洒落になりませんから」

オレと千冬姉さんのほぼ一方的な攻撃による兄弟喧嘩。

前代未聞な形での仲直りを遂げたのだが、本当に大変だったのはそ

の後だった。

折れたナイフの刀身が斬り裂いたオレの右肩。

最初はそこまで深刻な怪我でもなかったのだが、叫んだり長話をしたせいか傷口からの出血量が増してしまった。

おかげでスーツの中に着ていた中着は血を吸って胸元近くまで真っ赤に染まり、そんな時に少し様子を見にセレン達や山田先生が道場に来てくれた。

一見血塗れに見えるオレの姿を見た山田先生はパニックを起こしてその場で気絶。セレンなどの大人組は千冬姉さんを今にも殺さんばかりに問い詰め、リリウムとエイプルは涙目でオレの傷の手当てをしてくれた。

その騒ぎが伝わって他の職員も現れ、今度はセレン達が姉さんを脅迫していると誤解。オレと姉さんが誤解を解いていなかったら冗談抜きであの場は戦場になっていたかもしれない。

まあ、今は副担任としての仕事をしますか。入学式早々、女生徒達に甘く見られたら後が辛い。

* * * * *

「皆さん入学おめでとう！ 私は、副担任の山田麻耶です」

教室に入ってきたのは、眼鏡を掛けた緑髪の美女だった。

最先端技術を惜しみなく使用した学園の恩恵もあり、右手のスナツプと同時に空中に名前を書いたスクリーンが出現した。

（山田麻耶・・・上から読んでも下から読んでも“やまだまや”だな・・・つか山田先生、胸でかいな）

先生の名前でどうでもいいことを考えつつ、母性の象徴である胸の大きさに少し驚く。

んで、その山田先生が笑顔で自己紹介したんだが・・・

「・・・・・・・・・・（じ）」

ご覧の通り、全員視線を最前列方向に集中させるのに必死でまったくの無反応状態だ。

予想外の反応に山田先生はたじろぎ、オロオロしながらどうしようか必死に考えている。

（まあ、俺達が原因だけどさ・・・まったく、周りからの視線が正直鬱陶しいな。6年振りに再会した幼馴染はすぐに顔を背けやがるし・・・俺、嫌われてんのか？）

「え、え〜つと・・・きよ、今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制、学校でも放課後でも皆と一緒にです。仲良く助け合い、楽しい3年間にしましょうね」

山田先生は挫けずにスクリーンの映像を変えながら学園の説明を続けるが、返ってきた反応はさっきと同じ沈黙。

おいおい、野郎2人なんか見詰めてないで誰か反応してやれよ。山田先生、今にも泣きそうだぞ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えつと、出席番号順で・・・」

泣くのを我慢するように山田先生は進行を続ける。立派だねえ、流石は社会人だ。

「はあ・・・」

俺は小さく息を吐きながら、現状確認と現実逃避の意味を込めて、今までのことと、こうなった経緯を思い出してみる。

7年前の空港火災。

あの日、俺は家族の1人である弟と離れ離れになり、何も出来なかった無力感を強く経験した。

俺も千冬姉もあいつが、ラーゼが死んだとはまったく思っていなかったが、あの時の無力感はオレの心に力への強い渴望を刻んだ。

だからこそ、中学時代もバイトをしながら剣道部に通い、実力を鍛え続けた。稀に帰ってくる千冬姉にも頼んで体術全般も鍛え上げた。はつきりとした目標が無い上での鍛錬だったが、力を付けたことで損なことは殆ど無い。おかげで、誘拐されそうになった時は逆に犯人共をボコボコにすることが出来たしな。

けど惜しかったなあ、まさかISまで持つてくるとは思わなかったしな。ちくしょう、はつきりと顔は見えなかったが、あの蜘蛛みたいなISは絶対に忘れねえ。

結局俺はあの後モンド・グロツソの決勝戦を放り投げてやって来た千冬姉に助けられたが、同時に俺は千冬姉の確実だった優勝を潰してしまった。

だが、無力感を感じながらも俺は学生の身だ。当然高校入試が待っている。

とりあえず俺は学費が安く就職率の高い私立藍越学園あいえつに入学することにした。いつまでも千冬姉に養ってもらうのは悪い気がしてならなかったのだ。

そして受験日当日、俺は確かに多目的ホールで藍越学園の試験場に向かった。だが、内部構造がかなり複雑になっていて、地図を見てもまるで複雑という言葉がドヤ顔で書いているだけにしか見えない。

結局は係委員に道を尋ねたのだが、向かった部屋にあったのは試験場ではなく、座したIS。しかも好奇心で触れてみたらそのISが反応しなかった。

その現場をIS委員会の職員に目撃され、その時点で俺はIS学園に無条件&強制的に入学させられることとなったのだ。

以上、そんな流れで俺は此処に居るわけなのだが、いまいち実感が湧かないし心の中で気になることもある。俺が道を尋ねた係委員だが、他の人に訊いてみたら全員が“そんな人は知らない”と答えた。

まるで俺の行き先を誰かが誘導したような気配は恐らく気のせいでは無いだろう。せめてそのことを千冬姉に知らせようと思ったが、日本政府に殆ど監禁されたような状態だったので無理だった。

犯人はわからんが、一体何がしたいのかねえ……犯人と同じでまったくわかんねえや。

「……斑君……織斑一夏君っ」

「ああ？」

目の前で名前を大きな声で呼ばれ、意識と視線が浮上する。

咄嗟だったため少々ドスが入ったような声で反応してしまい、後ろと左の女生徒、さらに山田先生が怖がって短く悲鳴を上げた。

「ひいっ！……あっ、あの、大声出してごめんね。お、怒ってるかな？ご、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。だ、だから、自己紹介してくれるかな？ダメ？ダメかな？」

気が付くと山田先生が涙目になっており、ぺこぺこ何度も頭を下

げていた。その度に大きめな眼鏡がずり落ちそうになっているが、俺の視線は頭を下げる度に揺れている巨乳へと固定されている。すごいな、たゆん、たゆん、揺れてる。

その時、何故か左側から突き刺さるような殺気と視線が飛んできたが、気にしないことにした。

「あ、すみません、山田先生。ぼくとしてたんで。自己紹介ですよね？そんな謝んなくてもちゃんとやりますから大丈夫ですよ」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！織斑君！」

涙目のまま俺に確認を取る山田先生に“大丈夫ですよ”と答えて立ち上がり、俺は後ろを向く。前の席は無いんだし、この方が良いだろ。

「えーっと、織斑一夏です。知ってると思いますが、何故かISを動かすことが出来たんでこの学園に入学することになりました。剣術が少しばかり得意ですが、ISの操縦に関してはまったくのド素人なんで、よろしく願います」

趣味らしいものはあんまり無いんでこの辺りで勘弁して欲しい。だから、その光線でも出そうな輝く瞳で『もって何か喋ることないのか』みたいな視線はやめろ。

「あ、ありがとうございます。じゃあ、次は“男子”繋がりで風間君、お願いできるかな？」

「あ、はい。わかりました」

席に座った俺と入れ替わり、右の席に座っていた“男子”が立ち上がり、俺と同じ様に後ろを向く。

「えっと・・・初めまして、風間真司です。同じくISを動かせたのでこの学園に入学することになりました。趣味は機械弄り、読書、音楽鑑賞、スポーツです。あと、僕も剣術が少し得意です。よろしく願います」

名前から分かると思うが、そいつは日本人だった。

後頭部で一纏めにされた漆黒の髪に紅い瞳。顔立ちは平均よりも整っていて俺なんかよりも上だ（自分のルックスの方が上だと自覚無し）。

身長は俺と同じ170センチ程だが、外見がスレンダーなのでかなり華奢に見える。

（しかし、風間真司か・・・さっき話して思い出したが、まさか全国大会決勝の対戦相手とこんな場所で再会するとはねえ）

実を言うと、俺とこいつは互いに知り合いだ。何を隠そう、全国大会の決勝戦で試合をした相手なのだから。そして、あの外見で本当はかなり筋肉の付いた体をしているのを俺は知っている。

楽しかったなあ・・・あいつとの試合。結果的に俺が勝っただけ、審判が止めて言ったの聞こえずにお互い体力尽きるまで続けたっけ。

まあ何にせよ、同じ境遇の人間が知り合いだったことには少なから

ず感謝だ。おかげで再会から今までの時間でもう名前を呼び合う仲になれた。

でも何でかね？始めて会った時あいつ、俺を見た途端に顔真っ青にして凄え頭痛で苦しんで気絶したんだけど。しかも起きたら突然泣き出して「幸せなんだ」とか言うし。

「はい、ありがとうございます。じゃあ次の人は「すまない山田君、遅くなったな」あ、先輩」

真司が席に着き、次の人に自己紹介を頼もうとしたら扉が開き、何だか覚えのある声が聞こえた。

声の方向に視線を動かすと、そこにいたのは……………

「げえっ！サタン！？……………ぶほおっ！！」

咄嗟に導き出されたその名を口にした次の瞬間、右の顔面に強烈な衝撃が走り、俺の体は背中から床に叩き付けられた。

「誰が地獄の長となつた悪魔か、馬鹿者が。咄嗟に避けおつて」

「つつても拳は顔面にヒットしやがったがな、ちくしょう……………痛つつつ」

痛む頬を押さえながら立ち上がり、俺は目の前の犯人、我が姉、織斑千冬に正面から向き合う。

千冬姉がISに関わる仕事をしているのはかなり前から知っていたし、この学園にいる可能性は充分に高いとは思っていた。だが、今

の状況から察するに恐らく千冬姉はこのクラスの担任。

そして兄弟と再会した最初のリアクションが右ストレートとは、疑うまでも無くこの女は千冬姉だ。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。キミ達新人を一年で使い物にするのが私の仕事だ。私の言うことは良く聞き、そして理解しろ。出来ないものがあるなら出来るまで鍛え抜いてやる。気に食わぬ点があるなら逆らっても良いが、私の言うことは聞け、いいな？」

「キャー！ー！！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私、お姉様のためなら死ねます！……ところで、隣にいる人誰？」

ソニックブームすら生みかねない黄色い悲鳴が停止し、俺や真司を含めた全員の視線が鬱陶しそうな顔をしている千冬姉に移動する。

だが、俺は驚きで目を見開き、無意識に席から立ち上がっていた。

そこにいたのはダークスーツを着た1人の男。銀色の髪と赤い目からもだが、7年振りに見るその顔だけで俺には正体がわかった。

「皆さん、まずは入学おめでとうございます。

この度、クラスの二人目の副担任を務めることになりました、ラ

ーゼ・ベルセルクと申します。基本的には織斑先生と山田先生の補助、臨時や放課後は学園の警備方面を務めています。

それと、私はこれでもORCA旅団より派遣されたリンクスですので、多少はISやネクスト、荒事についての対処に自信があります。助力が必要な時には遠慮無く相談してください。

皆さん、よろしく願います」

そこにいたのは、7年前の空港火災で生死不明となったもう1人の家族であり弟のラーゼだった。

第21話 入学式（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ごめんなさい、篇幅がまるで空気です。

今作の一夏の口調は少々不良っぽくなってます。ですが、原作よりも賢くて強くなっています。でも少しオープン（良いことだと思う）

あと、一夏誘拐の際のIS使用者はこれで誰かはわかったのではないかと。

そしてもう1人の男子ですが……うん、オリキャラです。

・風間 かざま 真司 しんじ

・年齢 15歳

・性別 男

・身長 約175cm

・体重 60kg

・容姿 背中まで届く黒髪を後ろで一纏めにして、目の色は紅。
ルックスの階級は、ラーゼⅡ真司<一夏、という感じ。

・声のイメージ：未定

・趣味や好きなもの：機械弄り、読書、音楽鑑賞、スポーツ、甘いもの

・嫌いなもの：苦いもの（お茶はセーフ、ゴーヤなどはアウト）、上から目線で見下す人間

・性格

穏やかで優しいが、自分が嫌う人間には嫌悪感を露骨に表す。何処か好戦的な部分もあり、“勝負”も好きだが“戦い”の方が好き。

・詳細

剣道の全国大会で一夏と出会った時に前世の記憶を思い出し、自分がISの世界に転生したのだと理解した。

ちなみに、前世では夜中に酔っ払い運転をした車に轢かれて死亡。

前世の友人から聞かされて『IS』のことは知っているが、原作知識はかなり穴だらけで序盤（1〜3巻位）までしか知らない。

ちなみにハーレム願望などは無く、ヒロイン達の応援や手伝いでもするつもりである。あと、恐らく自分と同類のラーゼと話したいと考えている。

ラーゼと違って力を貰ったわけではないが、体をかなり鍛えているので決して弱くない。剣道だけでなく、格闘技全般にも手を付けている。

現在は心の中で自分の専用機がどんなものか少し期待している。

こんな感じかな？

真司の専用機はせっかくなのでA Cだけでなく、選択肢を増やして作者が好きな他シリーズのロボットとかも含めようと思います。

ほら、スパロボOGとかマブラヴとかマクロスとかデモンベインとかアナザーのオリジナル機体とか（他色々）

まあ、当分は試験で更新が出来ませんが……

では、また次回。

第22話 再会と初授業（前書き）

ギャラリー様、ケンス・ハムナー様から感想をいただきました。ありがとうございます。

かなり間が空いてしまい、申し訳ありませんでした。

では、どうぞ。

第22話 再会と初授業

Side Out

「・・・なるほど、この7年の間、ずっとORCAにいたってわけつか。くそ、あの姉貴、サプライズのつもりならセンスが最悪だな」

「まあ確かに、センスはともかく思考パターンが常人のソレじゃないのは確かだな。この間の“手合わせ”でも肉体面の人外っぷりに磨きが掛かってた」

「それはさっきの鉄拳を受けた俺の顔面が何よりも理解してるって」

IS学園の屋上で2人の男が話をしていた。

一般高校の屋上とは違い、草を広げた庭などの新しい発想を設備として具現化させているのだが、その2人は気にもしていない。

学園の制服を着ている1人、織斑一夏は、屋上の鉄柵に上半身を預けながら、疲れ切った様子で屋上から見える学園の風景を見ている。対するもう1人、ラーゼ・ベルセルクは、高い身長に見合うダークスーツを着ており、鉄柵に背中を預けていた。こちらも少し疲れた様子で、話をしながら頭上に広がる青空を見ている。

あの時、ラーゼの自己紹介が終わった途端に一夏は千冬にもまとめて説明を求めたが、返ってきた返事は「席に座れ」という一言と竜巻を纏わせた高速の右ストレート。

理不尽な頬の痛みに出鼻を挫かれた一夏は渋々と了解し、一時間目の授業が終了するまで待った。

そして、終了と同時に一夏とラーゼは打ち合わせをしたわけでもないのに無言で屋上に向かい、これまでの7年間のことを話した。

「……まあ、その、なんだ……千冬姉がそこまでキツイお仕置きしたってんなら、俺からお前に怒ることはもうねえよ。俺としちゃ、お前が無事でいてくれたのなら万々歳だしな」

「ありがとう、って言いたいところだが、本当にいいのか？姉さんの時みたいなのは勘弁だが、数発殴られるのは覚悟してたぞ」

「真剣で殺されそうになったお前にまだ罰を与えるほど俺は鬼じゃねえよ。それに、俺としてはお前がずっと帰ってくる為に戦ってたってわかっただけで満足だよ。てなわけで、この話はここまでのな」

「……ふっ、了解だ……ただいま、兄さん」

「……おう。おかえり、ラーゼ」

互いの顔を見ず、笑みを浮かべる2人の顔は本当に嬉しそうで、そこには7年経っても変わることの無い兄弟の絆があった。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

「そういえばお前、さつきORCAから派遣されたって言うけど、ISのことなんて教えられんのか？あれ女性しか動かせないだろ。つか、俺と年同じはずなのに何で副担任なんて出来んだ」

「この仕事が決まったのは10日以上前だし、知識だけなら専門のプロにも負けない自信がある。生徒に基礎を教えるくらいなら簡単だよ。あと副担任をするのは依頼内容の1つに入るから、依頼主が事前に手を回してくれてた」

「んなこと出来る人間ってだけで依頼主に大体の想像が付くが・・・やめとこう。苦労すんのは今の状況だけで充分だ」

「まあ、此処は色んな意味で男には生き辛い場所だもんな。もう1人の男子、風間真司だっけ？知り合いみたいでよかったじゃないか・・・むっ、すまんが兄さん、時間切れた」

話をしている最中に、ラーゼがふと腕時計に目を向けて傍に置いてあったファイルを持つ。

「あれ？もう休憩時間終わりか？」

「いや、まだ5分ほど残ってるが、これでも副担任だからな。色々仕事があるんだよ。じゃあな、授業中はちゃんと先生って呼んでくれよ」

「わかってるよ。千冬姉の教育的指導は出来るだけ回避したいから

な。ああ、そうだ……出て行くついでに入り口の影に隠れてる
箒にこつち来いって伝えてくれ」

相変わらず鉄柵に上半身を預けて学園を見渡している一夏にラーゼ
は「あいよ」と答えて入り口の方に歩いていく。

どちらとも、屋上で話を始めた時から入り口に隠れていた箒の気配
には気付いていた。2人にとって箒幼馴染なのだから追い払う理由
も無く、そのまま話をしていたのだ。

「よう、久しぶりだな箒」

「あ、ああ……本当に、ラーゼなんだな」

入り口に隠れていた女生徒、篠ノ之箒はラーゼに話しかけられたこ
とに驚きながら、同時に目の前の男が7年前に行方不明となったも
う1人の幼馴染だという事実にあ堵する。

「兄さんや姉さんもだが、お前にだも何も言わずにいなくなったか
らな。すまないと思ってる」

「い、いや、お前はこうして生きてくれていた。それだけで充分だ。
盗み聞きするつもりは無かったのだが、あの時気絶していた私がお
前の決意を怒るなど絶対に無い」

「……そうか。ありがとうな、箒……あ、そうだ兄さん
がいい加減出て来いってさ、6年振りに会ったんだろ？あの朴念仁
を落とすのは大変だろうが、頑張れよ」

「なっ！？う、うむ……では、行ってくる」

一瞬で顔を真っ赤にした篤は呼吸を落ち着け、そのまま一夏の所へと向かっていった。

ラーゼは昔から篤の一夏に対する思いを知っているが、ラーゼの記憶にある昔の兄は筋金入りの鈍感であり、篤の好意はいつまで経っても届かなかった。

今の一夏はどうだか知らないが、昔はその鈍感さと篤の不器用な愛情にラーゼだけでなく千冬までもが頭を悩ませる始末だった。

一夏も篤も子供の頃から年を重ねて成長し、今では立派なイケメンと美女だが、弟のラーゼとしては兄と幼馴染の問題点が少しでも改善されているのを願うばかりだった。

軽い溜め息を吐いたラーゼは心の中で“まあ、がんばれ”と呟いて屋上から出て行った。

* * * * *

Side ラーゼ

「——であるからして、ISを運用するには基本的も国家の認

証が必要なわけです。そして、その枠内を逸脱したISの運用を行った場合は、刑法に基づいて罰せられます」

現在は2時間目。

黒板の前に表示させた3つの空中スクリーンを使いながら、IS運用における原則や刑法について説明している山田先生は何処か生き生きとしている。

その右には腕を組んでいる千冬姉さん、左には手持ちのiPadを操作して事務関係のデータに目を通して纏めるオレがいる。データの内容はIS学園やORCA関係の物で、一定の間隔で指を動かしながら情報に目を通す。

本来ならこういったIS操縦以外の学科方面はオレが教えることになっていたのだが、仕方がなかったんだよ。あんな今にも泣きそうな、捨てられた子犬のような目で頼まれた場合の適切な対応法なんてオレは知らない。

生徒達はそれぞれ話を聞きながらノートを取っている。

流石に初歩中の初歩である今の段階で頭を捻らせる者はいないが、自分達がこれから扱うことになる『兵器』の異常性と危険性を理解しているのは果たしてリリウムとエイプルを除いて何人いるだろうか？

ただ、その生徒達の中で異例の存在である2人の男子、兄さんと風間真司はというと……。

「やっぱりミサイルは素直にフレアとかで迎撃した方がいいのかね

？ISって戦闘機と同じレベルの速さで三次元飛行が出来るんだし、ミサイルの追尾性能だってかなりのもんだろっ」

「でも、その考えだとフレアを持つてなかったらお仕舞いだよ？僕としてはマシンガンで弾幕を張るとか、地面に急降下してすかさず上昇とか、そういう臨機応変な対応が大事だと思うよ」

なんともまあ……

2人とも最前列の席なのを利用して椅子だけを動かし、席と席との中間で5冊それぞれの教科書を広げながら戦闘でのミサイルの迎撃法について話し合っていた。

話題が現在の授業内容からかなり逸れているのもあるが、見たところ2人とも真面目に話し合っているのが余計に性質が悪い。

視線を横に動かすと、オレから近い順番で、2人の話し合いに感心しながら困り顔で苦笑している山田先生、呆れた様子で溜め息を吐く千冬姉さんが見える。

「織斑、風間……今の授業で話しているのはIS運用についての原則や刑法についてだ。何故お前達は数十ページ先の空中戦闘について話し合っている」

「いや、わかってるんですがね……正直、参考書の内容全部覚えたんでつまなくて」

「僕も同じく全部覚えたんで……」

さも当然のように答えた2人の言葉にクラス中の生徒が驚きで目を

見開き、ざわめきが起こる。

確かにあの参考書の見た目はタウンページか六法全書のどちらかにしか見えないが、なんで驚いてる生徒がこんなにいるんだ？あれって必読のはずだろ。

ちなみに、オレ達ORCAのメンバーは全員内容を覚えている。ISはネクストと対を成す可能性が最も高い兵器なのだから当然だ。

「覚えただと？あの量をか？」

「政府のおかげで数週間、自宅に缶詰めでしたんで……暇潰すのにちょうどよかったですよ」

吐き捨てるような兄さんの言葉に姉さんは一瞬辛そうな目をするが、すぐにいつも通りの目に戻る。

「わかった……だが今は授業中だ。今学んでいるのと別のところの話がしたいのなら、休み時間に好きなだけ話し合え。どうしても今話したいのなら教室を出ろ。規則を守れんのなら此处にいる必要は無い」

普通に授業を受けないのなら出て行け。

明らかにそう伝える千冬姉さんの言葉に教室の女生徒達は肩を縮ませるが、兄さんと風間真司は表情を一切揺らさず、一瞬だけ顔を合わせて席と椅子を元に戻す。

あと、気のせいだろうか？

先程の姉さんの言葉を聞いて肩を縮ませる他に、頬を染めながら陶酔したような目で興奮した者や、身をくねらせながら「あああ・・・もつと罵ってください！」とか言ってた女生徒がいたのは。

「罵るだけじゃ足りません！躰を、躰をくださいお姉さま！」

「鞭で私達の体に躰の証を刻んでください！」

「ねえねえ、ラーゼ先生ってやっぱりSの方かな？」

「ふっ、甘いわね。そういう人はきつと叩かれれば即座に順応するのよ。ちなみに私は叩かれる方の特化型よ（キリッ）」

何故だろう。急に悪寒が走り出して体の震えが止まらない。

しかも、心の何処かが1秒でも早くこの教室から出るべきだと叫んでいるのは気のせいなのか？

「あ、そうだ。先生、せっかくだから先生方の意見聞かせてもらえませんか？」

謎の悪寒と震えに困惑していると、手を上げた兄さんの質問の声に気付いて意識が現実に戻る。

「どつという理屈でせっかくだからなんだ・・・私の意見は恐らく実用的ではない。ラーゼ先生と山田先生の意見を聞け」

あくまで予想だが、姉さんの場合なら近接ブレード一本でミサイルをぶった斬りそうだ。

「わ、私ですか！？え、えっと・・・そうですね。ミサイルの誘導式で変わる時が何度かありますけど、私も風間君が言っていたようにマシンガンで迎撃します。ラーゼ先生はどうですか？」

「私ですか？そうですね・・・ネクストに乗っている私では観点が少し違いますから、1つだけ確実なアドバイスを出しましょう。

いいですか？ミサイルというのは、近距離信管型や遠隔爆破を可能にしたタイプでも無い限りは発射した人間の思い通りに爆発させることは出来ません。

ですから、ミサイルを撃墜するのに最低限かつ確実な方法は“ミサイルに一定以上の衝撃を与える”ということです。例えを出すなら・・・」

キンコーンカーンコーン！

説明の途中で鳴ったチャイムの音が授業と説明の終了を告げる。思いのほかオレの説明を聞いていた女生徒が多かったようで、慌しく机の上の教材を片付けていく。

こうして、オレの初授業は随分と中途半端な形で終了した。

S i d e 一 夏

授業が終了して千冬姉、山田先生、ラーゼの教師陣が教室を出て行く。やっぱりあいつも副担任なりにかなりの仕事があるんだろう

な。

「ただど……あいつ、なんか顔色悪くなかったか？しかも少し早歩きだったし。」

「いいところでチャイム鳴っちゃったね、一夏」

「仕方ねえさ、元はと言えばオレ達が勝手なことしたからだしな。また今度聞きやいい」

しかし、本当にいいところで終わっちまったな。一定以上の衝撃を与えるか、なんなんだろうな。

「ちよつと、よろしくて？」

「ん？」

「ああ？」

真司と話をしている中、いきなり背後から話しかけた声に反応して俺は再びドスが入ったような声で答えてしまった。

話しかけてきた相手は、鮮やかな金髪に少しロールを入れた女性だった。肌は白人のそれで、瞳もそれ特有の青色だ。

多国籍などに関係無く生徒を受け入れなくてはならないIS学園では外国人など珍しくもないが、この女には何処か普通とは違う“お嬢様”という感じのオーラがあった。

まあ、俺のガンとばすような視線とドスの入った声のせいで現在は

顔を引き攣らせ、肩を縮ませているんだがな。弾とかにやめろって言われたけど、この返事ってそんなに怖いかな？

「きき、聞いていますの？お返事は？」

「まあ、聞こえちゃいるけどよ………んで？俺等になんか用か？」

「まあ！なんですそのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのでは？」

「……………」

俺と真司の視線が一瞬合わさり、互いに疲れたような小さい溜め息を吐く。

はつきり言っで、この手の女は俺も真司も苦手だ。いや、正直に言えば大嫌いだ。

それっぽい正当な理由なんぞありはしない。単純に、ほぼ間違い無く初対面の相手を当然のように見下した態度が気に入らないのだ。

「真司、お前このミニドリルヘアーの女に見覚えあるか？俺は千冬姉の拳の痛みで覚えが無えや」

「どうだろう？あの自己紹介がやたらと長かった人かもしれないけど、織斑先生とラーゼ先生のことの衝撃的だったから覚えてないや」

どうやら俺と真司の頭の中にはこの女についての記憶が無いらしい。だが、その事実が判明したことで金髪の女は不機嫌そうに目を細め

て見下すような口調になる。

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を知らないとおっしゃるの？」

ふむ、どうやらセシリアってのが名前らしい。

しかし、イギリスの代表候補生か……確か、国家代表の候補として選ばれる人間だっけ？

けどあれって、代表の候補に選ばれたエリートって言えば聞こえは良いけど、突き詰めればその国が良い様に使える実験体ってことじゃないか？

「嘆かわしいですね……本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのですわ！その現実をもう少し理解していただける？」

「おいおい、マジかよ。真司、どうやら俺達どうでも良いことに運使っちゃったらしいぞ？」

「何組構成だったか忘れちゃったけど、随分とありがた迷惑な幸運だね」

「……もしかしなくても馬鹿にしていますわよね、アナタ達？」

失敬な。

運を使っただから幸運だったことだろう。真司だってありがた迷

惑な“幸運”って言ってたし。

「大体、何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね。ISを動かせる男と聞いてもう少し知的な人物だと思っていましたが、期待外れですわね」

「なあ真司、じゃんけんしね？負けた方が此処に残るってルールで」

「気持ちはわかるけど、やめた方が良いよ？無視したら余計に鬱陶しくなるだけだし」

気付かれないよう小声で話す俺達に気付かず、セシリアは黒板の方へと歩きながら言葉を続ける。

なんつつか……普通なら別に怒っているかもしれないだが、セシリアの言葉は無理矢理にでも自分を優秀だと自慢するような感じがするので怒る気すら無い。

ただ、その発言がいい加減に鬱陶しく感じてきたのは間違いないと思う。

「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ？わからないことがあれば……まあ、泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。なにせ私、入試で唯一人、教官を倒したエリート中のエリートなのですから」

「入試？……ああ、それなら俺も……」

「一夏、その先は言わない方が良いよ。絶対に面倒なことになるから」

真司の弦きを聞き、俺はよく考えて発言を中止する。

突っ込んできたのを避けたら相手が壁に激突して気絶、勝利なんて話でもこいつが聞いたら俺の話などまともに聞かず噛み付いてくる。

「あら、そろそろ時間ですわね」

ようやくか。なんか、今までの人生で一番長くて辛い休憩時間だったな。

（やっぱ、こういうタイプの女には下手に反論せず、適当に受け流すのが一番良いな・・・）

そんなことを考えながら、俺と真司は次の授業で使う教科書とノートを机の上に取り出す。

この時、クラスにいた全員がこの休憩時間の話し合いは終わりだと思っただろう。実際、俺も真司もそう思っていた。このまま何もなく、終わると。

だが・・・・・・

「まあ、よく考えてくみてくださいいな。少なくとも、“あの貧弱そうで場違いな男性教師よりは”上手に教えて差し上げる自信がありますから」

バアアアアン！！！！

・・・セシリアの最後の言葉を聞いた瞬間、気が付けば俺は自

分の机に拳を叩きつけていた。

『・・・・・・・・・・』

ただ拳を叩き付けたものとは思えない豪音。そのせいで教室中の音が無くなり、生徒全員の視線が俺に集中する。

だが、俺はそんな視線など気にも留めていない。俺の意識の全ては、驚きで身を固まらせたセシリアと先程の言葉に対する怒りで埋め尽くされている。

今すぐにでもそれを開放しそうな勢いだったのだが・・・・・・・・。

「落ち着け、一夏」

威圧感を纏わせたような声を出す真司が俺の肩を掴み、その言葉で頭の中が少し落ち着いた。

キンコーンカーンコーン！

そこへ、トドメを差すようにチャイムの音が鳴り、怒りは完全に霧散してしまった。

「くそがつ・・・・・・・・」

不完全燃焼となってしまう俺は吐き捨てるように呟き、心底不機嫌な態度を隠さず席に座る。

それに続いて真司も席に着き、他の女生徒達も我に返って席に着き始める。

予想できた結果だが、再び飛んでくる無数の視線が、今は比べ物にならないほど鬱陶しかった。

第22話 再会と初授業（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ちくしょう、代表決定戦まで持つていけない……

この作品の一夏君は一応ISについて一通りの知識を備えているので、基礎知識だけならほぼ完璧です。

あと、1年1組は千冬のファンを通り越してカオスな趣向を持っている人達がたくさんいるようです。

次回はせめて代表戦の開催決定くらいまで行きたいなと思います。

では、また次回。

第23話 代表候補生（前書き）

ギャラリー様、アストラル様、ケンス・ハムナー様から感想をいただきました。ありがとうございます。

とりあえずメリークリスマス（遅い）。そして、もうすぐ年明けです（微妙に早い）。

それ関係の短編とかを投稿できない私を許してください。

では、どうぞ。

第23話 代表候補生

S i d e ラーゼ

「そうか・・・休憩時間の間にそんなことがあったのか。突然呼び止めてすまなかったな。ありがとうな、リリウム、エイップール」

今はIS学園での新学期1日目、放課後。

全ての授業を終えて無人となった教室の中。オレは学園に来る前に決めたサインでリリウム達に教室に残るように指示を出し、話を聞いていた。一応生徒や教師に見られないよう充分に警戒している。

そして、今話を聞いた結果、どうやら1時間目が終わった休憩時間に兄さんと風間真司の2人がイギリスの代表候補生と一悶着を起こしたらしい。

まあ、悶着と言っても代表候補生の方が一方的に突っ掛かっただけらしいが・・・どうやら、最後の最後で代表候補生がオレの悪口を言つて、兄さんがついキレてしまったそうだ。

なるほど・・・二時間目の授業で兄さんが明らかに不機嫌だったのはそういうことか。そのおかげで、オレは涙目の山田先生を必死に宥めることになったわけだ。

「いえ、お兄様。お礼を言われるようなことはありません・・・『ビシッ!』あうっ!」

「今はラーゼ先生な。織斑先生のように出席簿で叩くわけにはいかないから罰としてデコピンだ」

につこりと微笑んだリリウムの額にデコピンをかます。リリウムは少し涙目になり、両手で額を押さえながらオレを見上げる。

「ううゝ…………絶妙な威力調整のせいで地味に嫌な痛みですう…………」

「織斑先生の出席簿とは違う意味でやられたくないだろ？そういうえは2人共、IS学園での初日の感想はどんな感じだ？」

「私は楽しかったです！休憩時間の時に仲良くなった女の子が私の髪を綺麗だつて言ってくれて、色んな国の話とかをして、それから…………それから…………」

「はははっ…………エイ！プールもリリウムも、楽しそうで何よりだよ」

良い笑顔で楽しさを表現してくれる2人の頭を優しく撫でる。

本当ならこの2人は高校生として生活するのが当たり前なのだ。だから、こうやって今の状況を喜んでくれるのはオレとしても嬉しい。

「んじゃ、お前等はそろそろ寮に行った方がいい。部屋の組み合わせは2人とも同じ部屋になってるはずだから、19時になったら通信機を使ってオレに連絡してくれ」

「「はい」」

リリウムとエイ＝プールは笑顔でラーゼに一礼し、そのまま寮に向かっていた。

2人が立ち去り、教室の中に一人残ったラーゼは腕を組み、壁に背中を預けて夕暮れの空を見る。

「セシリア・オルコットか……特に接触する理由も無いからノーマークだったが、少し面白いことになりそうだな」

* * * * *

S i d e 一夏

「痛つつ……ちくしょう。箒のやつ、木刀で渾身の胴はねえだろ。直撃したら俺でも肋骨の数本折られてたぞ」

初日の授業全てを終えて、俺と真司は学園の寮に向かった。

政府から最初の1週間は自宅から通うように言われてたんだが、せっかく部屋が空いたんだから是非使わせてもらおう。

……と、ありがたく思いながら指定された寮の部屋に入ったんだが、なんとその部屋には箒がいやがったのだ。しかもシャワーを

終えたばかりだったようでバスタオルを巻いただけの半裸姿だ。

んで、半裸を見られたその幼馴染は自分の荷物の中から木刀を取り出し、俺に襲い掛かってきた。あのまま部屋の中に居たら俺は亡き者にされていたかもな。

しかし、殺されそうになった後で言うことじゃないだろうが、流石は俺と同じ全国大会優勝者。羞恥心と怒りで顔を真っ赤にした精神状態でも、その太刀筋はかなりのものだった。

一瞬で部屋の外に逃げる判断をした俺でも避け切ることが出来ず、今でも木刀が掠った右脇腹に鈍い痛みがジリジリと走っている。

でも、よく考えたらおかしくねえか？ISが主流でも普通、教育者が若い男女を同じ部屋にするか？しかもその相手が知り合いの筈って、なんだか誰かが部屋割りを急遽変更してるような気がする。

けど悪いことしちゃったな、穴だらけになった扉越しに一応誤解だつて説明したけど、今度しっかり謝らないとな。でも、まずは・・・。

「今日の夜を何処で過ごすか、だよなあ・・・ううっ、春でもやつぱり夜は冷えるな。さて、どうするか・・・」

寮の中に戻るわけにもいかないの、とりあえず今は校舎の玄関近くにいたのだが、当然今は行く当ても無い。いきなり千冬姉に頼るわけにもいかねえし、やつぱり野宿するしかないか。

鍛錬で登山にも行ったことがあるから野宿は別に苦でもねえし、この学園って庭とかかなり整備されてるから充分快適だろ。

うっしっ！　そうと決まればまずは雨風凌げる場所を探さないとだな！

「・・・意気込んでいるところ悪いが、こんな所で何をしてるんだ、兄さん」

「え？ラーゼ？」

今夜の我が家を求めていざ駆け出そうとした時、後ろから掛けられた声に振り向く。

そこには、手提げ鞆を片手に持ったダークスーツ姿のラーゼがいた。本人も自覚あるらしいが、どうにも教師というよりは秘書とか執事、もしくはホストとかにしか見えねえな。

「あと1、2時間で消灯時間だぞ。まだ寮に行っていないのか？」

「ああ・・・実はな・・・」

仕方なく、俺は寮の部屋であったアクシデントと現状を詳しく話した。

当然我が弟は「兄さん、そりゃねえよ」と短く分かりやすい感想をゴミを見るような冷たい目でくれたよ。ちくせう・・・何も反論が出来ない自分が憎いです。

「はあ・・・今から姉さんに連絡を入れても無理だろうしな。仕方ない、部屋の用意ができるまではオレの所に泊まりなよ」

「え？お前の所って・・・寮にお前の部屋があんのか？」

「生徒の兄さんならともかく、副担任で男のオレに寮の部屋があるわけないだろ。ORCA本部の方でトレーラーハウスを用意したんだ。出発前に改造は終えたから、見た目よりは快適だよ」

と言って歩き出したラーゼの後を追うと、数分でそのトレーラーハウスは見つかった。特に目立つ色などは見当たらず、外装の殆どは白色で染められている。

俺は始めてみるトレーラーハウスに感動しながらラーゼに続いて入り口に辿り着く。

すると、ラーゼは何かを思い付いたらしく、入り口の自動ドアのコンソールから伸ばした接続端子をいきなり自分の首の後ろに差し込んだ。

そのまま数秒経ってラーゼは俺にドアのパネルに触れてくれと言ってきた。どうやらトレーラーハウスに入るには登録した指紋か網膜パターン、あるいはAMSを通した認証が必要らしい。

7年前からAMSとかラーゼの体のことは知ってたから端子を首に差すのは驚かないが、やるならその前に少し言ってくれとありがたいな。いきなりやられると精神的にキツイから。

「どうぞ。と言っても、オレもまだあまり入ったこと無いけどな」

ラーゼはそう言ってダークスーツを脱ぎ去り、Yシャツ姿のまま自室らしき部屋に入ってしまった。

改めてトレーラーハウスの中を見ると、俺はその設備の良さに

感服する。外から見ても決して小さくは見えなかったが、中の広さは予想以上だった。

「これ絶対に基準のトレーラーハウスの広さを逸脱してるよな。かなり弄ってやがる」

「当然だろ。3年間暮らす家だし、せつかくだから盛大に改造したんだよ。それに、オレの他にもここを使う奴がいるからな」

声に振り返ると、そこにはダークスーツを脱いで黒いシャツと無地の黒いズボンに着替えたラーゼがエプロンを着て、何処か楽しそうな笑みを浮かべていた。

「おっ！？もしかして今日はラーゼの飯が食べんのか？」

「7年間ずっと腕を磨いてきたからな。今では和、洋、中に限らず、何でもござれだ。何がいい？」

「マジで！？んじゃ中華！麻婆豆腐とエビチリ、ご飯も特盛りで！」

「はいよ。他には……餃子とシューマイ、どっちが良い？」

「餃子！」

それから、俺は7年振りに食ったラーゼの料理を残さず平らげ、そのまますぐにソファアーの上で寝てしまった。ソファアー自体がかなり良い物だったし毛布とかも借してもらった。

慣れない環境で疲れたのかもしれないが、それよりも、7年振りに再会した弟と楽しく夕食を食べることが出来た。それが嬉しかった

という理由の方が大きいかもしれない。

S i d e ラーゼ

久々に手料理を振る舞った翌日の朝、ソファで快適そうに寝ていた兄さんを叩き起こし、オレ達はそのまま2人で学食へと向かった。

テーブルに向かう途中、何やら兄さんが合流した風間真司を混ぜて筈に謝っていたが、恐らく昨日の寮部屋であったアクシデントのことだろう。

長引きそうなので、オレは2人を待たずに朝食を取っている。副担任というのは意外と担任よりも忙しい時さえ有るのだ。なるべく時間を無駄にしたくない。

「あのおーラーゼ先生……隣、いいですか？」

右側から掛けられた声に視線を移すと、兄さんと同じ1年の女子生徒3人が朝食のトレーを持って返事を待っていた。ただ……その内の1人が随分代わったパジャマ姿なのは何故だ？

「構いませんよ。どうぞ……」

返答を聞き、女子生徒3人は「よしっ！」と言ってガッツポーズを取りながら席に座った。

まあ、兄さん程でもないが、オレもこの学園では少し珍しい存在だ。他の生徒から向けられてくる多くの視線やざわめきも仕方ない。

「うわ、ラーゼ先生って朝すっごい食べるんですね」

「ん？まあ、女性から見たら多いかもしれないね。私自身、男性では多く食べれる方ですから、自然とこの位の量になってしまいうんです」

トレイの上にあつた料理を全て平らげ、食後のコーヒーを飲みながらチラリと女子の食事メニューを覗いてみると、1、2枚のパンに飲み物を1杯、あとはおかずを少なめに載せた皿が一枚だけ。パジャマ姿の女子だけは一家の食卓に並びそうなメニューと量だった。

やれやれ、太りたくないのは女性として仕方がないとはいえ、そんなに少ない食事で足りるのか？オレの知ってる大人の女性陣（セレン、ウィン・D、メイ、千冬など）は普段の食事でもかなり食うし、酒が入ればさらに量が増すぞ。

「あゝ、コーヒーだゝ。先生って大人だねゝ」

「いえいえ。コーヒーと大人はそんなに関係ありませんよ。私がこの苦味を好んでいるだけです。さてさて、私はそろそろ失礼します。皆さん、H Rに遅れてはいけませんよ」

「はい！」

「ははっ、よろしい」

その後、長話をしていたせいで朝食を急いで食う羽目になった兄

さん達がいたらしい。

さてと、H Rまでに大体の書類を片付けておきますか。

* * * * *

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備について説明する」

「あ、やばい、鼻がっ・・・へっ・・・へっ・・・へっ・・・イグニッションッ!!」

「・・・諸君、ここに1本の近接用ブレードがある。人間に使うとどうなるかよく見ている」

「織斑先生、わざわざ運んできたISの装備を生徒に試さないでください」

日本刀の形をした近接用ブレードを構える姉さんを後ろから羽交い締めにして止める。IS用の装備を生身で扱える身体能力だけに、肉体を改造されているオレでなければ抑えられない。

しかし兄さん、何をどうやってたら“へっ”を断続的に言った後“イグニッション”になるんだ。一体くしゃみで何を点火させるつもり

だっ たんだ。

「……すまない。取り乱した」(スパンツ!!) 出席簿で一夏の頭を叩いた音。

「いえ、お気になさらず。それより、まだクラス代表を決めていませんが……この時間で決めてしまつては？」

「むつ、そういえばそうだったな。……では諸君、これより再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表は対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……簡単にいえばクラス長だな。ちなみに、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ちなみに、口には出せないが現時点ではこの1組が断然トップだ。セシリア・オルコットを除いてもこのクラスにはリリウムやエイ・ブルという隠れた戦闘のプロがいる。

一緒に来た女性陣全員には事前にオレが設計したIS、実質上の“専用機”を渡してあるので、IS同士の戦闘でもあの2人がトップクラスになるだろう。機体の性能でも、搭乗者の実力でも。

「クラス代表には自薦他薦を問わない。誰かいらないか？」

まあ、そんな情報を知らない女子達はたぶん……

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私は風間君を推薦します！」

……こんな風に、2人しかいない男子生徒に面白そうだと期待して推薦するわけだ。

「だってさー夏、どうする？」

「わりいな真司、さっきの出席簿のダメージが首にも影響を与えてそれどころじゃねえんだ」

推薦された当の本人達は辞退出来ないとわかっているようで冷静だ。もしかしたら現在微調整を施している首の骨の方が重要なだけかもしれないが。

「納得がいきませんわ！そのような選出は認められません！」

他薦や自薦がまったく途絶え、このまま決定しそうなところでバンツと机を叩く音が聞こえた。

クラスの視線が向く方向にいたのは、セシリア・オルコット。兄さん達は未だに首の微調整に没頭しており、そちらを見ていない。

「男がクラス代表なんて恥晒しもいいところですわ！この私に、セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるの！？」

兄さん達の様子に気が付かないセシリア・オルコットはそのままスピーチを続ける。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは当然！それを、物珍し

いという理由で極東の猿にされては困ります！私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスを見に来ているわけではありません！」

「ねえ一夏、当然だって言うなら何で自分で立候補しなかったのかな？」

「よし、あと少しで……あ？そりゃアレだろ……推薦してほしかったんだろ」

「ぐっ！」

「……あー。なるほど」「」「」

間違いなく罵声である言葉に対し、相変わらず兄さん達はセシリア・オルコットの方を見ないで会話を続けている。当然、その会話が罵声を吐いた本人の凶星を明らかにしたのは気付かない。

「だ、大体！文化としても後進的な島国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛であり――」

「暮らすことも苦痛なら無理せず帰ればいいのに」

「マゾなんじゃね？それかイギリス政府から行ってこいって命令受けて逆らえないとかな……よしと、ここをこうして……お？首治った」

再び振り向かずの会話。セシリア・オルコットの顔が怒りで真っ赤に染まってくる。

しかしあの女、さつきから元気良く話してるが自分の発言内容を理解してんのか？それとも本当に大した度胸を持っているのか。

極東の猿と言うが、このクラスの担任と副担任は“元世界最強”と“日本の元代表候補生”だぞ。

そつと視線を横に動かしてみると、山田先生は額の微かな青筋を綺麗な笑顔で隠し、姉さんは青筋などは浮かべていないがその目の中には薄くだが殺意に似た冷たさが宿っている。

兄さんと風間真司、オレと箒、リリウムとエイプルはその怒気と殺気に気付いているが、発言者はそれに露ほども気付かない。

しかも文化としても後進的とは正直驚きだ。この学園が作られることになった原因を作ったのが何処の誰なのか忘れたわけではあるまいに。

（あの人が聞いたらどうなるか・・・多分イギリスにハッキングされたミサイルの雨が振るな）

「織斑先生、結局クラス代表は誰になるんですか？」

「なに、簡単なことだ。3人の候補の中から一番実力の有る者を選べばいい」

そう言った姉さんは笑みを浮かべながら一瞬だけ兄さん達に視線を移した。それに気付いた兄さんは嫌な予感でもしたのか、重い溜め息を吐いた。

セシリア・オルコットは当然自分が選ばれると思い込んでいるよう

で、上機嫌そんな笑顔だ。

「候補者3人、織斑、風間、オルコットにISの勝負を行わせ、総合戦績で一番優秀だった者をクラス代表とする」

その言葉を聞き、兄さんと風間真司は疲れたように重い溜め息を吐き、セシリア・オルコットは笑顔のまま一瞬石化し、再び怒りの表情に変わる。

「な、何故ですか！？勝負などせずとも実力的に私が一番優れているではありませんか！例え2人同時に相手したところで負けはしません！」

「ならばそれを試合で私に証明してみせろ。代表候補生だろうが特別扱いされるなどと思うな。反論は許さん。織斑、風間もそれでいいな？」

「僕は構いませんけど……」

「つか、反論は許さんって言うってから聞くって、軽く脅迫してんじやねえか。どうしようもねえじゃねえだろ……。あ、そうだ。織斑先生、少しお願いがあります」

「言ってみろ」

どうしても納得できないセシリア・オルコットを簡単に抑え込み、姉さんは何かを思い付いた兄さんへと目を向ける。

「俺と風間の2人ってISに関しては素人なんで、そっちの代表候補生さんが言っただけに2対1で試合してもいいですか？1人ずつ

相手するより早く済むっしょ?」

「オルコットが自分で言ったことだ。許可する。だが気のせいかな? どうにもお前の発言の中には“本番が手を抜いて早く終わらせませう”という姿勢が感じられたが」

「ちっ、わざわざ言いやがって……んじゃあ、やる気出すためにもう一つお願いします」

「何故お前のやる気を出すために取引が必要なのかわからんが……まあいい、言ってみろ」

呆れたように溜め息を吐く姉さんから発言許可を貰い、兄さんは席から立ち上がって何故かオレの方に視線と体を向けた。

「もし俺等がそっちのオルコットさんに勝ったら、ラーゼ先生と勝負させてください。もちろん、ISとネクストを使った勝負で」

一瞬、空気が凍った。

兄さん以外の全員が驚きで目を見開き、数秒後に生徒全員にざわめきが起こる。

「……ほう。副担任との一体一勝負か……ラーゼ先生、どうかな?」

姉さんは反対せず、楽しそうな、期待するような微笑を浮かべながらオレの方を見た。はつきりと反対しなかったということは、姉さん個人は了承する、ということだ。

あとはオレ個人の意思決定だけ。受けようと、断ろうと、オレの自由だ。

だが、オレの返答は聞くまでもなく、すでに決まっている。

「喜んで承諾します。私個人としても、非常に楽しみですよ」

そうだ。何を迷う必要がある。

今の兄さんとオレはISやネクストなどの第二の肉体を得たことで同じ土俵に立っている。そんな状態で、何の縛りも無く兄さんと勝負が出来るのだ。嬉しく、楽しくて仕方が無い。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜日、第3アリーナで行う。織斑、風間、オルコット、ラーゼ先生の4人はそれぞれ“準備”をしておくように。では授業を再開する」

ぱんつと姉さんが手を叩き、話を強制的にそこで締める。

兄さんがゆっくりと席に座る。その時、偶然オレと数秒間、目が合った。

「・・・・・・・・・・」

会話などは当然無いが、気が付けばオレと兄さんは一瞬だけ、笑みを浮かべていた。

第23話 代表候補生（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

一夏と真司は首の骨が気になってセシリアの発言には大人の反応です。さらにはやる気出すから、というとんでもない条件でラーゼに勝負を挑む始末。

山田先生と千冬さんのことに関しては原作読んでふと気付いたんで書きました。実際、セシリアってスゴイ発言してましたよね。

次回は多分、作者が考えている真司の専用機についてだと思っています。
では、また次回。

第24話 それぞれの専用機（前書き）

ギャラリー様、ケンス・ハムナー様から感想をいただきました。ありがとうございます。

あと、PVが40万を越えました。皆様ありがとうございます！！

なんか番外編でもやろうかな・・・

では、どうぞ。

第24話 それぞれの専用機

S i d e 一夏

「織斑、風間、お前達のISだが、準備まで時間が掛かる」

休み時間が終わり、授業の準備をしたところに、千冬姉がオレと真司にそんなことを言ってきた。

「準備？訓練機で使えるやつはないんすか？」

「政府からの決定だ。データ収集も兼ねて、学園の方で専用機を用意することになった」

専用機。その言葉に反応して教室中にざわめきが走る。

専用機というのは、字の通り、その搭乗者の為だけに用意された機体のことだ。

だが、筈の実の姉、束さんが開発したISコアの総数は467。つまり、現在でISは467機しか存在しないわけだ。

その467機の中で専用機を与えられるのは、本来ならかなりの実力を持つエリートだけ。

千冬姉が言ったが、俺と真司に専用機が与えられるのはISを動かせる男のデータ収集。わかりやすく言えば、ただのモルモットだ。

「はっ……専用機を与えてモルモットのご機嫌を取ろうって

か？」

「量産機じゃ大したデータが取れない、ていうのも有るかもね。どつちしにしろ、薄汚れた善意に変わりは無いけど」

俺も真司も自分の立場や状況は充分にわかってるつもりだ。

だからこそ、たとえ裏の目的があろうが他の操縦者より優位に立てるなら、こういう手配もとことん利用してやる。

そして、絶対に俺達は思い通りにはなつてやらない。

専用機を手に入れて、この学園で充分に力を付けるまでは存分に政府からの甘い蜜を利用する。

まあ、政府や世界が俺達を利用したり危害を加えないのなら、そんなつもりはないがな。

「先生。オレと真司はその専用機で1週間後に試合するんすか？」

「そうだ。一週間後には間違いなく到着するそうだが、詳しい日取りはわからんから試合の当日に届く可能性もある。覚えておけ」

「あれ？それじゃあ、もしかして性能の詳細とかも全く分からずに試合するっていうのも有り得るんですか？」

「おいおい、マジかよ。代表候補生相手に性能が全くわからん機体で挑めつてのか？」

代表候補生のIS操縦時間がどれだけだか知らねえけど、俺達みた

いな素人とは比べるまでも無いのは間違いないねえってのに。

「有り得るな……だが風間、お前の専用機に関しては違いかもしれん」

千冬姉は真司に問いに即答するが、少し言葉を濁した。

俺と真司は顔を見合わせ、同時に首を傾げる。なんで真司だけ？もう大体完成してるとか？

「お前達の専用機を仕上げるはずだった企業が1機だけで手一杯だと言つてな……まだ未完成状態で機体を学園に送ってきた。政府から技術者を呼んでいる時間も無いので、現在はラーゼ先生がお前の機体を作っている」

そういえば、よく見るといつもは教卓の近くに立っているラーゼの姿が無い。

つか、あいつ“知識だけなら専門のプロにも負けない自信がある”って言つてたけど、ISの機体開発まで出来んのか？

もう授業出ずに生徒に技術教えた方がいいんじゃないのか？

「……そういうわけで風間、お前の専用機の性能が知りたいならラーゼ先生に会いに行つて聞いてみるといい。織斑の方は到着まで待て」

そう言つて千冬姉は踵を返して歩いていく。

だが、そこで1人の女子生徒がオズオズと手を上げて質問した。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

おい。即答してつけど、生徒の個人情報バラしていいのか。まあ、篠ノ之なんてかなり珍しい苗字なら少し考えれば分かるだろうが。

そして、千冬姉の言葉で再び教室にざわめきが走る。ちなみに、元凶たる本人は後悔などしてないって顔してるけど、生徒1人都合も考えようぜ先生。

「えええええー！すつごい！」

「篠ノ之さんも同じ天才だったりするの！？今度ISの操縦とか教えてよ」

ざわめきが充分に聞こえる声となり、何人かの女子が箒の元にわらわらと集まる。

その光景を見て、俺はこれから起こるであろう事態に備えて耳を塞ぐ。近くにいた真司も、俺の行動を見て同じく耳を塞ぐ。

「あの人は関係ない！！」

数秒後、箒は俺が予想したとおり、集まる女子達の声を上回った大声を出す。

その大声で、集まっていた女子達はもちろん、今から席に向かおう

としていた女子までもが盛り上がり気味だった所に冷水をぶちまけられたかの如く静まり、固まってしまう。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何も無い」

棘のある口調を隠そうとせず、箒はそう言って窓の外に視線を向けた。

数秒後、固まっていた女子達は、それぞれ顔に困惑や不快感を表して席に戻る。

（まあ、今のは女子達が悪いのかもしれないが、箒の態度にも問題有りだな）

もう少し角の取れた言い方をすりゃあ、女子達も素直に自分が悪いって思っただろうに。

（……でも、箒と束さんって、そんなに仲悪かったっけか？
良くもなかったけど）

ていうか、束さんは確かに頭が良いが、身近に話した身として言えばアレは“天才”っていうより“天災”だろ、絶対に。

しかも箒があの人と同じになんて冗談じゃねえぞ。間違いなく、俺が千冬姉、どっちかの胃が蜂の巣になって大量吐血だ。兄弟揃ってストレスで胃をやりましたとか、笑い話にもならねえ。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令を」

「あ、はいっ！では、今日は昨日の続きから始めます。教科書の・・・」

教室の雰囲気良くない方に傾いても千冬姉はまったく動揺せず、山田先生もプロとしてすぐに授業を始めた。

（後で箒と話してみつか。このままじゃ少しマズイだろうしな・・・）

そんな幼馴染としてのフォローを発揮した俺だったが、休み時間の結果は、「フェアな条件で戦えるようで安心しましたわ！」と再びセシリアに聞きたくもない自慢話を聞かされ、一緒に飯を食いに行こうと誘った箒に古武術でブン投げられる、という無残なものだった。

しかも、気が付けば真司の奴は教室から姿を消していた。早速ラージェのところに行ったのか、とにかく教室に残された俺は、背中に激痛を感じながら箒と飯を食いに行くことになった。

当然、箒がおとなしく連れて行かれるわけがなかったが、「いいかげんにしろ」と頭に軽い拳骨をくれてやって連行した。こちらら古武術でブン投げられたんだ、コレでお相子だろ。

だが、食堂で飯を食っている時でさえ先輩の女子から「ねえ、キミって噂の子だね？私がISのこと教えてあげようか？」と言われて邪魔が入る。

どうやら親切心らしいが、それならその見え見えの好奇心をどっかに捨ててきてほしいもんだ。

とはいえ、正直にそう伝えるわけにもいかないのでもう1人の男子と一緒に鍛えるつもりなんで結構です。別に必要ありません」と、もう来んな、という感じの意思を込めて追い払った。

実際、真司と2人でそう話し合ったしな。知識は一応あるし、なんとかなるだろ。

んで、そう返答したら先輩だけでなく、箒まで驚いて悔しそうな顔をしてた。いや、なんで？

しかも、何故か突然、「放課後、剣道場に来い。久しぶりに鍛えてやる」とか慌てたように言われ、俺は強制的に放課後の予定を決められてしまった。

いや、だから、なんで？

* * * * *

S i d e 真司

休み時間に入ってすぐ、僕は教室を出てIS学園の整備課にやってきた。

織斑先生が言ったように、僕の専用機の詳細が知りたいっていうのもある。だけど、本当はもう1人の副担任であるラーゼ先生と話が出来ると思ったからだ。

（でも……一夏の専用機はきつと同じなんだろうな）

実を言うと、僕は前世の自分の記憶を持っている。言葉にするなら転生者というやつだ。

そして、前世の記憶の中で、友人から少し読ませてもらった本があった。その本の名前は『IS - インフィニット・ストラトス』。それは僕が今生きているこの世界の名前でもある。

だけど、今僕が生きているこの世界は、本で読んだ『IS』のそれとは大きく違う。

AC、MT、ネクストなんて機動兵器はもちろん、ORCA旅団、企業連、そんな名前の組織も存在しなかったはずだ。

最初は混乱したけど、このIS学園に来てなんとなく、クラスの自己紹介でラーゼ先生を見た時に直感で分かったことがある。

この人も僕と同じなんだって。

幸か不幸か、僕も原作主人公の一夏と同じくISを動かすことが出来た。そして、ラーゼ先生はネクストを所有するリンクスの1人。

しかも、一夏は秘密だって言ったけど、ラーゼ先生は、一応織斑の家に養子として迎えられたことがあるらしい。

曖昧ではつきりとはしない覚悟だけど、とにかく、僕は玉碎覚悟でラーゼ先生に話をしようと思っていた。

「すみません。1年1組の副担任のラーゼ先生って何処にいますか？」

「え？あの男の先生？あの人なら、かなり奥の内装を使ってるわよ」先輩であろう女子生徒が指を差した場所は、本当にかなり奥の方だった。ラーゼ先生って、意外と控えめな性格？いや、単純に機体を他の人に晒したくないだけか。

先輩に礼を言つて奥の方を目指すと、そこには分解された日本製の量産機、打鉄やフランスのデュノア製、ラファール・リヴァイヴが分解された状態で置かれている他に、レンチやスパナなどが入った工具箱などがある。

（あれ？さっきの先輩は工具なんて使ってたのに……）

「……おや？風間君じゃないですか。どうしてこんな所に？」考え事していると、いつの間にかラーゼ先生の声が少し前方から聞こえた。考え事をしていたとはいえ、気配をまったく感じられなかったおかげで充分に驚いた。

床から顔を上げると、そこには整備士のような作業着を着たラーゼ先生がいた。スーツ姿も似合っていたが、頬や服をオイルで汚し、汗拭き用のタオルを首に掛けた今の姿も様になっている。

「いえ、その……織斑先生が僕の専用機は今ラーゼ先生が作

つてるって聞いて……」

「ああ、なるほど。一応、外見は当日のお楽しみということで見せられませんが、スペックなら完成版のデータが有りますが、見てみますか？」

「あ、はい。お願いします……でも、なんでラーゼ先生そんなにオイルで汚れてるんですか？他の生徒さんはISスーツ姿で汚れてませんでしたよ」

「でしょうね。彼女達がやっていたのは機体のスキャンと修復や構築、あとは内装面の出力調整などです。私が今やっているのは、武装の開発ですよ……はい、これがデータです」

僕の質問に苦笑しながら答えたラーゼ先生は授業中に使っていた黒塗りのiPadを取り出し、数回画面をタッチして僕に渡してきた。

ラーゼ先生の言った言葉の意味がよく理解出来なかったが、僕は受け取ったiPadの画面に目を向け、そこに映されている情報に目を通して……数秒後、意識が硬直した。

「………なんですか……このIS……」

「まあ、驚きますよね。私も最初は信じられなかったんですが……コアに登録されているデータを見てみたら間違いありませんでした。それが、完成時のスペックです」

「でも……こんなISの設計なんて、一体誰が？そもそもこんな機体、作れるんですか？」

「機体の基礎フレームは到着した時からすでに6割近く仕上がっていました。搭乗者登録もしていませんから、内装面はISコアに任せるしかありません。だから私は現在、残りの武装開発をしているんですよ」

いつのまにか内緒話をするように密着し、少し離れると肩を組んでいるように見える距離だ。近くにいと改めて分かるけど、ラーゼ先生は本当に背が高いな。

僕も170センチくらいあるけど、ラーゼ先生は180を超えてるんじゃないだろうか。

それにしても、基礎フレームが6割出来上がったのに未完成の状態でIS学園に丸投げした？よく考えればそれって色々おかしくない？

そこまで仕上げておいて、なんで残りの作業を放棄したんだ。こんな機体を作ることが出来るんなら武装の開発だってプランが出来てたはずなのに。

ラーゼ先生も心の中では似たような考えなのか、何処か納得がいかないような顔だ。

あれ？よく考えたら今の状況って、あの話をするのに絶好の機会だよな。聞いてみようかな？

「あ、あの……ら、ラーゼ先生……」

「ん？おや、更識さん。どうかしましたか？」

そんな時、肩を組んでいるような密着状態の僕等の後ろから1人の女子生徒が声を掛けてきた。所々に内はねがあるセミロングの蒼い髪、角が四角型の眼鏡を掛けた瞳は細めで虚ろな感じ、そんな子だ。何処か他人を寄せ付けないような雰囲気があるその少女は、モジモジしながら俯き気味だった顔を上げてラーゼ先生と僕に視線を合わせた。

「あの……機体データを見たくて……」

「ああ、ネクストのですか？標準機のデータでよいのなら……これですね」

「どうも……えつと、じゃあ……」

「はい、好きにご覧になって頂いて構いませんよ」

笑顔でデータディスプレイを更識さんって子に向けて、ラーゼ先生は僕の近くに戻ってきた。

ここからだとは反対でよく見えないけど、更識さんが見てるディスプレイには、機体のタイプの名前なのか、AALIEYAHとか、HILBERTとかの名前の下に詳しい機体構造が書いてある。

とりあえず、僕は声を出さずに視線だけでラーゼ先生に“誰ですか？あの子”と話しかける。

「更識^{しんし}簪^{かん}さん……1年4組所属の生徒で、日本の代表候補生です。本当なら此处、整備課を使うのは2年からは基本なんです、彼女が完成途中だった自分の専用機を独力で実用化するという特例

で此処を使ってるんです」

「完成途中？僕の専用機と似たような状況にでもなったんですか？」

「いえ。彼女の専用機……現在名『打鉄式』を開発していた企業名は倉持技研。現在、織斑君の専用機を開発している企業です」

「一夏の専用機と同じ……。あつ、もしかして、完成途中になつたのって……」

「織斑君の専用機開発にスタッフ全員を割いたから、でしょうね……。話してくれた時、本人も口には出しませんでした、かなりショックだったようです」

なるほど、ISを動かせる男の専用機と代表候補生の専用機、社会的な利益をもたらすには前者の方が明らかに魅力的だ。

しかし、それでも楯無さんの専用機開発を途中で打ち切るのは幾らなんでも無責任だ。一夏だつてこれを聞いたら「他人の都合を勝手に踏みにして作った機体なんぞ、こつちから願い下げだ」と言つて絶対に機体を受け取らないと思う。

あれ？でも……。そうなると、僕も原因の1人だったりする？

「……。一応言っておきますが、風間君が気にする必要はありませんよ。あなたの機体は更識さんの時よりも酷く半端な状態で送られてきましたし、本人はむしろ気の毒に思っていましたから」

僕が考えたことを悟つたのか、ラーゼ先生が教えてくれた。

恨まれてないのは、ありがたい。

けど、そうなるならーゼ先生はそんな半端な状態から機体を完成させてくれたことになる。そう考えると、今度はラーゼ先生に申し訳ない。

思い切ってラーゼ先生にそのことを聞いてみると「好きでやったことですし、楽しかったですよ。ですから、そんなお気になさらず」と笑顔で返された。

そんな時、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

ラーゼ先生は更識さんに見せていたデータディスプレイを閉じ、笑顔で「時間切れです。さあ、授業に遅れてはいけませんよ」と僕達に言った。

どうやら更識さんは抵抗したようだったが、ラーゼ先生の笑顔の中に潜んだ謎の威圧感に屈したのかペコリと頭を下げて整備課の出口に向かっていった。

僕も遅れるわけにはいかないので「僕の専用機、よろしく願います！」とラーゼ先生の背中に叫んで、すぐに教室まで全力疾走した。僕はまだやられてないけど、織斑先生の出席簿アタックは出来れば避けたい。絶対に痛そうだし。

あ、そういえば……………

（転生とかの話聞くの忘れてた……………）

教室に到着してからそのことに気付き、僕は思わず頭を抱えた。

そして、放課後改めてラーゼ先生の所に行こうと考えたのだが、授業が終わると同時に一夏に捕まり剣道部の道場に連行された。

なんでも、休み時間に箒さんから半ば強引に決められたそうだ。けど、それって僕は別にいなくてもいいよね？

そう聞いてみたら「いや、男1人じゃ寂しいし、道連れってことで」と返された。

ああ、なんだろう。流石にム力ついた。ブチッっていう音がしたら急に殺る気が溢れてきたよ。

それから、剣道場内にはしばらくの間、僕と一夏が殺る気満々で振るう竹刀が打ち合う音が響いた。その時は気付かなかったけど、見物していた剣道部や他の女子達は僕達の勝負を見てポカンと口を開けて呆けていた。

勝負の結果は単純な時間切れで引き分け。けど、色々とストレスと怒りが溜まっている僕達はそんな結果では満足などに出来ない。よって………

「明日も勝負だ！」

「上等だ！」

こんな感じで、明日の放課後に再び勝負することを決めたのだった。

その時、箒さんが「何故だ……どうしてこうなった……」とか言ってた気がするけど、この時の僕は気にも留めなかった。

そして、この時の怒りはラーゼ先生と話をする用事を僕の頭の中から完全に忘れさせ、時間切れや一夏と篤さんの試合などで決着が着かない勝負は来週の月曜日まで長引いてしまった。

そして、クラス代表決定戦の当日になって現実に気付いた僕と一夏は仲良く頭を抱え、自分達のバカさ加減を存分に恨むのだった。

・・・・・・ホントに、どうしよう？

第24話 それぞれの専用機（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

そして皆さん、あけましておめでとうございます。

もう1つの作品共々、出来れば、これからもよろしくお願いします。

今回は主にオリキャラ、風間真司視点でした。結局話は出来ませんでした。

そして、今回は早くも7巻の原作キャラの登場です。整備課といえはこの人は出さねば、と思ひまして。

あと、残念ながらまだ真司の機体の詳細は明かせません。次回ではつきりと登場します。

でも、これって完全に私の好きなもの一直線ですので、もし皆さんの期待を損ねたらすいません。

次回はいよいよクラス代表決定戦が開始します。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9738q/>

IS - 小さな幸せを求める青年

2012年1月8日22時52分発行